

平成3年度

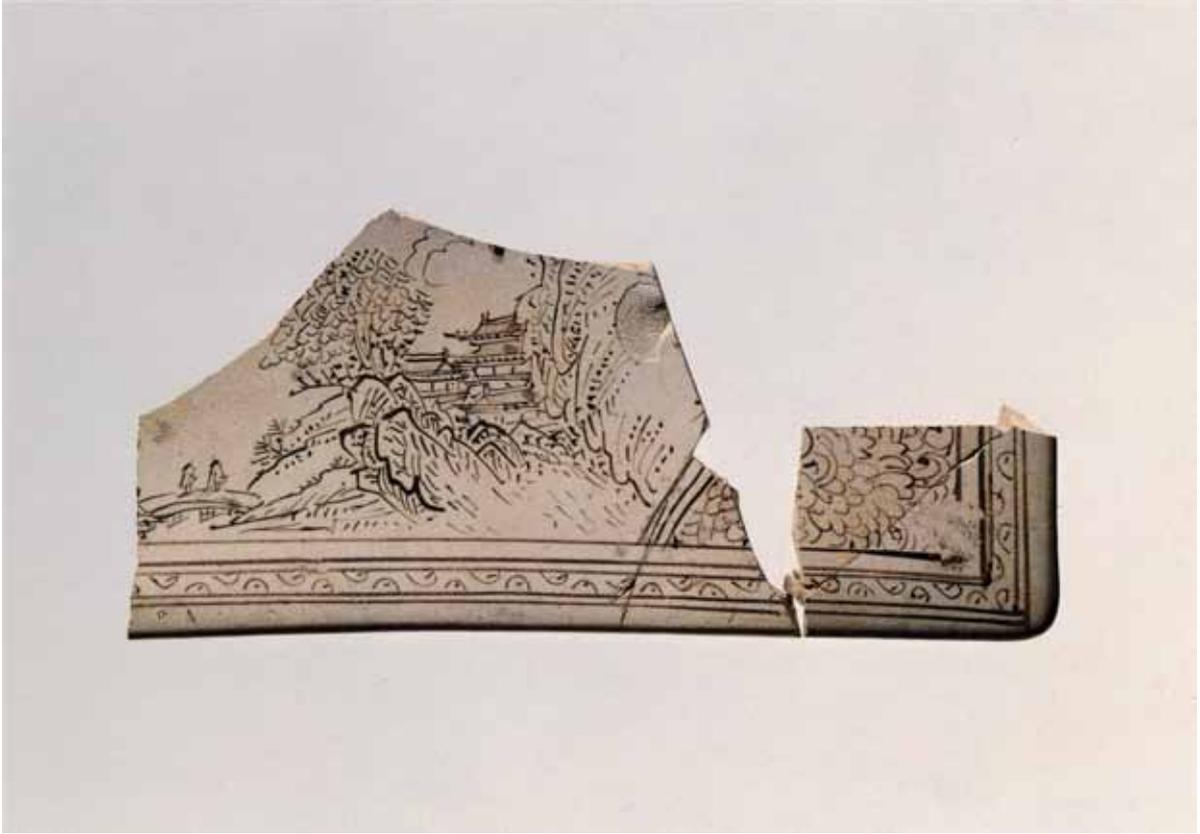
京都市埋蔵文化財調査概要

1995年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



滝石組（平安京左京三条三坊 池 876）



上：磁州窯白磁山水図枕 下：龍泉窯青磁牡丹文鉢（平安京左京三条三坊 池 876 出土）

序

京都市内には平安京跡を始めとして、長岡京跡、六勝寺跡、鳥羽離宮跡など多くの重要な遺跡があります。京都は歴史都市として著名ですが、地上の文化財と比べて、これら地下の文化財への理解と認識は、まだまだ進んでいないように思われます。地下の文化財の価値を高めるには、市民の方々と協力して、まだまだ調査しなければならないことが多く、その責務を日頃痛感している所であります。

当研究所は昭和51年発足以来、鋭意埋蔵文化財の調査、研究、普及啓発活動に努めてまいりました。本概要報告はその一貫として定期的に発刊しているものであります。今回は平成3年度に実施しました平安京跡、長岡京跡など54件の埋蔵文化財調査事例の概要を報告しております。平安京跡関連では、平安京左京域から中世の庭園跡が発見され注目されました。長岡京跡では研究所発足以来最大の調査対象面積になり、本年も継続して調査しております。長岡京の街路や建物、下層からは区画された古墳時代の水田など貴重な発見が相次ぎました。また六勝寺があった白河街区では、二条大路末の街路の築地や栗栖野瓦窯では二彩陶器を焼成した窯が発見されております。この他にも得られた成果は多くあり、できるだけわかりやすく、簡潔にまとめたつもりでおります。

今後とも本概要報告が学術研究の資料として、また、埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、わずかでも貢献できれば幸いと考えております。

最後に、埋蔵文化財調査を依頼された原因者の方々、京都市を始め関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げますと同時に、広く市民の方々にも当研究所の活動を深く理解していただきますようお願い申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が、平成3年度に実施した事業の年次報告である。発掘調査（第1章）、試掘・立会調査（第2章）、資料整理（第3章）、普及啓発事業等報告（第4章）とした。
- 2 調査継続のため昨年度に報告を終了したもの、次年度に報告するものについては表9・10に示した。
- 3 本書中に示した方位・座標値は、平面直角座標系VIによった。ただし座標値は、単位（m）を省略している。座標は、京都市遺跡測量基準点と京都市水準点を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市長の承認を得て同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、都市計画図（縮尺：1/10,000）、市街図（縮尺：1/30,000）を複製して調整した。
- 5 長岡京の条坊呼称は、長岡京市教育委員会と向日市教育委員会の成果によった。
- 6 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、奈良国立文化財研究所の用例に従った。
- 7 調査位置図の方位は、北を上配置し、縮尺は付記した。各調査位置図に示した黒塗り部分が、本年度実施した調査地点および調査対象地である。
- 8 図版1・2の調査地点番号のIは発掘調査、IIは試掘・立会調査を表す。表9・10の番号を用いており各章の報告番号とは必ずしも一致しない。
- 9 平成3年度発掘調査の内、文化庁国庫補助事業による調査は、平成3年4月から12月実施分は平成3年度の各発掘調査概報に、平成4年1月から3月実施分は平成4年度の各発掘調査概報に報告している。
- 10 本年度の調査ならびに本書の作成にあたっては、研究所全員の協力と参加があった。
- 11 写真は、遺物写真および一部を除く発掘調査の遺構写真は村井伸也・幸明綾子が、試掘・立会調査の写真とその他の写真は、各調査担当者が撮影した。
- 12 各報告は、文末に記した各調査担当者が執筆（連名の場合は初出の者が主として報告）した。
- 13 本書の作成にあたっては、編集と調整は資料課が行った。

目次

第1章 発掘調査

I 平成3年度の発掘調査概要	1
II 平安宮・京跡	
1 平安宮中務省跡1	3
2 平安宮中務省跡2	4
3 平安宮大極殿院跡東部	5
4 平安宮・平安京右京一条三・四坊・ 二条二・三坊・三条一坊	6
5 平安京左京二条三坊	13
6 平安京左京三条一・二坊・ 神泉苑跡・史跡旧二条離宮	16
7 平安京左京三条三坊	23
8 平安京左京六条一坊	29
9 平安京左京九条二坊	32
10 平安京右京二条四坊	35
11 平安京右京六条一坊	38
III 白河街区跡	
12 最勝寺跡・岡崎遺跡	41
IV 鳥羽離宮跡	
13 鳥羽離宮跡第137次調査	48
V 中臣遺跡	
14 中臣遺跡第70 - 4次調査	50
VI 長岡京跡	
15 長岡京左京一条三坊	53
16 長岡京左京四条二・三坊	54
17 長岡京左京六条三坊	56

VII その他の遺跡

18 焼場谷炭窯跡	61
19 栗栖野瓦窯跡1	62
20 栗栖野瓦窯跡2	63
21 植物園北遺跡	64
22 北白川廃寺	68
23 広隆寺旧境内1	69
24 広隆寺旧境内2	72
25 史跡大覚寺御所跡	76
26 松室遺跡	81
27 南春日町遺跡第22～24次調査	82
28 史跡随心院境内	86
29 史跡醍醐寺境内	87

第2章 試掘・立会調査

I 平成3年度の試掘・ 立会調査概要	89
II その他の遺跡	
1 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	90
2 長岡京左京四条二・三坊・ 羽束師遺跡	91
3 嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡	92
4 史跡特別名勝天龍寺庭園・ 史跡名勝嵐山1	93
5 史跡特別名勝天龍寺庭園・ 史跡名勝嵐山2	94
6 山科本願寺跡	98
7 大宅廃寺・大宅遺跡	99

第3章 資料整理

1 遺跡測量	101
2 コンピュータ	102
3 保存処理	103
4 復原彩色	105

第4章 普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業	107
2 京都市考古資料館状況	109
3 役職員名簿	112

図版目次

図版1	調査地点位置図1	平安京・白河街区・鳥羽離宮・長岡京地区調査位置図
図版2	調査地点位置図2	1 洛北地区調査位置図 2 嵯峨・桂地区調査位置図 3 大原野地区調査位置図 4 山科・醍醐地区調査位置図
図版3	平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊	1 17 A区全景 2 11区SE6
図版4	平安京左京二条三坊	1 室町時代全景 2 平安時代全景
図版5	平安京左京二条三坊	1 古墳時代竪穴住居全景 2 竪穴住居1
図版6	平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・史跡旧二条離宮	1 No.20 トレンチ全景 2 No.21 トレンチ全景 3 No.22 トレンチ全景 4 No.23 トレンチ全景
図版7	平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・史跡旧二条離宮	1 No.24 トレンチ全景 2 No.24 トレンチ縄文時代後期窪地 3 No.25 トレンチ大宮大路西築地 4 No.31 トレンチ全景
図版8	平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・史跡旧二条離宮	1 No.26 トレンチ全景 2 No.26 トレンチ弥生時代溝 3 No.27 トレンチ全景

	4	No. 27 トレンチ井戸 1
図版 9 平安京左京三条一・二坊・ 神泉苑跡・史跡旧二条離宮	1	No. 28 トレンチ全景
	2	No. 28 トレンチ土壙 15
	3	No. 29 トレンチ全景
	4	No. 30 トレンチ全景
図版 10 平安京左京三条三坊	1	江戸時代全景
	2	池 421
	3	建物 970
図版 11 平安京左京三条三坊	1	室町時代全景
	2	東洞院大路
	3	堀 833
図版 12 平安京左京三条三坊	1	池 876
	2	池 876 滝石組
	3	池 876 青磁鉢断ち割り状況
図版 13 平安京左京三条三坊	1	最終面全景
	2	井戸 544
	3	井戸 544 掘形断ち割り
図版 14 平安京左京六条一坊	1	4区全景
	2	4区朱雀大路東側溝
図版 15 平安京左京六条一坊	1	5区樋口小路北側溝
	2	5区坊城小路西側溝
図版 16 平安京左京九条二坊	1	3次調査全景
	2	4次調査全景
図版 17 平安京右京二条四坊	1	1区平安時代全景
	2	冷泉小路北側溝と柱穴列
図版 18 平安京右京六条一坊	1	全景
	2	S B 6
図版 19 最勝寺跡・岡崎遺跡	1	南区平安時代全景
	2	南区東西溝 16 瓦出土状況、地業 100、東西溝 35
図版 20 最勝寺跡・岡崎遺跡	1	南区東西溝 16 完掘状況、地業 111
	2	自然流路 110
図版 21 最勝寺跡・岡崎遺跡	1	南区堰 114
	2	南区自然流路 110
	3	北区木材集積遺構

	4 北区平安神宮火山灰層断面
図版 22 最勝寺跡・岡崎遺跡	出土軒瓦
図版 23 最勝寺跡・岡崎遺跡	出土土器
図版 24 鳥羽離宮跡第 137 次調査	1 全景
	2 井戸 11
	3 井戸 10
図版 25 中臣遺跡第 70 - 4 次調査	1 VII - 1・3 区全景
	2 4 号住居
図版 26 中臣遺跡第 70 - 4 次調査	1 VII - 2 区全景
	2 2 号住居
	3 3 号住居
図版 27 長岡京左京一条三坊	1 全景
	2 S D 26
	3 建物
図版 28 長岡京左京四条二・三坊	1 1 トレンチ全景
	2 東二坊大路西側溝
	3 2 トレンチ全景
	4 東二坊大路東側溝と S X 13 を接続する溝
図版 29 長岡京左京六条三坊	1 F 1 区東二坊大路東側溝
	2 F 1 区古墳時代水田
図版 30 長岡京左京六条三坊	1 F 2 区长岡京期全景
	2 F 2 区古墳時代水田
図版 31 長岡京左京六条三坊	1 E 2 区长岡京期全景
	2 E 2 区建物群と東二坊大路
図版 32 植物園北遺跡	1 I 区全景
	2 I 区 S B 4・5・6
図版 33 植物園北遺跡	1 II 区全景
	2 II 区 S B 11
図版 34 植物園北遺跡	1 II 区 S X 1
	2 II 区竪穴住居 4
図版 35 北白川廃寺	1 全景
	2 S D 47
	3 S K 35
図版 36 広隆寺旧境内 1・2	1 広隆寺旧境内 1 全景
	2 広隆寺旧境内 2 全景

図版 37 史跡大覚寺御所跡	1	2次調査区全景
	2	2次調査区北半全景
図版 38 史跡大覚寺御所跡	1	2次調査区掘立柱建物
	2	2次調査区池状遺構
図版 39 史跡大覚寺御所跡	1	3次調査区江戸時代全景
	2	3次調査区平安時代全景
図版 40 松室遺跡	1	5トレンチ全景
	2	4トレンチ全景
	3	立会A地点遺構断面
図版 41 南春日町遺跡第22・24次調査	1	22次調査全景
	2	24次調査全景
図版 42 南春日町遺跡第23次調査	1	下西代1号墳全景
	2	下西代1号墳完掘状況
	3	下西代2号墳全景
	4	下西代2号墳小石室断ち割り
図版 43 南春日町遺跡第23次調査	1	下西代2号墳小石室断ち割り断面
	2	下西代2号墳封土・掘形の掘り込み
	3	下西代2号墳床面敷石除去
	4	下西代2号墳完掘状況
図版 44 史跡醍醐寺境内	1	I区全景
	2	II区全景
	3	III区全景
	4	IV区全景
図版 45 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	1	No.20～21景石検出状況
	2	No.7～9礎石検出状況
図版 46 史跡特別名勝天龍寺庭園・ 史跡名勝嵐山2	1	8区調査風景
	2	1区1地点土壙断面
	3	出土軒瓦
図版 47 大宅廃寺・大宅遺跡	1	A地点窯断面
	2	窯奥壁
	3	窯側壁

目 次

図1	平安宮中務省跡 1	調査位置図	3
2	平安宮中務省跡 2	調査位置図	4
3	平安宮大極殿跡東	調査位置図	5
4	平安宮・平安京右京一条三・四坊・ 二条二・三坊・三条一坊	調査位置図	6
5	〃	遺構平面図	8
6	〃	11区S E 6実測図	10
7	〃	出土土器実測図	11
8	〃	出土軒瓦実測図	11
9	〃	17B区全景	12
10	〃	6A-2区全景	12
11	平安京左京二条三坊	調査位置図	13
12	〃	遺構平面図	14
13	平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・ 史跡旧二条離宮	調査位置図	16
14	〃	遺構平面図	18
15	〃	遺構平面図	20
16	〃	調査地全景	21
17	〃	No.27 トレンチ近世から近代押小路通	21
18	〃	出土軒瓦拓影	22
19	平安京左京三条三坊	調査位置図	23
20	〃	遺構平面図	24
21	〃	池 876 平面図	25
22	〃	江戸時代主要遺構平面図	26
23	〃	堀 397 木製品出土状況	28
24	平安京左京六条一坊	調査位置図	29
25	〃	S E 78	29
26	〃	遺構平面図	30
27	〃	S E 78 出土土器実測図	31
28	〃	5区S D 33 断面	31
29	平安京左京九条二坊	調査位置図	32
30	〃	3次調査区遺構平面図	32

図 31	〃	4 次調査区遺構平面図	33
32	平安京左京九条二坊	3 次調査区御土居堀遺物出土状況	33
33	〃	3 次調査区御土居堀最終の埋め立て状況	34
34	平安京右京二条四坊	調査位置図	35
35	〃	Ⅲ区遺構平面図	35
36	〃	I・Ⅱ区遺構平面図	36
37	〃	溝 1 出土土器実測図	37
38	平安京右京六条一坊	調査位置図	38
39	〃	遺構平面図	38
40	〃	S E 15	39
41	〃	S X 1 出土土器実測図	40
42	最勝寺跡・岡崎遺跡	調査位置図	41
43	〃	主要遺構配置図	42
44	〃	地業 100・111 実測図	43
45	〃	出土土器実測図	45
46	〃	出土軒瓦実測図	46
47	鳥羽離宮跡第 137 次調査	調査位置図	48
48	〃	遺構実測図	48
49	〃	井戸 10 実測図	49
50	〃	出土土器実測図	49
51	中臣遺跡第 70 - 4 次調査	調査位置図	50
52	〃	遺構平面図	51
53	〃	4 号住居平面図	52
54	長岡京左京一条三坊	調査位置図	53
55	〃	遺構平面図	53
56	〃	周辺主要遺構配置図	53
57	長岡京左京四条二・三坊	調査位置図	54
58	〃	遺構実測図	54
59	〃	周辺主要遺構配置図	55
60	長岡京左京六条三坊	調査位置図	56
61	〃	古墳時代遺構平面図	57
62	〃	長岡京期遺構平面図	58
63	〃	長岡京期建物配置図	59
64	焼場谷炭窯跡	調査位置図	61
65	栗栖野瓦窯跡 1	調査位置図	62

図 66	栗栖野瓦窯跡 2	調査位置図	63
67	植物園北遺跡	調査位置図	64
68	〃	甕棺墓検出状況	64
69	〃	遺構平面図	65
70	〃	遺構実測図	65
71	〃	埋納遺構 1	67
72	〃	埋納遺構 4	67
73	北白川廃寺	調査位置図	68
74	〃	遺構平面図	68
75	広隆寺旧境内 1	調査位置図	69
76	〃	遺構平面図	69
77	〃	出土土器実測図	70
78	〃	出土軒瓦実測図	71
79	広隆寺旧境内 2	調査位置図	72
80	〃	遺構平面図	72
81	〃	出土軒瓦実測図	73
82	〃	出土土器実測図	73
83	〃	葛野郡五条荒蒔里付近坪界復原図	75
84	史跡大覚寺御所跡	調査位置図	76
85	〃	池状遺構平面図	77
86	〃	2・3次調査区遺構配置図	78
87	松室遺跡	調査位置図	81
88	南春日町遺跡第 22～24 次調査	調査位置図	82
89	〃	22 次調査遺構平面図	83
90	〃	24 次調査遺構平面図	85
91	史跡随心院境内	調査位置図	86
92	〃	遺構平面図	86
93	史跡醍醐寺境内	調査位置図	87
94	〃	出土軒瓦拓影	88
95	〃	象嵌青磁	88
96	鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡	調査位置図	90
97	長岡京左京四条二・三坊・羽束師遺跡	調査位置図	91
98	嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡	調査位置図	92
99	史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山1	調査位置図	93
100	史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山2	調査位置図	94

図101	〃	出土土器実測図	96
102	史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山2	出土軒瓦実測図	97
103	山科本願寺跡	調査位置図	98
104	〃	1 トレンチ西部断面	98
105	〃	2 トレンチ西部断面	98
106	大宅廃寺・大宅遺跡	調査位置図	99
107	〃	A 地点窯推定図	99
108	〃	A 地点窯断面図	99
109	〃	出土瓦実測図	100
110	〃	出土軒平瓦	100
111	保存処理	幡枝2号墳出土の鉄器類	103
112	復原彩色	表面の汚れを取り除く	105
113	〃	実物を観察しながら描く	106
114	〃	表土の色を修正する	106
115	〃	分割線を目立たなくする	106

表 目 次

表1	広隆寺周辺条理関係溝検出一覧表（広隆寺旧境内2）	74
2	2号墳解体調査の工程（大原野遺跡第22～24次調査）	84
3	平成2年までの出土木製品の保存処理件数（保存処理）	103
4	平成3年度における出土木製品の保存処理（保存処理）	103
5	金属製品の処理件数（保存処理）	103
6	中臣遺跡第70-4次調査出土焼失家屋の樹種調査結果（保存処理）	104
7	平成3年度の遺物復原彩色件数一覧表（復原彩色）	105
8	平成3年度月別観覧者一覧表（京都市考古資料館状況）	111
9	発掘調査一覧表	114
10	試掘・立会調査一覧表	116

第1章・発掘調査

I 平成3年度の発掘調査概要

本年度の発掘調査は34件で昨年度より1件増加した。昨年と同様、長岡京左京のように20,000㎡を超える大規模な発掘調査があり、白河街区跡でも約10,000㎡の発掘調査を実施した。

発掘の調査件数は平安宮・京跡12件、白河街区跡1件、鳥羽離宮跡1件、中臣遺跡1件、長岡京跡3件、およびその他の遺跡として洛北地区4件、北白川地区1件、太秦地区5件、南桂地区4件、伏見醍醐地区2件である。

平安宮・京跡 主として平安宮跡は、国庫補助事業による発掘調査として実施し、中務省跡の調査（1・2）では、北限の築地の基底部と思われる瓦を含む整地層や礫を敷いた路面を検出した。また中務省の北限築地と西限築地の交点を確認できたのも大きな成果であった。大極殿院跡東部（3）は中務省と大極殿院とのほぼ中間に位置し、調査で整地層を確認した。広場と考えられる。JR嵯峨野線の高架工事に伴う遺跡調査（4）は宮の範囲が含まれているが、目立った遺構の検出は無かった。ただ左馬寮と推定される区域で井戸の可能性のあるもの、土壌、溝などを検出しており注目される。

京内では左京域を6件、右京域を2件、発掘調査している。その内左京域の1件は地下鉄東西線に関連する発掘調査である。この調査は左京三条一坊・神泉苑跡と左京三条二坊の調査に分かれる。

左京域でまず注目されるのは、左京三条三坊の調査（7）である。この調査で滝組があり、景石を備えた中世の庭園跡を検出した。左京域でほぼ全容がわかるような中世の庭園跡が発見されたのは今回が初めてである。他にも中世の構の濠が発見されている。またこの調査地は江戸時代初頭、金座を主催した後藤庄三郎の邸宅跡にあたり、井戸や建物を検出した。江戸時代前期の出土遺物も多く、洛中における豪商の生活の様子を知る上で注目される。地下鉄東西線関連の調査（6）では、神泉苑の東西の築地を検出しており、左京三条二坊七町では大型の建物を検出している。左京六条一坊の調査（8）では朱雀大路、樋口小路、坊城小路の側溝を検出した。また左京九条二坊の調査（9）では御土居の堀を発掘しており、豊富な木製品が多量に出土している。弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居と古墳時代後期の竪穴住居を発見した左京二条三坊の調査（5）も平安京成立以前の遺跡の状況を理解する上で重要である。

右京域で注目されるのは右京六条一坊の調査（11）である。この調査で1町を4分の1に分割する溝が検出され、4分の1町の宅地割が確認されている。右京二条四坊の調査（10）では平安前期の整地層を確認した。

白河街区跡 最勝寺推定地の調査（12）では、10,041㎡の広範囲を発掘調査した。伽藍に関連する遺構は検出できなかったが、二条大路末の街路築地の地業を検出している。また、鶴塚が古

墳時代後期の古墳であること、古墳時代の自然流路から多量の土器が出土したこと、下層から火山灰が確認されたことなどがある。

鳥羽離宮跡 顕著な鳥羽離宮に関する遺構は検出できなかったが、室町時代の井戸を検出した。(13)

中臣遺跡 縄文時代中期後半の土器が出土しており、また弥生時代後期の竪穴住居、古墳時代後期の古墳の周溝を検出した。(14)

長岡京跡 長岡京の左京六条三坊の調査(17)は、対象面積が29,300㎡で、2町分を発掘調査することができた。街路が造られている部分と造られていない部分があり、小規模な建物が認められた。長岡京内での実質的生活空間の南東隅と考えられる。下層では古墳時代の水田を検出した。この水田は106㎡を区画単位として地割りされており、条里制以前の地割りの方法がわかり注目された。長岡京左京一条三坊(15)では、東に庇を持つ南北棟の建物1棟を、長岡京左京四条二・三坊(16)では、川原寺に比定される地区で、柵列と門、東二坊大路の両側溝、側溝に架かる橋などを検出した。

その他の遺跡 窯跡の調査が3例ある。焼場谷炭窯跡1例(18)、栗栖野瓦窯跡2例(19・20)である。特に注目されるのは、栗栖野瓦窯跡2(20)で、この窯では二彩釉の製品を焼成していたことが判明した。作業道の検出も注目される(19)。植物園北遺跡の調査(21)で、今回初めて奈良時代から平安時代にかけての建物を検出した。植物園北遺跡はこの発見によって奈良時代から平安時代も含めて捉える必要が出てきた。

北白川廃寺(22)では多量の奈良時代から平安時代中期までの瓦が出土している。

広隆寺旧境内では2例の発掘調査(23・24)があり、多量の土器や瓦などが出土している。他に条里と関係すると思われる溝も検出している。史跡大覚寺御所跡については、3箇所を調査区を設けて発掘調査(25)しており、池状遺構、東西溝、掘立柱建物などを検出した。

松室遺跡(26)では古墳時代後期の柱穴を検出したが建物の規模を復原するまでには至らなかった。南春日町遺跡・大原野下西代古墳群でも3箇所を調査区(27)を設けており、その内1箇所が大原野下西代古墳群の調査である。南春日町遺跡では、大原野神社の社家跡とした鎌倉時代から室町時代の建物や濠が発見されている。他に下西代古墳群の移築のための解体調査も実施している。

史跡随心院跡の調査(28)では、随心院に直接関係する遺構は発見できなかった。史跡醍醐寺境内の調査(29)では、奈良時代の遺構・遺物を新たに確認し、遺跡の存在が明らかとなった。

以上、平成3年度の概要を述べたが、本年度も数々の発掘調査を実施し、多くの成果をあげることができた。調査した遺跡の時代は、縄文時代から江戸時代まであり、多彩な遺構、遺物が発見されている。歴史都市としての多様な京都の遺跡状況をうかがい知ることができる。

(永田信一)

II 平安宮・京跡

1 平安宮中務省跡 1 (図版1)

経過 平安宮朝堂院の東に位置する中務省は、比較的調査回数の多い所である。当地の西側でも北側築地と側溝を発見している。当調査地はこの延長線上でもあるため、同様の遺構が存在すると予想された。

遺構 検出された遺構は、古墳時代末期（7世紀前半）、平安時代中期（10世紀前半）、江戸時代のものがある。古墳時代末期の遺構は、

7世紀前半のもので、溝状遺構と円形土壇が重複していた。平安時代中期の遺構は、瓦を叩き込んだ整地面を調査区の南辺で確認し、北半部では礫を叩き込んだ路面状の遺構を発見している。SK5はこれを成立面にしており、軒丸瓦と縄叩き目の平瓦が出土した。平面形が長方形を呈する土壇SK2は、炭、骨片、キセル、土師器皿が出土し、江戸時代に属したものである。

遺物 古墳時代の須恵器杯はTK217に併行するとみられ、他に、須恵器高杯の脚、土師器甕が出土している。平安時代の出土遺物は、緑釉陶器片、土師器皿、複弁四弁蓮華文軒丸瓦がある。軒丸瓦は、一本造り瓦当で、大極殿、八坂寺の塔に出土例がある。

小結 中務省の北限築地が比定されていたが、明確な遺構は確認できなかった。しかし、比定位置には瓦の整地層があり、また調査区北半部には礫敷きの路面状遺構を検出した。前者は築地の基底部で、後者は築地外の通路にあたる可能性がある。

(吉村正親)

『平安京跡発掘調査概報』平成3年度 1992年報告

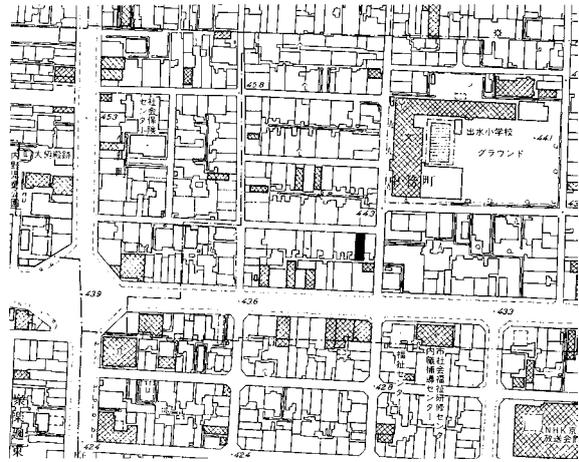


図1 調査位置図 (1:5,000)

2 平安宮中務省跡 2 (図版1)

経過 研究所の平安宮復原によると、調査地の西側に中務省の西限築地や北限築地の一部が推定されている。試掘調査を実施し、西限築地と「L」字状に折れ曲がる軛を用いた溝を発見した。

遺構 検出した遺構は中務省西限築地・北限築地とこれに付随する側溝などである。

西限築地では、築地上で東西方向に築地を横断する方形の軛を立て並べた溝を2mにわたって検出した。溝の内法寸法は約15cmであつたことを確かめている。

一方、西限築地の東側でも同じく方形の軛を南北方向に並べて溝にした遺構を3m以上にわたって確認した。溝の内法寸法は約30cmで溝内の埋土は2層に分層でき下層には白色の砂の堆積が認められた。

北限築地の内側溝は、南側の肩口が調査区外にあり、その規模を明らかにできなかった。埋土は3層に分けることが可能で、上層には瓦の堆積が顕著にみられた。

また、西限築地を横断する溝の延長線上で、方形掘形の柱穴を1箇所確認した。対になるものを求めて拡張を試みたが、調査区内では発見することができなかった。

遺物 遺物の中で、最も多く認められたのは瓦類で全体の9割以上を占めている。土器類は少なく、いずれも小片である。

瓦は、両築地の内側溝および西限築地外側溝の上層から主として出土した。軒瓦の出土量は少なく十指に満たない。軛は、寸法に若干の違いが認められ、数種類に細分できる。

土器類は、土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器などに分類できる。土師器は、皿・杯・高杯・甕などがある。須恵器は杯や甕以外に、蓋を硯に利用したものや風字硯などが出土している。黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器はいずれも杯であるが、小片であり点数も少ない。

小結 今回の調査成果は、以下のようにまとめることができる。

中務省の北限築地および西限築地の交点を明らかにすることができ、中務省の北西隅を確定できた。また、西限の築地幅は4m前後であったことが明らかになった。軛を土止めとして用いた南北方向の溝は、犬行と築地内側溝との間に位置した雨落溝と考えられる。しかし、このような遺構は平安宮、京域に類例がない。現段階では、暗渠の軛がなくなった箇所で見出した柱穴を含め、門に付随する雨落溝と推定している。

(鈴木久男)

『平安京跡発掘調査概報』平成3年度 1992年報告

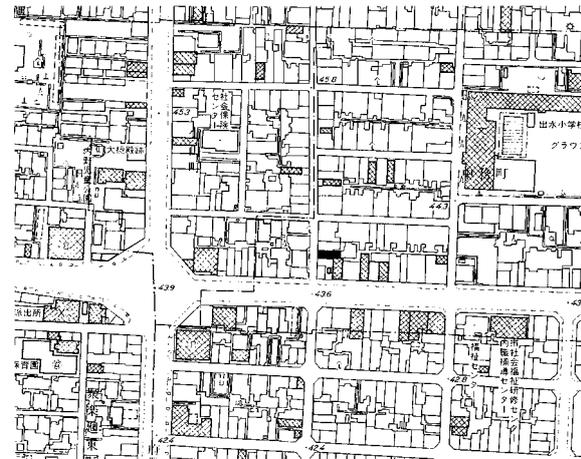


図2 調査位置図 (1:5,000)

3 平安宮大極殿跡東部（図版1）

経過 当調査地は、平安宮跡の復原図では、中務省と大極殿院との間に位置する。建築が計画されたため、試掘調査を実施した。その結果、平安時代の整地層や瓦片の検出があったため発掘調査を行うことになった。

今回の調査は、遺構面が非常に浅いため掘り下げはすべて人力で行った。また調査面積を広く確保するため残土は基本的に場外へ搬出した。調査地の西側は、地下室と考えられる施設があったため、遺構・遺物は発見できなかった。

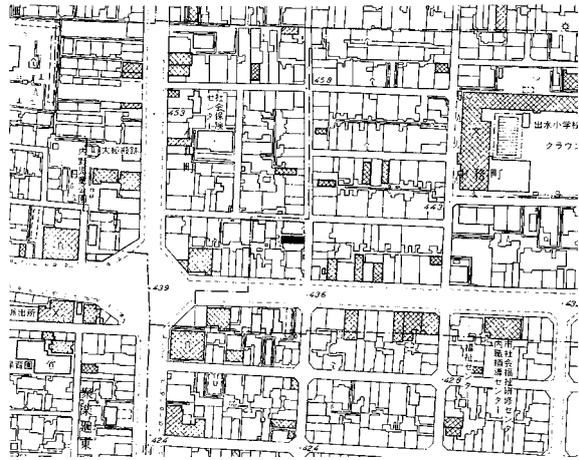


図3 調査位置図（1：5,000）

東側は、現地表面から約20cm掘り下げると遺物包含層になり、平安宮造営当初の遺構面には35cm前後で達する。

遺構・遺物 調査の結果、調査地は中務省と大極殿院の間に設けられた広場であったことを確認した。

整地の状況 整地層Ⅰは、地山と考えられる暗褐色砂礫層の上面を地ならししたもので、確認した整地層の厚さは5～6cmである。部分的に凝灰岩の小片が認められるが、瓦や土器などは全く含まれていない。

整地層Ⅱは、整地層Ⅰと土質は異なり、褐色系の粘質土である。上面には凝灰岩片を含んでいる。また、わずかに炭の小片が認められる。

整地層Ⅲは、瓦や焼土などを多量に含み、凝灰岩片もみられる。

出土遺物の9割以上が瓦であり、土器の出土はきわめて少ない。緑釉瓦の出土が、調査地の東側で実施した調査と比較してかなり多い。

土器類は、土師器・須恵器・緑釉陶器・中国陶磁器などが出土したものの、いずれも小破片であった。

小結 建物や土壌などの遺構はみられなかったが、3回にわたる整地層を確認することができた。これらの整地層については、次のように考えている。

整地層Ⅰは凝灰岩片がわずかに認められるだけで、平安宮造営当初の整地。整地層Ⅱは、焼土や瓦などが認められず、わずかに凝灰岩が含まれていることなどから弘仁年間の修築に伴う整地、整地層Ⅲは二次焼成を受けた瓦や焼土などが多量に含まれていること、9世紀後半に比定できる土器が出土していることから、貞観十八年（876）の火災後に行われた整地とみられる。

（鈴木久男）

『平安宮跡発掘調査概報』平成3年度 1992年報告

4 平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊 (図版1・3)

経過 京都市中京区西ノ京・聚楽廻、右京区花園地先に所在するJR嵯峨野線軌道敷内で山陰本線高架化工事が計画された。当該地は平安宮朝堂院、豊楽院、御井、左馬寮、平安京右京一条三坊十二・十三町・四坊四・五・十二・十三町、二条二坊・八・九・十六町、三条一坊一・二・

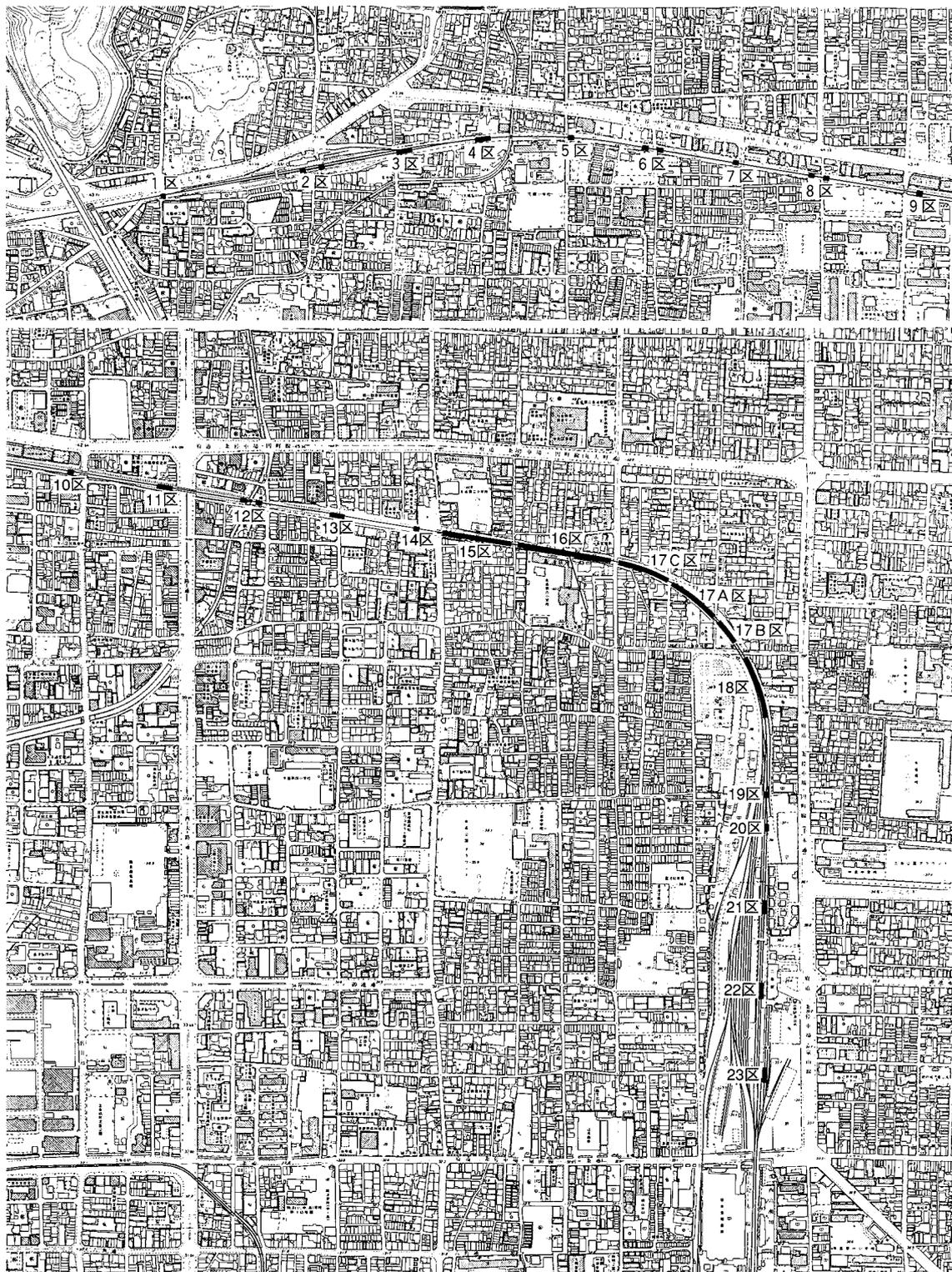


図4 調査位置図 (1:10,000)

三・四町にあたっている。道路遺構では、二条大路、押小路、三条坊門小路、姉小路、西大宮大路、西靱負小路、西堀川小路、野寺小路、道祖大路、宇多小路、馬代小路、恵止利小路、木辻大路、菖蒲小路、山小路、無差小路、西京極大路などが比定されている。調査対象地は幅5m、全長3kmにおよぶ。このため平安宮に関しては比定地に連続した調査区を設定し、平安京に関しては、各道路の側溝比定位置に調査区を設定した。未調査地区は立会による確認調査を実施した。調査区は1区から23区を設定し、平安京右京の各道路施設に伴う側溝などを多数検出した。2区、8区B、12区について立会調査を実施し、その他の調査区は発掘調査を実施した。

遺構 調査で検出した遺構は平安時代の道路側溝、流路、土壇、井戸、柱穴、湿地堆積土層、室町時代の溝、江戸時代の溝、井戸、土壇、湿地堆積土層がある。以下、各調査区について検出遺構の概略を調査順に述べる。

17 A区は豊楽院に比定されるが、院内空地にあたるため平安時代の遺構は検出していない。江戸時代に属する溝3条と近代に属する溝（SD1）を検出した。SD1は明治30年代開設の山陰本線に付属した南側溝と考えられる。

17 B区は豊楽院東限にあたり、調査地点北側の調査で豊楽院東限築地に伴う溝を検出している。しかし本調査では粘土採取土壇による攪乱があり、遺構は遺存していない。17 A区から連続するSD1と江戸時代の石組井戸を検出した。

18区は朝堂院西南地区にあたるが、粘土採取土壇の攪乱が激しく、遺構を検出していない。17区と連続するSD1が検出されたが、この地点では杭による護岸の施設が認められた。この溝からは多量の木製品が出土している。

21区は押小路南北側溝の検出される地点である。遺構面は比較的浅く、ベース直上に平安時代前期の遺物が検出されたが、押小路道路施設は検出されていない。

22区は三条坊門小路道路施設が検出される地点である。この地点には深さ1.5m以上の沼地状の堆積が確認され、上層からは江戸時代、下層からは平安時代前期の遺物が出土した。このため平安時代の早くから湿地か沼地になったことが考えられる。関係する道路施設は検出していない。

23区は姉小路南北側溝の比定地である。しかし調査地は3mを超える盛土があり、調査に危険を伴ったため、江戸時代の耕作土を確認後に埋め戻した。したがって平安時代の遺構面は確認していない。

17 C区は豊楽院西限にあたる。一部で遺構ベースと考えられる黄色粘土層の遺存する区域が認められるが、これは小径か畦道であったため粘土採取がおよばなかったものと考えられる。その他は粘土採取が激しく西限に関係した遺構は検出されていない。

16区は御井に比定される地区である。調査区東側は黄色粘土採取が激しい。中央から西方にかけては江戸時代の遺物を含む灰色砂泥層の堆積が深く、湿地状堆積が認められる。平安時代にさかのぼる遺構の検出はなかった。

19区は平安宮南限に比定される。調査では南限推定ラインを挟む両サイドに浅い溝を2条検

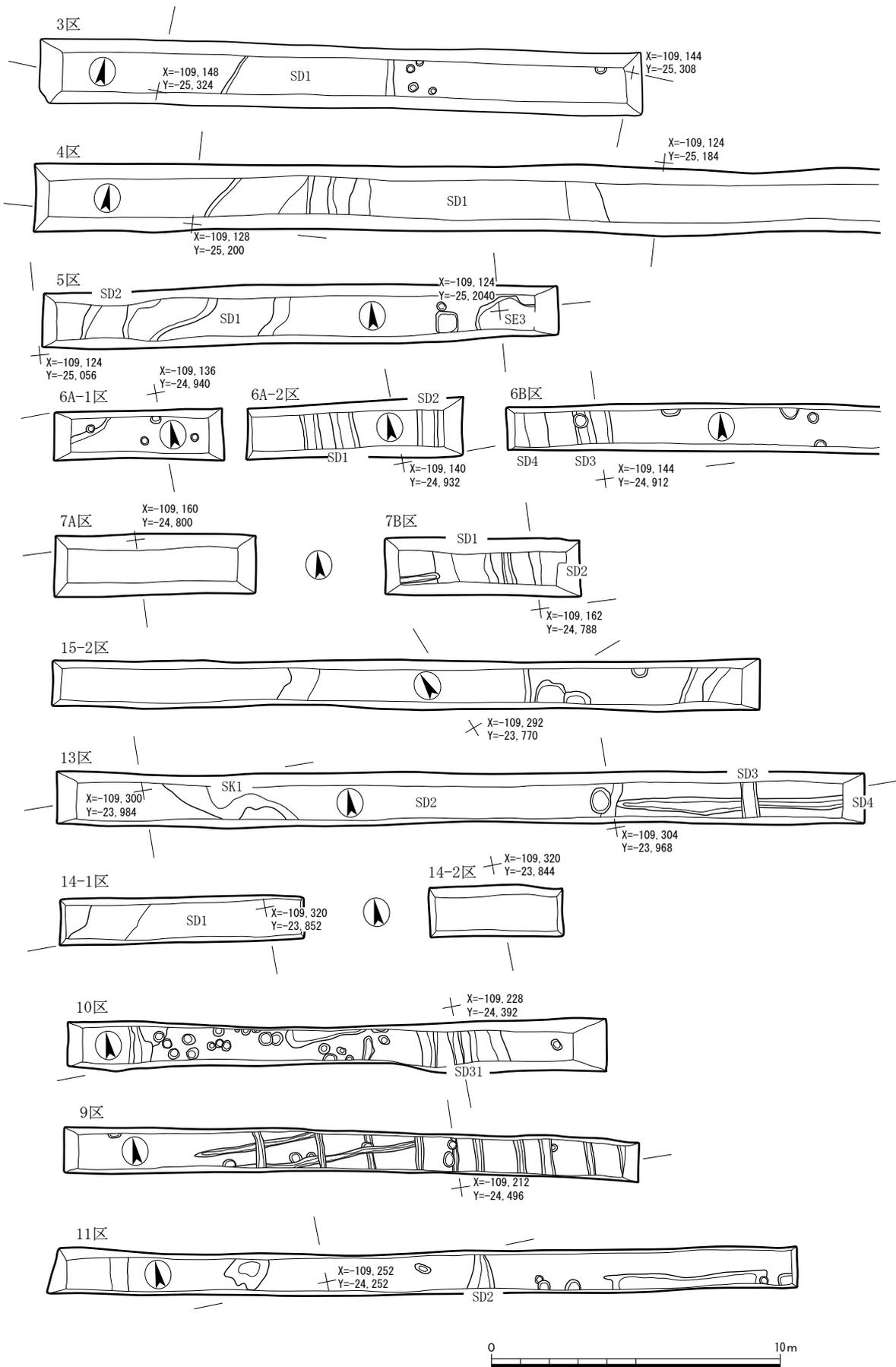


图5 遺構平面図 (1:200)

出したが、時期は近代以降に属している。

20区は二条大路南溝に比定される。ベースに直接砂礫層が露出しており、遺構は遺存していない。

1区は法金剛院境内西限にあたる。調査では2m以上の盛土と、この下層に暗灰色泥土層が堆積する。調査区が狭小で危険が伴うため堆積土層を記録した後即刻埋め戻した。

3区は無差小路道路施設の検出される地区である。路面に推定される位置に幅10m以上の流路が検出された。平安時代後期に属する土器類を伴う。この流路の東端に無差小路東溝の痕跡と考えられる溝状遺構が検出された。

4区は山小路道路施設に比定される。3区と同様な流路が路面の位置に検出された。平安時代後期に属する。

5区は菖蒲小路東側溝が推定される地点である。調査では小路東側溝および築地内溝と考えられる遺構を検出した。しかし溝自体は肩部の崩れが激しく輪郭は不明瞭である。溝の東側宅地内に柱穴、井戸などを検出している。いずれの遺構も平安時代前期の土器類が出土した。

6区は木辻大路に比定される。現道路を挟んだ東西に両側溝が推定されている。6A区で木辻大路西側溝と内溝、6B区で東側溝と内溝を検出した。西側溝は平安時代前期、東側溝は中期に埋没する。

7区は恵止利小路西側溝に推定される位置である。調査でも平安時代中期の土器類を含む小路西側溝および築地内溝が検出された。

15区は左馬寮に比定されている。調査区西端は左馬寮西限・西大宮大路東側溝にあたる。調査では調査区西側に幅10m、深さ50cmの溝状遺構を検出しており、左馬寮西限・西大宮大路東側溝に関係したものと考えられる。平安時代前期の土器を含んでおり、早い時期に肩部の崩れが始まり、溝幅が拡大したものと考えられよう。左馬寮内の調査では、井戸、溝、土壌が検出されている。井戸1基からは平安時代前期の遺物が出土する。

13区調査では溝(SD2・3・4)、土壌(SK1)を検出した。SD2は西鞆負小路比定地にあたり、幅約14mの流路である。流路の堆積土層はやや時期幅がある。西側では平安時代後期の土器類を含むが、東側での堆積は平安時代末期から鎌倉時代におよぶ。SK1はSD2西肩口に検出した。径1m前後の円形を呈する。浅いためSD2肩口の堆積の一部と考えられる。鎌倉時代以降の時期に属する。SD3はSD2と併行する幅50cm、深さ20cmを測る南北溝である。SD4は幅50cm、深さ20cmの東西溝でSD2に接続する。

14区に検出したSD1は西大宮大路西側溝に比定される溝で、14-1区西端に溝の西肩を検出した。深さ1.5m、幅は17m以上の規模を持ち、14-2区外東に延びる。氾濫の結果、東側路面を侵食拡大したためと考えられる。埋没時期は平安時代中期を下限にする。

10区で検出した溝(SD31)は道祖大路西側外溝と考えられる。深さ2m以上、幅6m以上を測る。西側に25基以上の柱穴群と土壌を検出している。柱穴は径40cm前後の規模を持つものが大半を占める。土壌は東西2.5m以上の楕円形を呈し、南北規模については不明である。深さ

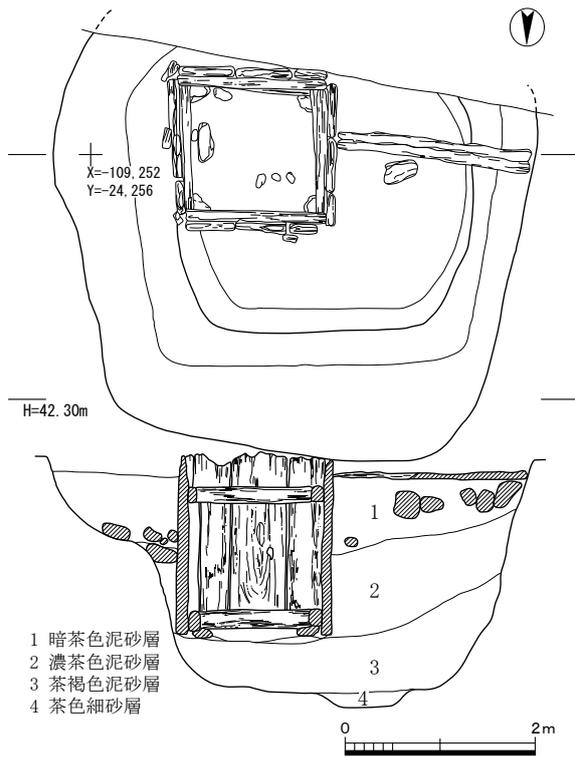


図6 11区SE 6実測図 (1:80)

幅2.0m、深さ0.5mを測る。野寺小路東側溝および築地内溝と考えられる。SE 1は掘形径2.2m、深さ1.5m、一辺0.9mの縦板組横棧留方形木枠を持ち、野寺小路路面敷き東端に成立する。9世紀後半に造られ、10世紀前半に機能を停止している。SE 6は掘形径2.5m、深さ1.2m、同じく一辺0.75mの縦板組横棧留方形木枠を持ち、底部に川原礫と砂を敷く。木枠に比べて掘形が大きすぎることで、木枠下端の下25cmに掘形底部があること、木枠外掘形底部から曲物が出土することなどから、数次にわたって造り替えられたと考えることができる。

2区西京極大路比定地では平安時代後期を下限とする湿地堆積土層に覆われるが、一部で地山の高くなった地区があり、西京極大路施設の遺存する可能性はある。

12区西堀川小路の調査では、天神川の盛土が厚いため遺構面に達せず、遺構の有無は確認されていない。

遺物 出土した遺物には、弥生時代、古墳時代、平安時代、室町時代、桃山時代、江戸時代、近代のものがある。弥生時代、古墳時代の遺物は、17C区で近代の遺構に混入して出土した。平安時代前期の遺物は5・6・7・15区検出の各溝や11区井戸などから出土した。中期の遺物は15区溝、14区溝、10区溝・柱穴、9区柱穴、11区井戸・溝から出土した。

後期の遺物は3・4区溝・流路、13区溝、10区柱穴から出土している。室町時代の遺物は、9区溝を中心に出土している。桃山時代・江戸時代・近代の遺物は、17・18・21・22・23・16・19・20・15・5・7区で検出した。平安宮域からの出土が多く、この地域の再開発が大規模であったことがうかがえる。平安京右京地域での出土遺物は、平安時代前期から中期の土器類を中心としている。一部で後期の土器が出土するが、出土地点が限られる。瓦は各地点で必ず一定量の出

30cmを測る。平安時代後期を埋没時期とする。

9区は中御門大路南側溝の推定地にあたるが、関連する遺構は検出していない。平安時代中期の柱穴10基以上を検出した。うち3基が2.5m間隔で東西に並ぶ。各柱穴は径40～50cm、深さ30cmを測る。南北溝は10条、東西溝は2条を検出した。東西溝は幅1m離して併行し、真東西に近い方向に延びる。南北溝は耕作地に伴う畝の湿気抜き、東西溝は畦畔の溝と考えられる。

8区は江戸時代に属する堆積土層下に黄白色砂礫層が検出され、遺構は確認していない。

11区は調査区内で溝(SD 2)、柱穴3基を検出した。井戸(SE 1・6)、溝(SD 2・3)は調査区南側拡張区の軌道敷き盛土下で検出した。SD 2・3はそれぞれ幅3.0m、深さ0.6m、

土がみられ、建物の一部に瓦を使用していた状況が裏付けられる。やや特殊な遺物として11区出土の緑釉熨斗瓦片、石製門扉軸受けがある。これはSE1埋土中から出土した。

小結 調査で検出した条坊に伴う道路側溝は菖蒲小路東側溝、築地内溝、木辻大路東西側溝、

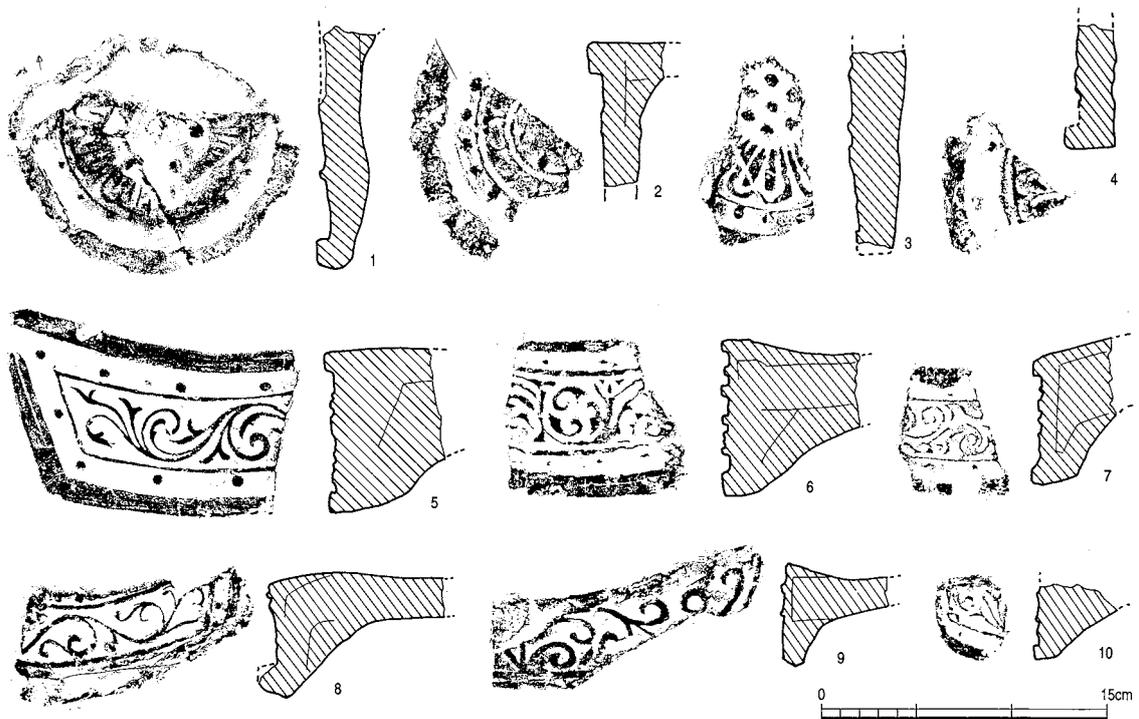
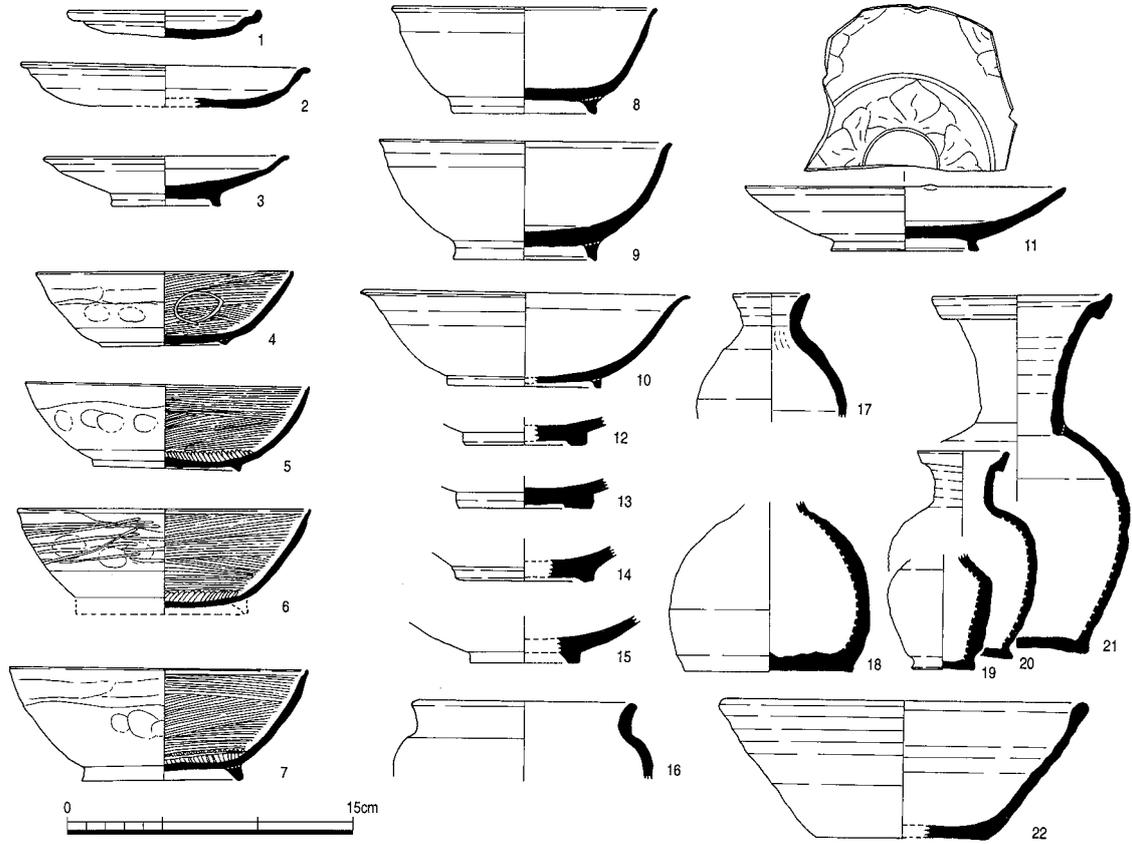


図8 出土軒瓦実測図(1:4)

築地内溝、恵止利小路西側溝、築地内溝、西靱負小路西側溝・東側溝、築地内溝、西大宮大路東側溝、西大宮大路西側溝、野寺小路西側溝、築地内溝、道祖大路西側溝などがある。また、西靱負小路、山小路、無差小路は流路であること、西京極大路では湿地であることが明らかになった。

平安宮左馬寮・西大宮大路の調査は、大路両側溝を検出した。両溝ともに外溝と推定される位置に検出しているが、肩部の崩れが激しく側溝が大きく広がった状態で検出されている。

西靱負小路は、平安時代後期には路面、両側溝を持った道路施設としては存在せず、全体が流路などの排水施設に転化したと考えられる。野寺小路では小路路面内東端に井戸（S E 1）があり、道路利用、景観を考える上で好資料が得られた。道祖大路西側溝の調査では、内溝は検出していないが、溝直近に土壌、柱穴多数を検出しており、この地区の宅地としての土地利用の多様性がうかがえる。8・9区の中御門大路南北溝比定地の調査では、J R軌道敷きが東西方向のため調査区設定に難があり、側溝検出までに至らなかった。しかし9区では南側宅地内の柱穴を検出しており、周辺の平安時代遺構遺存度の高さを証明した。

平安宮域から宇多川に至る各地区は比較的安定した遺跡立地条件が確保されており、平安時代前期から中期に属する道路施設、宅地内施設の各遺構が観察される。しかし右京一条四坊五町西半、宇多川以西は、造営時に道路施設整備を経たが、平安時代中期以降になって道路全体を排水施設へと転化することを余儀なくされたと考えられよう。安定した遺跡立地条件を備える右京一条二・三坊、二条三坊地区の、中期以降における遺跡の希薄化は本調査でも証明できた。一方、西ノ川を中心とした一条四坊地区の卑湿な条件を抱える地区でも、平安時代後期の遺跡が部分的ながら存在する調査結果となった。このことは、平安京右京の衰退に、自然環境以外の要因も絡まることを示唆したものといえよう。

（平田 泰・小檜山一良）

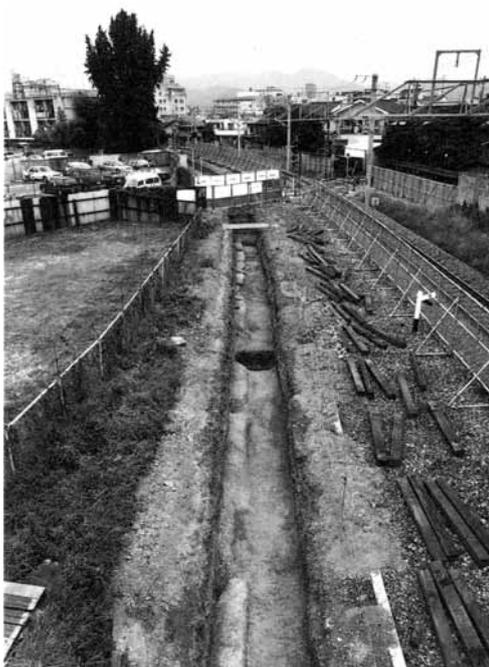


図9 17 B区全景（南東から）



図10 6 A - 2区全景（南東から）

5 平安京左京二条三坊（図版1・4・5）

経過 調査地は、平安京左京二条三坊十町の北東部にあたる。左京二条三坊の地は、二条大路の北側で、近隣には二条三坊九町の小野宮を始めとして、有力な貴族の邸宅が営まれたことが記録に残されている。今回の調査地については記録がないが、同規模の邸宅が営まれていたことが予想でき、検出が期待された。調査区は、南北約15m、東西約23mの方形に、5×10mの張り出し部分を南西側に設定した。

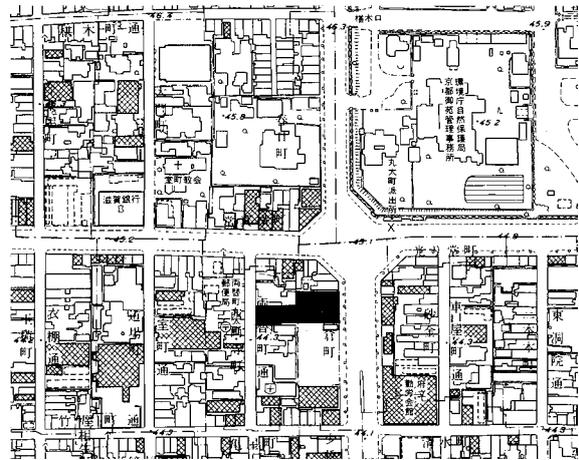


図11 調査位置図（1：5,000）

遺構 江戸時代前期の土壇1は、土蔵基礎部分である。土壇2は一辺約30cmの瓦質の甃を、方形に掘った穴の外壁に立て並べている。これも土蔵の基礎部分と考える。土壇3は南北に長い方形で、東西方向の辺にそれぞれ2本の丸木杭の痕跡が残る。地下蔵の跡と考える。丸木杭は壁の板材を止めるのに用いたのであろう。また、調査区の西壁沿いに不整形な土壇4がある。多量の陶磁器・瓦などが出土したことから、ゴミ類を投棄した穴と推定する。それらの土壇群の東側には柱穴が残り、中には礎石をもつものもある。以上から、この時期は烏丸通に面した部分に町家が建ち、その西側に土蔵などの施設、さらにその裏（西側）にゴミ穴を配置する敷地内の土地利用がみてとれる。このことは隣接して現存する町家の状況とも矛盾しない。

室町時代後半から安土桃山時代の遺構は土壇・柱穴がある。江戸時代ほど大規模なものは認めない。土壇6・7は共に方形の石積壁を廻らせている。用途は確定できない。この時期や江戸時代前期の土壇から金箔瓦が出土している。数は少なく、検出した柱穴の規模からも、この地に金箔瓦を葺いた豪壮な建物があったとは考え難い。金箔瓦は整地などのために他所から持ち込まれたものとする。

鎌倉時代から室町時代前半にかけての遺構は確認できていない。

平安時代の遺構は後世の攪乱を受け、検出した柱穴も小規模である。土壇8・9・10などの土壇がみられることから、屋敷地の外れであったと推定できる。溝1は12世紀、溝2は11世紀の土器片を多量に埋土に含む遺構である。屋敷地内を区画する機能を持ったものともみられる。

平安時代前期の遺構は検出されない。

平安時代以前の遺構は調査区南東部と北壁沿いで、地山のオリーブ褐色砂土層とその直上の暗褐色・黒褐色砂泥層で検出した。他の地区では、後世の攪乱で痕跡が残っていない。遺構は大きく弥生時代後期後半から古墳時代初頭と古墳時代後期に分けることができる。竪穴住居は少なくとも3基検出した。いずれも後世の遺構に壊されている部分が多い。最も残りが良い竪穴住居1の南東部分には土器が一括して廃棄してあった。庄内式併行期に属する土器である。また、竪穴

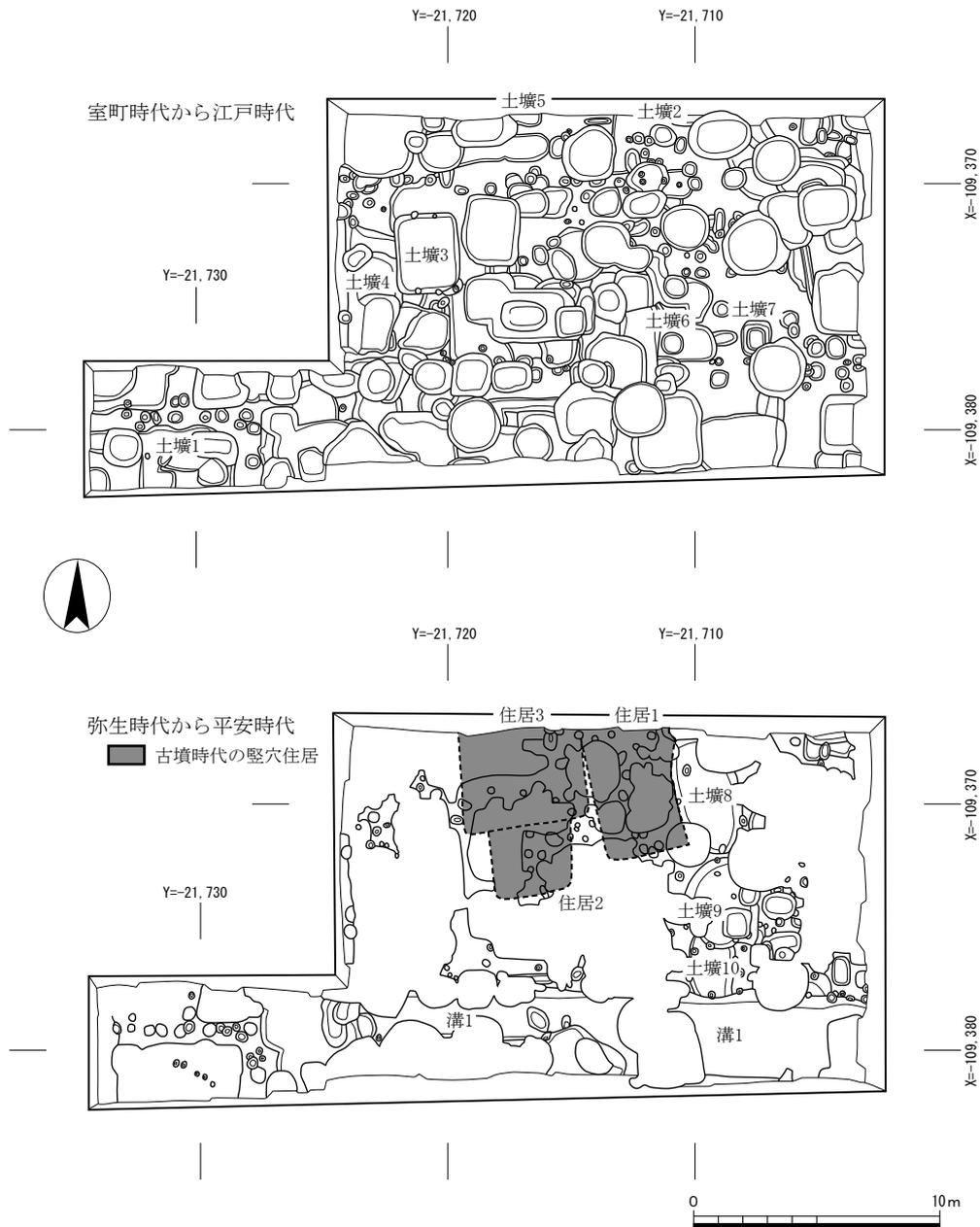


図12 遺構平面図 (1:300)

住居2は小型の住居で柱穴は検出していない。竪穴住居3のみが古墳時代後期に属する。

遺物 江戸時代の遺物は、整地層、土壇から多く出土した。土器類・瓦類・石製品・金属製品などがある。土器類は日常雑器が中心で、土師器・焼締陶器・施釉陶器・磁器などがある。伏見人形・土鈴・泥面子などの玩具も多い。埴塼が出土しているが小破片である。瓦の中には二次的な火熱を受けたものや焼土などがあり、火災後に処理されたものであろう。甗は土壇2の壁際に並べられていた。石製品には石臼・硯・砥石、金属製品には鉄釘・鉄板・銅釘・銅椀・銅火鉢・キセルなどがある。また、銭貨も数枚出土している。土壇4・5からはウシの骨が多量に出土した。関節の部分がほとんどで、鋭利な刃物で切り落とした痕跡が明瞭に残る。骨製品の加工を行っていた可能性がある。

室町時代から安土桃山時代の遺物には、土器類・瓦類・石製品・金属製品などがある。土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・磁器があり、江戸時代と同様、日常生活に用いたものがほとんどで、土壙・遺物包含層から出土した。金箔瓦はいずれも破片で軒丸瓦・軒平瓦がある。文様の凸部に漆を接着剤にして金箔を捺している。金箔の残りは悪く、瓦当文は多種類がある。石製品には砥石・滑石製の鍋、金属製品には鉄釘や銅銭がある。

平安時代の遺物には、土器・瓦・金属製品がある。主として溝1・2、土壙8・9・10から出土した。後世の遺構の埋土から出土しているものも多い。平安時代前期の土師器片・瓦片は、遺構に伴わず、数点しか出土していない。土器の大部分は土師器の皿類が占めている。他に黒色土器・瓦器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・焼締陶器・中国製陶磁器が出土している。瓦は室町時代以降の出土量に比べ少ない。

弥生時代から古墳時代の土器は、小片で磨滅も進んでいる。須恵器は蓋杯片と甕腹片、弥生土器・土師器は甕類が多い。竪穴住居1の一括の土器群は、壺・甕・高杯・有孔鉢があり、ほぼ完形に復原できる。なお、小さな碗の形をした滑石製品が壁面から出土した。

小結 調査地内への居住が認められるのは、弥生時代後期になってからである。竪穴住居1と竪穴住居2は、2基で大型・小型の組みになっていた可能性がある。古墳時代後期では竪穴住居3がある。他にもそれぞれの時期の柱穴を検出しており、調査地外にも住居が広がっていたと考えられる。竪穴住居は調査区内でも地山の標高の最も高い所に立地しており、こうした微高地上に集落が営まれたのであろう。今後の周辺調査の成果を待ちたい。

平安時代では、調査区全体にわたる整地などの土地の改変は行われていない。しかし、10世紀に建物が建っていたことは確実である。11世紀・12世紀と時代が下るに従い、溝・土壙・柱穴などの遺構は増加するものの、建物を復原することはできなかった。柱穴の規模やゴミを廃棄した土壙の存在、十町地内での調査地の位置などから、主要な建物位置から外れていたものとみられる。

鎌倉時代から室町時代前半にかけては遺構が検出されていない。この地が活況を呈し始めるのは室町時代後半になってからである。烏丸通側に町家が建ち、土蔵も次々と造営されている。この地での具体的な業種は明確ではないが、加工痕のあるウシの骨の出土は生産活動の傍証とみられ、活発な商工業活動が営まれていたと考えて良いだろう。江戸時代には、家々が建ち並び、現在でもみられるような景観になったものといえる。

(山本雅和・磯部 勝)

6 平安京左京三条一・二坊・神泉苑跡・史跡旧二条離宮（図版1・6～9）

経過 地下鉄東西線建設に伴う事前の調査として、史跡旧二条離宮内の発掘調査を実施した。美福通、堀川通間の史跡内では1次調査（No.3～10トレンチ）を1990年8月から1991年2月にかけて実施し、二条城関連遺構、神泉苑関連遺構、平安京左京三条二坊二町、同七町内の遺構などを多数検出した。平安時代の遺構を始め、各時代の遺構が良好に遺存していることが明らかになった。

1991年7月から、本調査にあたる2次調査（No.20～31トレンチ）を開始した。平安時代の神泉苑の園池が確実に検出できると予想された現神泉苑前に関しては、幅の狭い調査区とはなったが、調査（No.31トレンチ）を実施した。また、同年度には烏丸通以東の工事区についても立会調査を実施している。

遺構・遺物 二条城に関連する遺構は、各調査区で、江戸時代から近代の押小路通路面を検出している。路面は、すべて小礫と泥砂土を均質に敷きつめて丁寧に造られている。最下層路面、および1枚上層の路面には、化粧のためとみられる白砂が薄く敷かれている。

大宮通以東では、路面と対応する北側溝、側溝北側で並走し側溝と切合う柵の柱穴列を検出している。柵列は、新旧の3条を検出しており、最も新しい1条は、現在も残る二条城南門を中心に、東西にそれぞれ40m分検出している。この柵列は小門を伴っており、南門前だけが南側に張り出していたと推定できる。なお、この柵列は出土遺物などから、近代に入ってから造られたと考えられる。

平安時代の遺構面は、西側では主に砂礫層、東側では黄褐色系の色調を呈する泥砂層（いわゆる聚楽土）によって形成されている。検出遺構の内容も大きく異なり、西側では神泉苑の園池関連の遺構が主であり、出土遺物も瓦類がほとんどで、土器陶磁器類はごく少ない。東側では建物の柱穴や井戸、溝など生活臭の強い遺構が展開しており、出土遺物は瓦類も数多く出土するが、土器陶磁器などの食器類が多数出土する。平安時代の遺構面は、大宮大路東側部分を検出したNo.26トレンチと、その東隣のNo.7トレンチ間で、1m強の比高差がある。この原地形を残した東西の高低差は、江戸時代初頭まで大きな変化は認められない。二条城築造に伴い、西側には1m以上の厚い積土が行われて高低差が補正され、押小路通はその上に形成されている。この積土は濠に対しては堤防となっており、二条城の南西コーナーから南辺の大宮通交差点東側までは、堤

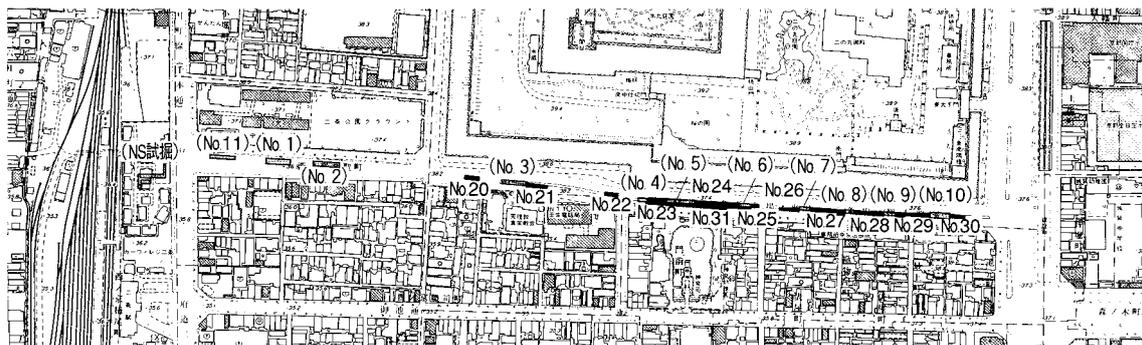


図13 調査位置図（1：7,500）

防状の高みを築いて形造られたと理解される。

1次調査No.3トレンチの平安時代の遺構面において壬生大路の路面部東辺、東側溝、東築地などを検出している。壬生大路の東築地は苑の西端を画する。検出した築地は平安京条坊復原モデルの築地推定ラインより東へ約6m内側に位置していた。築地より東側部分の苑敷地内では、庭園を構成していたとみている礫敷遺構などを検出した。東辺の礫敷遺構は同調査区東隣に設けたNo.21トレンチに連続している。

No.25トレンチでは大宮大路西築地、犬行、西側溝の西肩部を検出した。西築地は平安京条坊復原モデルの推定位置とほぼ重なる。大宮大路西築地は神泉苑東端にあたる。この築地基礎土からは平安時代前期の土器類がまとまって出土しており、平安時代前期中に築造（再築）された築地とみている。犬行については幅4mを測り、通例の大路犬行幅（約1.5m）と比べ非常に広い。この点については解釈を必要とするが、西側溝も一部を検出したのみの段階ではまだ資料不足といえる。

なお、築地と犬行下層の地山上面において、築地と重なり南北方向に延びる高みと、並走して南北に延びる規模の大きい流路状の遺構を確認している。流路状の遺構内からは、遺物が出土しなかったため、平安京の街路と関連するものか判断は難しい。

No.5トレンチ南隣のNo.31トレンチにおいては、神泉苑園池北縁部とみた部分と流路の南西延長部を検出した。全体として流路が広がった河口部とみておきたい。また、この河口部から15m程西側で明確な園池北縁部（園池北側水際）を検出した。傾斜面から底部にかけて、拳大からそれより少し大きい礫が敷かれていた。出土遺物や水際の礫敷の形成状況からみて、平安時代に入って造園されたことは明らかである。園池内に堆積している黒褐色のシルト層は、傾斜の緩くなるNo.5トレンチの西部にも薄く堆積している。

No.5トレンチ東隣のNo.24トレンチ東半と、No.31トレンチ東半では、平安時代の瓦類と凝灰岩片を多く含んだ平安時代中期後半（11世紀）代の整地層を検出した。整地層は、この地区だけにみられる部分的な土層である。同時代には残っていた浅い窪地を埋めて、遺構面を作り直したものとみられる。No.24トレンチでは、同層の下層にまで調査を進めた結果、南方へ急に深くなる窪地を検出した。窪地内の砂礫層からは縄文時代後期後半代と推定される土器片が出土した。この他流木とみられるアカガシ亜属を中心とする木材類や各種の木の实類や木の葉の他、有機質の腐植物が堆積していた。植生の時代相が、土器片からの推定年代と矛盾しないことから、自然遺物の堆積年代は縄文時代後期後半代と考えている。この発見によって神泉苑の園池は縄文時代には自然地形として成立しており、平安時代以前にも長い歴史を持つ池であることが明らかとなった。

No.5トレンチ東部からNo.24トレンチ西端部付近と、同トレンチ、No.31トレンチ東部において、平安時代の柱穴（ピットなど）を数基検出している。南北方向に並ぶものもあるが、明確な建物とすることは狭い調査範囲では難しい。しかしNo.5トレンチ東部からNo.24トレンチ西部の柱穴については、位置関係から廊などの遺構の可能性も残されている。

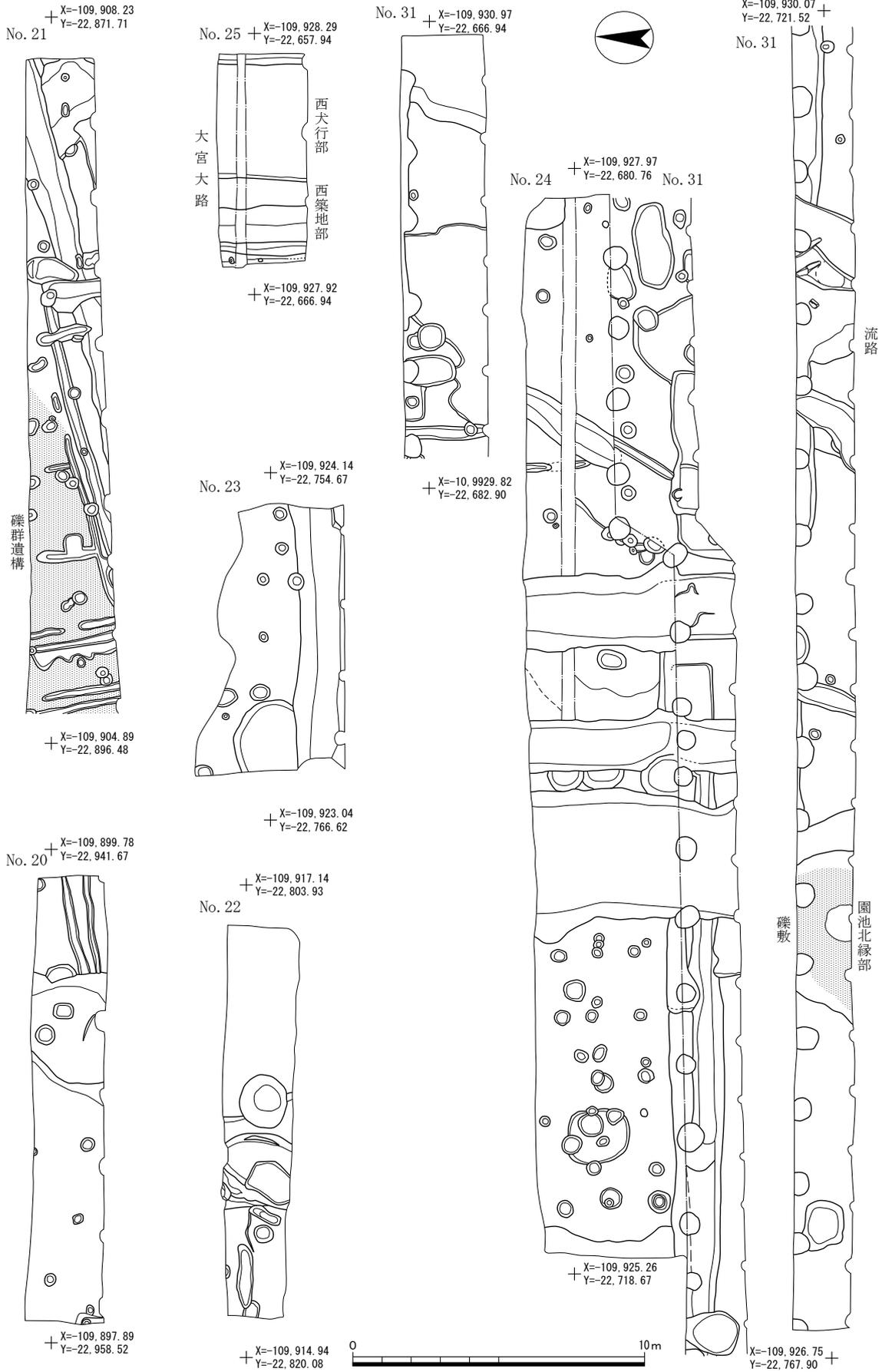


図14 遺構平面図 (1:200)

1次調査No.4・6トレンチ、2次調査No.22・23トレンチでは、No.5・24トレンチの陸部に連続する平安時代の遺構面を検出しているが、他には明確な遺構は検出できなかった。No.22・4・23トレンチについては、正殿前面の空地である南庭の一部と理解しておく。神泉苑内部の平安時代の遺構面は、大きく荒らされることなしに室町時代末期まで生き続けている。

神泉苑内の各調査区において、室町時代末期から桃山時代には、それまで苑内ではみられなかった遺構が形成される点については注意しておきたい。厚さ10数cm程度の整地土層が各トレンチで確認できる。その上面には、桃山時代から江戸時代初頭の町屋とみられる遺構が点在する。この時期に、京都の人々の神泉苑に対する認識が、変わった結果と考えられる。

大宮通以東の各トレンチでは、柱穴を含むピット、土壙、井戸、落込、掘込など平安時代から桃山時代の各種の遺構を数多く検出した。No.29トレンチでも、同様の時期幅にわたる猪隈小路を検出している。疎密の変遷は認められるが、宅地として利用される地域（都市域あるいは近辺地）であったとみられる。

この地域で最も注目される遺構は、No.10トレンチで検出した平安時代初頭の大型の建物である。東隣に設定したNo.30トレンチにおいて、この建物の北東部を検出することができた。柱間が3m（10尺）等間で東西5間、南北2間の東西棟の身舎部分である。身舎南辺の柱穴列が南側工区に位置していることは確実である。柱抜取穴の一つからは、土師器、須恵器が少量出土している。平安京の土器編年ではI期新古相段階に比定できる。実年代については810～20年代が想定される。この建物は七町内の北西ブロックに位置している。建物規模などからみると1町内での位置は偏った印象がある。しかし、同町西辺を走る猪隈小路が今回の発掘調査（No.29）によって、平安時代前期には設定されていないことが明らかになり、建物が現存した平安時代初頭に、町割は二町と七町を合わせた、2町規模かそれ以上の敷地として利用されていた可能性がある。

平安時代以前の遺構については、No.26トレンチで、弥生時代の北東から南西方へ延びる溝、No.27トレンチでも同方向の古墳時代の溝などが検出されている。両遺構とも遺跡中心から少し外れた地点に位置するが、北東の近隣地には同時代の遺跡が存在しているとみられる。また、No.9トレンチで検出した大きな自然流路については、東隣のNo.29トレンチの断割調査によって東肩部の検出を目指したが、調査区内では検出できなかった。自然流路からは縄文土器が出土しているが、縄文時代には現堀川までを含む規模を持つ自然流路（旧堀川）がNo.9トレンチ以東に存在していたと考えられる。

小結 旧二条離宮（二条城）史跡内の南側は、江戸時代初頭の二条城築城の際に押小路通が移築され、同通りと外濠の間には柵が設置され、現在の状態と同様な整備が行われたとみられる。遺存状況から、江戸時代を通じて良好に管理された様子がうかがえる。南門前に小門のある柵の設置は、大正の御大典による二条離宮の整備に伴う可能性が高い。

神泉苑は、平安時代前期に整備され、造営された8町規模を持つ平安京唯一の禁苑である。今年度まで実施した調査によって神泉苑の東西の築地を検出し、平安時代の神泉苑の東西規模を考

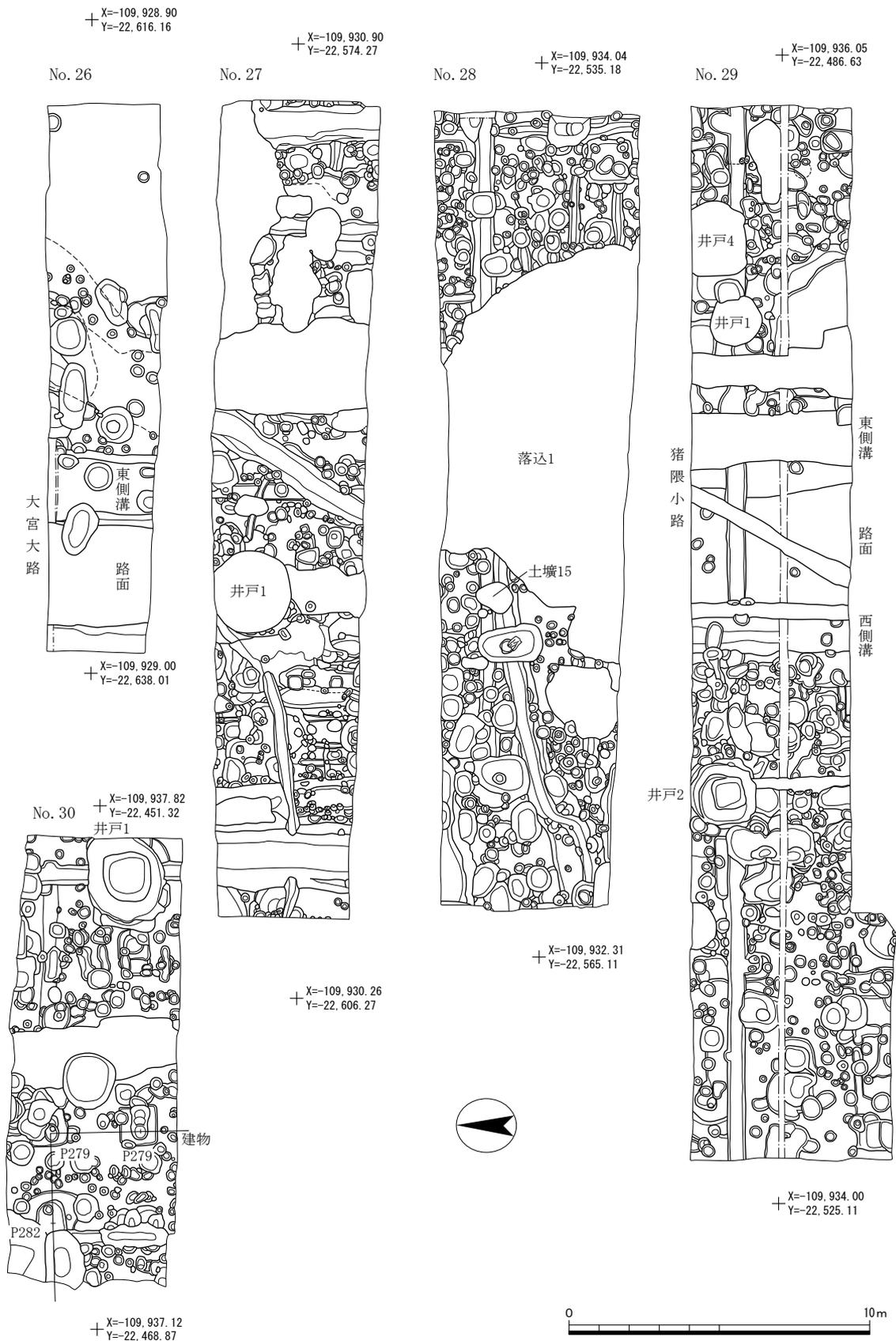


図15 遺構平面図 (1:200)

古資料によって明らかにすることができた。神泉苑敷地内と、大宮大路以東の邸宅地域とは、遺跡の様相も各時代を通じて大きく異なっており、神泉苑敷地内には園池が遺存していることが明らかとなった。No.31 トレンチで検出した平安時代の園池北縁部の水際には石敷きによる州浜がみられ、園池の北東から池へ流し込む流路（遣水）と河口部の西側（園池最北部ともみられる）に厚板を設置、舟着きの足場板として利用されたと考えられる。流路の方向や位置は、神泉苑の古図に示された様相とよく一致している。No.24 トレンチでは、縄文時代の沼沢地の北縁部を検出している。神泉苑の園池は縄文時代には自然に形成されており、平安時代に自然地形を取り込んで、部分的に手を加え、造園されたことが立証された。現存する小規模化した園池も、縄文時代以来の長い歴史を持つことが、発掘調査によって明らかとなったことは大きな成果である。

神泉苑敷地内である東隣の三条二坊二町内の各調査区からは、緑釉瓦を含む瓦類が多数出土している。これらの瓦類は苑内の北部にあったとされる乾臨閣などの建物に使用されたと考えられる。

三条二坊七町の北西部で検出した大型建物は、文献資料にはみあたらない。その規模と平安時代の初頭の限られた時期に使用され解体されていることから、特殊な施設として建設されたものとみられる。周辺トレンチからは、この建物に関係したと思われる、平城京などからの搬入瓦類がまとまって出土している。建物が公施設として建てられた物証になるだろう。今後とも追跡調査が必要な成果の一つである。

（上村憲章、小森俊寛）



図16 調査地全景（西から）



図17 No.27 トレンチ近世～近代押小路通（東から）

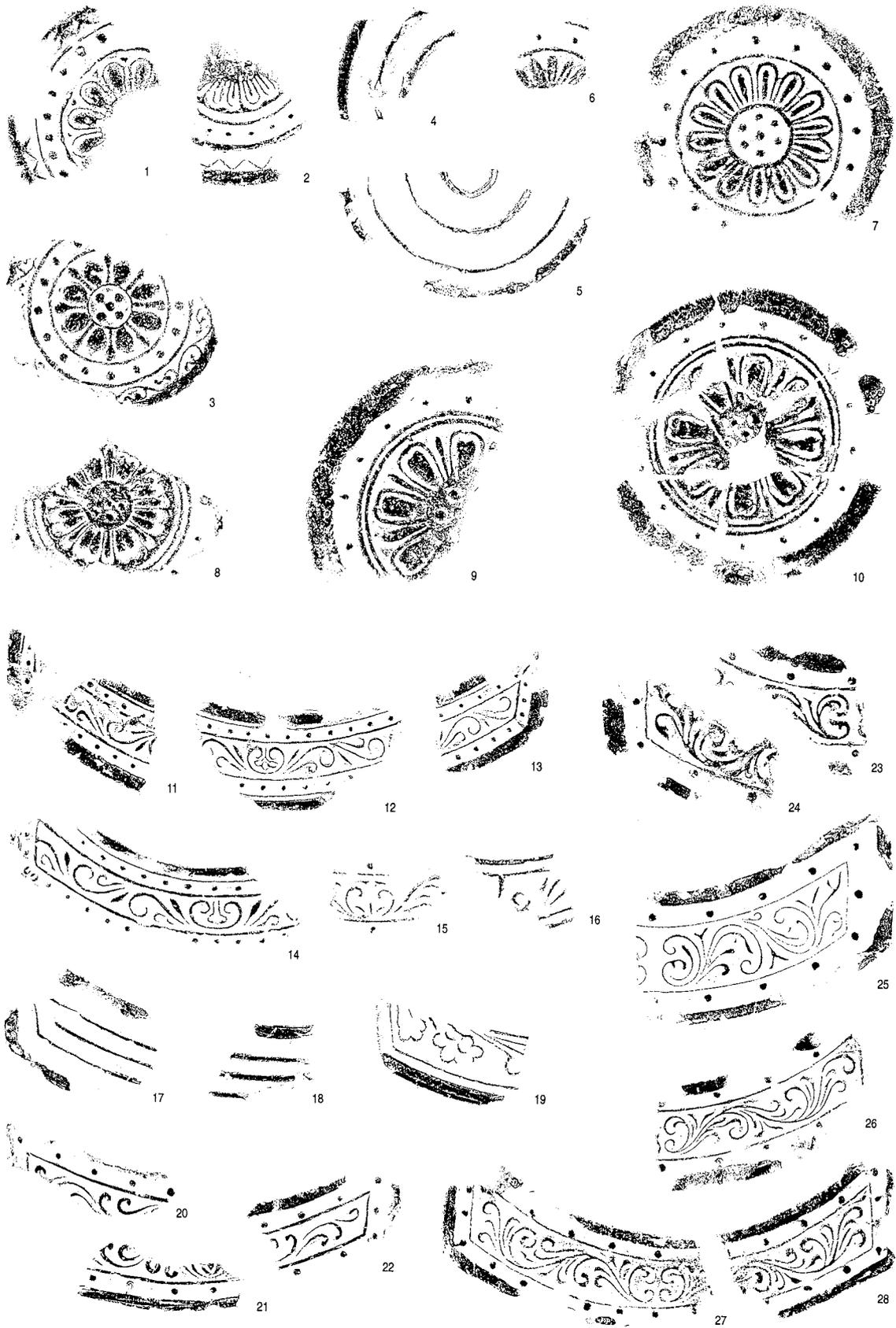


图 18 出土軒瓦拓影 (7·9·26 - 28: 神泉苑跡出土 1 ~ 6·8·10 ~ 25: 二坊二町出土) (1:4)

7 平安京左京三条三坊（図版1・10～13）

経過 調査地は、平安京左京三条三坊十三町、東洞院大路に該当する。当該地にビルが建設されることになり、試掘調査が行われた結果、遺構の遺存状況は良好であることが判明し、発掘調査を実施することとなった。調査区は十三町のほぼ中央から東洞院大路の西半にかけて東西約65m、南北約25mの範囲で鉤型に設定した。調査面積は約1,300㎡である。

左京三条三坊十三町は、平安時代には藤原家や藤原家通などの邸宅があったことが知られ、院の御所である三条東殿が営まれ、平治の乱の勃発した場所としても知られる。江戸時代初期には金座を主催した後藤庄三郎が伏見から移り住んだ。

遺構 調査区の基本的層序は、積土層と江戸時代中期以降の整地土層が約2.5mあり、整地土層下に厚さ10～40cmの黄灰色砂礫層が堆積する。この砂礫層は調査区全域で検出しており、洪水による堆積層であろう。砂礫層下には江戸時代前期の整地層や室町時代の整地層が堆積している。室町時代の整地層を除去すると無遺物層（黄褐色粘土層、東半部では砂礫層）となる。今回の調査では烏丸御池遺跡に伴う下層遺構は検出していない。

平安時代から鎌倉時代 平安時代から鎌倉時代に属する遺構には井戸・土壇などがある。

井戸544は調査区中央北端で検出した。上半が方形縦板組み、下半が円形縦板組みの井戸側を有する。方形縦板組みは縦板と横棧が遺存し、一辺約1.40m、現存高約0.18m。円形縦板組みは幅約10cm、厚さ約12cmの板をほぞとほぞ穴で接合、円筒形とする。外周下半に縄を巻き楔で固定した痕跡がある。縦板下端は揃える。径0.86m、現存高1.51m。底部に径32cm、高さ24cmの円形曲物を据える。井戸977は井戸544により全体が破壊されるが掘形最下部に井籠組みの部材（長2.1m、幅0.3m）が2枚遺存、周辺から平安時代前期の遺物が出土した。井戸976は調査区東端で検出、方形縦板組みの井戸側を有し底部中央に円形曲物を据える。掘形は一辺約2.1m、井戸側は一辺約1.1m、曲物は径54cm。井戸859は調査区中央南端で検出、方形縦板組みの井戸側を有する。掘形は一辺約2.7m、井戸側は一辺約0.8m。井戸790は調査区西北部で検出、方形縦板組みの井戸側を有する。掘形は一辺約3.2m、井戸側は一辺約1.3mある。

室町時代 室町時代中期から末期に属する遺構には東洞院大路・堀・溝・池・井戸・石室・土壇・柱穴などがある。

東洞院大路は調査区東端で検出した。道路敷きは修築も含め4面ある。宅地は道路敷き面より約20cm高まる。西側溝は幅20cmの雨落溝状を呈する。路面上に堀状南北溝があり、宅地と堀状溝間の道路敷きは幅1.8～2.5mあり堀状溝に向かって傾斜する。検出した路面と宅地の境界は

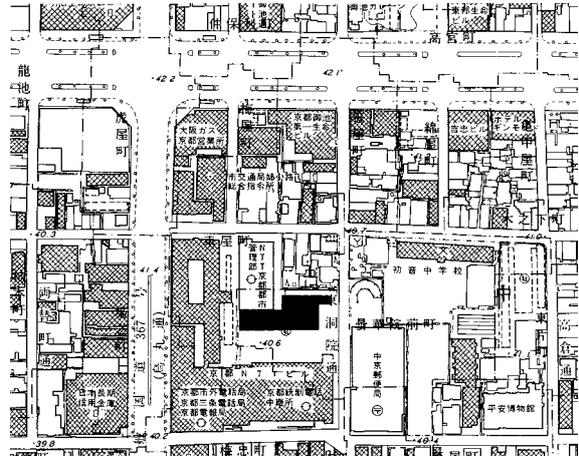
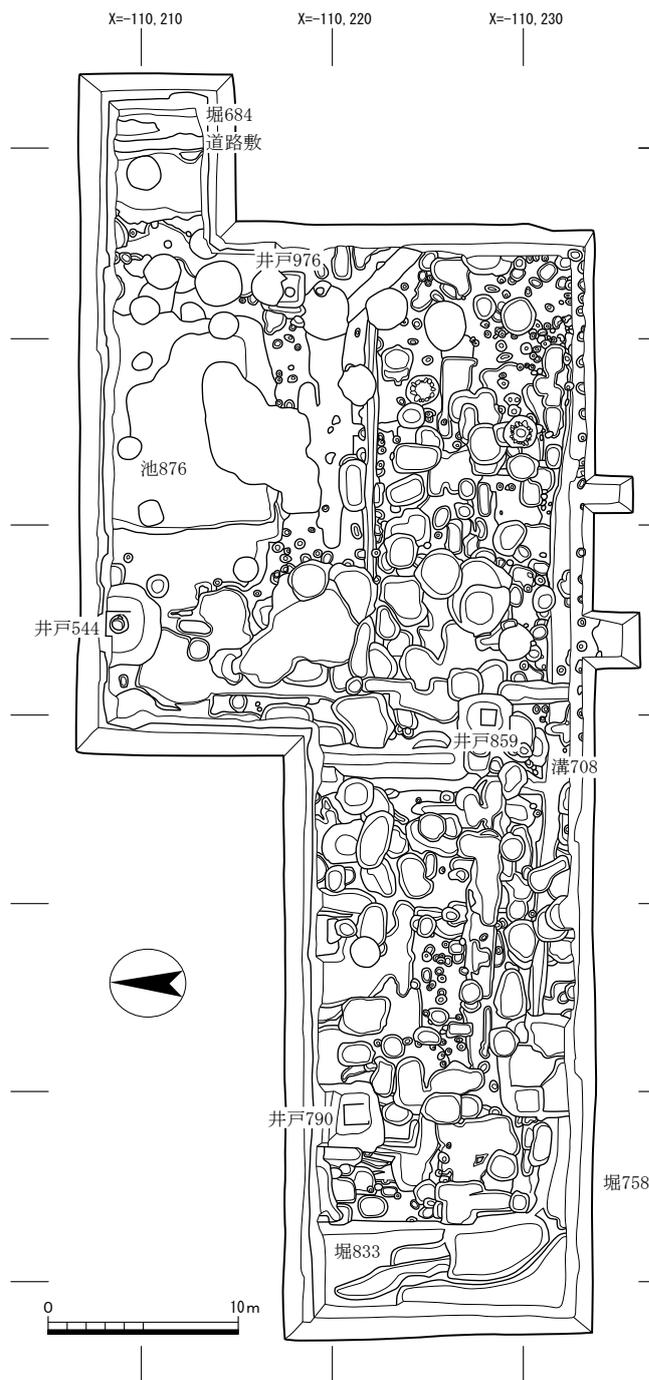


図19 調査位置図（1：5,000）

平安時代の東洞院大路東築地心定線から東へ第3路面で約2.6m、第2路面で約3.0m、第1路面で約3.5mに位置し宅地が道路敷を侵食する状況がうかがえる。

堀833は調査区西端を南流、調査区南端で東折して堀758へ連続、東洞院大路の堀状溝と合流すると考えている。検出面での規模は現存幅約6.0m、深さ約1.5mある。出土遺物から16世紀代には機能しており、16世紀末には埋め戻されている。検出した堀833・758は各々一町のほぼ中央に位置しており、堀で囲まれた宅地は1町の4分の1の広さを有する。

池は調査区北東部で検出した。上面の池545から16世紀、下面の池876から15世紀中頃に属する遺物が出土した。池876の北肩口は調査区外にあるが平面形はほぼ方形を呈したものと考



られる。池は無遺物層である砂礫層を掘込んで造作しており、池底面には黄色粘土を貼付ける。検出面での規模は東西約11.0m、南北約9.5m、深さ約1.5mある。池肩口は、南東部は垂直に近く滝口が構築され、西部は緩やかに立上がる。滝口下前方にL字形に板が埋め込まれ、この板を起点に直交して長径20cm前後の石を並べ、その上に石を重ねて基底部と為し、基底部上に正面の大石（鏡石）と複数の石を積重ねて滝口を構築する。鏡石の両側面にはさらに上方に石が組まれていたと想定される。池肩口から底面に拳大の礫を敷き、長径30～80cmの景石を配する。北東部には一段高い陸部がある。陸部上面には花崗岩の粗い砂が敷かれ、緑色の結晶片岩と輸入青磁鉢が据えられる。白色と緑色の対比に注目したい。池を構成する石は砂岩やチャートなどの丹波帯の石以外に高野川系の数種の花崗岩が含まれること、紀ノ川流域産の結晶片岩が含まれることなどが判明した。池876からは輸入白磁山水画枕が出土した。

池545は池876の上面に20～30cm程度泥土層が堆積した上に造築してお

図20 遺構平面図 (1:400)

り、池 876 の北肩口を埋め立て規模を縮小する。肩口から底面まで拳大の石を敷きつめるが景石は配さない。北東部に遣水と考えられる石敷溝がある。

柱穴は調査区内に散在するが、建物として復原することはできない。調査区西端の堀 833 から東へ約 8.0 m と 11.0 m の地点で検出した柱穴は完形の石仏（高さ 63 ～ 67 cm、幅 37 cm）の背面を利用し根石とすることからこの柱穴を使用した建物には重量のある上部構造が想定できる。

江戸時代 江戸時代に属する遺構には建物・土間・竈・小径・柱列（塀）・池・井戸・集石土壙・土器埋納土壙・塵芥投棄土壙・土取穴などがあ

り、江戸時代前期におさまる遺構である。

『洛中絵図』（寛永期）には姉小路に面して後藤庄三郎家が記されており、これを参考にすれば調査区中央に後藤家敷地の東端境界が位置し、調査区西半は後藤家敷地の南半部分に該当するようである。後藤家に係わる遺構には、敷地東部に池・堀・土壙、中央に土壙・土取穴、西部に建物などがある。調査区南東部には小径がある。小径は、後藤家内から東洞院通まで延び、砂・礫を敷つめ丁寧な造作を行う。小径上面で土器埋納土壙を 2 基検出した。土壙 17 には土師器小皿が、土壙 124 には土師器羽釜が埋納されていた。柱列 974 は小径が機能を停止したのち小径南端に沿って建てられる。柱列 975 は後藤家の東端境界を示すと考えている。柱列 975 の西で池 421 を検出した。検出面での規模は現存長約 21.0 m、幅約 3.5 m、深さ約 1.0 m ある。上面には厚い砂礫層が堆積する。肩口に拳大の礫を疎らに貼付ける。池南東隅には東へ延長する溝 151 がある。溝 151 南肩口に沿って柱列 972 が延長する。池西端で堀 397 を検出した。下層には泥土層、上層には砂礫層が厚く堆積する。池 421 埋没後に池西肩口に沿って柱列 973 が建てられており、後藤家が東端境界を縮小した後の柱列と考えられる。西端で検出した建物 970 は南北棟の掘立柱建物である。桁行は一間 1.25 m で 9 間分確認した。梁間は約 5.0 m ある。塵芥投棄土壙には灰・



図21 池876平面図 (1:100)

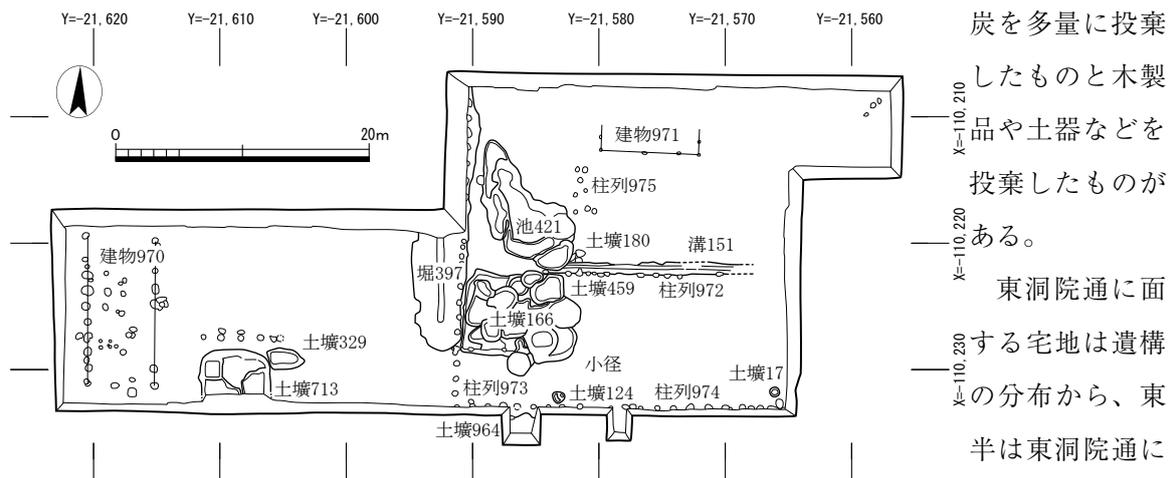


図22 江戸時代主要遺構平面図 (1:600)

炭を多量に投棄したものと木製品や土器などを投棄したものはある。東洞院通に面する宅地は遺構の分布から、東半は東洞院通に面した建物、西半は裏庭などの

空閑地に想定できる。東半では土間・礎石・竈状遺構などを検出した。調査面積が狭小なため間取りなど詳細は不明である。なお、東半は室町時代の東洞院通の路面であり、江戸時代には東洞院通が現路幅まで狭められたと考えられる。西半では礎石建物 971 と土壌を検出、建物北半は削平を受けるが柱間は桁行 1 間約 1.6 m、梁間約 1.0 m である。土壌には土器や塵芥などを投棄した土壌と集石土壌がある。

遺物 遺物は整理箱で土器瓦類 503 箱・木器類 177 箱・石製品 4 箱・金属製品 2 箱・土サンプル 2 箱の総数 688 箱出土した。半数以上は後藤家敷地内から出土した江戸時代前期に属するものであり、国産陶磁器類や木製品が多量に含まれている。当該期の遺構や生活環境を考察する上で重要な資料であると共に、所有者が推定できる遺物としても注目できる。

平安時代前期から平安時代後期に属する遺物には土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦・木製品がある。室町時代中期から後期に属する遺物には土師器・瓦器・陶器・輸入陶磁器・金属製品・土製品・銭貨・石製品などがある。江戸時代に属する遺物には土師器・瓦器・陶磁器・輸入陶磁器・瓦・木製品・土製品・金属製品・銭貨・石製品・骨角器・骨・種実などがある。出土遺物は整理中であり現在までに判明している主要な遺物の概要を示す。

土師器では金箔を貼った土師器皿がある。江戸時代に属する。

国産陶磁器には古瀬戸（花瓶）、瀬戸（向付・天目）、織部（椀・大皿・皿・向付・猪口・水指・魚形水滴）、志野（椀・大皿・皿・向付）、備前（椀・鉢）、唐津（沓茶椀・椀・皿・蓋）、伊万里（椀・皿）、京都産（楽茶椀・仁清茶椀・京焼皿・京焼魚形水滴）などがある。

輸入陶磁器には越州窯青磁椀・長沙窯白釉壺・龍泉窯青磁牡丹文鉢・龍泉窯青磁壺蓋・磁州窯白磁山水図枕・磁州窯瑠璃釉壺・高麗椀などがある。

軒瓦では平安時代前期から後期に属する軒瓦には蓮華文軒丸瓦、唐草・無文・剣頭巴文軒平瓦などがある。江戸時代に属する軒瓦には巴文金箔瓦などがある。

木製品では平安時代から鎌倉時代に属する木製品には井戸部材がある。江戸時代に属する木製品には工具（漆塗籠・刷毛・工具柄・漆付着布）、服飾具（扇子・連齒下駄・差込齒下駄）、容器

(漆器椀・漆器皿・漆塗折敷・折敷・漆塗曲物・曲物・桶・釣瓶・箱・曲物柄杓・籠編物・黒漆塗竹編物・把手)、食事・調理具(箸・切匙・串状製品・杓子)、調度具(燈架・漆塗部材・部材)、計量具(物指)、遊戯・祭祀具(木球・羽子板・舟・人形・立体人形棒・刀形・舟形)、雑具(傘・棕櫚箒・棕櫚縄・鉉)、木簡(付札・文書木簡など)、他に用途不明の木製品が多数ある。木製品のうち文字・記号資料としては漆器椀・皿底部外面に「一」、「二」、「太」、「大」、「甲」、「△」、「×」、「L」、「◇」、などを赤漆や刻線で付すものが16個体、下駄台表に「中」、「∞」、「△」、「#」、「>」、「∴」などを刻線で付すものが8個体ある。箸には21～30cm前後の長さのものがある。物指は1寸と5分毎の目盛および5寸目に「×」印を刻線で示す。7寸目まで遺存しており1尺物指に復原できる。現存長は27.2cm、1寸平均3.89cmとなり鯨尺の目盛を刻んだ物指であろう。

積文の立った木簡は27点ある。付札では商標であろう木標を記したものが14点あり、「五大力菩薩」や「伊勢大神宮」を記したものも含まれる。文書木簡では日記を記したものがある。その他、柄に「御台所」と墨書した切匙、「南無阿弥陀仏」と墨書した薄板がある。

金属製品は大半が江戸時代に属するものであるが、一部室町時代のものも含む。金属製品には銅箸状製品・鉄箸状製品・銅蝦鉸状製品・鍍金銅製品・鉄釘・銅鏡・銅煙管(吸口・雁首)・銅飾り金具・鉄工具・鉄刀子・銅籠状製品・鉄五徳・赤漆鎧・銅飾り(人物)棒・鉄包丁・鉄螺旋状製品・銅楔状製品・銅鞘尻金具・銅飾円筒製品・銅鏢止・銅鏡・鉄吊り金具・銅針・銅毛抜・銅刀子柄・銅管・銅板他、用途不明の金属製品が多数ある。

銭貨は寛永通寶・慶長通寶・文久永寶・永樂通寶・元符通寶・天禧通寶・紹聖元寶・洪武通寶・元豐通寶・熙寧元寶・皇宋通寶・治平元寶・元祐通寶・祥符通寶・嘉祐元寶・聖宋元寶・天聖元寶(金付着)、他刻字不明の銭貨を含め約110個体ある。

石製品は室町時代に属する石製品には石仏がある。江戸時代に属する石製品には硯・正座形人形・石仏などがある。硯には「元和」銘線刻硯・草花文線刻硯がある。

その他の遺物としては、室町時代に属する土製品では「源心」銘型押仏がある。また、江戸時代に属する伊万里将棋駒(歩)・伊万里人形・犬形土製品などがある。

骨角器・骨には江戸時代に属する獣骨(頭蓋や顎骨など)・魚骨などがある。

小結 今回の調査では主目的の一つであった東三条内裏期の遺構を検出することはできなかった。これについては幾つかの理由が想定される。まず、平治の乱の折に東三条内裏は炎上したことが知られるが、調査区内では火災の痕跡を検出していないことから当該期の遺構面は削平された可能性がある。あるいは、調査区が十三町の中央やや北寄りに位置するため、1町規模の邸宅における建物配置や空地を想定すれば主殿に南面する南庭に該当する可能性もある。南接する現NTT中支店敷地内での(財)古代学協会による調査(1965年)では、現地地表下約2.6mで平安時代末期の遺物を包含する黒褐色粘土層が検出され、池に伴う土層と評価されている。今回の調査では調査区南端において現地地表下約1.6mで無遺物層を検出しており、黒褐色粘土層は調査区内にはおよばないため、検出された黒褐色粘土層は池に伴う堆積土層である可能性は高い。

東三条内裏期前の遺構については井戸を検出するにとどまったものの、平安京跡では検出例の

少ない規模・構造を有する井戸であることは注目できよう。井戸 977 は方 2.1 m の井籠組井戸に復原でき、これまでに平安京跡で検出された井籠組井戸側では西寺跡出土井戸（方 2.4 m）に次ぐ規模を有する。井戸 544 は方形縦板組みと円形縦板組みの 2 種の井戸側を組み合わせる特徴的な構造を有する井戸である。出土遺物（11 世紀前半）から藤原氏の邸宅に伴う井戸と考えられる。

室町時代については「構」の一部と考えられる堀を検出した。堀の規模や堀に囲まれた宅地規模が明らかになった。応仁・文明の大乱前後の下京域の様相や「構」の構造などの中世京都の研究を進める上で重要な考古資料が得られたと言える。また、池 876 の造作ならびに輸入陶磁器の出土宅地規模などから考え、所有者は有力な階層であったことがうかがえる。ことに中世期の池で全容のわかる出土例は京都では他になく、庭園研究に新たな考古資料を提示できた。

江戸時代では、後藤家ならびに東洞院通に面する宅地などを検出することができた。近世京都の明確な宅地割りや宅地内の具体的な状況を把握できたことは、秀吉の大規模な都市再開発を経て近世に至る京都の歴史を考察する上で重要な考古資料である。

池については千葉大学の浅野二郎氏、仲隆裕氏ならびに造園学会諸氏から多くの御教示を頂いた。また、石材鑑定は京都府立山城郷土資料館の橋本清一氏に御願ひした。木簡については京都文化博物館の藤本孝一、奈良国立文化財研究所の館野和巳、綾村宏、橋本義則、神戸大学の鈴木景二各氏の御指導を受けた。記して感謝いたします。

なお、池は原因者との協議により当地に保存されることが決定され、原位置に砂と土嚢袋によって保存されていることを記しておく。

（辻 裕司・鈴木廣司）



図 23 堀 397 木製品出土状況（北から）

8 平安京左京六条一坊（図版1・14・15）

経過 この調査はJR丹波口駅周辺の再開発事業の一部である道路拡幅工事に伴うもので、対象地は日本たばこ産業敷地（旧専売公社五条工場）の南西部、現万寿寺通および千本通に沿う横L字形の地域である。当地は平安京左京六条一坊一町の南端、朱雀大路の推定地にあたり、調査予定地には、朱雀大路、樋口小路、坊城小路に関連する遺構の検出が予想された。

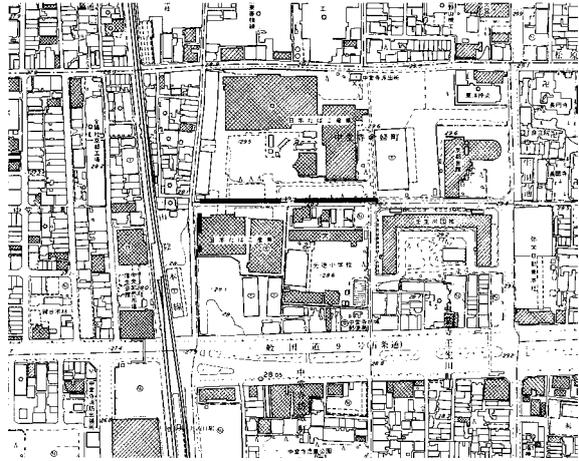


図24 調査位置図（1：5,000）

調査区は道路拡幅予定地に、幅5～6m、東西方向（万寿寺通沿い）の総延長175m、南北方向（千本通沿い）38mを計画し、条坊関係の遺構の検出を主眼として設定したが、既設建造物の回避、旧施設の基礎、敷地内建物の解体工事による廃材搬出路の確保などの都合で、対象地を1～6区に分割し調査を進めた。調査の結果、予想された平安時代の条坊街路側溝の他、鎌倉時代の側溝や井戸、近世の土壌（土取り）などを検出した。

遺構 平安、鎌倉時代の遺構は条坊関連の溝5条の他に井戸がある。このうち朱雀大路東側溝は新旧の2条（SD 33・124）あり、新しい方は位置が西へ約3mずれている。樋口小路北側溝も同様に南北に接して2条（SD 52・46）検出しており、時期もそれぞれ朱雀大路東側溝に対応している。ただ、北側のSD 52の一部では下層に10世紀代の遺物を含む堆積層を確認しており、溝の成立期がさかのぼる可能性がある。この二つの道路側溝に対して、坊城小路西側溝（SD 55）は1条を検出したのみである。しかし、この溝の東側の基礎跡による破壊を免れた箇所での土層観察によると、シルト層の堆積が確認でき、朱雀大路東側溝の状況から見てもこの部分にもう一条古い時代の側溝が存在した可能性が高い。井戸（SE 78）は樋口小路北側溝SD 46を切って成立しており、



図25 SE 78（北から）

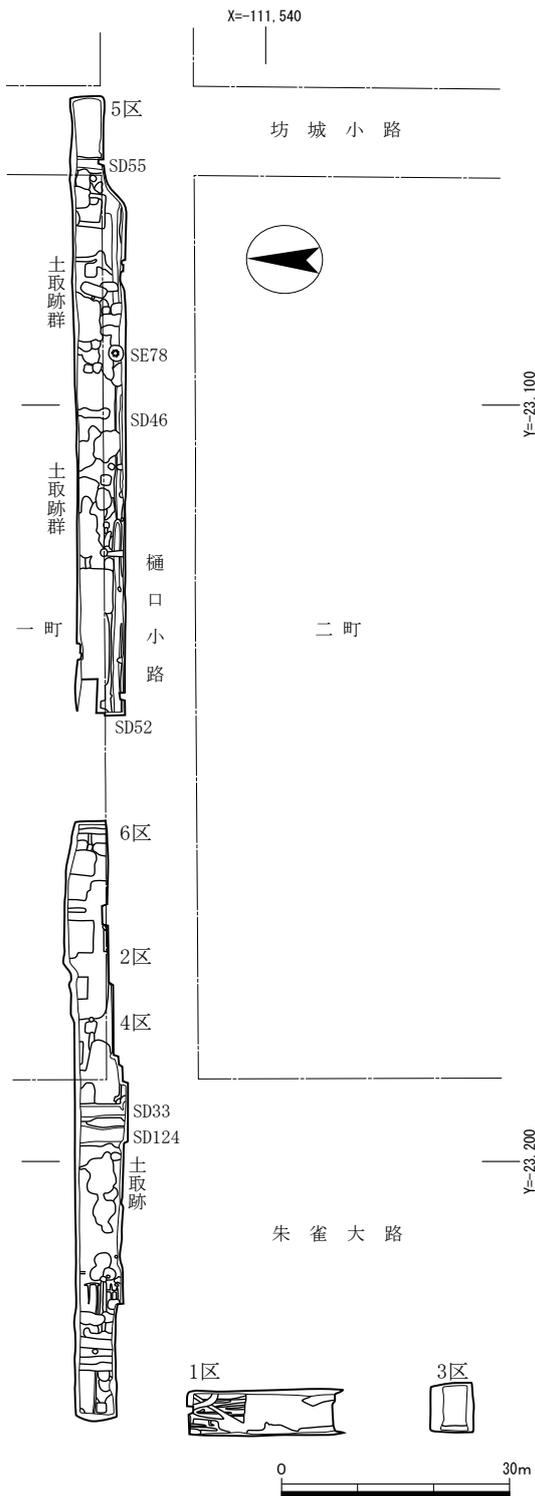


図26 遺構平面図 (1:1000)

鎌倉時代後半のものである。自然石を用いた平面円形の石組みの井戸で、土師器を主として多量の土器類が出土した。

遺物 遺物は整理箱にして73箱出土した。その大半は土器類で、他に少量の瓦類、骨など動物遺体、木簡がある。土器類は主に溝、井戸から出土したが、その内SD33、SE78のものが量的にまとまっており、特にSE78からは多量の土器類が出土した。瓦類は主に朱雀大路東側溝とその周辺の整地層から出土している。

SD33の遺物には土師器、須恵器、白磁など土器類の他、ウシ、ウマの肢骨、頭骨、ヒト（成人男性）の下顎骨などの骨、「南無大日如来」と墨書された木簡がある。

SE78からはⅦ期古（13世紀末頃）の土器類が多量に出土している。土師器、瓦器、須恵器、焼締陶器の他、青磁、白磁褐釉陶器などの輸入陶磁器があり、破片数の比率は総数5,806の内土師器96.3%、瓦器2.6%、須恵器0.6%、焼締陶器0.1%、輸入陶磁器0.3%で、土師器が最も多い。土器類は椀・皿など供膳形態のものが98.0%と圧倒的多数を占め、その中の98.2%が土師器で、他は少ない。土師器の皿類には褐色系のものと白色系のものがあるが、その比率は前者が約7割を占めている。土師器を除いた食器類の比率は、瓦器88.3%、須恵器（山茶椀含む）1.0%、輸入陶磁器10.7%で、同時期の左京中心部の資料と比較すると瓦器の比率が高い傾向を示している。

小結 この調査は旧専売公社五条工場敷地内の調査としては5次調査になる。これ以前の調査が六条一坊の八町域に集中していたのに対して、今回は一町の南辺部が対象になった。この地域では既往の調査によって広範に土取り跡が確認されており、今回の調査でも調査区のかなりの部分が同様の土取りによって破壊されていた。しかし、推定していた条坊関係の側溝は三つの街路（朱雀大路、樋口小路、坊城小路）ともに良好に残存しており、さらに坊城小路を除く二つの街路についてはそれぞれ二時期の側溝を確認した点は大きな成果と言えよう。（平尾政幸）

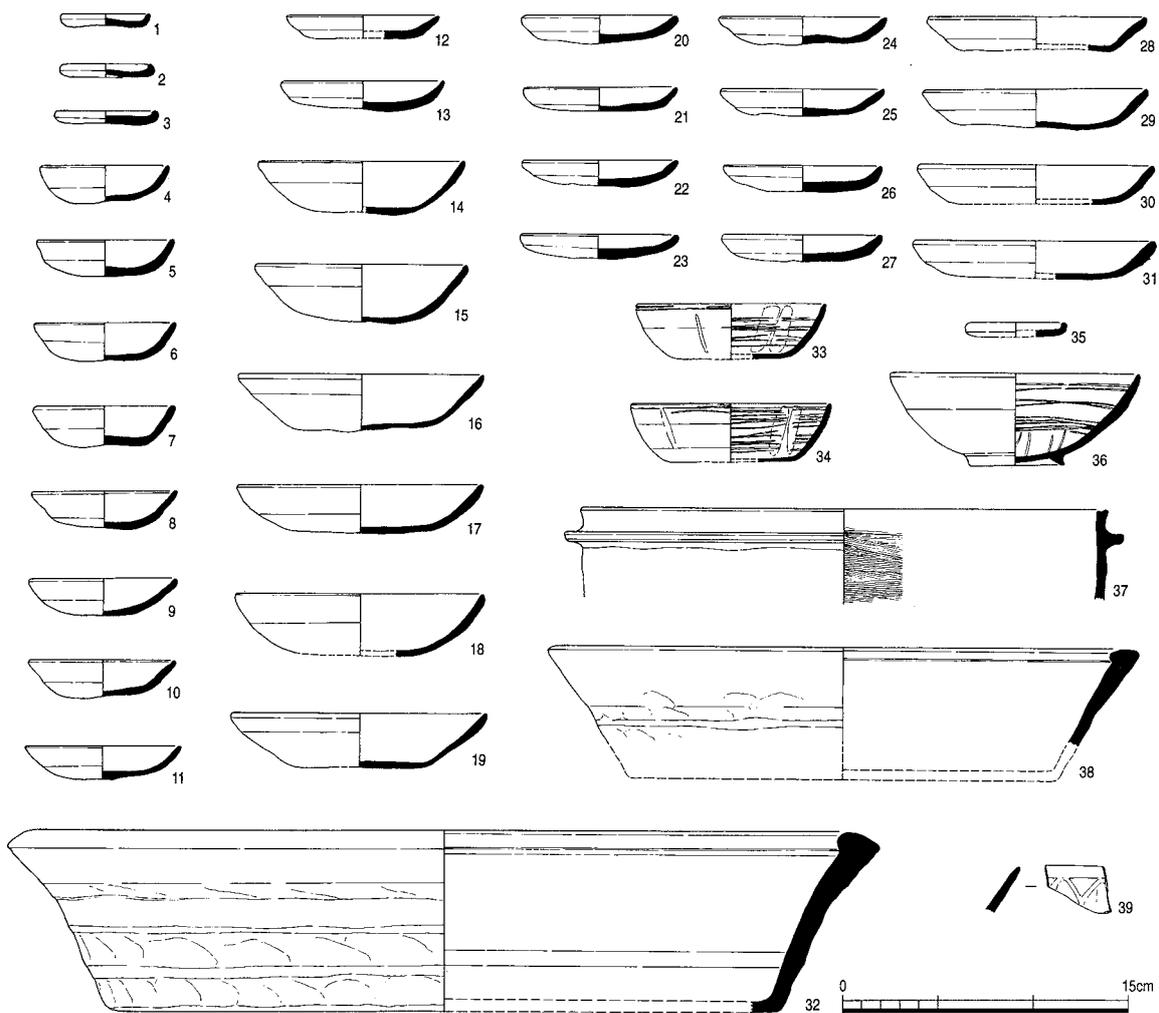


図27 S E 78 出土土器実測図 (1 ~ 31 : 土師器 32 ~ 38 : 瓦器 39 : 青磁) (1 : 4)



図28 5区SD 33断面 (南から)

9 平安京左京九条二坊 (図版1・16)

経過 前年に引き続き実施した調査である。1989年試掘調査を1次、昨年度の調査を2次調査として、今回の調査は3・4次調査にあたる。3次調査は、敷地南西にある大型バス駐車場、4次調査は、敷地北西に位置するオートテニスおよびテニスクラブ駐車場部分にあたる。両地点共に豊臣秀吉により洛中洛外の境として天正19年正月に着工され、翌年2月に完工したとされる御土居の堀に推定される。また、調査対象地西端に油小路東築地が推定できる。

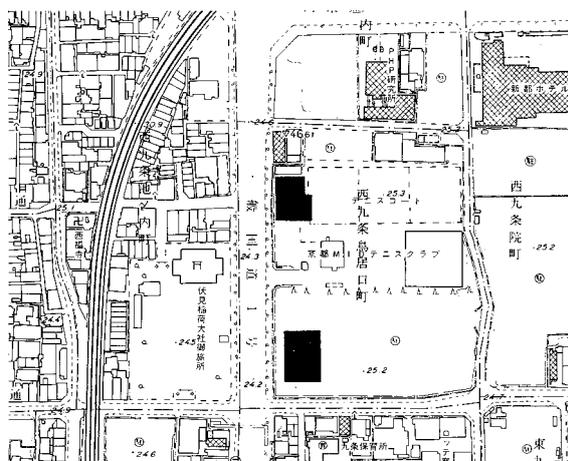


図29 調査位置図 (1:5,000)

遺構・遺物 基本的な層序は、3・4次調査共に同じである。約2mの現代盛土層下が砂礫層となる。この砂礫層は、弥生時代から古墳時代の磨滅した土器をわずかに包含し、平安時代以降の遺構ベースとして調査区一帯に堆積する。また4次調査区では、盛土層下に明治時代以降の耕作土層が約15cmの厚さで堆積する。

検出した遺構は、近世末から近代にかけての耕作に伴う溝・暗渠溝、桃山時代から江戸時代の御土居洛外側の堀などがある。なお、3・4次調査区共に御土居築造より古い時代の遺構の検出はない。

近世から近代にかけての暗渠には、3・4次調査に窯変した陶磁器・窯道具、瓦などを多量に詰込み水はけを良くしている。

御土居堀は3・4次調査共に約30mにわたり調査した。また西肩は検出していない。

堀の堆積層は19層から21層に分層され、その大部分は泥土層であり常に湿地状を呈していたことが想定できる。層厚約80cmの砂礫層の間層を挟み、大きく2層に分層できる。上層からは寛永通寶が出土するが下層からは

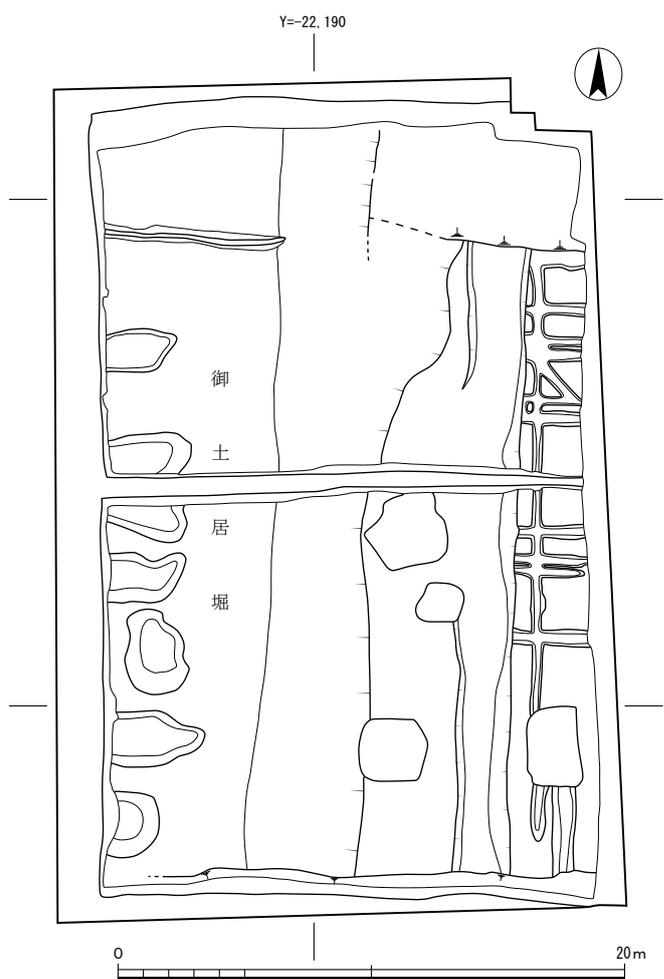


図30 3次調査区遺構平面図 (1:300)

出土しない。また、下層からは多くの陶磁器類と木器類が出土するが、上層からの出土遺物は少ない。堀底面から約50cm上に堆積する間層からは弥生時代から古墳時代の土器、平安時代・桃山時代の土器類が出土する。弥生時代から古墳時代の土器は磨滅が著しいが、以降の土器・瓦は磨滅を受けておらず、近隣からの混入と考えられる。

堀底面では幅1.5～2mの連続した窪みを検出しており、堀開削時の作業単位と考えられる。

なお、4次調査区は平安京条坊の針小路と油小路の交差点東半に比定できるが、御土居堀による削平のために確認できなかった。

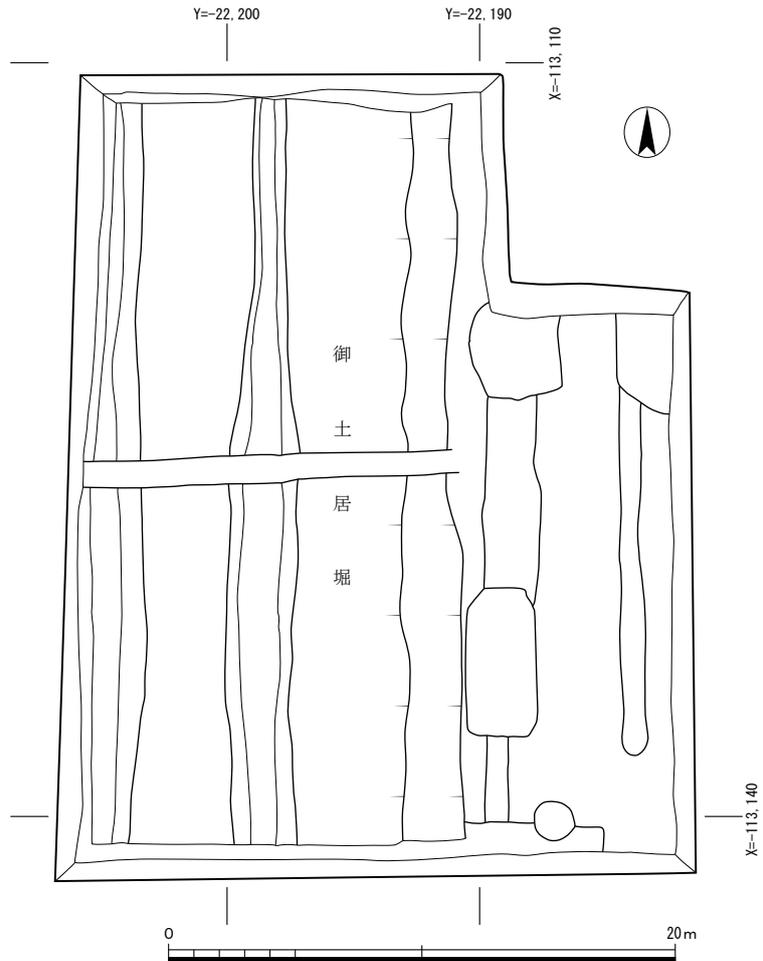


図31 4次調査区遺構平面図 (1:300)

出土遺物の大半は御土居堀からのものである。また、遺物の大部分は木製品が占める。木製品では、箸の出土量が圧倒的に多く、漆籠、刷毛、桶、漆製品、建築部材、曲物、折敷、櫛、織機、墨書木製品などがある。この他に能面のミニチュア製品や、塔婆、人形の頭、刀子形、剣形、撥形木製品、将棋の駒なども出土した。将棋駒には、中将棋の『銅将』が一点ある。

出土した墨書木製品文字資料には、付札木簡の他、板材、曲物側面、曲物蓋、杓把手、糸車などに墨書や絵を描いたものがある。



図32 3次調査区御土居堀遺物出土状況 (北東から)

小結 3・4次調査共に調査区の大半は御土居堀で占められており、平安時代の遺構を検出することはできなかった。しかし、御土居堀から出土した多量の木製品には多くの文字資料と、人形の頭や製品不明の部材が多くあり、民俗学上からも注目すべき資料となった。

なお、文字資料は400点を超えており、以下のようなものがある。

付札類には

- 1 ・「京極丹後殿へ遣□内蔵物」
・「ミツ漬けの つぼ壺ツ 筑後与り」
- 2 ・「保四年 八月中」
・「正保四□ 八月□」
- 3 ・「仁 伊勢大神宮」
・「五大力菩薩岩渕宇野長三」

曲物蓋に墨書されたものには

- 4 「進上 海鼠腸」
- 5 「むし保 双林寺 漢阿弥」

折物蓋には

- 6 「茶」

などの文字資料があり、この他の文字資料には焼印がある。板材、桶側板、部材に押捺したもので、「天下一」「今」「やまとや」「吉」などがあり、分銅や丸に「丁」、小判形などの絵柄を刻したのものもある。 (菅田 薫)



図33 3次調査区御土居堀最終の埋め立て状況（北東から）

10 平安京右京二条四坊 (図版1・17)

経過 調査地は、平安京右京二条四坊十四町の南東隅にあたっている。1989年に実施した調査では、冷泉小路北側溝の検出を始め、古墳時代から江戸時代の遺構や遺物包含層が良好に残存していることが明らかになっている。今回の調査は、その成果を受けて、広い面積で調査を行うことで遺構群のまとまりを明らかにし、遺跡の理解を深めることを目的とした。

したがって、調査区は可能な限り広く設定することを目指したが、埋設管や東側の道路の関係から南北約35m、東西約20mの歪な方形となった(I区)。また、調査地の北西部分は、調査地内では十四町の中心に最も近い部分となるので、遺構のつながりを確認するため、別に約7m四方の調査区を設定した(II区)。さらに1993年にはII区の西に南北約20m、東西約4mの細長い調査区(III区)を設け、遺構の検出に努めた。平成5年度の調査であるが合わせて掲載する。

遺構 平安時代末期から鎌倉時代の遺物包含層より上の土は、盛土と耕作土で、遺構のほとんどが耕作に関連する小溝である。幅・深さとも数10cmで、断面はU字形もしくは逆台形である。

平安時代末期から鎌倉時代の遺物包含層の下から、柱穴1～5を検出した。東でやや南に振れるものの、5つの柱穴が東西方向に並んでいる。平安時代後期に属する。間隔は、西からそれぞれ5.0m、4.0m、4.0m、4.3mである。柱穴の大きさはまちまちで、最も大きな柱穴3では、一辺約1.0mの掘形に直径約30cmの柱が建っていたことが確認できた。この柱穴の底には、拳よりやや大きめの石を根固めにつめてあった。柱穴の大きさから、建物の一部ではないかと考え、北側・南側をそれぞれ精査したが対応する柱穴は認めていない。柱の間隔が建物にしては大きすぎ、間隔も揃わないことから、塀または柵であったと考えたい。この時期には後述する冷泉小路北側溝もすでに埋没しており、こ



図34 調査位置図(1:5,000)

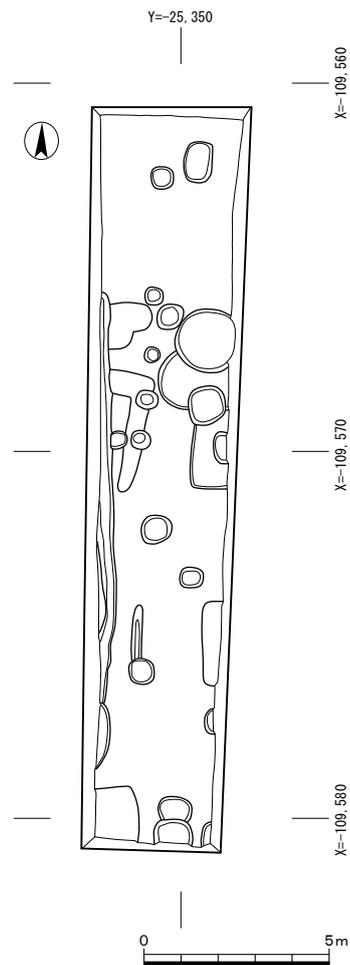


図35 III区遺構平面図(平安時代)(1:200)

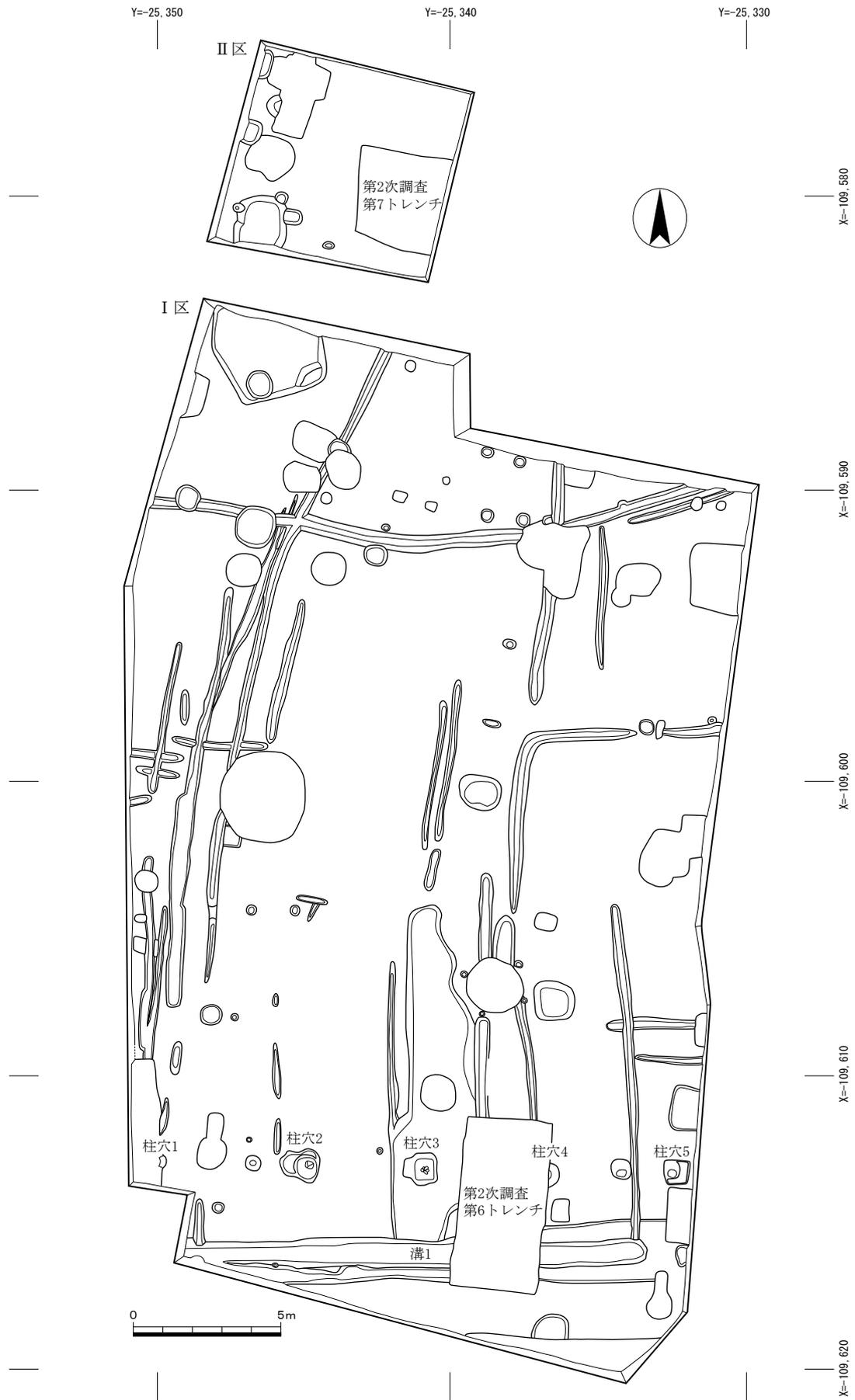


図36 I・II区遺構平面図(平安時代) (1:200)

の遺構は何らかの区画の機能を担ったとみられる。

平安時代中期の遺構は確かなものはない。

平安時代前期の遺構は、冷泉小路北側溝にあたる溝1がある。西へは調査区の外へ延びるが、調査区の東端近くで途切れる。調査区の西側では二つの溝が重なっている。切り合いから南側の方が新しく、9世紀末葉から10世紀初

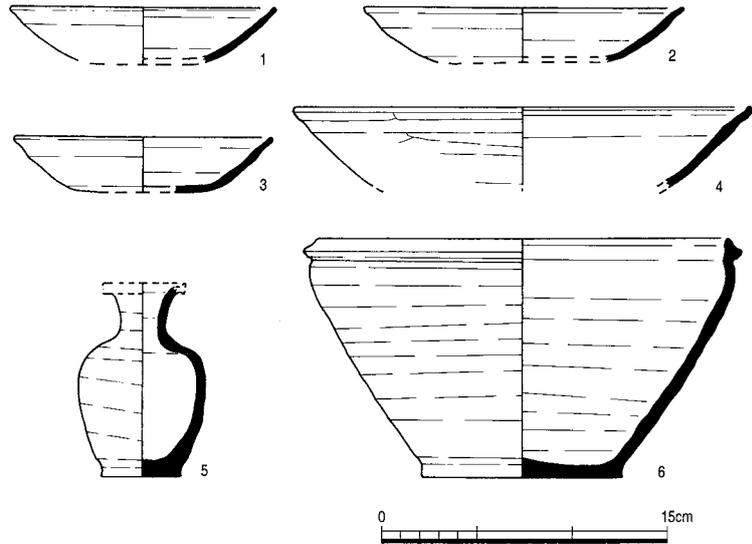


図37 溝1出土土器実測図(1～4:土師器 5・6:須恵器)(1:4)

頭の遺物が出土した。この溝と対応するにぶい黄褐色砂泥層からも平安時代前期の遺物が出土しており、この段階で整地が行われている。

Ⅱ区、Ⅲ区は、調査地の中でも十四町の中心に近い部分であり、冷泉小路沿いの側溝や柱穴列に対応する建物の痕跡を確認することを目指した。しかし、検出できた遺構は耕作に関連する溝などで、柱穴も建物ではなく、それらに伴う柵などとみられよう。

遺物 出土遺物は江戸時代以降のもので占められる。室町時代以前の遺物は、包含層・遺構共に出土量は少なく、細片がほとんどである。唯一、溝1からは、土師器皿と須恵器鉢が良好な状態で出土した(図37)。

小結 今回の調査では、平安時代前期の整地層を確認することができた。冷泉小路北側溝も、平安京造営時かそれに近い時期に造られたものと考えられる。これらのことから平安京の造営は京の北部でも西端までおよんでいたことが明らかとなった。

また、平安時代後期には冷泉小路沿いに埋没した溝に替わって塀か柵が設けられた。しかし、調査地内では平安時代に建物が建造されることはなかった。より地盤の高い北側に建物があったのではないだろうか。

(山本雅和)

11 平安京右京六条一坊 (図版1・18)

経過 この調査は京都市リサーチパーク建設に伴うもので、旧大阪ガス京都工場跡地の調査としては6次目にあたる。今回の調査地は平成元年度に実施した4次調査地の西側に位置する東西約65m、南北33mの区域で、平安京の条坊では右京六条一坊十三町の中央から北西の一面に該当する。東隣の4次調査地では平安時代前期の建物、溝などが検出されており、本調査地においても同様な遺構の存在が予想された。調査の結果、十三町を4分の1に区画する溝や、掘立柱建物、井戸など平安時代前期の遺構の他、それらの下層に縄文時代から弥生時代の川などを検出した。

遺構 平安時代の遺構には掘立柱建物、柵、溝、井戸、湿地(池)状の落込などがある。掘立柱建物は少なくとも8棟を検出した。その内3棟は調査区の南端部で北側の柱筋を検出しただけで、規模や全体の形状は不明である。建物SB6は東西の2面に庇の付く2×5間の南北棟、建物SB5は西庇で2×7間の南北棟。建物SB8は2×3間の南北棟だが、東側の断割の結果、2箇所柱穴を確認しており、東庇が付く建物と思われる。建物SB10は東西2面に庇の付く南北棟で、北側が調査区外に伸び、規模は不明である。溝SD2は十三町の東西中央に位置する南北方向の溝で、溝SD3は十三町南北の中央に位置する東西方向の溝である。また溝SD3

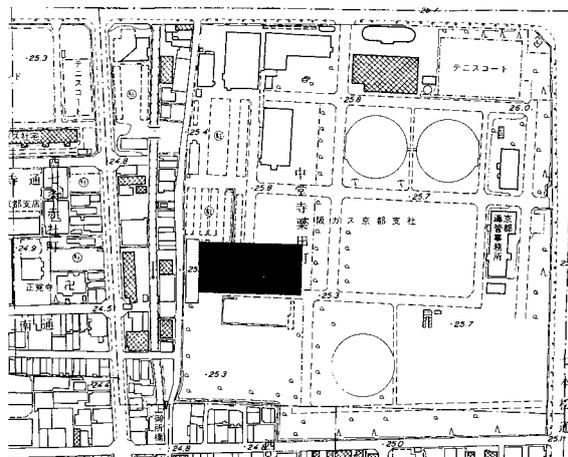


図38 調査位置図 (1:5,000)

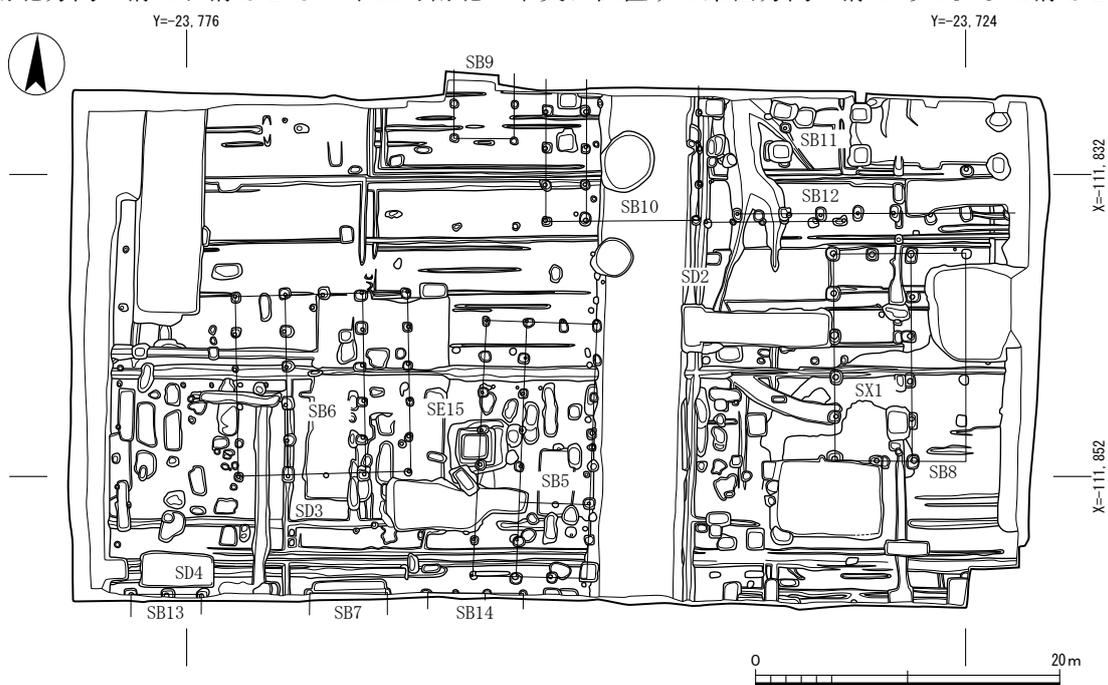


図39 遺構平面図 (1:500)

の南側約3mを隔て並行する溝SD4を検出したが、この間が小径として機能していた可能性がある。これらを区画施設として理解すれば、十三町は4分の1町に分割されていた時期があったことになる。建物SB6の東に検出した井戸SE15は建物SB5に切られている。井戸内からは部材の一部とみられる木片が出土したが、構造は不明である。調査区の東部では湿地状の遺構SX1を検出したが、この遺構は4次調査においても検出している。下層の旧流路上に位置しているが、建物SB8の廃絶後に成立しており、平安時代の遺物が出土している。



図40 SE15 (西から)

下層の流路は縄文時代から弥生時代の川で、今回の調査区では西肩部のみを検出した。4次調査の成果と合わせると、この付近では幅約20mの河川であることが判明した。肩部に生育していたと思われる径40～60cmの橡の根元部が川側に倒れこんだ状態で数本検出されている。

遺物 出土遺物の大半は平安時代のもので、土器類が主体を占める。遺物は主にSX1、SD2から出土しており、井戸、建物の柱穴など他の遺構のものはわずかである。平安時代の遺物の年代はおおむねI期中からII期中(9世紀初頭から後半)に納まり、その他の時期のものはほとんどない。図示した土器類はSX1出土のもので、型式はII期中(9世紀後半)に位置付けられる。土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器があり、総破片数3,396片のうち各器種の比率は、土師器85.3%、黒色土器4.6%、須恵器7.3%、緑釉陶器1.1%、灰釉陶器1.1%、輸入陶磁器0.6%を示す。機能別の比をみれば、供膳形態79.9%、貯蔵形態4.7%、煮沸形態7.7%となる。供膳形態では土師器が91.8%と大半を占めており、他はわずかである。土師器を除いた食器類の構成は黒色土器46.4%、須恵器16.2%、緑釉陶器15.3%、灰釉陶器14.0%、輸入陶磁器8.1%となっており、平安京の同時期の資料と比較すると緑釉陶器、灰釉陶器など国産の施釉陶器の比率がやや低く、黒色土器、輸入陶磁器が多い特徴を示している。ただII期中の破片数データは乏しく、類型とできるかは、今後の資料の増加を待って検討する必要があるだろう。

小結 今回の調査では掘立柱建物を始めとする平安時代の遺構を検出することができた。中でも十三町を4分の1に区画していた溝を検出したことは大きな成果である。同様の溝や柵などの区画施設は4、5次調査において十一、十二町でも発見されており、それらの検討結果からも各町が4分の1あるいは8分の1町に区画されていたことが想定できる。このことはこの地区が1町全域を占めず、分割された宅地として認識できることを示している。またこれらの遺構はすべて平安時代前期に属するものであり、9世紀後半のうちには廃絶している。平安時代中期以後の遺構は希薄で、中世以降も耕作地として利用されていた状況を示している。こうした状況は右京六条一坊の皇嘉門大路以西のこれまでの調査結果ともよく符合する。しかし、皇嘉門大路の東に

位置する五、六町では平安時代前期の遺構がやはり9世紀代のうちには廃絶するが、その後の空白期を経て、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構が多数検出され、その時期に再開発があったことがうかがえるなど、皇嘉門大路を挟んで異なった状況が認められることも明らかになった。
 (平尾政幸)

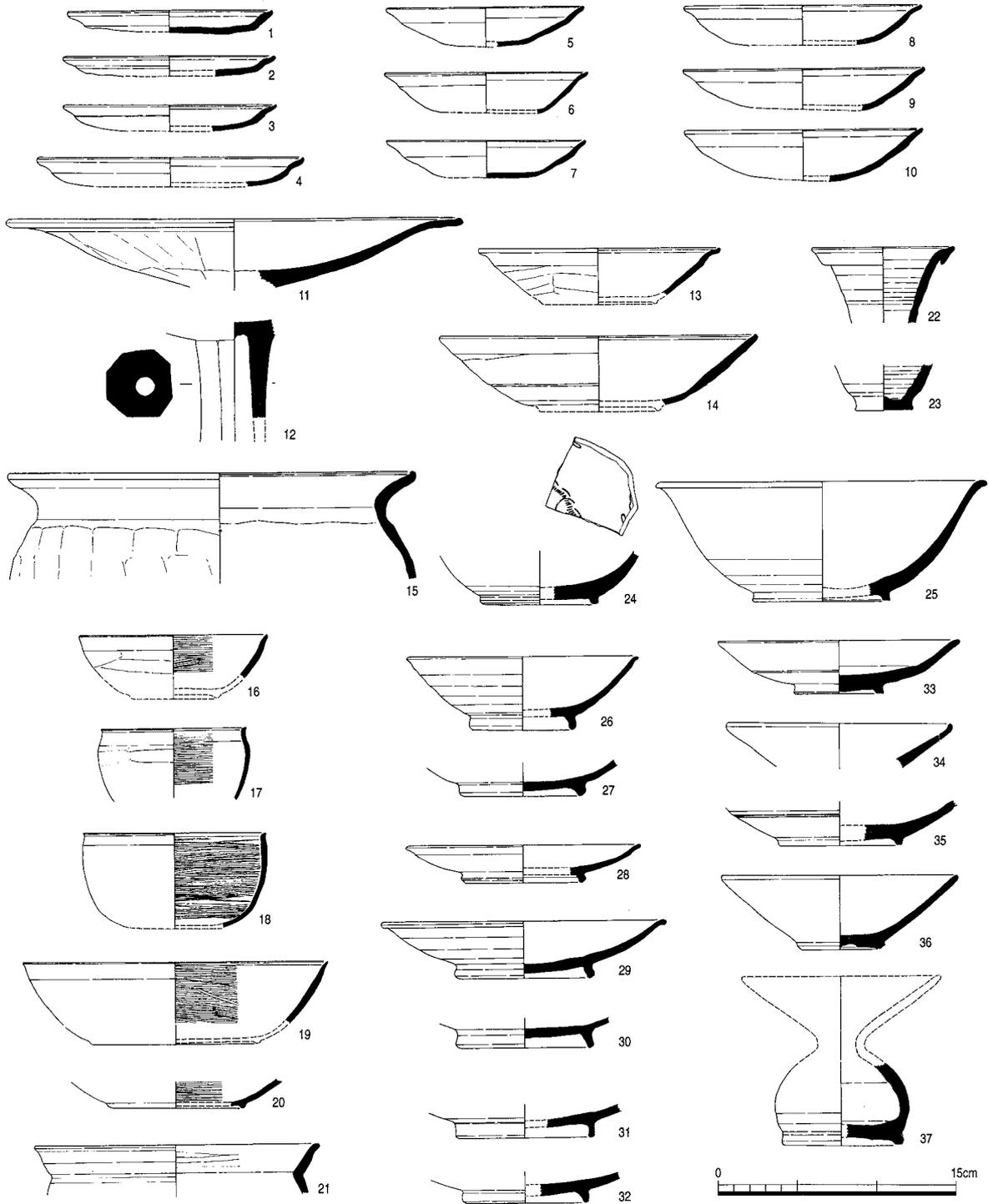


図 41 S X 1 出土土器実測図 (1～15:土師器 16～21:黒色土器 22・23:須恵器 24・25:緑釉陶器 26～32:灰釉陶器 33:白磁 34～37:青磁) (1:4)

Ⅲ 白河街区跡

12 最勝寺跡・岡崎遺跡 (図版1・19～23)

経過 調査地は、六勝寺の一寺院、最勝寺の推定地である。また、弥生時代から古墳時代の岡崎遺跡の範囲内でもある。調査の主な目的は、①実態が不明な最勝寺と白河条坊関連の遺構を検出すること、②弥生時代から古墳時代にかけての遺構を検出すること、③平安神宮火山灰層上下の層準で旧石器時代の遺構・遺物を検出すること、の3点であった。②に関しては、事前の試掘調査で調査区の南東部を北東から南西に向う庄内式期の自然流路の

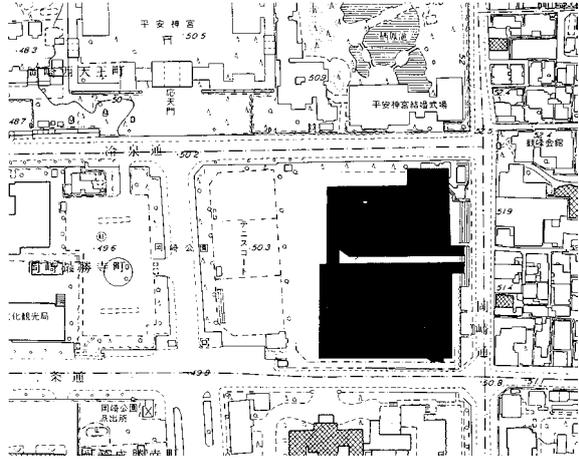


図42 調査位置図 (1:5,000)

存在が明らかになっていた。③については、調査に先立って行われた周辺整備の工事に伴う立会調査で平安神宮火山灰層が調査地全域にわたって良好に残存していることが判明していた。この層の上面で大型偶蹄類の足跡を発見した京都市動物園内の調査地は、今回調査地の南東方向に位置する。

遺構 基本層序について述べる。層厚30～70cmの現代盛土層直下に、黄白色の砂礫からなる沖積層下部層および低位段丘層相当層が堆積する。南区の南西部には、黄白色砂礫層の上に中近世耕作土の堆積を60～70cm認める。南区の東半、北区の中央部には自然流路110の低地があり、この中に縄文時代早期から平安時代後期にかけての堆積層が残る。縄文時代の湿地層の中には、港火山灰(U-Oki)・横大路火山灰(K-Ah)を認める。自然流路110の最上部には、部分的に室町時代の整地層を認める。また、黄白色砂礫層下1.5～2.0mには、上下を泥炭層に挟まれた状態で、平安神宮火山灰層(AT)が良好な状態で存在する。平面的な調査は、黄白色砂礫層の上面で庄内式期以降の調査を行い、平安神宮火山灰直上の泥炭層上面で旧石器時代の調査を行った。

平安時代後期の遺構は、南区の南端で東西方向の地業と東西溝を検出した。地業は、南側の地業100と北側の地業111を並行して検出した。共に、湿地化した自然流路110の上部に礫を集積したもので、軟弱な地盤を強化するための仕事と思われる。地業100は、幅3.5mで東西に約32m、厚さは約0.3mあり、中央が盛上がった断面蒲鉾形を呈する。拳大の礫を用い、東西の両端にはより大きめの石材を用いる。地業111は、幅2～3mで西端は湿地の範囲に応じて狭まる。東西長は約20mある。地業100と同じく拳大の礫を用いるが、掘形の基底に礫が一重敷かれるのみである。また礫敷は、先に約3mの間隔で礫を並べて区画を設け、その中を礫で充填する工法をとる。南面には瓦を敷きつめた犬走状の施設がある。二つの地業の間には、幅3.5～4.0mの

東西溝 16 がある。東は幅を狭めつつ調査区の東壁までおよぶ。西は後述する古墳墳丘の手前でとどまる。北側から落ち込んだ状態で多量の瓦が埋土から出土している。東西溝 35 は東西溝 16 の埋没以降に開削される。幅約 50cm ある。東端は地業 100 のやや東で浅くなる。西側は地業 100 を暗渠風に切り込んで南側に通じる。地業 100 の南側は溝状となり、鎌倉時代以降に埋まる。これらの遺構は、11 世紀後半から 12 世紀にかけてのもので、法勝寺の造営に始まる白河街区の整備に伴うものと考えられる。また、二つの地業の性格についてはさまざまな解釈が可能であるが、二条大路末の北縁に関連する遺構であることは間違いない。条坊関連の遺構としては、他に南西区で検出した南溝 130 がある。その他に浅い瓦溜 4 基と湿地を瓦片で埋めた遺構を検出したが、文献に記された最勝寺の大規模な伽藍の存在を示すような遺構は検出できなかった。また、調査区の西半は依然湿地が残っていたと思われること、後述する古墳時代後期の古墳墳丘がこの時期なお残存していることなどが明らかになった。

南区西半で 1955 年まで存在した「鶴塚」の跡を検出した。「鶴塚」は 1894 年に後高倉太上天皇の御陵参考地に指定され、1955 年に発掘調査が行われ東山区月輪に移転された。「鶴塚」の

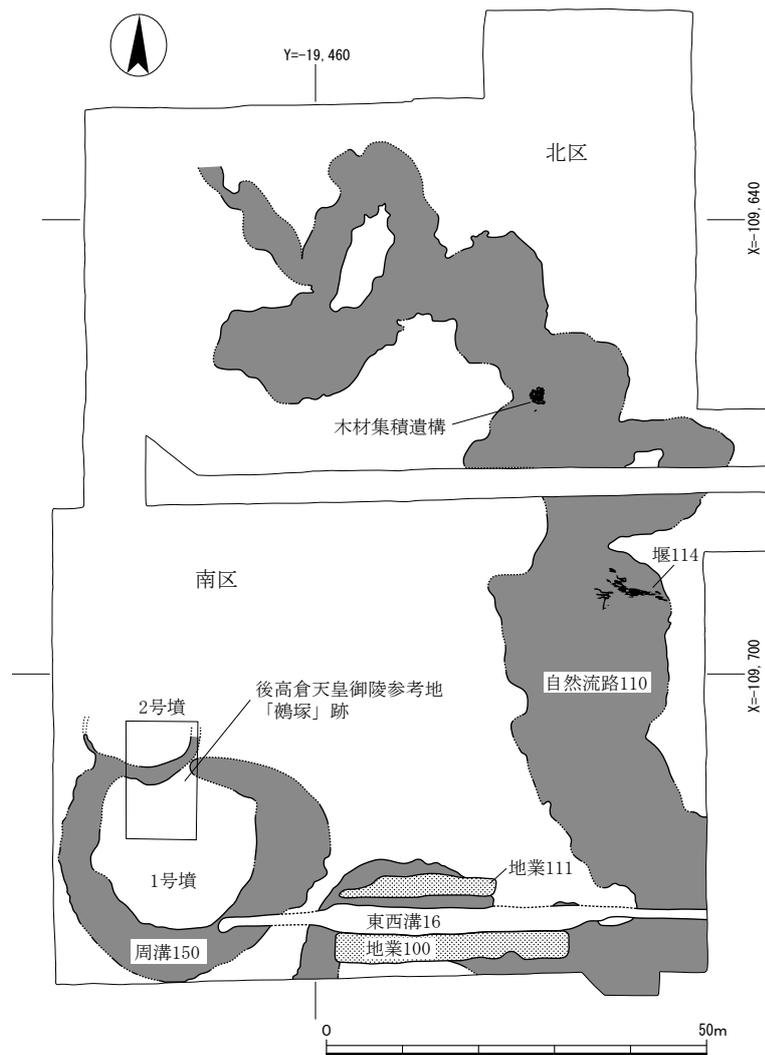


図43 主要遺構配置図 (1:1000)

周囲で円形に廻る周溝 150 を検出した。埋土から 6 世紀中葉の須恵器杯・壺が出土し、「鶴塚」が後期古墳の墳丘を引き継ぐことが明らかになり、これを 1 号墳とした。周溝 150 は、埋積状況から、平安時代中期には水が滞留した状態で存在し、それ以降に人為的に埋められたとみられる。また、周溝 150 と一部共有して、北側にもう一基の古墳周溝を検出し、これを 2 号墳とした。2 号墳の周溝から明確な遺物は出土していないが、周溝の切合い関係から 1 号墳が古く 2 号墳が新しい。1 号墳の墳丘部分の直径は約 20 m ある。周溝 150 は幅 6 ~ 10 m、残存深は最深部で約 0.8 m ある。2 号墳の周溝は北側が削平されているが、直径 12 ~ 13 m の円墳として復原できる。共に主体部の痕跡は認められなかった。

北区から南区にかけて、南流する自然流路 110 を検出した。氾濫原の幅は約 25 m あり、河道の幅は 3 ~ 5 m で、氾濫原の中を大きく蛇行する。土の堆積は、下層が洪水時の砂礫層で、上層は河道が放棄されてから以後の泥湿地層である。上層の中には植物遺体が多量に含まれる。南区の自然流路 110 内で堰 114 を検出した。川下側に杭を数本打込み、そこに横方向に木材を幾重にも重ねたもので、これにより河川の水位を上げて導水

したものと考えられるが、関連する遺構は検出していない。また北区の自然流路 110 内では、木材の集積遺構を検出した。これらの遺構の存在は、近くに集落が存在していたことを示唆する。以上の遺構は、庄内式土器が製作使用された時期のものである。自然流路 110 の肩口に縄文早期以降の湿地層を認め、流路の最下部の砂礫層から縄文時代晩期の土器片が出土することから、自然流路の位置を規定している窪地が古くから存在していたことがわかった。また、庄内式以降も湿地は存続し、平安時代後期に大幅に埋められ、一部は室町時代まで姿をとどめる。

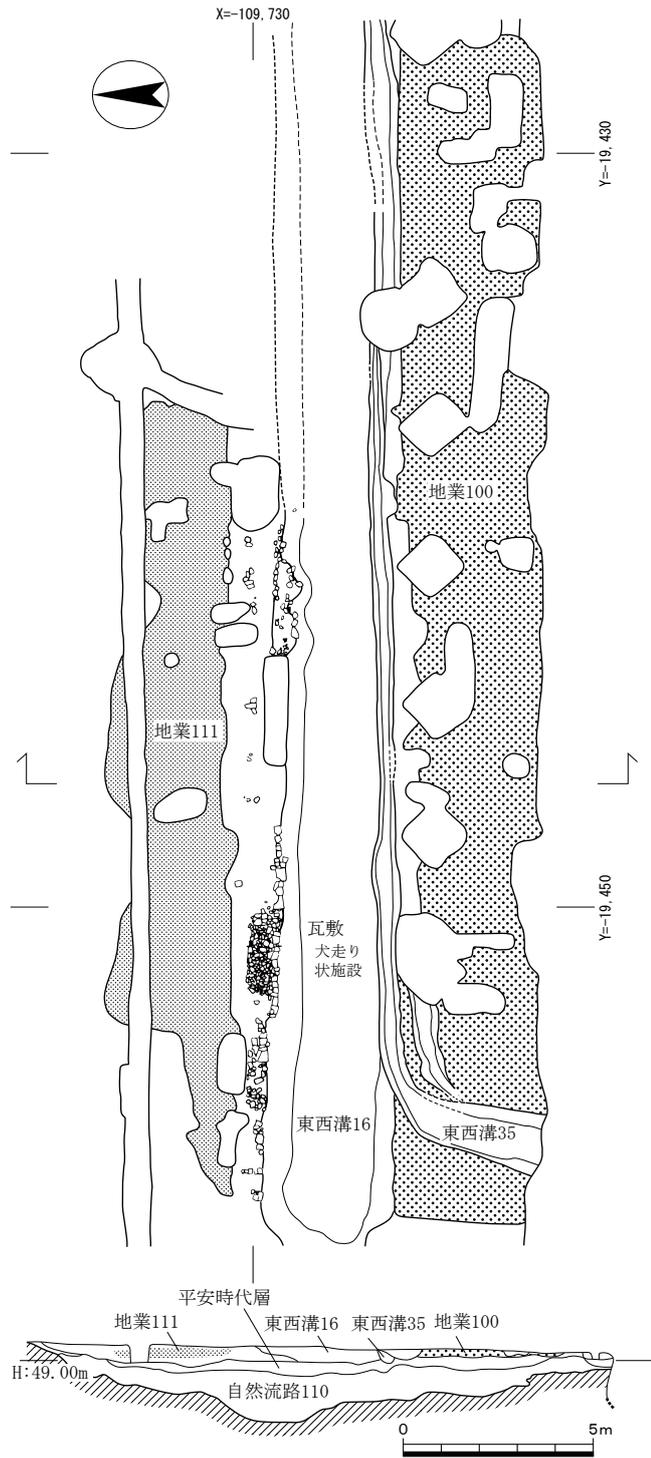


図44 地業100・111実測図 (1:200)

旧石器時代の調査は、主として平安神宮火山灰層直上の泥炭層上面で行い、一部で平安神宮火山灰層下の泥炭層上面も調査した。南区では大型偶蹄類の足跡遺構を一個検出した。蹄部分の長さは8～10cmである。前後足の判断はつかないが、右足の足印で、北西から南東方向に向かうものである。北区では平安神宮火山灰直上の泥炭層上面と平安神宮火山灰層下の泥炭層上面で足跡状の遺構を数個検出したが、確実に足跡と決定できるものはなかった。平安神宮火山灰層直上の泥炭層上面で、立木の基底部分を多く検出した。また、平安神宮火山灰の上下の層準には、寒冷地特有の地層の攪乱現象を認めた。足跡が良好な状態で検出できなかったのは、この攪乱現象のためでもある。なお、沖積層下部層以下の層準から、人工的な遺構・遺物は検出していない。

遺物 整理箱で1,219箱出土した。縄文時代、古墳時代、平安時代のものがある。土器と瓦の内訳は概算で土器1：瓦3である。その他に、土製品・石製品・木製品がある。以下、時代の古いものから解説する。

1 縄文時代 縄文土器には深鉢・甕がある(1～7)。中期前半の船元式に属するものが多い。後半の北白川上層式、晩期船橋式に属するものも少量ある。船元式土器は山城地方では出土例が少なく貴重である。石器には、石棒・砥石・石錘・叩き石などがある。石材は粘板岩製、頁岩製の他、近傍には産しない凝灰岩や片岩系統のものがみられる。

2 古墳時代前期 自然流路110より庄内式と布留式に併行する土器と木製品・土製品が出土した。土器(8～12)には壺・長頸壺・台付壺・甕・鉢・高杯・器台・小型丸底・手焙形と、ミニチュア土器として壺・台付壺・蓋などがある。いずれも磨滅が少なく、破片も大きい。生駒西麓地方から搬入された庄内式甕や岡山地方に分布する突帯を持つ特殊壺もある。同じ自然流路110からは木製品も出土している。内容は、斧の柄・鍬・ナスビ形鋤・琴・櫛状・四脚盤・加工した板材・棒状製品がある。また、土製品では土錘が出土した。

3 古墳時代中期・後期 須恵器と土師器があり、自然流路110と周溝150より出土した。自然流路110では、5世紀後半(TK 208型式)・6世紀初頭(TK 47型式)・6世紀末から7世紀初頭(TK 209型式)に属する須恵器がある。これらには杯身・杯蓋・高杯・甕・短頸壺・甕がある。古墳周溝150からは6世紀中頃(TK 10型式)に属する須恵器が出土した(13・15～17)。器種は、杯身・杯蓋・長頸壺・壺などがある。また、同周溝から紡錘車が1点出土した。表裏面に鋸歯文を施すもので、古墳の副葬品の可能性がある。

4 平安時代前期・中期 周溝150より出土している(18～27)。内容は、土師器(杯・皿・高杯・甕)・須恵器(杯身・杯蓋・鉢・甕・瓶子)・黒色土器(椀・壺)・緑釉陶器(椀・皿)・灰釉陶器(椀・皿)などである。墨書土器は2点あり、1点は土師器皿底部外面に「小泉」と墨書する。

5 平安時代後期 瓦と土器がある。土器は東西溝16、地業111などから出土したが、量的には少ない(28～33)。土師器(皿・甕)・須恵器(蓋・甕)・瓦器(釜・盤)・輸入陶磁器(白磁椀・青磁椀)がある。

瓦は東西溝16を中心に自然流路110上の整地層や瓦溜から多量に出土した。大半は丸・平瓦である。軒瓦は42箱分ある。軒瓦(図46)の瓦当文様はさまざまな種類があるが、内容的には

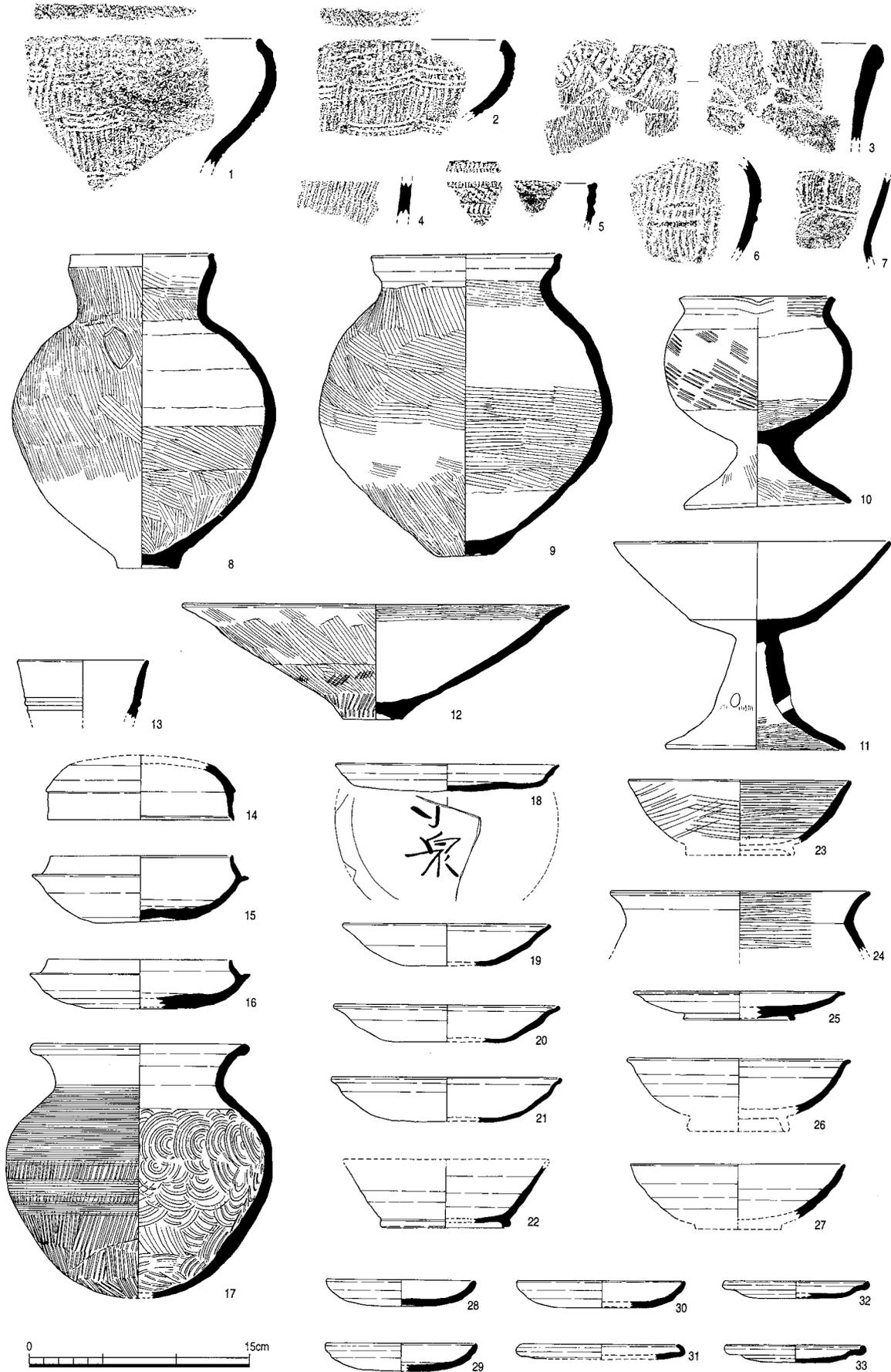


図45 出土土器実測図(1~12:自然流路110出土 13~27:周溝150出土 28~33:東西溝16出土)(1:4)

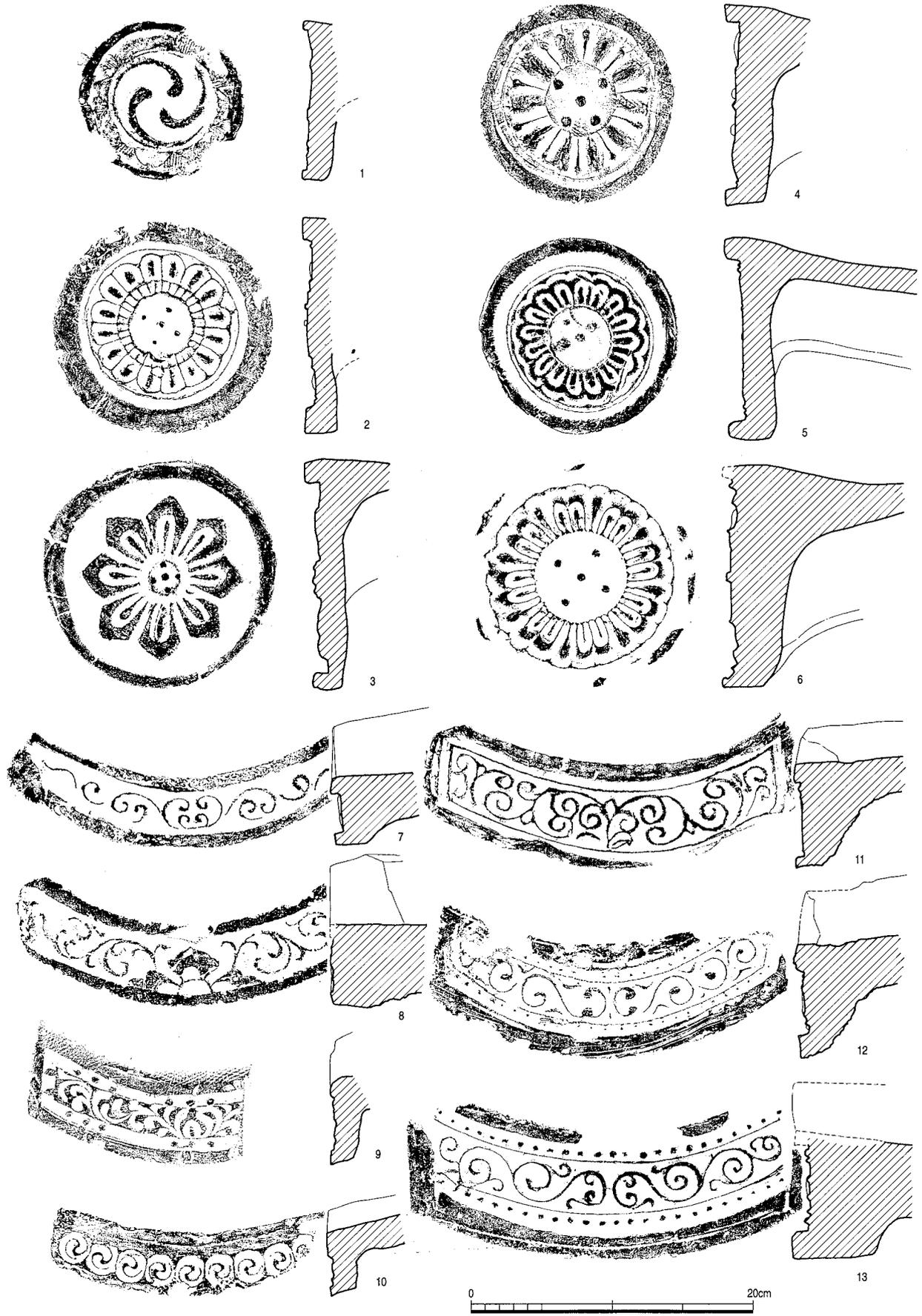


図46 出土軒瓦実測図 (7・12・13: 瓦溜出土 その他: 東西溝16出土) (1:4)

法勝寺跡や尊勝寺跡など過去の調査で出土したものに共通する。丸・平瓦には線刻文字や窺記号を持つものが少量ある。線刻瓦は3点あり、丸瓦の凸面に「友出」を刻むものが1点、平瓦凹面に「八中」を刻むものが2点ある。他に、丸瓦凹面に「サ」の字状の記号を刻むものが数例ある。平瓦の端面には「∕」、「V」、「×」、「○」の線刻を認める。この他、石製品として滑石製釜・火熱を受けた凝灰岩がある。

6 鎌倉・室町時代 土師器・陶器・輸入陶磁器などがあり、耕作関係の溝から出土した。特に鎌倉時代のものは周溝 150 の南側から多く出土した。

小結 調査地は法勝寺の西一町に位置し、最勝寺の推定地とされてきたが、調査の結果、史料に記されるような主要伽藍（塔・金堂・薬師堂・五大堂・東西廊・灌頂堂）の遺構は検出できなかった。調査地の東半には広い範囲で湿地が広がり、南西隅には古墳の墳丘が残されていたことを考慮するなら、調査地内に大規模な伽藍が配置されていたとは考えがたい。大規模な瓦溜がみられなかったことも、この考えを補強する。一方、南西調査区では南北溝 130 を検出した。この溝が区画施設に伴うものであるなら、最勝寺の寺域はこの溝 130 の西側に求めるべきと考える。

南区の南端、自然流路 110 の上部で検出した二つの地業跡は、平安京の条坊データからみても二条大路末の北縁に係わる遺構であるとみて間違いはない。しかし具体的な性格となると検討すべき問題が多い。ここでは、北側の地業 111 と東西溝 16 を大路末の北築地と北側溝、地業 100 を大路路面の整地痕跡として報告したが、溝 16 の埋没後に東西溝 35 が開削されるように、新旧関係があることも確かである。先に地業 111 と東西溝 16 が北築地・北側溝として築かれ、遅れて地業 100 と東西溝 35 が北築地とその内溝として築かれたことも想定できるが、調査時の断面観察や出土遺物には明確な時期差は指摘できない。なお、今回の地業遺構は、地業 110 が法勝寺金堂の北側柱列に、地業 100 が金堂棟筋の延長位置にほぼ該当することを付記する。

「鶴塚」の下で2基の古墳周溝を検出したことも特記できる。平安京から岡崎法勝寺へ上皇が御幸する際には、最短行程である二条大路を東行することを避けた記事が注視されてきたが、今回の古墳の検出によって、古墳前を通過するのを忌みきらったためという解釈が可能となった。庄内式期の遺構に関しては、自然流路 110 とその一部で堰と貯木施設を確認した。これら遺構と多量に出土した土器は、付近に集落が存在することを示している。今後、出土した土器の整理・検討を進め、土器様式の地域的特色を解明したい。

(内田好昭・丸川義広・平方幸雄)

IV 鳥羽離宮跡

13 鳥羽離宮跡第137次調査(図版1・24)

経過 本調査は、会社社屋建設に伴って行われたものである。調査地は泉殿・東殿の一面、白河天皇陵の北東約20mに位置する。周辺では過去に調査が数次にわたって行われている。しかし、白河陵を囲む濠が検出されている以外、泉殿・東殿の実態を明らかにするような遺構は少なく、今回これに関連する遺構が確認されることが期待された。調査に先立って、試掘調査が実施され、平安時代の遺構面が確認されたので、発掘調査を行うことになった。調査は重機

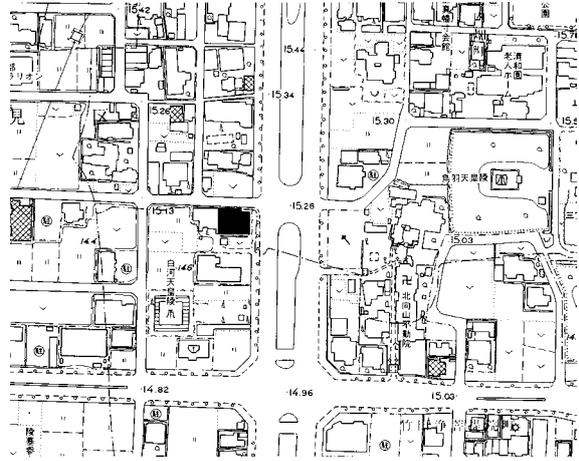
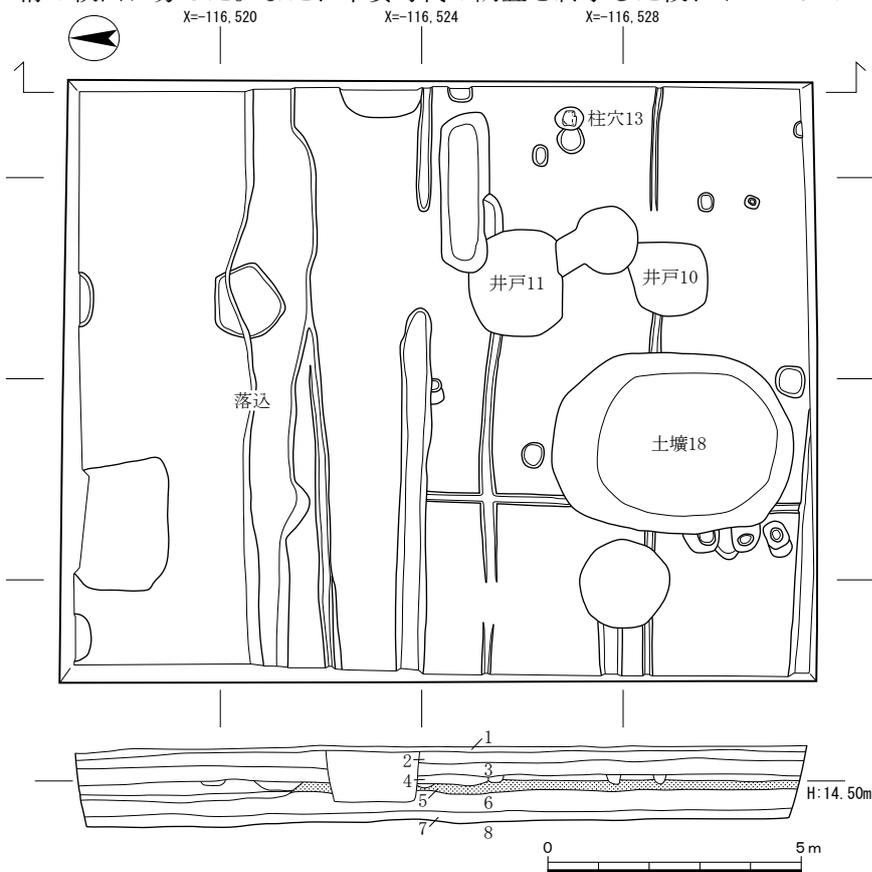


図47 調査位置図(1:5,000)



- | | |
|-------------------|-------------------------|
| 1 表土 | 5 褐色砂泥層(10YR4/4平安時代整地層) |
| 2 盛土 | 6 黄褐色砂泥層(2.5Y5/4) |
| 3 耕作土 | 7 オリーブ褐色粘質土層(2.5Y4/3) |
| 4 褐色砂泥層(7.5YR4/3) | 8 オリーブ黒色粘土層(5Y3/1地山) |

図48 遺構実測図(1:150)

により表土、旧耕作土の除去から始め、旧耕作土直下に室町・平安時代の遺構面を確認、以後遺構の検出に努めた。また、平安時代の調査を終了した後、トレンチの一部で下層遺構の確認を行

い南北方向の溝を検出した。
遺構 調査地の層位は、第1～4層の表土・耕作土などを除いて4層にわかれる。第5・6層が砂泥層で第7・8層が粘土層となる。第5層が平安時代整地層、第6層にはほとんど遺物が含まれず、第8層が地山となる。

平安時代の遺構面は、調査区の北側において南から北に緩やかに傾斜し、落ち込んでいます。この面で室町時代と平安時代の遺構を検出している。

室町時代の遺構は鳥羽離宮の瓦を用いた円形の瓦積み井戸2基がある。井戸11は深さ1.3mを測るが南半部は崩壊していた。井戸10は良好に遺存しており、瓦を約70cm積上げ、底には水溜として曲物を据えている。瓦の積み方は、平瓦を幾枚か重ねた後に丸瓦を入れるということを繰り返しており、丸瓦の湾曲した中には重みで割れないように拳大の石が入れている。井戸の中からは、14世紀の遺物が出土している。

平安時代の遺構は少なく、明確な遺構は調査区東側の柱穴13のみである。この柱穴は20cm大の根石を据えている。

調査区北側の落込は、室町時代の段階でほぼ平坦に埋め立てられていたようである。

平安時代以前の遺構として、第8層地山面で南北方向の溝がある。溝の時期は不明であるが、第7層から6世紀後半の有蓋高杯の蓋が出土している。

遺物 遺物は、瓦積みの井戸に利用されていた瓦が大半である。瓦を産地別にみると、京都産、播磨産、讃岐産などがあり、京都産の「段瓦」もみられるが、播磨産が全体の約8割を占める。播磨産の瓦を多用した鳥羽離宮の建物として、現在までに金剛心院が知られており、室町時代に瓦積み井戸を造るに際して、金剛心院跡に打ち捨てられていた瓦を利用したものと考えられる。瓦の中で特異なものとして、井戸11に利用されていた平瓦の凹面に、焼成前に縦9本、横9本の指による線跡をつけたものが出土している。まじないの「九字を切った」ものであろうか。柱穴13は、根石の下に11世紀後半の完形の土師皿（3）が入れられていた。平安時代の整地層からは土師器（2）、瓦器椀（1）、凝灰岩の小片などが出土している。

小結 今回の調査成果を以下にまとめておきたい。室町時代の井戸の存在は、東殿の北部において重点的に確認され、鳥羽離宮廃絶後の歴史を考える上で重要なものとなる。

泉殿と同時期の遺構に柱穴13があるが、その形状からすると主要な建物のものとは考えにくい。鳥羽離宮に関連する顕著な遺構は確認されなかったが、柱穴13の存在や整地層中に含まれる遺物から、整地が11世紀後半に行われたことは明らかである。調査地は、泉殿の東端で、白河陵に近接する。このため、白河陵となる御塔周辺は整地のみで空閑地とされていたとみられる。

(南 孝雄)

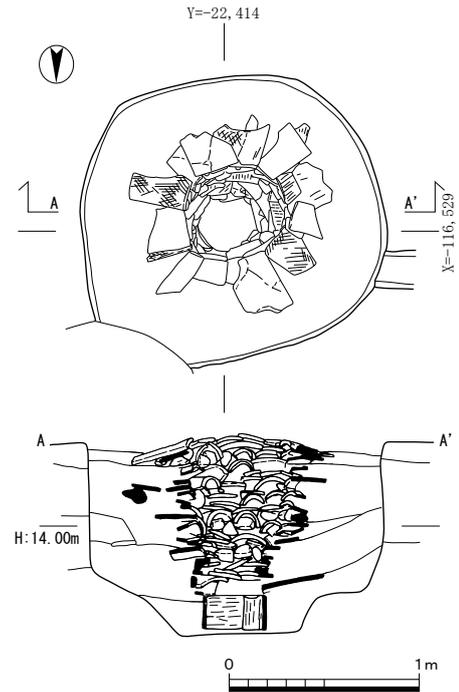


図49 井戸10実測図 (1:40)

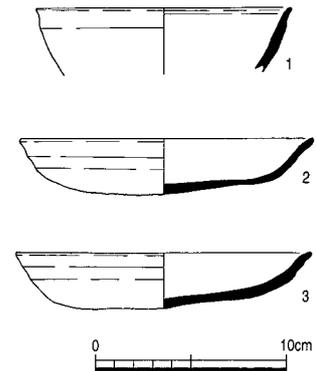


図50 出土土器実測図 (1:4)

V 中臣遺跡

14 中臣遺跡第70 - 4次調査 (図版2 - 4・25・26)

経過 本調査は、都市計画街路西野山・大宅線道路改良工事を契機として、昭和63年度から継続して行っている。本年度はⅢ・Ⅶ区の調査を実施した。なお、本年度を持って、第70次調査は終了した。Ⅲ区は東半に立退きの終了していない民家が1軒あった。そのため、西半部の発掘調査と、その民家の南・北側にガス・下水などの埋設管を敷設する工事の立会調査を行った。民家跡地の発掘調査は、これらの結果をみて判断することにした。結果、顕著な遺構

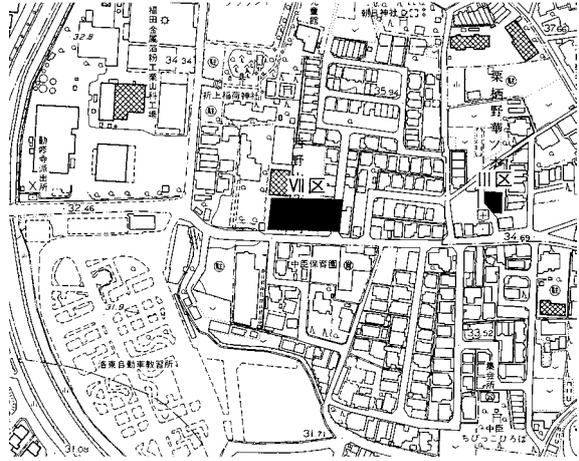


図51 調査位置図 (1:5,000)

は認められず、本調査には至らなかった。Ⅶ区は、一昨年度に調査したⅧ区 註1と接し、Ⅷ区で検出した縄文時代以降の遺構群と関連する諸遺構が予想できる地点であった。また、Ⅷ区東端で弥生時代後期の竪穴住居(1号住居)の西半分を調査しており、今回で全体を調査したことになる。なお、今回の調査は、民有地への出入口を確保するために3回に分けて調査を実施した。

遺構・遺物 Ⅲ区は明確な遺構は検出できず、遺物包含層も認められなかった。典型的な層序は、上から積土が0.8～1.0m、旧耕作土・床土が0.15～0.20mある。その下部に無遺物層の黒褐色砂泥層(10YR3/1)が0.1～0.3m堆積し、下部は地山の浅黄色泥土層(2.5Y7/4)となる。Ⅶ-2区の典型的な層序の状態はⅢ区と類似するが、Ⅶ-1・3区では、床土下に平安時代以降の遺物包含層(7.5YR3/2黒褐色砂泥層)が0.15～0.35mの厚さで堆積する。Ⅶ区では、縄文時代から古墳時代、平安時代、室町時代の遺構群を検出した。以下、主要な遺構・遺物を記す。

縄文時代の遺構はⅦ-1・3区で検出した土壇10基がある。大部分の土壇からは土器の小片が少量出土したのみであるが、出土した土器からみて、中期末葉から後期前葉に属する。土壇(SK 46 A)からは北白川C式の比較的大きな破片の土器が、一括性のある状態で出土した。土壇(SK 46 A)の平面形は、不正形な楕円形を呈し、長軸0.81m、短軸0.60m、検出面からの深さ0.62mある。遺物は、土壇を中心として一部竪穴住居の覆土に混入した状態で、深鉢・注口土器などの土器類、磨石が出土した。ただし、土器類はすべて破片の状態で出土しており、全形をうかがうことができる資料はない。

弥生時代の遺構は、後期の竪穴住居5棟を検出した。このうち1～4号住居は、焼失住居である。1号住居の平面形は一辺が弧状を為し、他の三辺は直線的で角が丸みを持つ、歪な角丸方形である。床面の中央にピット1箇所があり、4支柱からなる。検出面で長軸約7.5m、短軸約7.2mある。遺物は、広口壺・長頸壺・高杯・器台、鈍などが出土した。2号住居の平面形は、六角

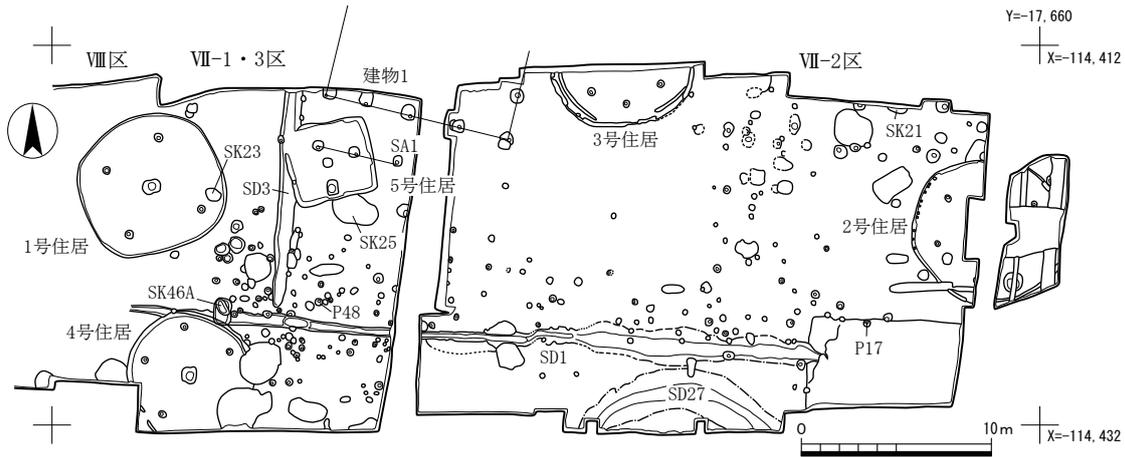


図52 遺構平面図 (1:400)

形である。支柱穴は4箇所検出したが、6支柱からなるとみられ、東南壁のやや内側に貯蔵穴が1箇所ある。検出面で、北東-南西方向に約7.7mある。遺物は、短頸壺・甕・台付鉢などが出土した。3号住居の平面形は円形を為すとみられるが、南側3分の1程度を調査できたにすぎない。支柱穴は3箇所検出し、建て替え拡張が認められる。検出面での最大長約7.5m（建替え後）ある。遺物は、短頸壺・高杯・器台などがある。4号住居の平面形は円形で、支柱穴を4箇所検出したが、配置からみて、5支柱からなるとみられる。検出面で、ほぼ東西方向に約6.2mある。床面の中央に二段落ちを呈するピットが1箇所ある。当竪穴住居も前述したように焼失住居で、炭化材などが床面全体に広がって検出できた。炭化材のあり方をみると、中央ピットを取り囲むように井桁状にある。一方、壁際から中央に向かっては、放射状に分布している状態がみられる。この状態からみて、屋根を架構するための太い骨組みが炭化した状態で残ったと考えられる。これら炭化材以外に、壁土状の焼けた粘土が北東から南西方向に長い楕円状で、ほぼ三重に分布している状態が認められる。この壁土状の焼けた粘土は、屋根に葺かれていた粘土と考えられる。屋根材の組み合わせ、葺き方などを復元的に考える上で参考になる資料と評価できよう。遺物は、土器群を3箇所検出した。これらの土器群には、台付長頸壺1・甕1・台付甕1・鉢2・高杯8・器台5・ミニチュア壺1、その他、壺・甕などの破片がある。なお、北東側土器群中に、約20cm大の白色粘土の塊に甕を半裁して被せたもの2箇所があった。これは、土器製作の粘土を乾燥から防ぐためとみられる。5号住居の平面形は、北東から南西方向にやや細長い長方形で、支柱穴は検出できなかった。住居の中央付近と南壁付近にピット2箇所があり、壁際のピットは貯蔵穴とみられる。長軸約4.6m、短軸約4.2m。

1・2・4号住居で検出した炭化材の樹種同定作業を行った。註2ここでは、その結果のみを報告する。1号住居の炭化材30点のうちクヌギ節25点・クリ5点であった。同様に2号住居は49点中、クヌギ節48点・不明散孔材1点、4号住居は30点中、アカガシ亜属12点・サカキ8点・クヌギ節5点・シイノキ属2点・針葉樹2点・散孔材1点であった。

古墳時代後期の遺構は古墳、土壇各1基がある。土壇（SK23）は、1号住居と重複して検出した。土壇からは土師器長胴甕・甗が出土した。古墳は周溝（SD27）のみを検出した。最

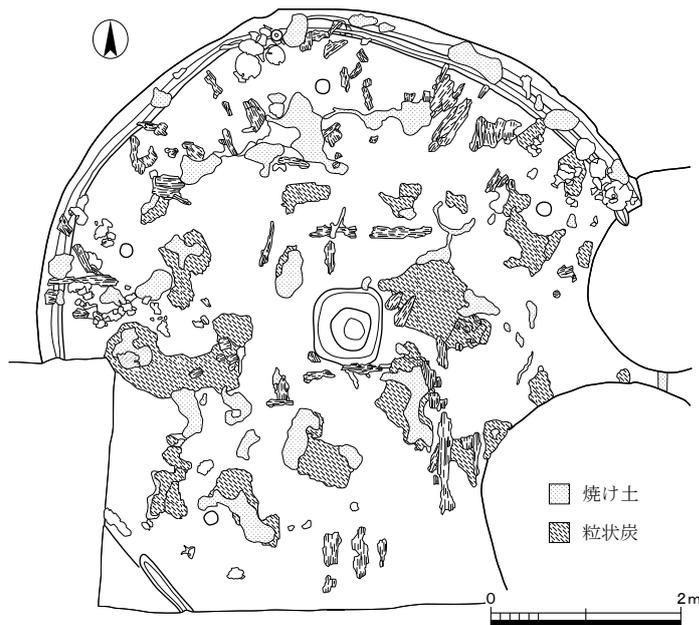


図53 4号住居平面図 (1:50)

大幅2.40 m、深さ0.35 mある。平面形から得られる復原直径は、約12.5 mである。主体部は、調査区外にあり、確認していない。遺物は周溝やその周辺から出土し、須恵器杯・高杯・甕がある。Ⅷ区の古墳から出土した土器群よりも、古相を示す杯もある。

平安時代の遺構は、前期の建物1と柵(SA1)、土壇(SK25)、中期の土壇(SK21)などがある。また、平安時代末から鎌倉時代前半の柱穴状落込に土師器皿を2～3個体納めた埋納遺構(P17・48)がある。

遺物は、平安時代前期から中期にかけての土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器などが出土した。

室町時代の遺構は溝、土壇、柱穴がある。SD1は、Ⅷ区で検出した東西溝の延長部分に相当し、SD3はSD1と直行する南北溝である。柱穴は、対応関係が不明確だが、SD1に沿って帯状に分布する箇所と、SD1が削られている付近で南北方向に分布する箇所がある。これらの溝と帯状の分布を示す柱穴群は、区画を示す施設とみられる。遺物は土師器皿、瓦器鍋が少量出土した。

小結 昭和63年度以来継続して行ってきた調査であり、これまでの調査成果を取入れながら、気付いた点を記す。縄文時代の遺構・遺物はⅦ・Ⅷ区で検出した。その時期は中期後半から後期前半にかけて主体となる。特に、今回の調査では中期後半の一括遺物が遺構から出土した点において重要である。弥生時代の遺構は、竪穴住居に限られているが、付近では、これまでこの時期の集落の分布が知られていなかった。中臣遺跡の当該期の集落を復原する上で重要な成果を得た。また、竪穴住居から出土した遺物は、後期中頃以前の一括遺物であり、土器編年を考える上で重要な位置を占める一群である。古墳時代後期の古墳は、今回周溝のみの検出であったが、Ⅷ区で検出した古墳と合わせ、中臣十三塚を構成する古墳である。平安時代以降の遺構が集中する地点は、Ⅷ区からⅤ区西半にかけてである。これらは、掘立柱建物、柱穴、溝などの集落に関する遺構である。出土した遺物から、平安時代前期後半から中期前半頃に新たな集落の営みが開始され、以降定着したことがわかる。(平方幸雄)

註1 高橋 潔・平方幸雄「中臣遺跡第70 - 2次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

註2 当研究所、岡田文男の分析による。

VI 長岡京跡

15 長岡京左京一条三坊 (図版1)

経過 長岡京左京一条三坊六町の推定地にあたり、久世ポンプ場建設に伴う2回目の調査である。1回目の調査^註では、長岡京期の河川から多数の木簡が出土した。

遺構 古墳時代の流路 (SD 26) は、西肩の一部を調査地の南東角で確認した。

長岡京期の遺構は、西半部で南北に延びるため間数は不明だが、東に庇を持つ南北棟の建物を1棟検出した。母屋桁行2.7m (9尺)、梁間4.8m (2間8尺等間)、庇2.1m (7尺)を測る。その他、建物としてまとまらない柱穴を検出した。

遺物 出土した遺物はすべて小破片で、大型破片や完形遺物の出土はない。時代的には弥生時代から中世にかけての遺物がある。

弥生時代の遺物は、SD 26に混入したもので壺・甕・石包丁の破片が出土した。

長岡京期の遺物は、土師器皿底部破片と平瓦片が柱穴および中世の遺構から出土した。

小結 今回検出した長岡京期の建物は、左京一条三坊六町のほぼ中央に位置しており、過去に検出した当町内の建物と比較して大きく、庇を持つことなどから、中心的な建物の可能性がある。(長宗繁一)

註 百瀬正恒「長岡京左京一条三坊・戌亥遺跡」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

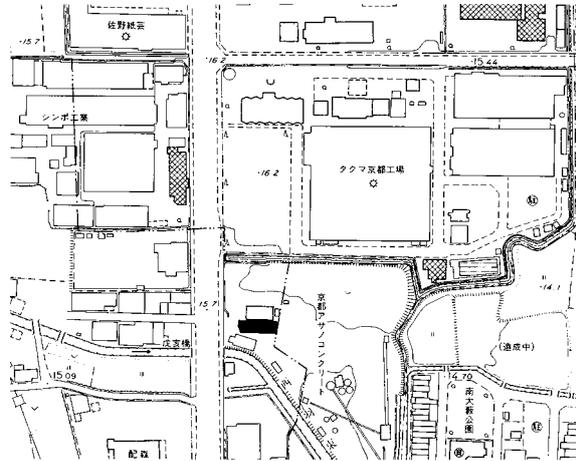


図54 調査位置図 (1:5,000)

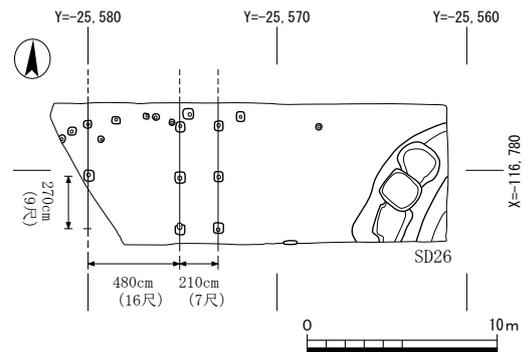


図55 遺構平面図 (1:400)

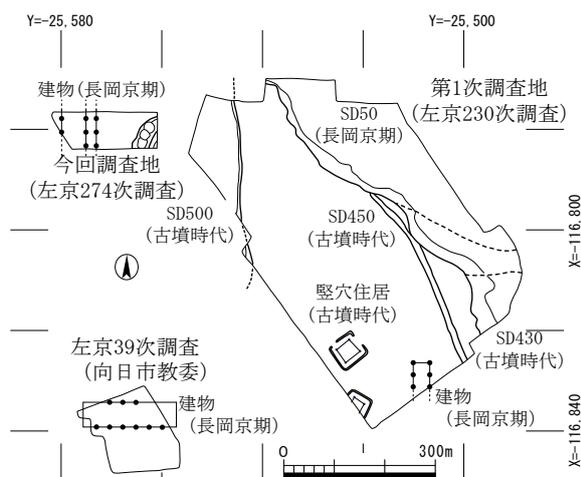


図56 周辺主要遺構配置図 (1:1500)

16 長岡京左京四条二・三坊 (図版1・28)

経過 調査地は外環状線調査地V区の南側に位置し、東二坊大路が敷地に比定されることが試掘調査でわかった。そのため、調査を両側溝の検出と東側に推定される川原寺の推定地に主目標をおいて実施した。東二坊大路の西側溝部の調査地を1トレンチ、東側溝の部分をも2トレンチとした。

遺構 1トレンチでは平安時代中期の遺構と長岡京期のものを検出した。平安時代の遺構は、東二坊大路の影響を受けて南北に浅く窪んだ土

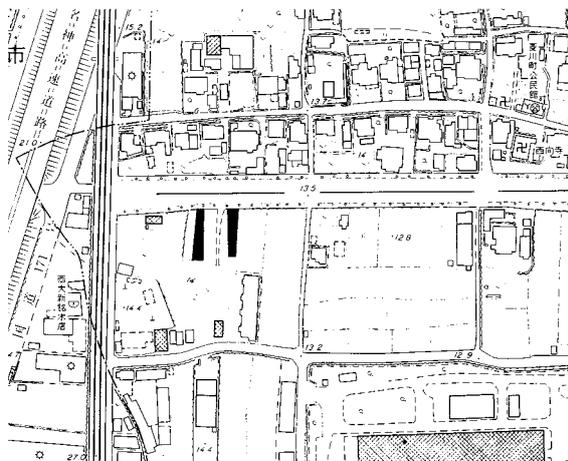


図57 調査位置図 (1:5,000)

壙状遺構 (SK5) と数個の柱穴を検出した。長岡京期の東二坊大路西側溝には、橋2基 (SX1・2) を検出し、SX2には新旧2時期あることもわかった。2トレンチには平安時代の遺構はなく、長岡京期の大路東側溝を検出した。側溝には橋 (SX3) が架かり、その東で川原寺の

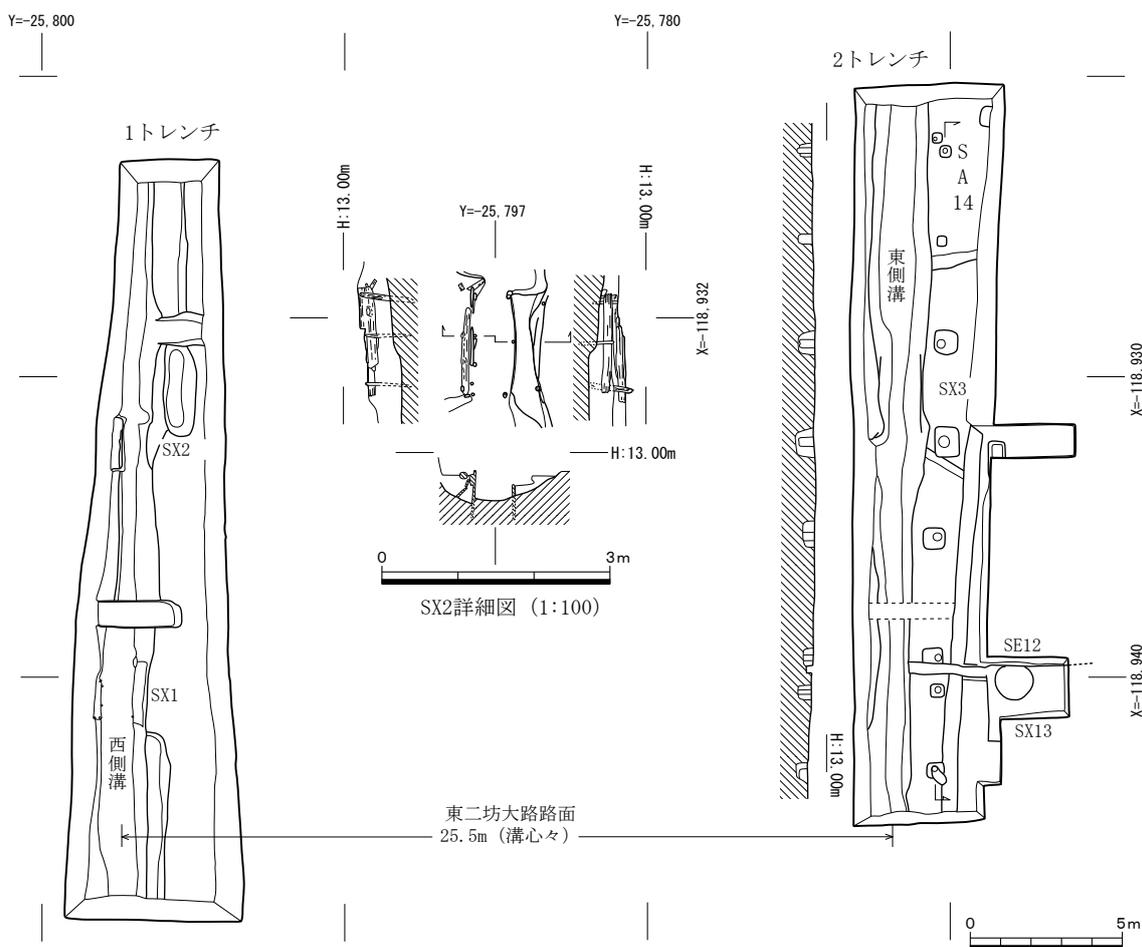


図58 遺構実測図 (1:250)

柵列と門を検出した。柵列（S A 14）の柱穴と門の柱穴とは規模が異なることから区別できる。調査区南部で東側溝から水を引き込むために側板で護岸した溝を検出した。柵列の下を抜けて寺域内へと続き、これも側板で護岸された水溜状遺構（S X 13）と接続していた。このS X 13が埋没した後に、曲物を持つ井戸（S E 12）が造られている。両側溝の心々間距離は25.5 mを測る。溝の規模は、ほぼ同規模である。また、西側溝に架かる橋S X 1の北面とS X 13の北面が東西に揃うなど、両側溝に架かる橋と遺構が相互に関連して造られたことが推測できる。

遺物 平安時代の遺物はすべて1トレンチより出土したもので中期頃のものである。緑釉陶器の出土量が多い。長岡京期の遺物は両側溝から出土したものがほとんどで、東側溝に比べ西側溝からの出土量が多く内容的にも豊富である。2トレンチS E 12やS X 13からも遺物の出土はあるが少ない。西側溝からは土馬、斎串などの祭祀関係の遺物が出土しているが量的には少ない。墨書土器は、土師器・須恵器の底部外面に墨書するものが10点程出土している。瓦類は軒平瓦が3点出土しており、その中に「旨」銘を中心に配するものが1点出土している。木簡は付札の完形品を2トレンチの有機物層の堆積より1点出土しているが墨の残存はない。他に寺関係の遺物としては凝灰岩製の輓の一部が出土している。

小結 川原寺については、外環状線内調査で検出した遺構群が寺の北半部の一部に位置し、厨関係の施設と推定している。門は南北3.3 m（11尺）を測り、門からは柵列が南北に延びる。門の柱穴二つは柵列のものより規模は大きく、また橋の幅もこれに合わせて造られている。位置関係から正門ではなく、寺域西面の北部に開く穴門程度のもと考えられる。西側溝に架かる橋2基は、外環状線調査のものを含めると3基が近接して造られたことがわかった。このことは、側溝からの出土遺物の量や内容、さらに川原寺との位置関係から、寺と密接に結びついた雑舎が大路を挟んで設けられていたものと推定される。（長宗繁一）

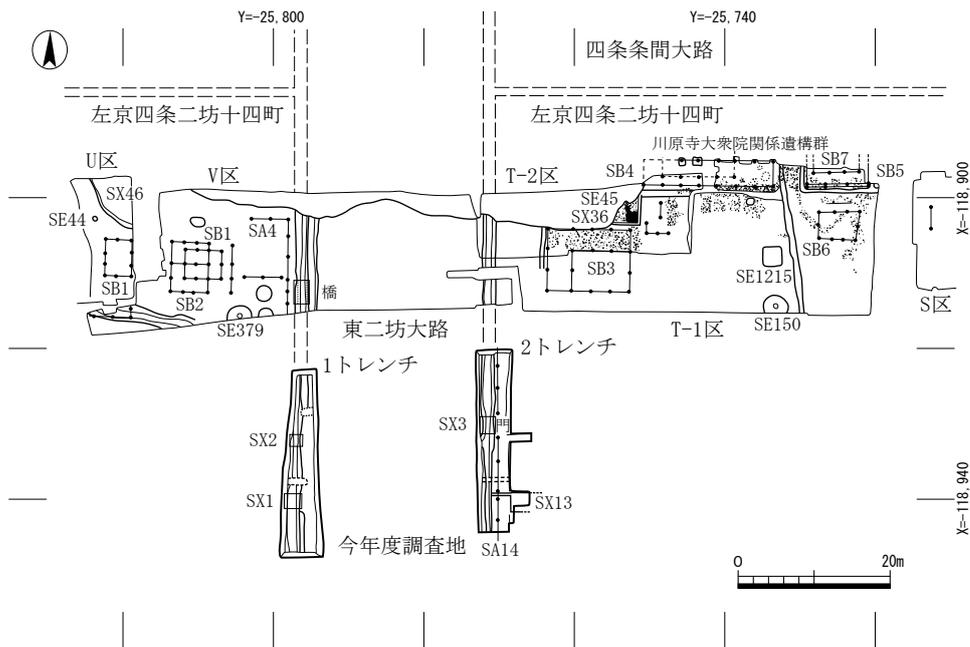


図59 周辺主要遺構配置図 (1:1000)

17 長岡京左京六条三坊 (図版1・29～31)

経過 調査は京都市清掃局の埋立処分地の拡張事業に伴うもので、平成2年度のGブロックに引き続き、北部のF区、E区南半の調査を実施した。調査の都合上、E・F共に東西二つの調査区に分割し、それぞれ西の調査区をF1・E2区、東をF2・E3区とした。また、Eブロックの今年度の調査は長岡京期のみを対象とした。長岡京の条坊呼称は、混乱を避けるために、旧呼称を用いている。

遺構 古墳時代の遺構は、ほぼ全域において検出した水田と北西から南東に流れる数条の川がある。水田は北西から南東に延びる緩い傾斜地に沿って造られ、一筆の面積が50～150㎡と小さく、基本的には方形または長方形であるが、亀甲形もある。また、用水路から直接水田に水を給排水した施設は検出できなかったが、水口の位置などから傾斜に沿って、北西の水田から南東の水田へ順次給排水されたものと思われる。水田の時期は出土遺物が少ないため確実ではないが、水田を覆っている砂礫層から6世紀後半の遺物が出土し、水田の用排水溝から布留式の土器が出

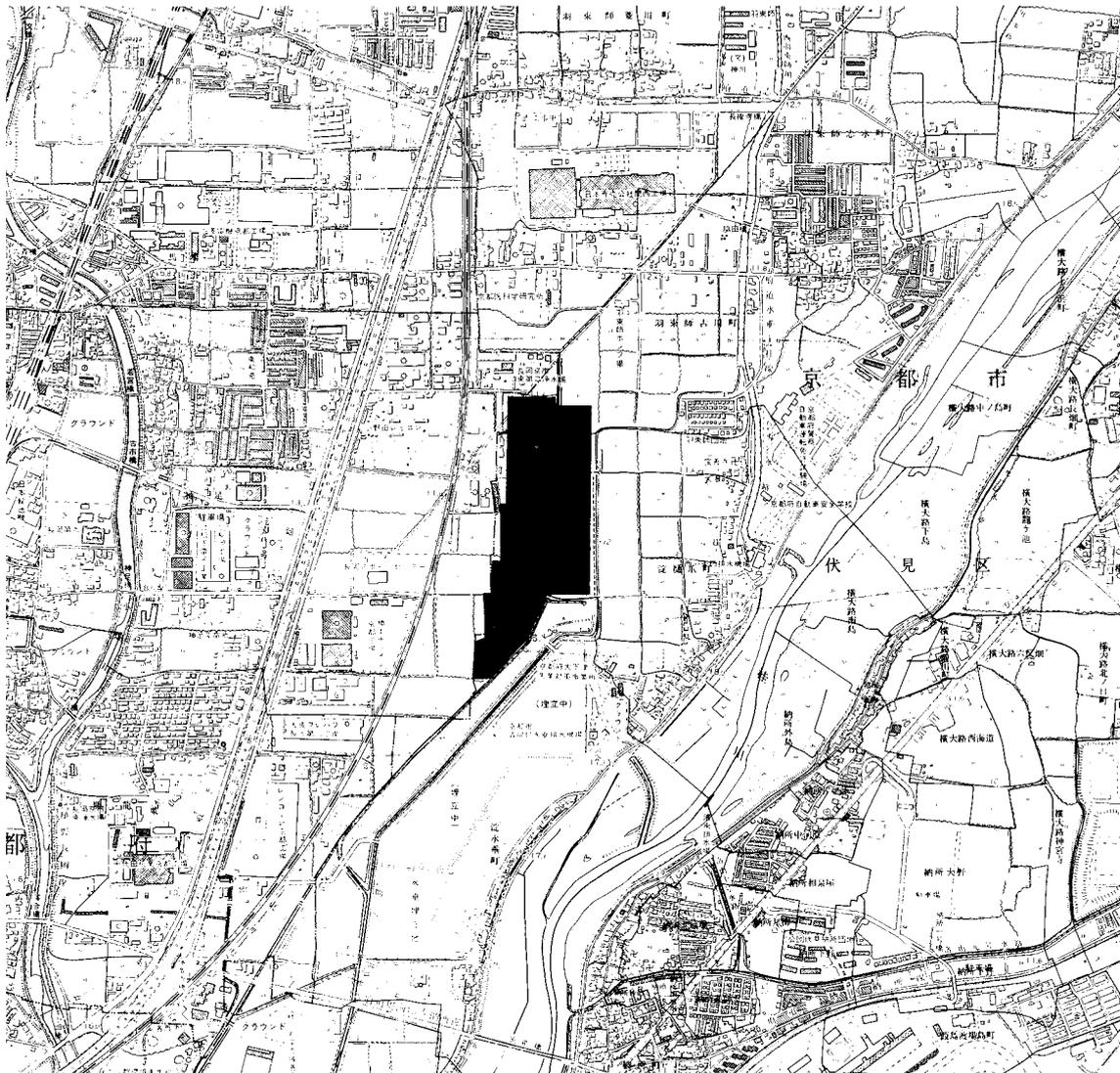


図60 調査位置図 (1:20,000)

土していることから、その間に営まれていたと考えられる。

今回の水田の調査では、水田が計画的に地割りされたことが確認できた。106 mを区画単位として、太くて高い畦畔によって地割りされている。また、それを二分・三分する位置でも同様な畦畔を検出している。

飛鳥時代の遺構には溝が1条ある。ほぼ東西に流れの方向を持つが、地形に沿った流れでないため兩岸や底部は浸食を受けて凹凸がある。堰が1箇所には設けられる。

長岡京期の条坊関連遺構としては、東二坊大路の路面と東側溝（溝1）、六条条間大路の南側溝（溝11）を検出した。東二坊大路の東側溝はGブロックに引き続いて検出し、今までに約390 m分を検出している。六条条間大路の南側溝は東二坊大路東側溝との交差点から約10 m分が検

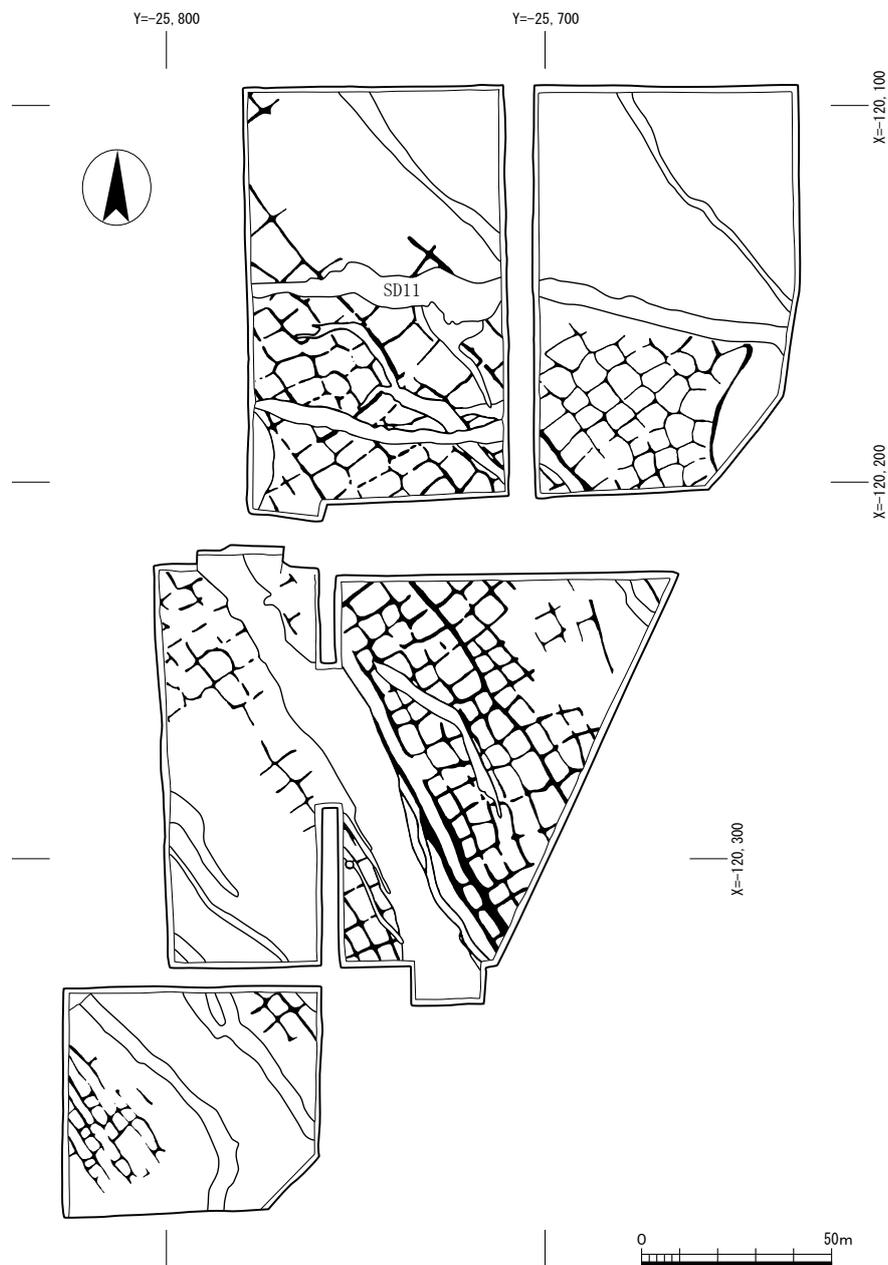


図61 古墳時代遺構平面図（1:2000）

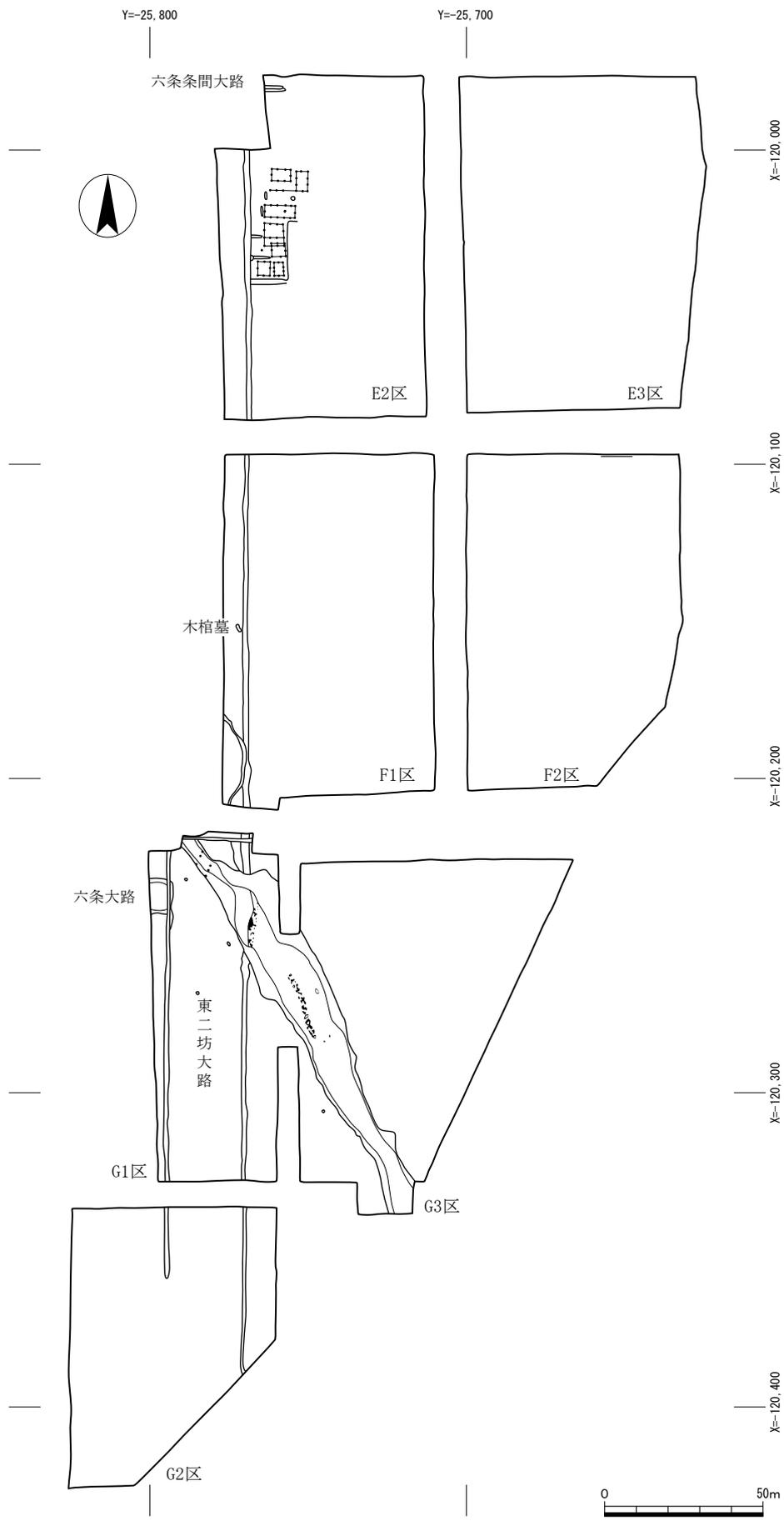


図62 長岡京期遺構平面図 (1:2000)

出され、それ以東には延びない。また、六条第二小路と東三坊第一小路の推定位置が調査区内に含まれていたが、いずれも検出されなかった。

左京六条三坊四町では建物は検出されなかったが、三町では建物群を検出した。建物群は三町の黄褐色の土を遺構面とする付近より若干小高い北西隅だけを利用し、東二坊大路に沿って建てられ、南側は1町を南北に二分する溝（溝12）で限られている。建物群は井戸が二つあることなどから二つのグループに分けることができる。北の一群は、2×3間の東西棟（建物1）と2×3間の南北棟（建物2）が逆L字形に並び、南側に井戸（井戸13）がある。建物1の南側に柵（柵3）が設けられている。南のグループは、南に庇を持つ2×3間の主屋（建物5）を中心として、北には2×5間の東西棟1棟（建物4）、南に2×2間の南北棟（建物8）、2×3間の南北棟（建物7）の小規模な建物がある。また建物4と建物5には間仕切りの柱がある。建物6は建物5を切っけて造られている。南西隅に井戸（井戸14）、宅地の東と西に簡単な柵（柵9・10）を持つ。

これらの宅地は4丈を割付の単位としているらしく、「四行八門の制」には従っていないようである。南北の中央溝から北に8丈分が南の宅地、次の4丈分が北の宅地、六条条間大路南側溝までの8丈は空閑地となっている。建物はいずれも小型で、柱の間隔が1.5～2.0mと狭く、柱間も不

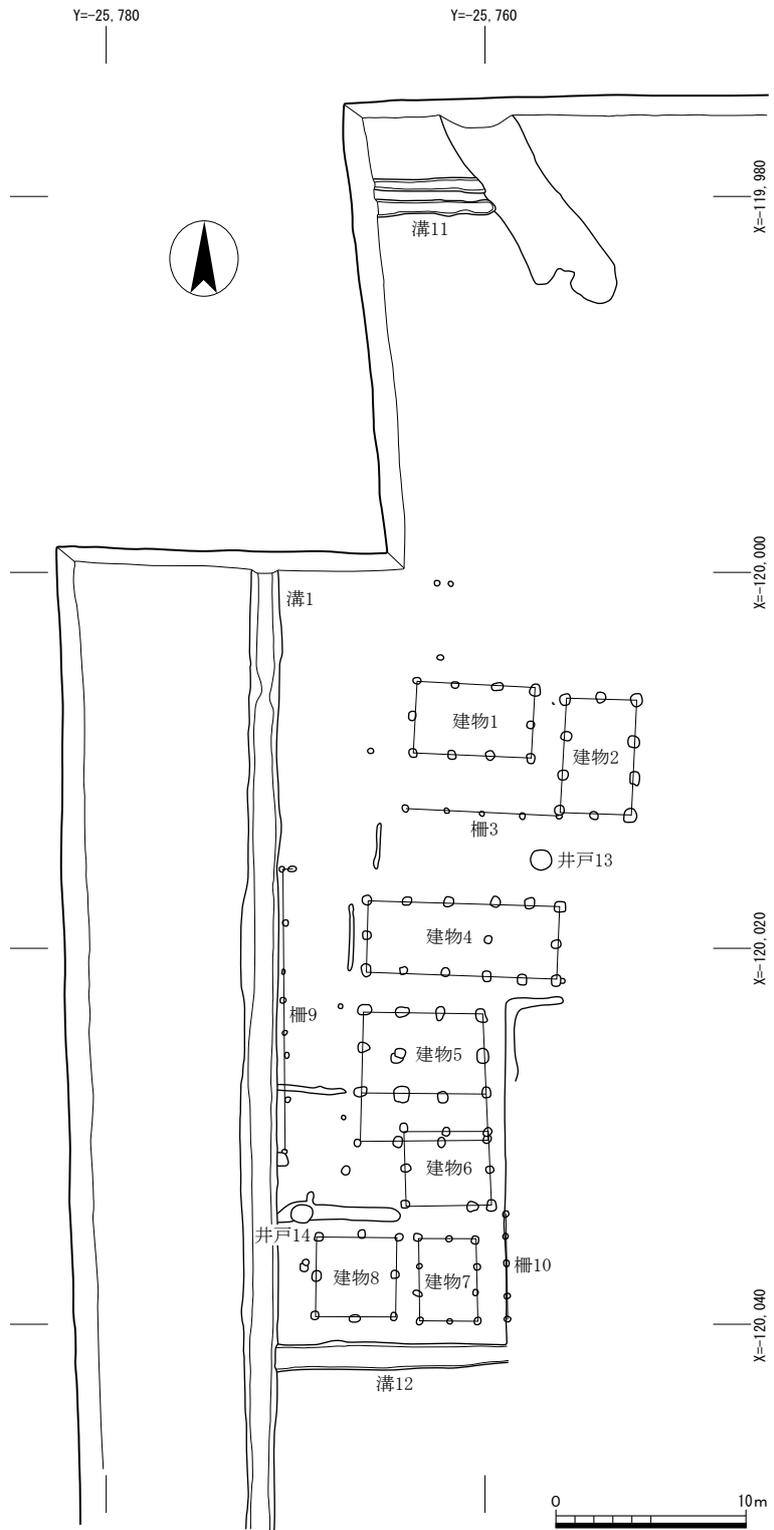


図63 長岡京期建物配置図 (1:400)

揃いなので、平面形は歪んでいる。他に東二坊大路の路面下から木棺墓を1基検出した。

平安時代の遺構は条里制に伴うもので、水田、畦畔、溝がある。10世紀中頃の洪水による砂礫層に覆われている。

遺物 古墳時代の遺物は、遺構が水田のため出土量は少ないが、河川から若干の土器と木器が出土している。また、6世紀後半の遺物を包含する溝から馬鍬を検出したことは、畜耕の開始時期を考える上で重要な資料になると思われる。

飛鳥時代の溝からは、槽や盤・曲物などの木製品が比較的多く出土している。

長岡京期の遺物の大半は、南の宅地の南東隅で検出された土器溜から出土したものである。土師器の杯・高杯・椀・皿・甕、須恵器の杯・蓋・皿・鉢・平瓶・壺・甕・円面硯、灰釉陶器の壺・平瓶、土馬、模型カマド、人面墨描土器、製塩土器、砥石などが出土している。そして東二坊大路の東側溝から和同開珎、万年通寶が出土している。中でも目を引くのは須恵器・杯蓋の転用硯が多くみられることである。特筆すべき遺物としては『秦』と墨書した杯底部の破片があり、宅地の性格を知る上で重要な手がかりとなろう。

平安時代の遺物には河川から出土した土師器、須恵器、灰釉陶器などがある。

小結 今年度の調査で、古墳時代の水田が計画的に区画されていたことが明らかになった。以前から普通の畦畔とは異なる太くて高い畦畔が規則的に傾斜方向に沿って直線的に延びていることはわかっていたが、今回の調査では直交方向にも同様な畦畔が検出された。これらは106mを区画単位として地割りされていることがわかった。この地割りの方法は代制地割りの可能性があり、条里制以前の土地区画法を考察する上で重要な資料となる。

長岡京期では、左京六条三坊三・四町のほぼ2町分を調査することができた。しかし、条坊関係の遺構では東二坊大路の東側溝と六条条間大路南側溝を検出したが、六条第二小路・東三坊第一小路は検出することができなかった。遺構面は自然傾斜程度の高低差は認められるが、後世に大きく削平された痕跡はないので、当初から六条第二小路と東三坊第一小路は当該地では造られなかったと思われ、四町の宅地内には人は住まなかったのであろう。そして、建物を検出した三町でも1町の宅地の北半の南西隅しか利用されていないので、調査地付近が長岡京の実質的な南東隅にあたる可能性もある。また、六条三坊三町の宅地割りは「四行八門の制」によらず、4丈単位で割り付けられている可能性がある。これも京の外れでの特殊な例なのかもしれない。

(木下保明・吉崎 伸・上村和直)

VII その他の遺跡

18 焼場谷炭窯跡（図版2-1）

経過 京都市左京区岩倉上蔵町の山中で山路の整備をするために山腹を削っていた所、法面に焼けた穴を数箇所発見した。連絡を受けた京都市埋蔵文化財調査センターが現地調査を実施した。当遺跡は、山腹斜面の等高線にそって赤変した窯体部が露呈しており、多数の横口を持つ窯跡で

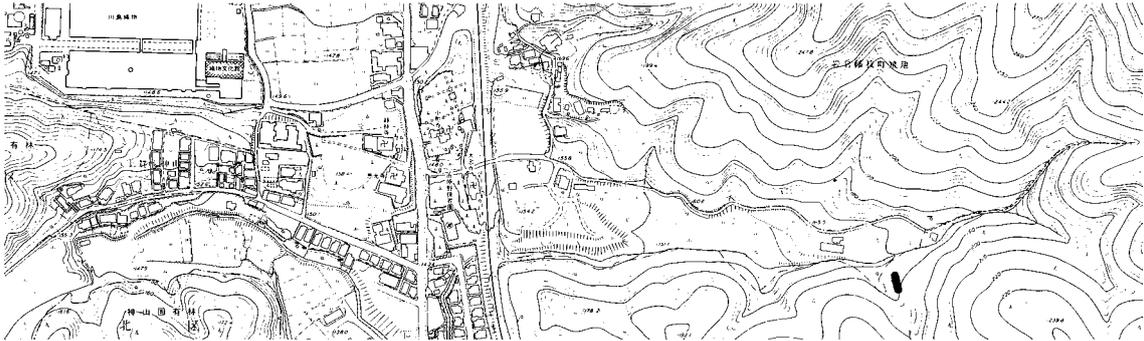


図64 調査位置図（1：7,500）

あることが判明した。センターは土地所有者と遺跡保存を前提に協議を行い、遺跡の性格および残存状態を掌握する発掘調査を実施し、その後、保存策を検討することになった。

遺構・遺物 丘陵西向き斜面に築かれた窯は、焚口を北に煙道部を南にして等高線と並行に築造された半地下式の窯で、窯体主軸の方向はN-13°-Wである。窯は焚口、焼成部、煙出からなり、窯体の谷側に横口を有する横口付木炭窯である。この窯は、使用途中で奥壁を2m程縮小して使用しており、これを第1次窯体と第2次窯体に分ける。

第1次窯体の規模は全長12.5m、焚口から奥壁まで11.6m、床面幅0.8m、天井高0.95mを測る。床面は平坦で、床面傾斜度は2.4度でそのまま煙道へと通じる。谷側の側壁に8箇所以上の楕円形横口が設けられている。奥壁下部に30cm程の方形の小穴を穿ち、南側外方に煙出穴を掘削し、長さ50cm程の煙道を掘っている。煙出開口部は径30cmを測る。第2次窯体の構造は、第1次窯体を2m程縮小して再構築したもので奥壁・煙出以外は変化がない。規模は全長10.6m、焚口から奥壁まで9.4m、天井高1.0mを測る。奥壁部は20～50cmの石を積上げて奥壁とし、下方中央に30cm四方の煙道を設ける。

窯体内からは、窯壁片以外の遺物は出土していないが、第1次窯体に伴う煙出掘形の二次堆積土中より7世紀代と考えられる土師器甕体部片が出土した。

小結 調査した窯は複数の横口を持つ通称「ヤツメウナギ」と呼ばれる横口付木炭窯である。このような窯で年代の推定されている多くが6世紀後半から7世紀後半の間に集中している。

本炭窯は、所属年代の手がかりがないため、熱残留磁気測定を行い、 670 ± 30 年という推定年代を得た。このことから本炭窯跡は7世紀後半の推定年代が与えられよう。（伊藤 潔）

『焼場谷炭窯跡発掘調査概報』平成3年度 1992年報告

19 栗栖野瓦窯跡 1 (図版 2-1)

経過 調査地は京都市左京区岩倉幡枝町 611。昭和 60 年度調査地^註の東側、灰原部分にあたる平坦な畑地部分で行った。

遺構 平安時代前期の遺構は調査地南端で確認した不整形な落込で、土師器、須恵器、瓦などが出土した。

平安時代後期の遺構は、S K 13、S X 3、S K 2・11 であった。中でも S X 3 は、平安時代後期の瓦窯に至るための作業道とみられ、付近の灰原の遺物を敷きつめて道の安定を図ったと思われる。

室町時代には、水田のために台地上に水路を設け、江戸時代にはゴミや瓦礫を埋めるための土壙が掘られている。

遺物 主に S X 3 から出土した。遺物の多数は、灰原などに廃棄された窯関係のもので、一部に生活品としての遺物が含まれている。土器類は、T K 208 (5 世紀後半) の須恵器、緑釉陶器、内側に磨きを持つ緑釉陶器素地、内外面に磨きが見られない白色土器などがある。他に、土師器皿、瓦器椀、白磁椀、瓦塔、窯道具も出土している。瓦類は、飛鳥時代から鎌倉時代のものがみられるが、大半は平安時代後期のものであった。折り曲げ技法の軒平瓦は、大半が半折り曲げで、完全折り曲げ技法は少ないことが判明した。刻印瓦は、「木工」の他に「上」銘が出土し、上ノ庄田瓦窯との間に瓦当範の貸借関係があったことを示している。記号瓦、緑釉熨斗瓦、瓦甃もみられた。

小結 遺構としては、土取り穴と思われる土壙が多くみられ、砂層に達すると掘り止めて袋状になっていた。他に、S X 3 (作業用道) の発見があった。遺物では、「栗栖野様器」が回転台を使用して製作された白色土器のことであり、9 世紀から 13 世紀までこの地で生産され続けたとみられる。

(吉村正親)

『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成 4 年度 1993 年報告

註 北田栄造・長谷川行孝『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』昭和 60 年度 京都市文化観光局 1986

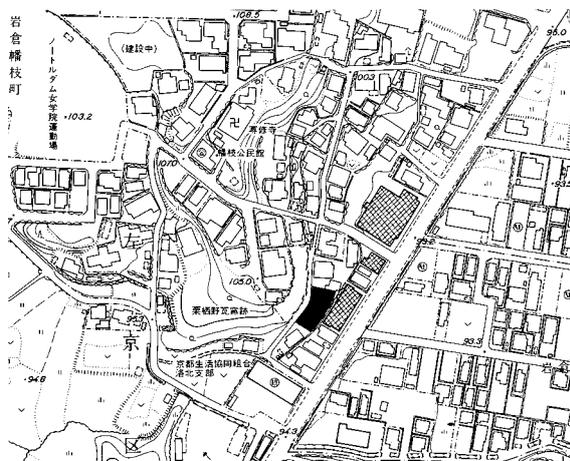


図 65 調査位置図 (1:5,000)

20 栗栖野瓦窯跡2 (図版2-1)

経過 調査地は京都市左京区岩倉幡枝町 665-49 他で、岩倉盆地の幡枝丘陵南西斜面に位置する。調査地の地形は切り立った崖と狭い丘陵斜面からなる。今回、この地で擁壁工事が計画されたため発掘調査を実施する運びとなった。

当地の南約 50 m には昭和 9 年に国の史跡に指定された栗栖野瓦窯跡があり、その後の調査で史跡指定地外にも窯跡が広がることがわかってきた。また 1985 年に調査地の東隣で実施した立会調査では窯跡を 1 基確認している。

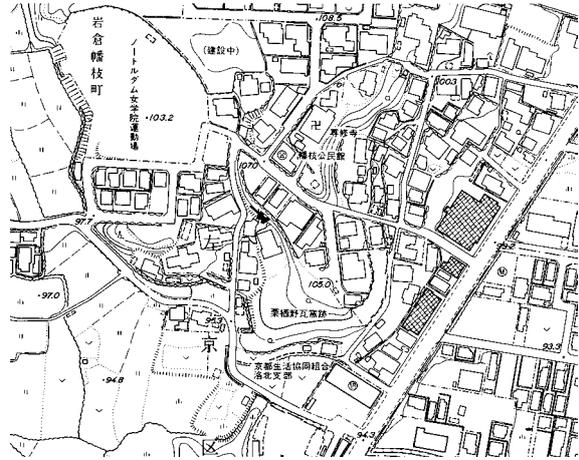


図 66 調査位置図 (1:5,000)

敷地面積は 239m²で、実際の調査面積は 40.5m²である。調査期間は 1992 年 2 月 17 日から同年 3 月 20 日までである。

遺構・遺物 検出した遺構は、窯 4 基と土壇 2 基である。窯のうち 3 基が平安時代前期、1 基が平安時代後期である。窯番号は栗栖野窯の発見順にすれば 21 ~ 24 号窯となる。

21 号窯 窯体が崖面に見えていた窯で、焚口と燃焼部の一部は破壊されている。窯の構造は、半地下式有階無段窖窯で、検出長 4.8 m、最大幅 1.5 m、深さ約 0.5 m が残存する。作業面は 2 面ある。第 1 次作業面の特徴は焼成部の床面に熨斗瓦を敷き詰めていることである。床面の傾斜は約 23 度である。焼台転用瓦には釉滴が顕著である。出土遺物には瓦類の他には窯道具である三叉トチン、二彩釉陶器、須恵器がある。第 2 次作業面は、第 1 次作業面の上に粘土を置き構築する。床面からは焼台に転用した釉滴の付着する熨斗瓦片と皿を主体とした須恵器類が多数散乱した状態で出土した。須恵器類はこの窯の最終焼成品である。床面上層には焼土・スサ入粘土が堆積する。

22・23 号窯 いずれも 21 号窯と同じ構造の窯と考えられる。22 号窯は燃焼部と焼成部の一部が残存する。検出長は 2.2 m、床面までの深さは東壁部分で 0.3 m あり、燃焼部と焼成部の境に丸瓦 2 本を横一列に並べて階を作る。出土遺物には須恵器皿・杯、緑釉熨斗瓦、三叉トチンがある。23 号窯は 22 号窯構築時に大半が破壊されており、焼成部の一部のみが残る。検出長は 1.3 m、出土遺物には焼台転用の熨斗瓦片と須恵器杯がある。

24 号窯 煙道の先端部の煙出し部分のみが残存するもので、煙出しの上部からは、崩落した状態の多量の丸・平瓦と剣頭文軒平瓦が 1 点出土している。

小結 今回の最大の成果は二彩釉陶器焼成窯が発見されたことである。また焼成部の床面に瓦を敷きつめる特殊な構造も明らかになった。このような構造は、栗栖野・西賀茂窯に先行するとされる大阪府吹田市の岸部 N 1 号窯と類似している。 (本 弥八郎)

『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報』平成 4 年度 1993 年報告

21 植物園北遺跡 (図版2-1・33・34)

経過 上賀茂神社の南方鴨川左岸の下流域には、弥生時代から古墳時代にかけての集落を中心とする植物園北遺跡がある。この遺跡は1979～81年に公共下水道敷設工事に伴う立会調査によって発見されたものである。

今回の調査は、平安建都1200年記念事業の一環としてコンサートホール建設が計画され、事前調査として行った発掘調査である。調査地は左京区下鴨半木町内にあり、京都府立大学農学部農園の一部で、調査対象面積は約10,000

m²を測る。発掘調査に先立ち試掘調査を実施した結果、遺構の残存状況が良好であり、発掘調査を開始した。調査は排土の関係で、I区(南半部)、II区(北半部)に分けて実施した。

遺構・遺物 調査地の地形は北から南へ緩やかに傾斜しており、約1mの高低差を測る。基本層位は、現代盛土、耕作土1・2、床土、遺物包含層(10YR4/3にぶい黄褐色砂泥層)、無遺物層(10YR4/4褐色砂泥層など)である。

今回の調査で検出した主たる遺構には以下のようなものがある。

縄文時代 II区の西端部で、甕棺墓と考えられる土壌を検出した。甕の内部には何も残存していなかった。北山通の地下鉄建設に伴う発掘調査でも発見されており、縄文時代の遺構の広がりが注目される。

古墳時代 この時期の遺構は希薄で、当調査地では明確な遺構の検出はできなかった。このため集落遺跡としての植物園北遺跡の縁辺部か、あるいは外れた所に位置していると思われる。

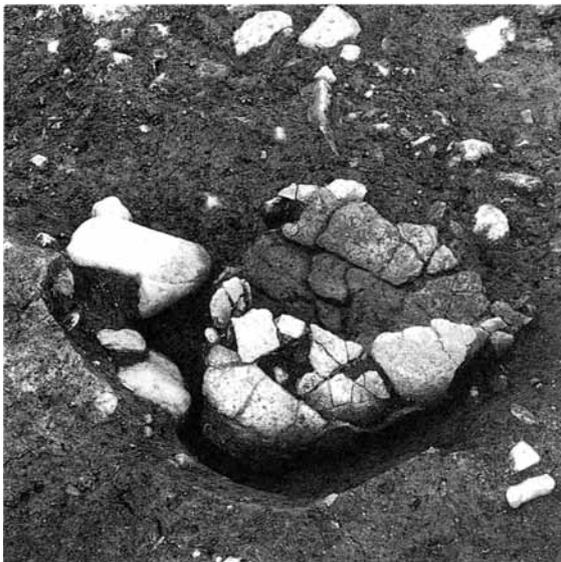


図68 甕棺墓検出状況(南西から)

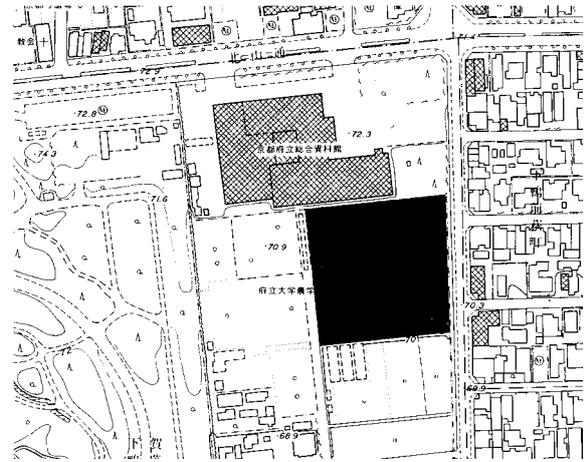


図67 調査位置図(1:5,000)

奈良時代から平安時代 当調査地で検出した遺構群の中心をなすものである。掘立柱建物は、確認したものでは、東西建物4棟、南北建物8棟、総柱建物4棟、計16棟検出している。これらの建物は遺構の検出状況からみて、東西方向の溝(SD1)を境にして性格が異なるものとみられる。溝の北では比較的小規模な倉庫群や掘立柱建物があり、溝の南ではこれらの建物群から離れた所に、中程度の規模を持つ倉庫、掘立柱建物を配置している。溝による土地の区画が認められる。検出した建物は全体に柱間や振れの方向が一定しておらず、同時代の都城や

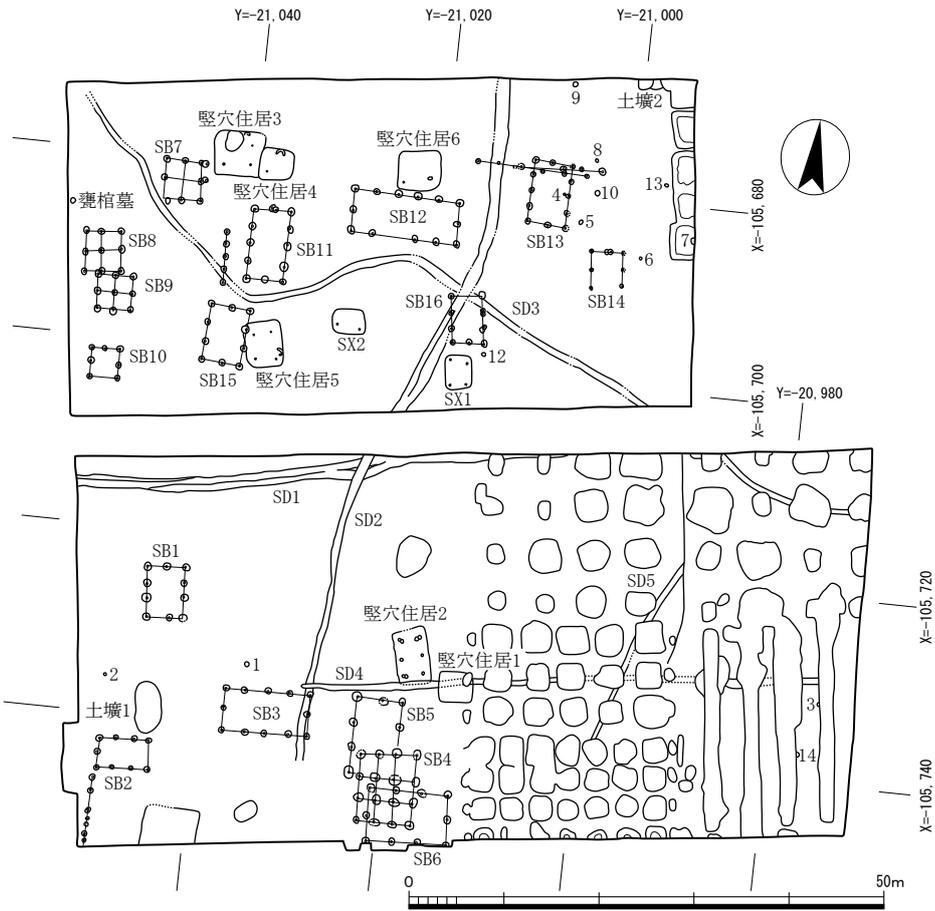


図69 遺構平面図(1~14は埋納遺構) (1:800)

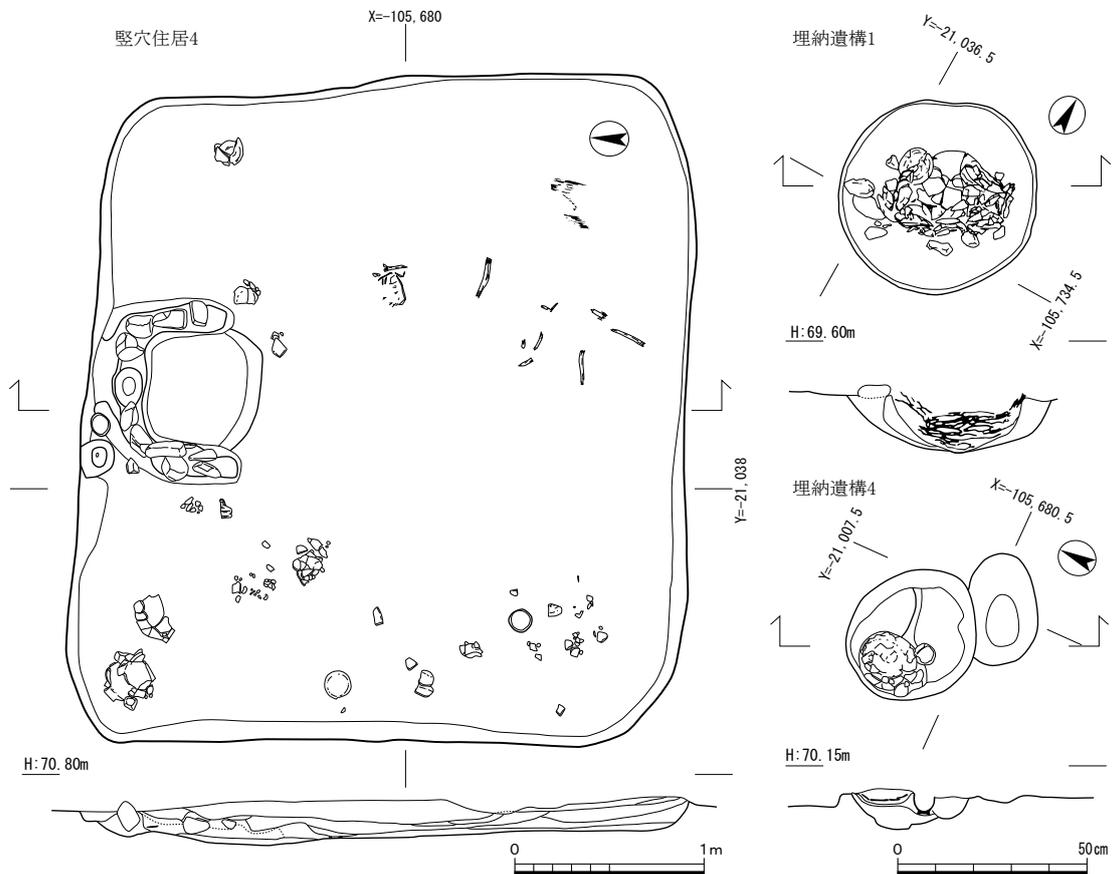


図70 遺構実測図 (1:40)

(1:20)

官衙での建物と比べて、規制が緩やかであると認められる。

古墳時代末期から奈良時代にかけての竪穴住居はⅠ・Ⅱ区で計6基検出している。いずれも残存状況は悪く、検出面から深さ10cm程度であった。このうち床面直上で炭化材を検出しており、焼失によって廃絶したと考えられる住居も確認できる。

Ⅱ区では長辺3.3m、短辺2.5m、検出面からの深さ0.5mを測る長方形の竪穴で、四隅に径10cmの柱穴（杭穴？）がある遺構SX1を検出した。これは竪穴住居というより、物資を貯蔵する「納屋」、「室」の遺構と考えられる。

平安時代 遺構はⅠ・Ⅱ区共に多数を検出しており、時期も平安時代全般にわたる。Ⅰ区では東半部は攪乱墳が多く、建物遺構としてまとめることはできなかった。Ⅱ区では、東半部を中心に建物としてまとまるものがあった。柵列（塀）としているものも、建物として取上げられる可能性はある。

今回の調査は、建物、敷地に伴う埋納遺構の検出が特徴的である。確認できた埋納遺構は計14基で、この内遺構（主として建物）との関連が指摘できるものは2基ある。柱穴に埋納する遺構も認められた。

時期的にみると9世紀末頃から12世紀末段階に至るまで平安時代全般をほぼ網羅している。埋置されている遺物は9世紀末から10世紀代頃までは土師器皿と須恵器小壺（瓶子）が基本的なセット関係となって埋納している。後期段階では検出頻度は高くなる傾向になり、土師器皿を主として埋置している。中には土師器皿を数十枚埋置するなど、前段階でみられたような一定の規格性はなくなるようである。

中世 調査地全域にわたって土壌、柱穴などを確認している。柱穴については、建物としてまとめることはできなかった。

出土した遺物は整理箱で102箱ある。その出土量は調査面積に比して少ないと言える。土器類は各時代のものが出土しているが、ほとんどが小片である。遺物が比較的多く出土する遺構は、土壌1、土壌2などである。土壌1から円筒埴輪片が出土した。この遺構近くの遺物包含層からであるが、金環が出土している。土壌2からは平安時代末期の土器類と共に、須恵質の盤状土器が出土しており、神事に使用されていた可能性もある。他に瓦類が数点、石鏃、鉄製紡錘車も出土している。

調査地では鉄滓が比較的目につき、Ⅰ区では焼土面、Ⅱ区では炭を充填する遺構があり、製鉄か鉄を加工する作業場ともみられる。

小結 今回の調査では、弥生から古墳時代の竪穴住居の発見はなかったものの、奈良時代から平安時代にかけての建物群を初めて発見したことは大きな成果である。また、地鎮・宅鎮といった「まじない」に関連する遺構（埋納遺構）を発見した。出土遺物から、当地では平安時代全般にわたって行われていたことが判明した。

調査地での遺構群から得られたデータは、以下の通りである。

- a 掘立柱建物群は奈良時代末から平安時代初めを中心としており、これらの建物の配置からみて官衙の構造を持っておらず、比較的身分の低い人たちの建物である。
- b 出土遺物も当調査地では首長クラスの存在を示すような遺物が認められない。
- c 地理的には上賀茂社、下鴨社のほぼ中間に位置しており、賀茂御祖（下鴨）神社にやや接近している。
- d 調査地に東接して鞍馬街道が走っている。

このことから、調査地で発見された建物群は、カモ社やカモ氏と関連しており、何らかの物資を保管・管理あるいは中継するための場所であったと考えることが可能である。

今回の調査は植物園北遺跡で初めて奈良時代末から平安時代の遺構群を検出し、それに伴って地鎮、宅鎮といった「まじない」に関連する遺構（埋納遺構）を発見した。このため改めて遺跡の性格を考えた時、古墳時代を中心とする植物園北遺跡というよりも、新たに奈良時代から平安時代の遺跡群を発見したという意味で、「下鴨半木町遺跡」として遺跡の再登録を行った方がより適切ではないかと考える。

(久世康博)

註 高橋 潔「植物園北遺跡」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』
 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994



図 71 埋納遺構 1 (北東から)



図 72 埋納遺構 4 (北東から)

22 北白川廃寺 (図版1・35)

経過 調査対象地は、1975年の2度の発掘調査により確認されている北白川廃寺塔跡の南東に位置する。試掘調査により、遺構の存在が明らかになったため発掘調査が実施されることになった。

発掘調査は、約175㎡の東西に長い調査区を設定した。7月1日に開始し、8月5日に終了した。この間、調査した遺構面は平安時代中期から縄文時代とみられる面まで6面を数えた。最終面の標高は75.1mを測る。

遺構・遺物 北白川廃寺の時期に比定できる遺構を第2面で3基検出した。調査区の南西部で5.5×4.0m以上の規模を持つ瓦溜と東部の幅4.2mを測る南北溝、北壁に沿った東西溝である。このうち瓦溜からは奈良時代から平安時代中期までの多量の瓦が出土したが、特に下層に北白川廃寺創建期とみられる瓦が集中していた。

出土した遺物は整理箱にして86箱を数え、そのほとんどを瓦が占める。土器類は少量であるが、須恵器・土師器などに時期比定できるものがある。縄文時代後期から晩期の土器（北白川上層式）

が10数片出土したが、いずれも包含層や奈良時代以降の遺構からの出土である。

小結 今回の調査では縄文時代の遺構は認めることができなかった。また、第2面で検出した遺構がどのように北白川廃寺塔跡に関連するかは今後の課題であるが、SK35出土の瓦は塔跡の修復の際に廃棄されたものである可能性がある。

(鈴木廣司・長戸満男)

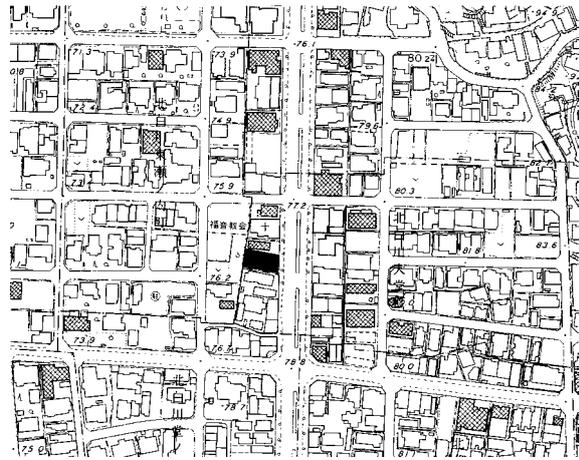


図73 調査位置図 (1:5,000)

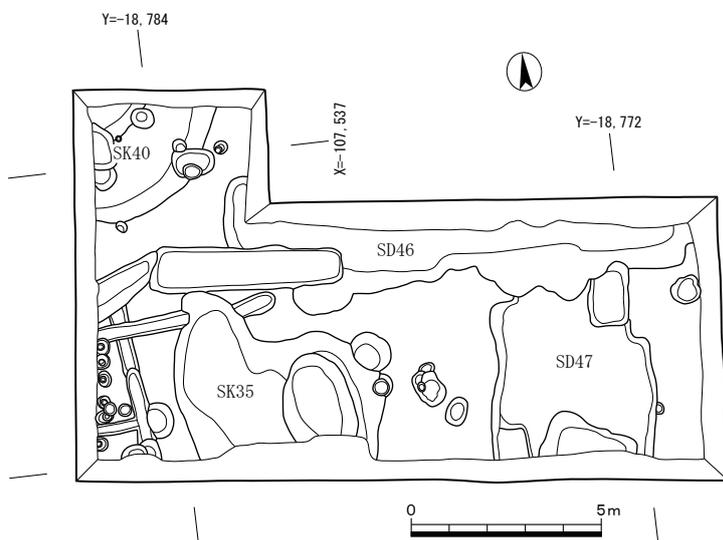


図74 遺構平面図 (1:200)

23 広隆寺旧境内1 (図版1・36-1)

経過 右京区太秦蜂岡町36番地に所在する京都市右京消防署で庁舎の改築が計画された。当該地は広隆寺の南門の東側に位置しており、広隆寺旧境内中心地区の東側にあたっている。広隆寺前面の築地、側溝、広隆寺伽藍に関する建物などの検出が予想されるため、前後二次にわたる試掘調査を実施した。この結果、敷地南半は既存建物による破壊を受けるが、北半には大規模な遺物包含層が良好に遺存することが判明した。このため北半の敷地を対象に発掘調査を実施した。調査区は敷地北側に約200㎡を設定した。

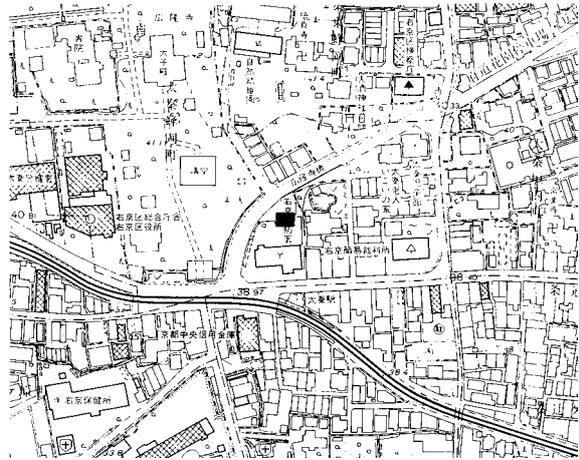


図75 調査位置図 (1:5,000)

遺構 調査では飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代、南北朝時代、江戸時代に属する遺構を検出した。飛鳥時代の遺構は後期(7世紀後半)に属する溝、柱穴、竈、土壇がある。溝(SD69)は北東から南西に延びる溝で幅1.5m、深さ0.5mを測る。柱穴は調査区中央に3基を検出したが建築遺構としてまとまるものではない。竈(SX71)は調査区南東辺に検出した。一辺70cmを測る矩形を呈し、楕円形に窪む焼土面を持つ。本来は竪穴住居に付属したものと思われるが、削平を受けたため、竈部分だけが遺存したと考えられる。土壇(SK70)は東西5.0m、南北2.0m、深さ0.5mを測る。出土遺物は少量である。平安時代の遺構には土壇、遺物包含層がある。土壇の主要なものには、前期に属するもの(SK56・59A・59B)、中期(SK52)と後期(SK36)に属するものがある。遺物包含層は平安時代後期、鎌倉時代、南北朝時代に属するものが中心である。SK56、SK59A、SK59Bは調査区中央北側に検出した。規模はいずれも東西幅4m以上、深さ0.7~0.9mを測る。北壁外に延びており全形は不明であるが、それぞれ59A、59B、56の順に切り合う。特にSK59A・59Bには9世紀初頭に属する土器と共に瓦、焼土塊、炭化物などが出土している。中期に属するSK52は東西3m以上、南北4m以上、深さ0.5mを測る。後期に属するSK36は東西10m以上、南北5m以上、深さ0.5mを測る。両土壇共に多量の土器を包含する。遺物包含層は各土壇から溢れた土器の平坦化や土地再利用のための整地によって形成されたと考えられ、平安時代後期から南北朝時代までに6面前後

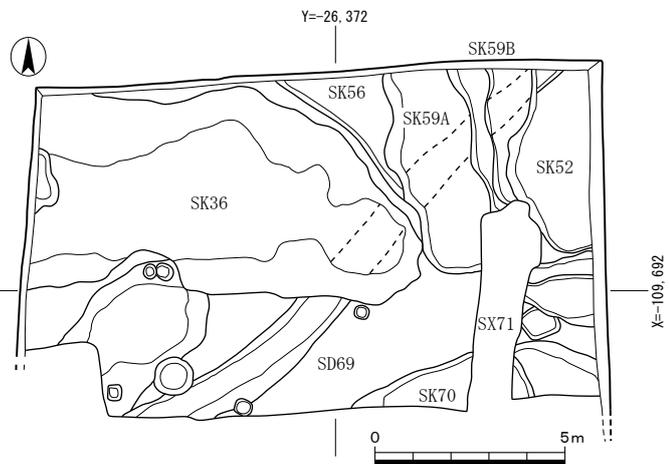


図76 遺構平面図 (1:200)

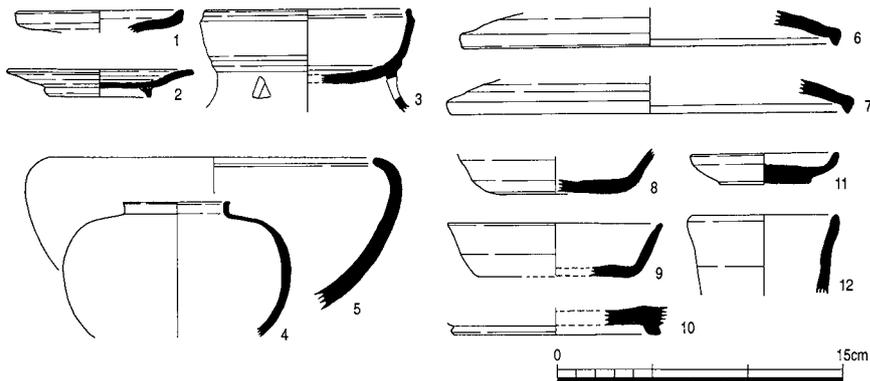


図 77 出土土器実測図 (1:4)

の堆積土層が確認できる。その他江戸時代に属した東西 2.0 m、南北 2.5 m、深さ 1.0 m を測る土壌が検出され、「火防眷属」と呼ばれる狐を象った土製品が多量に出土している。

遺物 出土した遺物には飛鳥時代、平安時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、江戸時代に属するものがある。飛鳥時代に属する遺物には土師器、須恵器、瓦がある。土師器には杯・甕が、須恵器では杯・蓋・壺・甕などの器形が認められる。瓦は平瓦の破片が出土した。いずれも S D 69 や柱穴から出土したもので、7 世紀後半の時期に比定できる。平安時代に属する遺物には土師器 (杯・皿・椀・甕)、須恵器 (杯・蓋・壺・甕)、緑釉陶器 (皿・椀・鉢・香炉・壺)、灰釉陶器 (皿)、黒色土器 (椀)、瓦器 (椀)、瓦 (軒瓦・平瓦・丸瓦)、金属製品 (金銅製仏像・金箔・銭貨)、土製品 (鋳型・窯壁・溶着瓦・壁土)、その他がある。鎌倉時代の遺物は、土師器、陶器、瓦器、瓦、その他がある。南北朝時代、室町時代の遺物には土師器、瓦器、陶器、銭貨、瓦がある。江戸時代の遺物には土師器、磁器、陶器、土製品 (火防眷属)、瓦、その他がある。平安時代後期に属する鋳型は窯壁・溶着瓦や多量の土師器皿類と共に出土した。内型と外型があり、仏具を鋳造後に遺棄されたものと考えられる。

小結 調査地は広隆寺旧境内、中心伽藍地区の南東付近にあたっている。調査では広隆寺の伽藍配置に直接関係した遺構の検出はないが、飛鳥時代の溝、竈、柱穴、土壌や、平安時代を中心とした土壌、遺物包含層を検出した。飛鳥時代の溝は最大幅 1.5 m に達するもので、現在の大酒神社方向から調査区に至り、広隆寺南門方向に延びる。竈、土壌はこの東側に検出されているが、柱穴は溝の西側にも検出されている。このため柱穴に関しては溝埋没後の成立の可能性がある。平安時代の各時期に属する土壌は大規模なもので、調査区内に納まらない規模を持つ。遺物包含層は整地目的以外に各土壌から溢れた土器類の堆積も認められ、この地区の長期間にわたる特殊な土地利用を示している。調査区北側中央に検出した S K 59 A・59 B は出土量は少量であるが、焼土塊、焼痕を示す瓦類、灰、炭化物などが認められ、火災後の整理土壌と考えられる。弘仁 9 年 (818) の火災時のものとして年代的に矛盾はない。以後平安時代を通じて途切れることなく、多量の土器類の堆積を繰り返し、鎌倉時代に至って堆積する土器量がようやく減少する。以後南北朝時代から室町時代にかけて、整地土層や小規模な柱穴、溝などの遺構が認められ、建物に関係した土地利用があった痕跡を示している。

(平田 泰・小檜山一良)

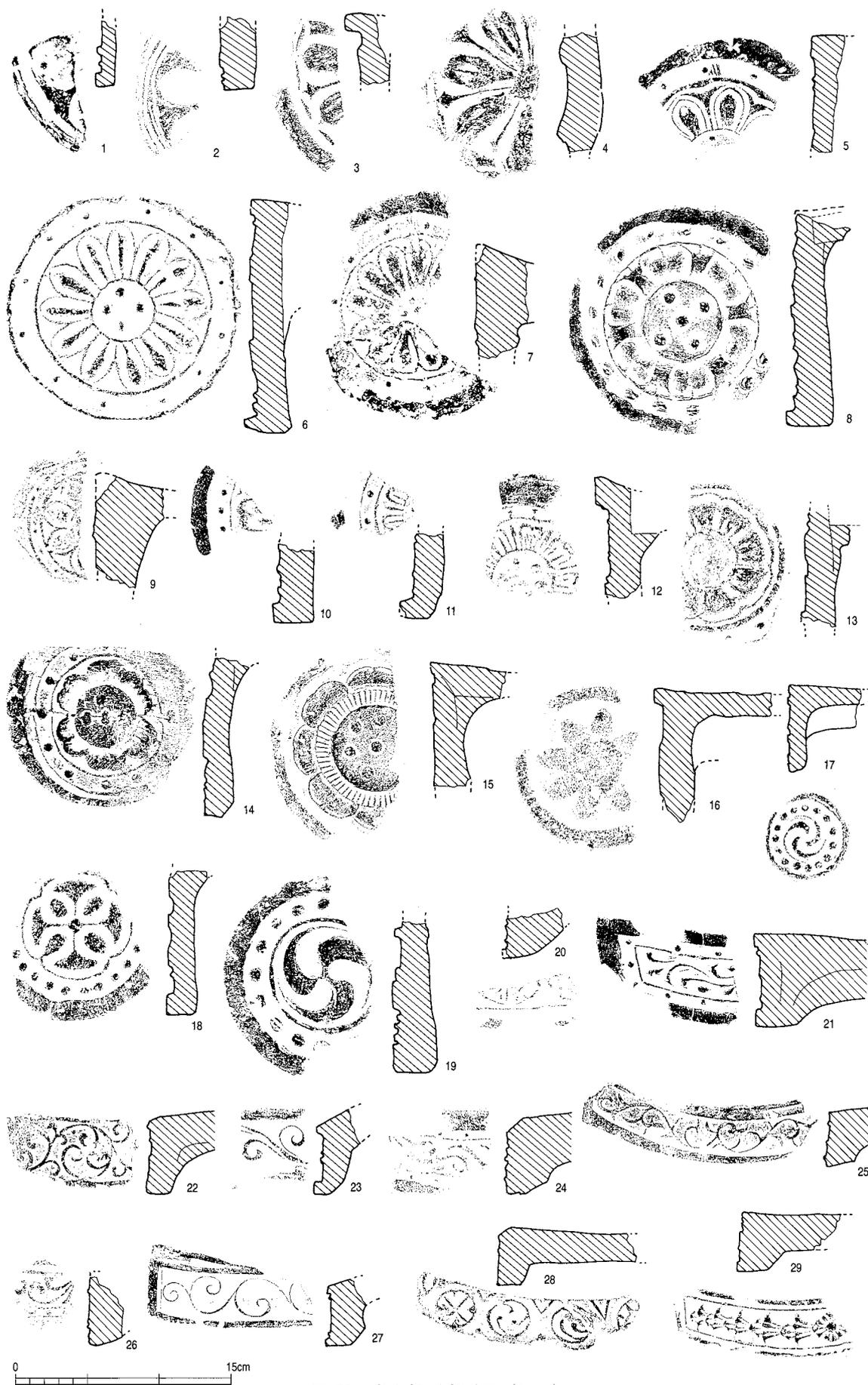


图78 出土軒瓦実測図 (1:4)

24 広隆寺旧境内 2 (図版1・36-2)

経過 京都市右京区太秦蜂岡町 31 番地に所在する右京区役所で、総合庁舎増築工事が計画された。当該地は広隆寺旧境内に比定されており、広隆寺に関係した遺構、遺物の検出が予想された。試掘調査の結果、平安時代前期の東西方向溝を検出したため、発掘調査を実施した。東西 17 m、南北 8 m の調査区を設定し、調査面積は約 130m²であった。調査では、平安時代前期の東西に並行する溝 2 条、土壇、柱穴などの遺構を検出した。

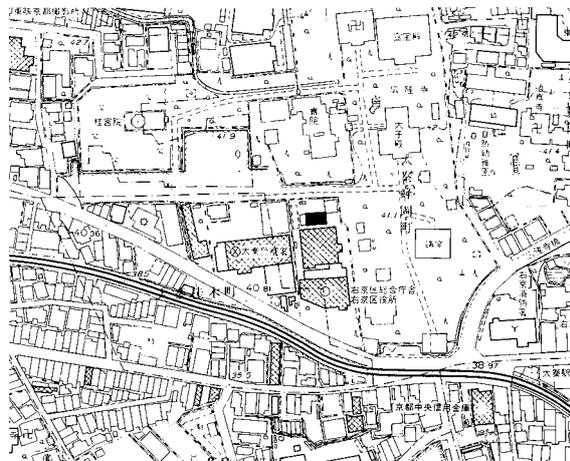


図 79 調査位置図 (1:5,000)

遺構 検出した遺構には、平安時代前期、中期、江戸時代に属するものがある。平安時代前期に属する遺構には、9世紀後半に埋没した溝 2 条がある。この溝 2 条 (SD 1・18) はいずれも東西方向で、心々 3.3 m を離して並行する。北溝 (SD 1) は幅 0.5 ~ 0.8 m、深さ 0.3 ~ 0.6 m を測り、調査区東端で南方向に屈曲し、南溝 (SD 18) と重複する。南溝は幅 0.8 ~ 1.2 m、深さ 0.3 ~ 0.8 m を測る。南北溝共に断面は整った U 字形を呈し、溝底部は 4 ~ 5 m 間隔で深淺を繰り返す。SD 1 は SD 18 と重複し切られる関係にあり、屈曲部に多量の瓦の堆積が認められる。SD 18 でも調査区東端、溝底部に敷きつめた状態で瓦類が検出された。両溝共に土器類、瓦類の他、焼土塊、炭化物を多量に含んでいる。肩部の崩れが少なく、出土遺物にも時期幅が認められないことから短期間の内に埋め戻された可能性が高い。平安時代中期の遺構には、土壇、柱穴がある。柱穴は SD 18 の南側で検出した。東西棟の北側柱列になる可能性がある。江戸時代の遺構には溝、土壇がある。

遺物 出土した遺物には、飛鳥時代前期・後期、平安時代前期・中期、江戸時代に属するものがある。飛鳥時代前期の遺物には瓦類があり、軒丸瓦、丸瓦、平瓦などがある。後期に属する遺物には須恵器杯・蓋・甕がある。いずれも平安時代の遺構に混入して出土したものである。平安

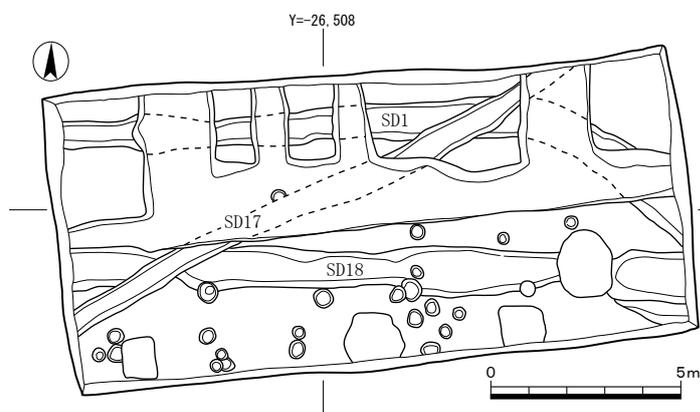


図 80 遺構平面図 (1:200)

時代前期に属した遺物には、土師器杯・皿・高杯・甕、須恵器杯・瓶子・壺・甕、緑釉陶器碗・皿、灰釉陶器碗・皿、黒色土器碗、輸入陶磁器碗、瓦などがある。主として SD 1・18 から出土したもので、土器類には表面が変色したものや焼土・炭が付着したもの、瓦類には赤色化な

いしは淡黄色化して脆くなったものがある。平安時代中期の遺物には土師器皿、江戸時代の遺物には土師器皿、陶器、磁器、鉄製品がある。

以下にSD 18出土土器を図化したものについて述べる。土師器皿(4)は高台を持ち、口縁部は外反する。緑釉陶器碗には大小があり、大型のものは体部が内湾気味に立ち上がり口縁端部がわずかに外反するもの(6)、体部の低位から立上がり、中位で内方に折れ、

稜を作るもの(7)がある。須恵器甕は倒卵形の体部に「く」の字状に折れ曲がる口縁部を持つ。(16)は体部外面に斜め方向のタタキ、内面に同心円のタタキ痕を薄く残す。(17)は体部外面のタタキ痕を丁寧に消す。

小結 広隆寺(秦公寺)は平安時代前期である弘仁9年(818)に火災に遭い、堂塔伽藍のすべてを焼失したとある。この被災復興後三百年を経た平安時代後期、久安6年(1150)に再度焼亡したと記録されている。今次調査で検出した東西方向に並行する2条の溝は、その埋土中に多量の土器・瓦類、焼土塊、炭化物などを含み、火災による整理に伴って埋め戻された可能性があ

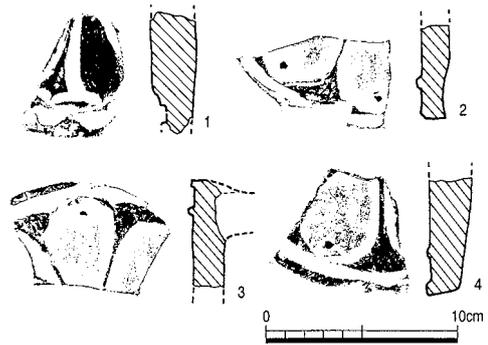


図81 出土軒瓦実測図(1:4)

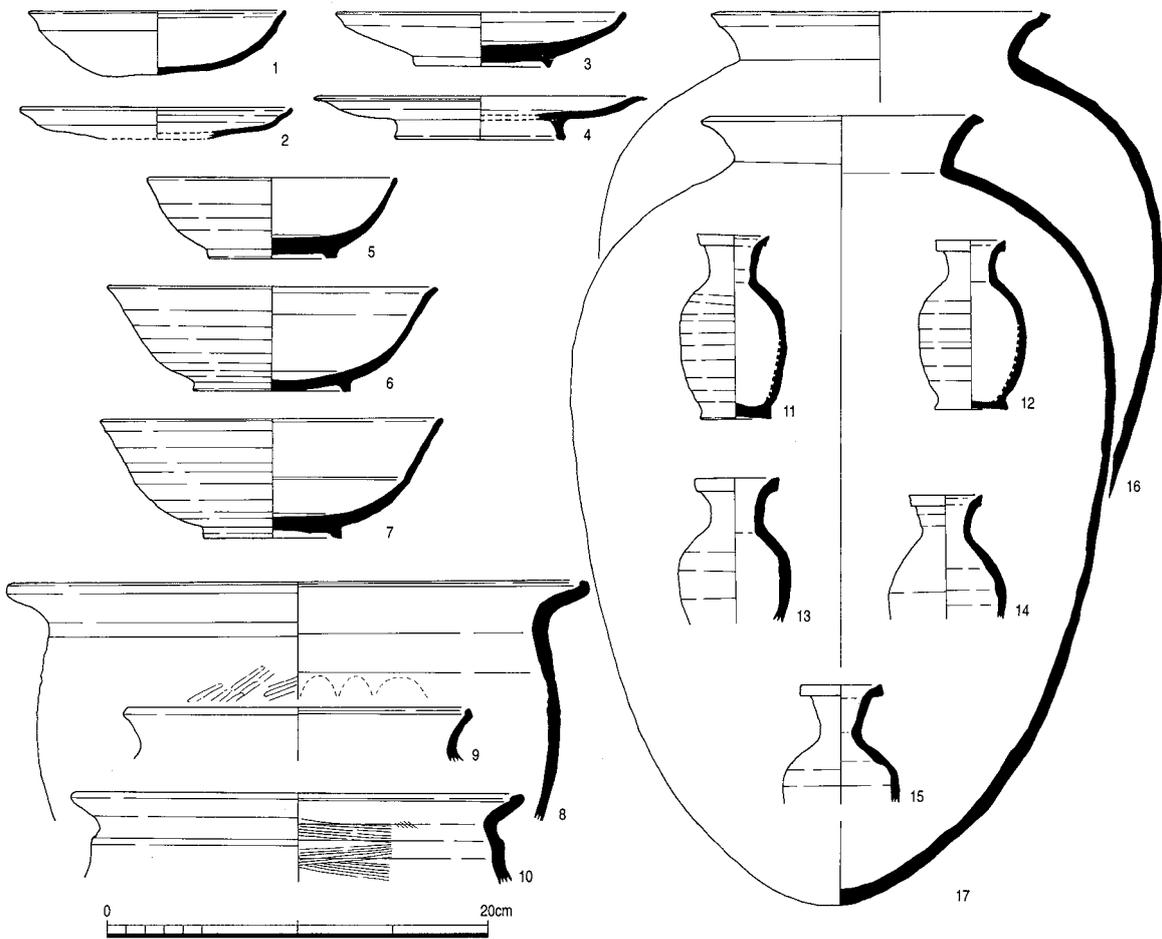


図82 出土土器実測図(1:4)

る。溝内堆積土層から出土する遺物は、最上層を除いて上下層とも土器類での時期差は認められない。ほぼ9世紀後半の第4四半期に属するものといえよう。したがって検出した2条の溝は弘仁9年火災時の整理によって機能を停止したものと考えられない。9世紀後半代の時期に発生した小規模な火災か、または溝、垣塀などの区画施設が不要になったため、廃棄されたものとみられる。またこれらの溝の成立年代も、肩部の崩れが少ないこと、前代の混入遺物がきわめて少ないことから、平安時代初期を大きくさかのぼらない時期と考えられよう。この溝と調査8（表1）検出の東西溝の振れを概算すると、真東西に対して5度35分から6度3分前後北偏しており、これが葛野郡の条里の傾きを示した数値とすれば、条里復原のための貴重な資料が得られたといえる。この数値と過去の調査で検出した溝遺構を根拠に、葛野郡五条荒蒔里を中心とした周辺の条里および坪界線を復原し、一案として以下に提示する。（平田 泰・小檜山一良）

表1 広隆寺周辺条理関係溝検出一覧表（番号は図83と同一）

	遺構	規模		出土遺物	埋没時期	備考	文献
		幅	深さ				
1	溝	1.2m	不明	土師器・瓦	平安時代後期	南北築地と両側溝を検出	註1
2	S D 1	2m	0.3m	土師器・須恵器・瓦器・陶器・軒瓦	室町時代	南北方向、20m 検出し途切れる	註2
3	S D 2	1m	0.5m	未検出	南北朝時代	南北方向、20m 以上検出	註3
4	溝	2m	1.5m	土師器・瓦器・陶器・瓦	平安時代後期	南北方向、80m 離れて2箇所検出	註4
5	溝状遺構	3m	2m以上	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦	平安時代後期	東西方向、幅2mの東西断面で検出	註5
6	溝	2m	0.5m	未検出	不明	南北方向、平行する溝2条を検出	註6
7	S D 1	0.8m	0.6m	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦	平安時代前期	東西方向、S D 18と平行する	註7
8	S D 19	2m	0.3m	土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・瓦	平安時代中期	東西方向、S D 9と一部で重複する	註8

註1 近藤喬一「太秦広隆寺の調査」『古代文化』22-3（財）古代学協会 1970

註2 鈴木廣司他『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977

註3 鈴木廣司他『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-III（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978

註4 平田 泰・加納敬二「広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・和泉式部町遺跡・一ノ井町遺跡・森ヶ東町瓦窯跡・常盤東ノ町古墳群」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991

註5 平田 泰・加納敬二「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993

註6 「平成元年度試掘・立会調査一覧表No.18」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

註7 本調査

註8 研究所は平成5年度に広隆寺旧境内に位置する右京消防署職員待機宿舎建設予定地で発掘調査を実施した。



図 83 葛野郡五条荒蒔里付近坪界復元図 (1:5,000)

25 史跡大覚寺御所跡 (図版2-2・37～39)

経過 調査地は右京区嵯峨大沢町に所在し、史跡大覚寺御所跡指定地の西隣に接する。調査地一帯は嵯峨野に含まれ、この地域の開発は、5世紀後半に渡来氏族である秦氏により為され、以後一帯に強力な勢力を持つに至ったと言われる。それを示すように、太秦付近に段ノ町・天塚・清水山・蛇塚・仲野親王陵・馬塚など6世紀代の前方後円墳が存在し、その周辺に数多くの群集墳が認められる。大覚寺周辺にもその東南約160mに6世紀後半と考えられる直

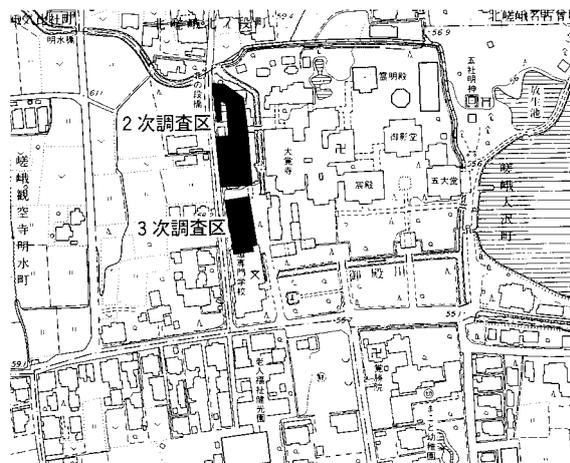


図84 調査位置図 (1:5000)

径50.0m、墳丘高9.1mの二段築成の丸山古墳(大覚寺1号墳)、東西30m、南北25mを測る方墳の入道塚(大覚寺2号墳)、南天塚、狐塚などの古墳が点在する。このことから、大覚寺御所のみならず古墳群に関連する遺構・遺物の検出も予想された。

まず本調査に先立ち既存基礎撤去に伴う立会調査と試掘調査を実施した。立会調査は対象地北端の撤去部分から開始し、順次南に移動して行った。試掘調査は、既存基礎が深くおよんでいない対象地の北端と南端で行った。まず北端に、幅2mの東西方向の調査区を20.5m、18m、14mの長さで3条設け、その南側東寄りに幅2mの調査区を南北方向に5mの長さで1条設置し、南端には東西13.5m、南北8.0mの長方形の調査区を設置、これを1次調査とした。

1次調査の結果、溝、柱穴、土壌などが確認され、平安時代以前から江戸時代にかけての遺構群の存在が判明した。注目されるものは、現在の西門の西側付近で幅2.5～3.0mの東西方向の大溝1条の確認である。しかもその溝の南側に並行する小溝を検出し、何時期かにわたる区画の存在が予想された。溝群より北側の地域では、柱穴・土壌・溝が密集して認められた。遺構の分布が幾つかの単位に分かれ、単位毎に遺構群の粗密がうかがえる。東寄りには土壌などが点在する。一方、溝の南側には幅8mを超える大規模な河川が2条重複して認められる以外、顕著なものはみられなかった。南端では幅2.7mの南北大溝を1条確認し、ここから中世の遺物が出土した。以上の調査結果に基づき本調査を行うこととなった。実施に際しては、対象範囲を南北に二分し、北半を2次調査区、南半を3次調査区として、2次調査区から開始した。

遺構 調査対象範囲が南北60mにおよび、北端と南端では現地表面の標高差が1.6mにもなる。そのため、対象範囲の中ほどの位置の基本層序を示す。現地表面下45cmが既存建物の整地層、江戸時代のいぶい黄褐色砂泥層が厚さ10cm、次いで厚さ20cmの黒褐色砂礫層があり、以下は黄褐色粘土層と礫層の互層で、地山とみられる。調査は江戸時代土層の上面から開始した。

2次調査区 検出した遺構は、総数707基あり、平安時代以前から江戸時代にわたる。鎌倉時代の遺構を除いた平安時代以降の遺構は、大覚寺御所に関連する遺構群と考えられる。

平安時代以前の遺構は、調査区全域に疎らに点在する土壇状遺構で、形状は円形、不定形、長楕円形などがあり、深さや底の形状も一定していない。いずれの遺構も、黒褐色粘質土層の埋土で、部分的に炭化物が入るが遺物はほとんど出土しない。時期は、平安時代の遺構との重複関係から、古いと考えられるのみで、性格についても判然としない。

平安時代の遺構は、調査区北半に集中し、池状遺構、掘立柱建物、東西溝、土壇などがある。その中で最も顕著なものは北西隅で検出した大規模な池状遺構である。これは北東の一部分を確認しただけであるが、東西・南北7 m以上、深さ1.5 mを測る。東肩は確認した範囲内の中ほどで折れ曲がり直線的である。その部分を境に肩部の形状が異なる。境には肩の傾斜に沿って角張った径40～50cmの自然石を1列4段に積む。その北側は肩から2 m離れた裾部に径20～50cmの河原石が肩と並行するように長さ4 mの範囲で2列段状を呈する。さらに下段石列の西脇に接するように残存長4.10 m、幅0.12～0.35 mを測る栗の割木材が上下2枚重なるように認められた。いずれも樹皮面を下に、割り面を上に向けている。木の据え方は下段がほぼ水平であるのに対し、上段は東端が西端より8 cm高く勾配をつけている。一方、南側には肩に沿わず東西南北に合わせて規矩形に径60cmの河原石が、3石並んだ状態で認められた。これらの施設から1 m西に舌状の高まりがあり、裾には径30～60cmの河原石と花崗岩が平坦面を上にして分布し、高まりの上面には小礫が密集する。池状遺構の底には、厚さ20cmの灰色泥土層の堆積がみられ、木の葉や枝などの自然遺物と共に前期から中期の遺物や、象牙製品の破片が出土した。池状遺構肩部の折れ曲がる部分に接して東西方向の溝1条が認められる。溝は幅1.50 m、深さ0.25～0.50 mを測り、底はかなりの凹凸が

みられる。検出した範囲の東端と西端では25cm程度の比高差があり、西端が低い。

埋土は小礫を含んだ砂礫層で、その中から前期の土器と軒平瓦を含む瓦類が少量出土する。東西溝の中心から南に3 m隔てて4間×4間の方形の掘立柱建物を1棟検出した。柱間間隔は桁行、梁間1.5 m（5尺）等間で、方位はほぼ真南北を示す。建物北西隅の柱穴は、規矩形を呈する石列からいずれも1.65 mに位置することから、建物と池状遺

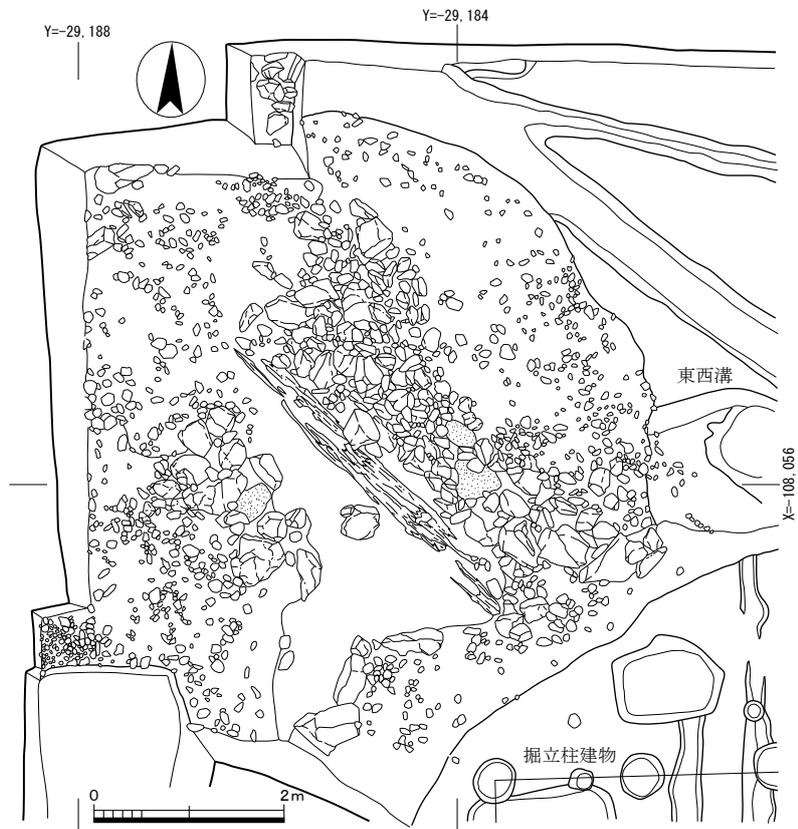


図85 池状遺構平面図 (1:80)

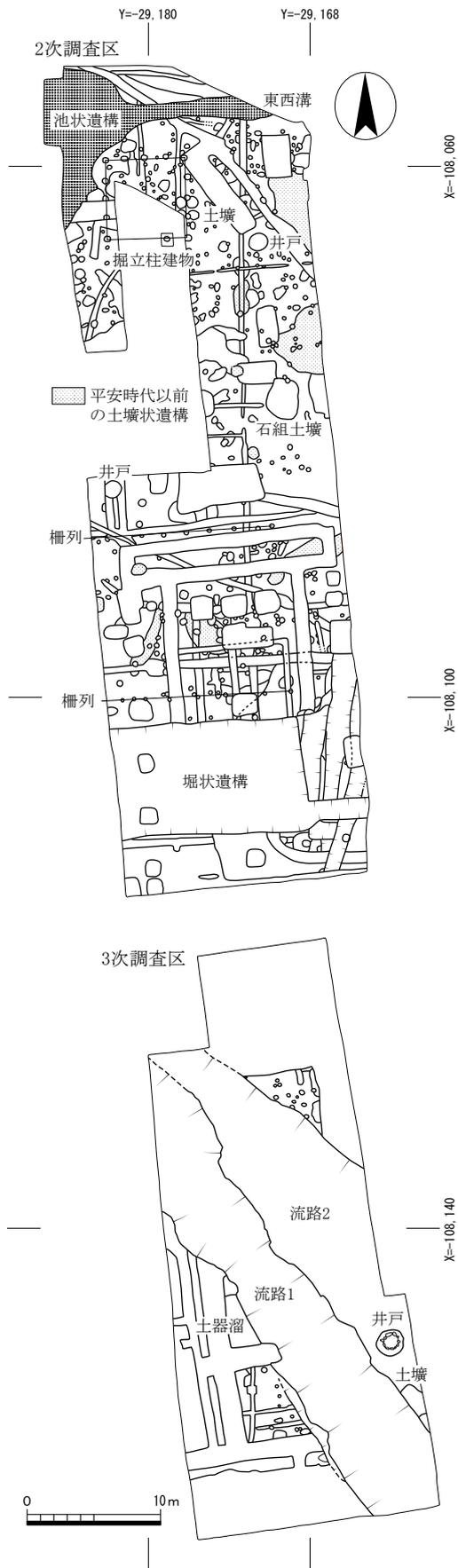


図86 2・3次調査区遺構配置図 (1:500)

構の関連がうかがわれる。

南北朝から室町時代の遺構は調査区全域で認められ、掘立柱建物、井戸、柵列、溝、石組土壙、土壙などがある。平安時代の池状遺構は一部埋まった後、底を作り替えて落ち込み状となって残る。東肩はなだらかになり、そこには拳大の礫が密集していた。深さは45cmと浅く底には薄く泥の堆積が認められることから、あまり水は溜っていなかったと考えられる。この東側には大小規模の異なる柱穴群が認められるが、調査区内で建物遺構にはまとまらない。柱穴群の南に東西2.10m、南北2.70m、深さ0.15mを測るやや細長い不定形の土壙が1基あり、西壁の一部に拳大の河原石を積んだ痕跡が認められることから、石組みであった可能性が高い。底は平坦で南北朝期の土器がまとまって出土した。また柱穴群の北西には径0.7mの円形で、深さ0.3mの半球状を呈する土壙が2基ずつ2列計4基確認された。いずれの遺構からもわずかに遺物が出土するだけで、甕などを据えつけた痕跡と考えられる。調査区中央西端には径1.5m、深さ2m以上を測る円形素掘り井戸を1基確認した。これより南には小規模な東西溝がある。

戦国時代から江戸時代初期のものも調査区全域で認められるが、北半では東西・南北方向の小溝群と柱穴群、土壙などがある。柱穴群は部分的に点在するだけで建物にはまとまらない。南半では、溝、柵列、大規模な堀状遺構などが重複して認められる。より古い時期に属するものは、堀状遺構、南北溝、柵列などがある。堀状遺構は東西10.0m、南北6.5m、深さ1.0mを測り、底は平坦で所々に径2m程の方形の土壙がみられる。いずれの中にも厚さ15cmの灰色泥土層の堆積があり、水が溜っていたことが予想される。堀は調査区東端手前で幅2.4mに狭まっている。堀は短期間で埋め戻され、替わって東西溝、柵列などが設けられる。東西溝は堀

とほぼ同位置で3条あり、一番南側のものが幅2.4 m、深さ1.0 mの規模で、底は平坦である。長さ9 mの範囲で一段深くなっている。段の東端から東側では北肩に板と杭で護岸した痕跡があり、南肩に人頭大の自然石が2段積んであることから、橋が架かっていたと考えられる。これらの堀や溝、柵列は敷地の南端を限る施設と考えられ、桃山時代から江戸時代初期の間に造り替えられたものである。

江戸時代の遺構も調査区全域で認められる。北端には北東に傾斜する大規模な落込の肩がある。その南には南東から北西に流れる1条の溝があり、中央で南に少し折れ曲がる。その部分と接するように西側には長さ7.0 m、幅2.0 m、深さ0.5 mを測る長方形の細長い土壙が1基ある。底は平坦で肩はほぼ垂直に立上がるが、接続部には溝底から土壙の底にかけて河原石が2段並べてあり、溝から土壙に水が流れるようになっている。このことから、この遺構は水を溜める施設と考えられる。土壙のすぐ東には径1.4 m、深さ0.8 mを測る円形素掘井戸が1基みられる。調査区中央には蔵の基礎と考えられる方形に廻る布掘り掘形が2基重複して認められた。これらは新旧の関係にあり、新しいものには拳大より大きめな河原石を2列に敷き、各隅と中央には径40 cm前後の花崗岩の切石を据えている。古い時期のものは底に瓦を置き、西肩には平瓦を縦に並べた後、遺構の上面まで破碎した瓦で埋めている。この南には東西小溝などがある。

3次調査区 検出した遺構は、総数150基を数える。平安時代から江戸時代のものがあり、大多数は江戸時代に属する。江戸時代以前と以後では遺構の状況が大きく変わり、前者では流路が主なものであるのに対し、後者では御所に関連するものが主体となる。

平安時代のものは、流路2がある。流路2は北西から南東に流れるもので最大残存幅約8.5 m、深さ1.3～1.8 mを測り、底は凹凸がみられる。流路内には底から礫、砂礫、粗砂、砂が互層となって幾重にも重なり、上面近くまで堆積している。遺物はほとんど出土しない。

鎌倉時代から室町時代のものは、流路1、土器溜、土壙がある。流路1は平安時代のものよりやや南西にずれて位置し、最大残存幅6～7 m、深さ1.8～2.2 mを測り、底は凹凸がみられる。その7割までは礫、砂礫、粗砂、砂が重なりあって堆積している。それより上面近くまでは泥砂、砂泥の堆積で、水が流れた痕跡はみられない。各層には南北朝期から室町時代の遺物が出土し、鎌倉時代のものも認められることから、各時期にわたって機能したと考えられる。なお流路の西肩中央で、南北朝期から室町時代前半の遺物が多量に出土する土器溜が1基、東肩にもほぼ同時期の土壙が1基認められた。

江戸時代のものは、井戸、溝、瓦溜、土壙などがあり、これらは調査区南半で認められる。井戸は中でも東端に近い所で確認され、井戸枠の径は1 m前後の円形石組みで、深さは検出面から6.7 m以上を測る。石組みは深さ約4.2 mまで抜き取られた後、ゴミ穴として利用され、江戸時代前期の遺物が出土した。下部に残っていた井戸枠内から遺物の出土がほとんどなく、時期が確定できなかった。江戸時代以前にさかのぼる可能性もある。瓦溜はやや西で確認し、平面は不定形を呈し、棧瓦と共に江戸時代中・後期の土器類が多量に出土した。溝はこの両者の間にあり、ほぼ南北方向であるが、遺存状態が悪く性格は不明である。

遺物 出土した遺物は、整理箱で227箱である。平安時代から江戸時代にわたり、その中でも瓦類が過半数を占める。土器類は南北朝から室町時代のものが多く、平安時代のものが少ない。平安時代の遺物では、2次調査区北半の池状遺構の底近くから2.5×4.0cm、厚さ1.5mmを測る象牙製品の一部と考えられる破片がある。それにつながる東西溝から均整唐草文軒平瓦が1点出土し、これは西寺出土と同範で名古屋の滝整備に伴う調査でも出土している。流路1の室町時代前期の層から「御厨…」と底部外面に刻んだ平安時代前期末の洛北産緑釉陶器碗の破片が出土している。南北朝から室町時代前期のものは、井戸、土器溜、東西溝、土壙などからまとまって出土している。大部分は土師器であるが、それ以外に古瀬戸平碗・鉢、瓦器鍋、常滑甕、東播系須恵器、龍泉窯青磁などがあり、小形の巴文軒丸瓦も出土する。江戸時代のものは、溝、井戸、土壙などからまとまって出土している。その中でも3次調査区の井戸内からは、17世紀中頃の多量の土師器皿と共に、明末染付皿、初期伊万里染付皿・青磁皿、唐津縁折皿、「天下一堺ミなと藤左衛門」(二重囲み)刻印の泉州湊系焼塩壺、箸・曲物・下駄・漆碗などの木製品も出土する。2次調査区の蔵の布掘り施設から出土した多量の瓦類の中には、軒瓦や軒先瓦、刻印のある平瓦などが含まれ、江戸時代前期の初めとみることができる。

小結 調査の結果、江戸時代までの5時期にわたる遺構群を明らかにすることができた。特に注目されるものに2次調査区北端で確認された池状遺構、東西溝、掘立柱建物がある。東西溝と池状遺構は接続していて、水が東西溝から注ぐようになっている。検出した河原石は、石の向きや勾配を測定した結果、一定の規則性がみられ、人工的に配置された可能性がある。これらを断ち割った結果、施設の下には流路による堆積層はみられず、東側の河原石群は当初までさかのぼり、西と南東部の石群は一時期新しいことが判明した。このような溝・河原石群・割木が一体となったような施設の類例はなく、性格を決定できるまでには至っていない。さらに池状遺構の南東にある4×4間の方形建物も平安時代の一時期並存していた可能性がある。ただ3次調査で検出した流路1から、平安時代前期末の緑釉陶器に「御厨」と刻んだものが出土したことから、調査地の近辺に御厨の施設があった可能性も考えられる。また流路は旧有栖川と考えられ、付け替えによる新しい時期の流路1で室町時代前期の遺物が出土したことから、流路の下限を知る手がかりとなった。現在大覚寺境内を方形に圍繞して流れる有栖川は、室町時代前期以降に付け替えられたとみられる。現在の有栖川との新旧関係は不明であるが、安土桃山時代から江戸時代初期に東西方向の溝や堀が存在することから、2次調査区一帯にこれらで区画した敷地が存在した後、江戸時代前期前半に、現在に近い景観が整備されたことも明らかとなった。(堀内明博・高 正龍)

26 松室遺跡 (図版2-2・40)

経過 西京区松室中溝町、松室北河原町の地の京都市立松尾中学校南側道路で、一ノ井都市下水路工事に先立って発掘調査を実施した。また、松尾中学校と西芳寺川に挟まれた西京区松室北河原町一帯の公共下水道工事に伴う立会調査も実施した。調査地はいずれも1983～84年に松尾中学校建設に伴う発掘調査により発見された弥生時代から奈良時代の集落跡である松室遺跡の南部に位置する。

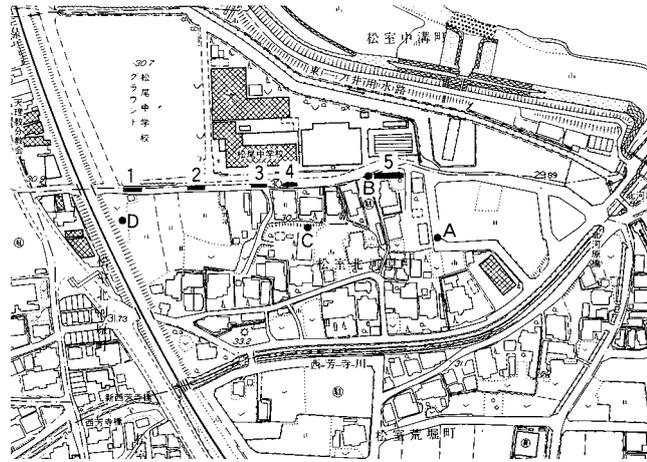


図87 調査位置図 (1:5,000)

今回の調査では、遺構配置や遺跡の範囲を確認することに主眼をおいた。

遺構・遺物 発掘調査は、松尾中学校内の調査で検出した遺構の延長上に西から1～5トレンチを設定した。

1～4トレンチでは、東西方向の旧農業用水路と、それに重複する同方向の中世の溝を検出した。下層は1・2トレンチは褐色砂泥層の地山となるが、3トレンチでは湿地状堆積となり、4トレンチでは湿地状落込の東肩部を検出した。

5トレンチでは、遺構面を3面検出した。遺構面1では室町時代の南北方向の溝状遺構64条、遺構面2では鎌倉時代の南北方向の溝状遺構42条を検出した。これらの遺構はいずれも耕作に関連したものといえる。遺構面3では古墳時代後期の土壙や柱穴などを検出した。柱穴は等間隔で一定方向に並び、掘立柱建物などを想定しうるものもあるが、調査範囲が狭いため規模など詳細は不明である。これらの遺構は、出土遺物から6世紀前半から中頃の年代が与えられる。

立会調査では、5トレンチを中心とした南側の地点(A～B地点間)で断面観察により古墳時代後期の柱穴・土壙などの遺構を検出した。またA地点では幅1.0m、深さ0.3mの東西方向の溝を検出し、埋土より古墳時代後期(6世紀代)の須恵器が出土した。調査区中央部(C地点)は、中学校の調査で発見された大溝の延長上にあたるが、土師器細片を含む褐色砂泥層と褐色砂礫層の互層が現地表下2m以上堆積しており、確認できなかった。調査区北西部のD地点では弥生時代の遺物包含層を確認した。遺構・遺物包含層・地山などの残存状況は良好である。

小結 今回の発掘・立会調査で、松室遺跡の古墳時代後期の集落跡が南東方向に広がっていることが確認できた。また弥生時代の遺跡が山側へ広がる可能性も見出すことができた。しかし、中学校内の調査で発見された葛野大堰から分流された灌漑用水路の一本と考えられる大溝は確認することができなかった。今後の調査で大溝の延長を確認し方向を追うことができれば、秦氏による葛野開発の実態がより明確になるとみられよう。(伊藤 潔)

27 南春日町遺跡第22～24次調査（図版2-3・41～43）

22次調査

経過 調査地の地目は水田で、小字名は「下西代」と呼称されている。下西代地区ではこれまで16次調査から21次調査の6度にわたる発掘調査を行っている。今回の調査地は19次、21次調査地の北に接している。両調査地では鎌倉時代から室町時代の遺構、遺物を多数検出した。特に両調査地のいずれも北端で検出した堀は同一のもので遺構群をとり囲むことが判明している。

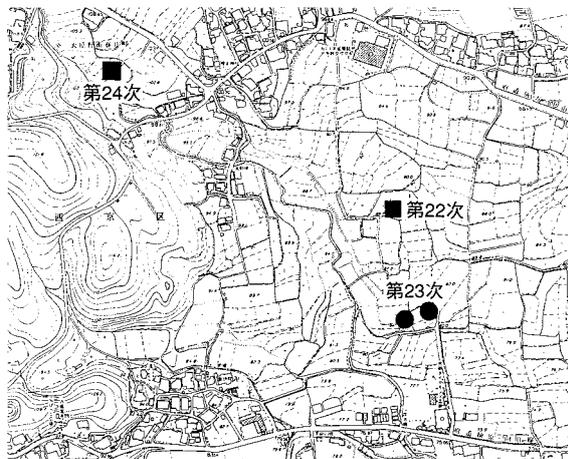


図88 調査位置図（1：10,000）

遺構 調査の結果、鎌倉時代から室町時代の

遺構を検出した。鎌倉時代の遺構には、建物1がある。建物は東西5間、南北4間で、総柱の東西棟である。東西の柱間は2.4m、南北の柱間は1.8mで各々等間隔である。建物面積は86.4㎡。さらに建物を囲む溝1を検出した。溝の幅は0.4～0.6mで、深さは0.3～0.6m。また建物1の東では炭化土壌1を検出した。土壌は溝1を切った状態で検出した。平面の形状は長円形で、規模は東西1.0m、南北2.0m、深さは0.3～0.5m。土壌は周壁面が焼け、内には炭化物が詰まっていた。

建物1の西は幅12m以上にわたり南北に延びる小礫が敷かれたような状況であった。敷かれていた石は小さな角礫で、石の間は粘土で固められていた。

室町時代の遺構には柱穴多数と溝、土壌、堀1がある。柱穴、溝、土壌は東半部で認められ、柱穴については建物としてまとまらなかった。南端部では堀1の北肩部を検出した。

遺物 出土遺物は整理箱で7箱あった。遺物は土器類と瓦類で、土器類が大半を占める。土器類には土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、陶器、陶磁器がある。時期別にみると鎌倉時代から室町時代が主体で、その多くが柱穴と遺物包含層から出土している。

瓦類には軒平瓦が1点と平瓦片、丸瓦片がある。いずれも遺物包含層から出土している。

小結 調査の結果、鎌倉時代から室町時代の遺構群を検出することができた。とりわけ明確な遺構としては鎌倉時代の建物と室町時代の堀が挙げられる。

当調査地が位置する下西代地区は地元では下社家と呼ばれていることから、当地での発掘調査による一連の検出遺構群については大原野神社に関連する施設（社家）と考えている。

今回の調査地に南接する19次、21次調査との関連で言えば、同一の堀を検出したことから、堀の規模、方向を確定できた。さらに堀の北で検出した鎌倉時代の建物については堀築造以前の状況を知る上で興味深い。

（加納敬二・永田宗秀）

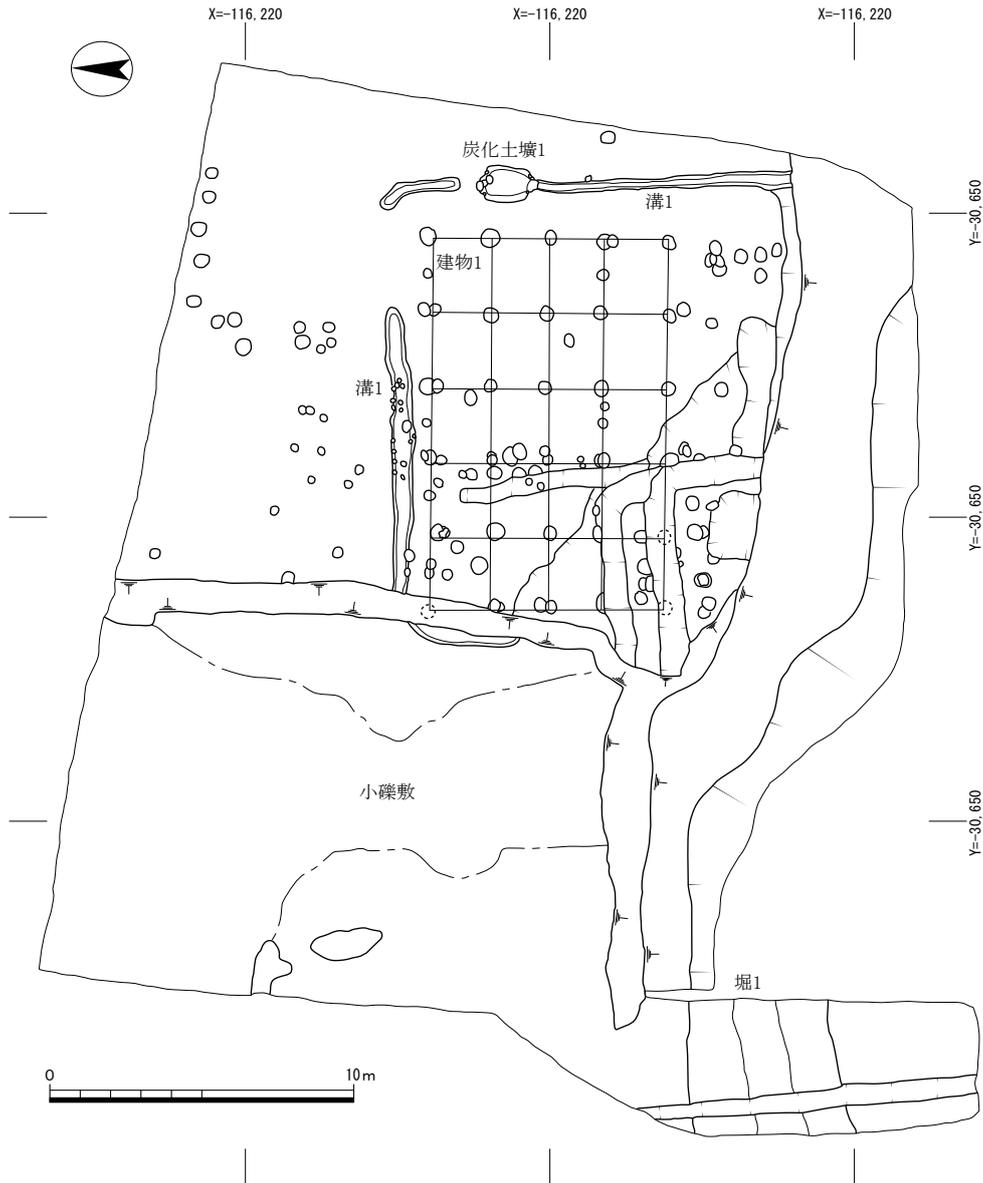


図89 22次調査遺構平面図 (1:250)

23次調査（下西代古墳群）

経過 下西代古墳群は1989年3月農業土地基盤整備事業に伴う16次調査で、一部拡張により古墳主体部である横穴式石室を検出し、同年6月再調査である17次調査^{註1}で古墳時代後期の群集墳であることが判明した。当古墳を1号墳とし、さらに新たな古墳確認のため同年10月周辺の田畑を対象に10箇所を試掘調査（18次）を行った。調査の結果、1号墳東150mの地点で石室の石材を確認し、1990年7月の20次発掘調査^{註2}で横穴式石室を検出し、当古墳を2号墳とした。

以上の経過により当古墳群は発見された。大原野地域では、数十基の古墳が点在することがすでに知られているが、いずれも本格的な調査は行われていない。今回の調査により1号墳は京都市内で当時期にみられる標準的な横穴式石室の形態を示すものであったが、2号墳については横穴式石室に小石室を持つ特殊な古墳であることが判明した。

1990年11月に京都府、京都市、地元、当研究所の四者で当古墳群保存についての協議が行わ

れた。その結果、当地一帯は削平の対象地であることから、南 150 mに位置する公園予定地に移築されることになった。ただし公園の敷地面積の関係から、移築古墳は特殊性を重要視し 2号墳とし、1号墳については残存良好な石材を据え置きすることになった。1991年11月に解体調査に入った。

ここでは移築古墳である 2号墳の解体工程について表示しておく。工程表は表 2に示した。

小結 今回の調査は、下西代古墳群移築のための解体調査であった。2号墳については原位置南約 150 mの所に、造成予定の公園内に復原が計画されている。しかし 1号墳については残存状態の良好な石室石材を選択し移設展示する方法がとられることとなった。古墳が移築、移設される公園の具体的なイメージについては、今後関係者と協議を重ね、大原野地域の古墳時代後期の群集墳を理解する上で活用できるような公園の実現を目指して取り組んでいきたい。

(加納敬二・永田宗秀)

註 1 加納敬二他「南春日町遺跡第 17・19 次調査」『平成元年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

註 2 加納敬二他「南春日町遺跡第 20・21 次調査」『平成 2 年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994

表 2 2号墳解体調査の工程

横 穴 式 石 室	小 石 室
<ul style="list-style-type: none"> ・羨道部側壁内側と上面の割付け ・玄室部側壁三段目石材の内側と上面の割付け ・小石室石材を取り外した状態での撮影 ・床面敷石東半部取り外し、実測、撮影 ・玄室部最上段石材取り外し、2段目石材の上面と外側割付け ・墳丘封土掘り下げ ・石室掘り方検出、掘り下げ ・セクション実測、撮影 ・床面敷石西半部取り外し、撮影 ・全景撮影 ・羨道部側壁外側割付け、取り外し ・玄室部 2 段目以下石材取り外し、実測、撮影 ・玄室部最下段石材取り外し、実測、撮影 ・断ち割り、実測、撮影 ・石材に強化・風化防止剤を含浸処理、及び補修 	<ul style="list-style-type: none"> ・側壁内側と最上段石材上面の割付け ・断ち割り ・南半部裏込め粘土掘り下げ ・〃 最上段石材取り外し ・〃 下段石材割付け、取り外し、実測、撮影 ・北半部南断面実測、写真撮影 ・〃 最上段石材取り外し ・〃 下段石材割付け、取り外し、実測、撮影 ・石材に強化・風化防止剤を含浸処理、及び補修

経過 農業土地基盤整備事業に伴う発掘調査である。調査地の地目は水田で、小字名は「久保田」と呼称されている。久保田地区では1982年に分布調査、1984年に試掘調査を実施している。今回の調査地は試掘調査で奈良時代から平安時代の遺物包含層を検出した地点である。そのことから当地点を含む一帯に当該期の遺構の存在が予想された。調査地は大原野神社から南東約400mに位置する。遺跡状況を見ると、飛鳥時代から奈良時代の須恵器の窯が点在する南春日窯跡群が社家川を挟み近接して立地している。

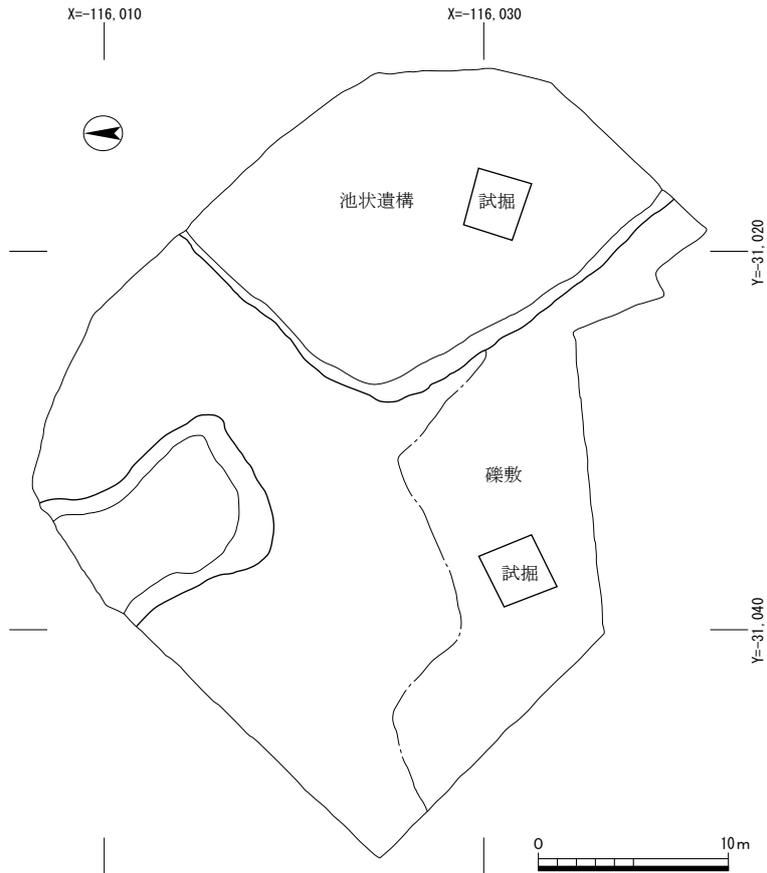


図90 24次調査遺構平面図 (1:400)

遺構 調査の結果、奈良時代から鎌倉時代の遺物を含む池状遺構を検出した。池状遺構は東西18m、南北25mの規模で調査区の南東部を占め、さらに調査区東外へ延びる。深さは0.6～0.8mで、堆積土は暗灰色泥土層である。

また、西南部で石敷を検出したが、性格、時期などについては不明である。

遺物 遺物は整理箱で4箱出土した。大半が土器類で土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦器、陶磁器がみられる。ほとんどが池状遺構から出土している。時期別にみると、奈良時代のものが多く、次いで平安時代、鎌倉時代の順である。奈良時代の遺物の大半が須恵器である。なお土器類以外では軒丸瓦1点が池状遺構から出土している。

小結 奈良時代から鎌倉時代の池状遺構は調査区の東外へ延びる状況であった。遺構内からの出土遺物は奈良時代の須恵器が主体であった。調査区の南接地には飛鳥時代から奈良時代の須恵器窯である南春日窯跡が立地していることから、出土した奈良時代の須恵器は、生産された製品が当地へ投棄されたのか、それとも、二次的に流出してきたことが考えられる。いずれにせよ両者の間にはなんらかの関係が考えられ、窯の操業時期における近接地の土地利用状況を考える上で興味深い資料を得ることができた。

(加納敬二・永田宗秀)

註 加納敬二・辻裕司「大原野南春日町遺跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度
京都市文化観光局 1985

28 史跡随心院境内 (図版2-4)

経過 防火水槽設置に伴う確認調査で、随心院境内としては初めての発掘調査である。現随心院は北東から南西に向かって傾斜する緩斜面上に位置し、寺域の西側は旧奈良街道に面する。調査に際しては、平安時代中期から後期にかけて成立した曼陀羅寺と、その廃絶後、桃山時代に成立した随心院の規模、構造などを知る手がかりを得ることを目的とした。現在の伽藍の築地塀と西側に広がる梅園との間に、約6m四方の方形の調査区を設定した。現代盛土層と江戸時代の整地層を重機で掘削し、現地表下約40cmの面で調査を行ったが、曼陀羅寺・随心院に係した遺構は得られなかった。

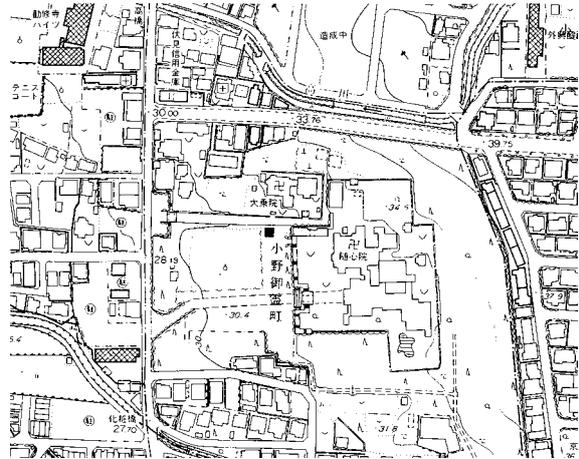


図91 調査位置図 (1:5,000)

遺構 土壌1は江戸時代の遺構である。掘形と井筒部分で埋土が異なる井戸状の遺構であるが、底が湧水高まで達せず井戸ではない。土壌2は浅い掘形に長方形に礫を並べた石室状の遺構の基底部分である。北と西の石列は失われている。室町時代から江戸時代にかけての遺構と考える。柱穴4・5・7・8は一棟の掘立柱建物を形成する。東西2間以上、南北1間以上ある。

遺物は細片のみで時期は確定できない。柱穴9・10には根固め状の礫を認める。柱穴6・11は明確な柱痕跡を認めるが、上部構造を復原できるような平面的な分布を示さない。底に礎石を持つ柱穴3は、柱が焼けた痕跡を示す。

遺物 遺物は少量出土した。まとめて出土した遺構は、土壌1のみである。また、土壌2から、古墳時代の須恵器杯蓋片が出土している。

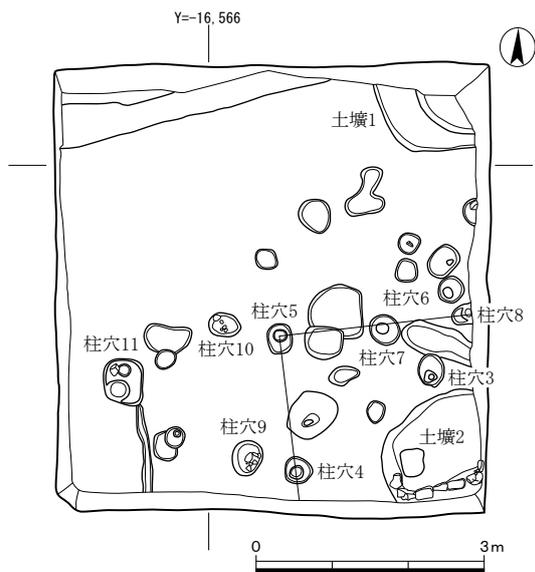


図92 遺構平面図 (1:100)

小結 今回の調査では、曼茶羅寺・随心院に直接か変わる遺構を検出できなかった。調査区とその西側に広がる梅園一帯は、江戸時代には民家が建ち並び、街区が形成されていたという。梅園の中には数基の井戸が残存しており、検出した遺構の中にこれらの民家に関連するものが含まれていると考えられる。また、小片ながら古墳時代の須恵器が出土したことは、近隣に古墳や集落が存在していた可能性を示唆するものである。(内田好昭)

29 史跡醍醐寺境内 (図版2-4・44)

経過 本調査は醍醐寺境内における上水道埋設工事に伴うものである。調査地は総門から西大門（Ⅰ区）、北門から西大門（Ⅱ区）、西大門から南門（Ⅲ区）、光台院から五重塔（Ⅳ区）に至る各参道である。上水道工事の掘削に合わせ、幅0.6～1.0m、長さ590mのトレンチを設定した。調査は基本的には重機によって地山面まで掘削したが、地山に至るまでに遺構面あるいは遺物包含層などがある場合は、その面より人力による調査に切換えた。

調査の結果、古墳時代の遺物、奈良時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認した。

遺構 基本層序は各区毎に小差異がみられるが、大きく盛土、旧参道面、整地層あるいは遺物包含層で地山に

至る。旧参道面は堅く締まり路面を為すものであり、数面確認できる所もあるが、すべて江戸時代中期以降に成立しているようである。整地層や遺物包含層は、Ⅱ区で平安時代中期、Ⅲ区で同後期のものがあるが、ほとんどが江戸時代のものである。なおⅠ区西端、総門側では、地山が地表より約1.5m下で検出されており江戸時代以降に嵩上げされていることを確認した。

遺構は奈良・平安・鎌倉・室町・江戸時代のものを検出した。奈良時代の遺構としては、土壙・柱穴がある。Ⅲ区で検出した柱穴は複数ある。調査地が狭いためその広がりには不明であるが、建物になるようである。Ⅱ区で検出した平安時代から鎌倉時代の遺構は、それぞれ幅2～10cmの7層よりなるもので、その最上層は炭・焼土層である。江戸時代に南・北側共に削られ南北に長さ5.6m残存する。下層から上層へ平安時代中期から鎌倉時代後半の遺物が順次出土する。調査区が狭いため断定はできないが、各層はそれぞれの時期の路面と考えておきたい。ただし江戸時代の参道面のように堅く締まってははいない。室町時代の遺構には瓦溜・土壙などがある。江戸時代の主要な遺構は、参道とその側溝である。Ⅰ区で検出した東西参道の側溝は、現参道側溝より1～2m内側に存在する。

遺物 遺物は整理箱で30箱になる。土器類と瓦類がほぼ半数ずつを占め、古墳時代から江戸時代の遺物が出土した。

古墳時代の遺物は、後期の須恵器甕口縁片があり、土師器甕胴部片の中にもこの時期の可能性を持つものがある。奈良時代の遺物は、土師器高杯・杯・甕、須恵器蓋・平瓶・壺が出土した。いずれも破片である。平安時代の遺物は、大部分が中・後期のものである。土器類は土師器、その中でも皿が多数を占め、灰釉陶器・輸入陶磁器などは少ない。瓦はⅣ区の瓦溜からまとまって出土している。主要な軒瓦については、鎌倉時代以降の軒瓦と共に拓影を掲げておく。鎌倉時



図91 調査位置図 (1:5,000)

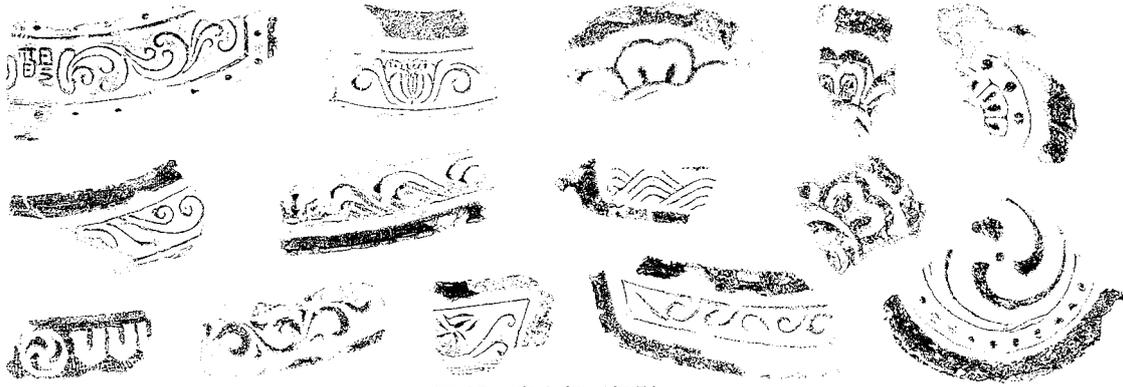


図95 出土軒瓦拓影



図95 象嵌青磁

代の遺物は土器類は少なく、瓦が大半を占める。室町時代の遺物は、土師器・陶器・瓦器・瓦などが出土しているが、注目しておきたいのは高麗時代末期から朝鮮時代初頭の象嵌青磁（粉青沙器）である。^{註1}小片で2次的に火熱を受けているが、方形容器の蓋と考えられる。江戸時代の遺物としては土師器・陶器・染付・瓦・銅銭などがある。

小結 調査区は幅0.6～1.0mと制限されていたが、いくつかの事実が明らかになった。

第一は、古墳時代の遺物の確認である。1990年の醍醐小学校の調査^{註2}においても円筒埴輪片が出土しており、確実な遺構は未検出ながら、付近に古墳時代の遺跡の存在を示唆する。

第二は、奈良時代の遺構・遺物の検出である。奈良街道が走る山科盆地東山麓沿いには、日野谷寺町遺跡・小野廃寺・大宅廃寺などの奈良時代以前の遺跡が数多く存在することはよく知られている。その中で醍醐寺周辺は空白地となっていたが、今調査で奈良時代の遺跡を確認することができた。

第三は、Ⅱ区で平安時代中期から鎌倉時代後半にかけての路面かと思われる遺構を検出したことである。これが現参道の前身であるのか、あるいはまた違う方向に延びるのかは不明であるが、今後中世以前の醍醐寺伽藍を考える上での一つの定点になるだろう。（高 正龍）

註1 （財）高麗美術館の巴望氏の御教示による。本製品は青磁であるのか粉青沙器であるか微妙な時期のものであり、小片であるため確定できないという。

註2 高 正龍「史跡醍醐寺境内」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1994

第2章 試掘・立会調査

I 平成3年度の試掘・立会調査概要

本年度の原因者負担による試掘・立会調査は24件を実施している。その内試掘調査は5件、立会調査は19件である。その他に文化庁国庫補助事業として継続している京都市内一円の立会調査（表10-25）を、本年度も430件実施している。これに関しては、『京都市内遺跡立会調査概報』平成3年度、『京都市内遺跡立会調査概報』平成4年度として報告しており、本書では省略した。なお、昨年から継続して調査している地下鉄東西線（京都市交通局）に伴う立会調査とJR嵯峨野線高架に伴う立会調査については、発掘調査と並行して実施しているため、本報告では、発掘調査（第1章）で扱っている。

実施した調査は、平安京跡4件、鳥羽離宮跡1件、長岡京跡関係1件、その他の遺跡として洛北地区4件、太秦地区6件、南桂地区1件、洛東地区4件、伏見醍醐地区3件である。このうち11件について概要を掲載している。

試掘・立会調査でも多くの成果をあげることができた。最も成果をあげることができたのは下水道付設に関連する立会調査である。まず鳥羽離宮跡（1）では118次調査で北殿の基壇を検出していたが、今回、勝光明院阿弥陀堂と関連する可能性が高い礎石を伴う建物を確認することができた。また、長岡京跡の下水道付設に関連して実施した立会調査（2）でも、旧小畑川の流路と長岡京の立地上の関係を理解する上で重要な資料が得られている。嵐山を中心に嵯峨野一帯（3・4・5）では、平安時代前期や後期の遺構が集中する区域を発見しており、遺物では『大井寺』の銘を持つ瓦が発見されている。この区域は嵯峨院や壇林寺のあった地域であり、これらの発見は今後、よくわかっていない嵯峨野における平安時代の諸施設の位置や範囲を確定する上で大きな役割を果たすと考えられる。山科では山科本願寺の土塁（6）や大宅廃寺の瓦窯（7）を検出している。これらの成果は下水道の立会調査によるものであり、遺跡の立地や範囲を広域的に理解する上でこの方法は有効である。上記以外の試掘・立会調査も実施したが、遺跡の有無の確認、残存度の確認にとどまり、目立った成果をあげることができなかった。この個所については表10に表記してある。

（永田信一）

II その他の遺跡

1 鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡（図版1・45）

経過 今回の調査範囲内には、鳥羽離宮跡の北殿と鳥羽遺跡が所在している。特にこの調査では、今まであまり明確でなかった北殿関係の遺構の発見が期待された。

調査は、No.1～12の区間において開始した。次いで、No.1～14、No.17～7、No.17～20、No.20～9、No.1～3、No.3～17、No.3～6、No.6～26、人孔6～9の順に実施した。

遺構 検出した遺構を調査地毎に述べる。

No.14～1～12では、離宮に係わる池（園池）と造営以前の池（低湿地？）とを検出した。

No.17～19では、池の北岸を検出した。また、

No.18では2m程北側で景石を2個発見した。一方、No.17～7で鳥と景石を認めた。No.19～9、7～9で礎石据付穴を5箇所検出した。また、No.21～9では景石と池（溝？）を確認した。No.6～8、No.24～7で基壇を認めた。（基壇の地業は、玉石を盛り上げたものであった。）No.8～9では瓦を検出した。No.7・6・22間では、杭列・石列を発見した。鳥羽離宮廃絶以後のものと考えている。

遺物 遺物の量は、全体に少なく、離宮の造営以前とそれ以降に大別され、離宮造営以前は、土師器・須恵器など量的にはきわめて少なかった。これらの遺物はNo.18、No.8～9で出土した。

鳥羽離宮跡関係では瓦の出土がNo.20～21、No.9、No.8～9で顕著に認められた。No.9では、軒丸瓦が1点出土し、この他は丸瓦・平瓦であった。生産地はすべて山城で、播磨などの搬入瓦は認められなかった。なお、景石はチャートで、礎石は花崗岩である。

小結 今回の調査による最大の成果は、北殿に造営された建物をNo.19～9、No.7～9で発見できたことである。この立会調査を実施する以前は、第118次調査で検出した基壇だけであった。

No.7～9で検出した礎石は、2箇所とも池もしくは溝内であったことは、勝光明院阿弥陀堂に係わる遺構の一部である可能性がきわめて高い。また、No.6の北側や東側において、第118次調査で検出した基壇の中央部が玉石積みの工法によって構築していることを確認した。

No.19～9の間で検出した建物は、最低でも2棟分以上であろう。建物の付近からは瓦が出土しているがいずれの瓦も小型で出土量も少ない。このことからこれらの建物は、檜皮葺きの礎石建物と考える。北殿の主要建物は園池の西側と北側に営まれたことは確かである。（鈴木久男）

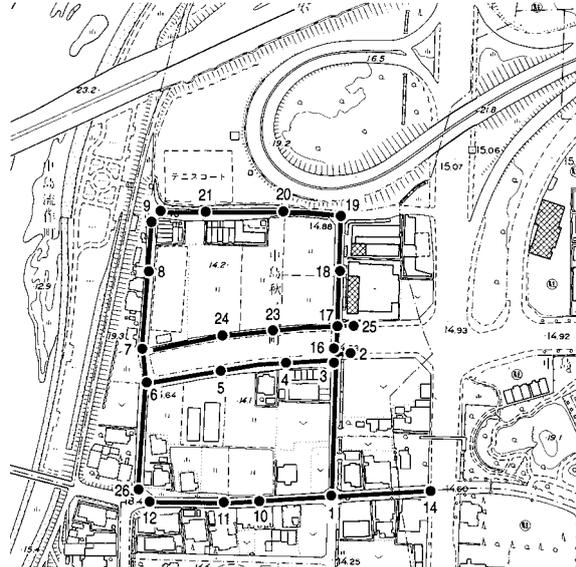


図96 調査位置図（1：5,000）

2 長岡京左京四条二・三坊・羽東師遺跡（図版1）

経過 伏見区羽東師菱川町にて公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。区間は1976年調査を実施した日本たばこ関西工場の北側東西道と、1980～1990年にかけて実施した外環状線との間の南北道で、合わせて約800mである。長岡京跡左京四条二・三坊、羽東師遺跡の推定地である。一帯は、旧小畑川の氾濫に伴う流路や砂礫層の堆積が、古墳時代から平安時代中期まで複雑に錯綜しており、その状況および範囲を確認する必要があった。

遺構 確認した遺構の時代は、縄文時代と思われる流路、古墳時代および奈良時代の流路、水田と思われる泥土層、長岡京期の包含層と溝、平安時代の流路などである。縄文時代の流路は、区間の東端部で1条検出した。古墳時代から奈良時代にかけての流路は、区間のほぼ中央から西側に数本みられた。長岡京期から平安時代にかけてのものは、流れが複雑になり生活面そのものに覆い被さる状況の箇所もみられた。

遺物 1箇所では遺物包含層を確認し、土師器の皿・高杯、須恵器の杯蓋、平瓦、製塩土器などの破片が出土した。須恵器杯蓋内部に墨が付着し、硯として使用していたものもある。他にはまとまった遺物の出土はない。

小結 今回の調査では、区間の北側で実施した外環状線の調査結果から、旧小畑川の流路が各所で検出されるものと推定していたが、その箇所は予想外に少なく、各時代とも部分的であることがわかった。このことは、外環状線調査区域が最も旧小畑川の氾濫堆積を顕著に受けた区域であることを意味する。周辺の調査を総合すると、平安時代の小畑川は府道志水西向日線の下に本流が流れ、これより南へ何本かの支流が複雑に流れる状況にある。この川が洪水による多量の砂礫層で埋め尽くされ、逆に周辺部より高く位置することになった。この高台に平安時代以降の菱川の集落が営まれ、現在に至っていることになる。 (長宗繁一)

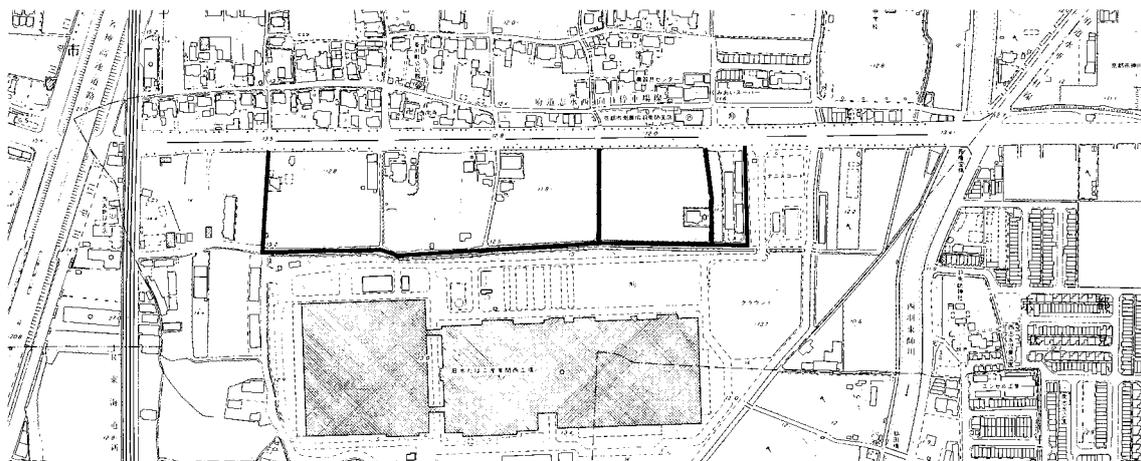


図97 調査位置図(1:7,500)

3 嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡（図版2-2）

経過 西部第二排水区西部（第二）系統嵯峨（その28）公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は右京区嵯峨観空寺明水町その他の府道大覚寺平岡線である。この地は嵯峨院跡および史跡大覚寺御所跡である。

調査は大覚寺西側の南北道路を1区、大覚寺南側の東西道路を2区として設定した。

遺構・遺物 1区において平安時代後期の溝・遺物包含層などを検出した。2区では桃山時代の柱穴、江戸時代の土壌などを検出した。

1区 2地点で溝を検出した。幅1.6m、深さ0.6～0.8mの規模で南北方向に13m以上にわたって検出した。埋土は暗灰色泥土で平安時代後期の瓦器碗を含む。4地点で落込遺構の西側の肩部を検出した。幅2m以上、深さ0.9mの規模でさらに東方向へ延びる。埋土は腐植土が主体で部分的に砂の堆積層を含み、底には暗灰色泥土の堆積がみられ、平安時代後期の遺物を含む。1地点では平安時代後期の遺物包含層を検出した。厚さ20cmで黄褐色砂泥層である。中央部で江戸時代の遺物包含層を断続的に検出した。厚さ30～60cmで黄褐色、ないしはにぶい黄褐色砂泥層である。3地点で東西方向の溝を検出した。幅2.2m以上、深さ1.15mの規模である。上層は暗灰色砂泥層で直径20cm程の石を多く含み、下層はオリブ灰色粗砂層である。堀状の遺構になるとみられる。他に東西方向の溝を3条検出したが遺物の出土がないため時期は不明である。

2区 アスファルト・現代盛土層下は近世以降の整地土層および路面の堆積となる。全体的に現地表下30～50cmで黄褐色泥砂層の地山層となる。5地点で柱穴を検出した。この柱穴は直径25cmの根石を持ち、埋土からは桃山時代の土師器が出土した。

小結 嵯峨院は「日本後紀」弘仁5年（814）条に初見がある。嵯峨天皇の皇子時代の山荘として造営され、即位後は離宮として利用されている。後の貞観18年（876）に淳和天皇皇后正子が大覚寺としたとされている。調査の結果、嵯峨院跡に関係する遺構・遺物の検出はなかった。しかし1区北半部に平安時代後期の遺構が集中することが明らかとなった。特に3地点の南北方向の溝は13m以上にわたって検出しており、この時期の溝による区画の存在を示すものと考えられる。4地点の落込遺構は堆積状況から水が溜っていたものとみられ、池状の遺構になる可能性を持つ。なお2区は遺構の密度が低い。

（小檜山一良）

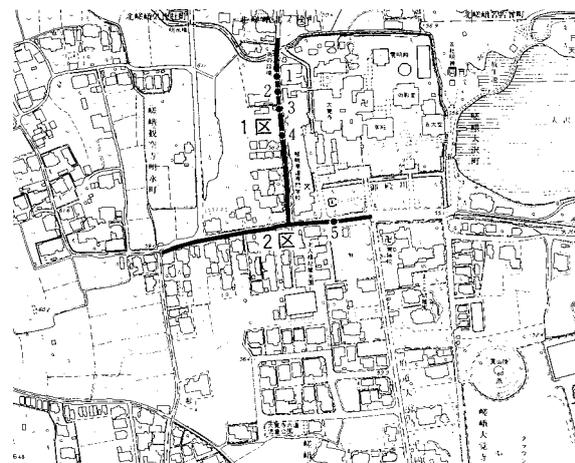


図98 調査位置図（1：7,500）

4 史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山1（図版2-2）

経過 右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町（その2）地内配水管布設工事に伴う立会調査を実施した。調査地は京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町の大堰川までの道路部である。この地は史跡名勝嵐山内であり史跡特別名勝天龍寺庭園を含む。

調査にあたっては天龍寺境内北側を1区、南側を2区、境内から大堰川までの道路を3区として地区設定した。

遺構 1区東半部で南北朝時代から戦国時代の土壌・遺物包含層を検出した。2区では平安時代後期、鎌倉時代の遺物包含層を検出した。3区では南北朝時代から戦国時代の土壌・遺物包含層を全域にわたって検出した。

1区 2地点で土壌を検出した。幅0.8 m以上、深さ0.5 m以上の規模である。土壌内には平安時代の瓦を多量に含む。1地点で土壌を検出した。幅1.70 m、深さ0.45 mの規模で、室町時代の遺物を含む。放生池の東側一帯で南北朝時代から戦国時代の遺物包含層を検出した。

2区 ほぼ全域で平安時代後期の遺物包含層を検出した。厚さ20～50cmで黒褐色ないし暗褐色砂泥層である。土師器・瓦を含む。中央部では鎌倉時代の遺物包含層を検出した。

3区 7地点で東西方向の溝を検出した。幅2.6 m、深さ0.9 m以上の規模で、埋土には平安時代前期の遺物を含む。全域で南北朝時代から戦国時代の遺構を多く検出した。遺物包含層は厚さ15～50cmで明黄褐色ないし黄褐色泥砂層である。4地点で土壌を検出した。南北幅24 m、深さ0.85 mの大規模なもので瓦を多量に含む。3地点で土壌を検出した。幅1.8 m、深さ1.0 mの規模で、直径40cm程の石を多く含む。5地点で石組遺構を検出した。石組みは石垣状のもの裏側で南北方向に2.7 m以上、高さ0.45 m、3段遺存する。30cm程の大きさの石を横積みにする。6地点で東西方向の溝を検出した。幅0.45 m、深さ0.70 mの規模である。

遺物 出土した遺物は整理箱に71箱で、平安時代前期から近世までのものが含まれている。量的には室町時代のものが大半を占め、丸瓦・平瓦には各種の刻印のあるものが多く出土している。平安時代前期の遺物は土師器杯・皿・甕、須恵器杯、緑釉陶器椀、瓦などがある。

小結 調査地の天龍寺は暦応2年（1339）亀山殿の跡地に勅願寺として造営された。以来、延文3年（1358）1月4日の大火災を始めとし、現在まで8回におよぶ火災に見舞われている。今回の調査では4地点で検出した土壌から二次的な火熱を受けた瓦が多量に出土した。遺構内からは瓦と共に15世紀後半代に属する土器類が出土しており、この時期の火災後の整理によるものとみられる。

（小檜山一良）

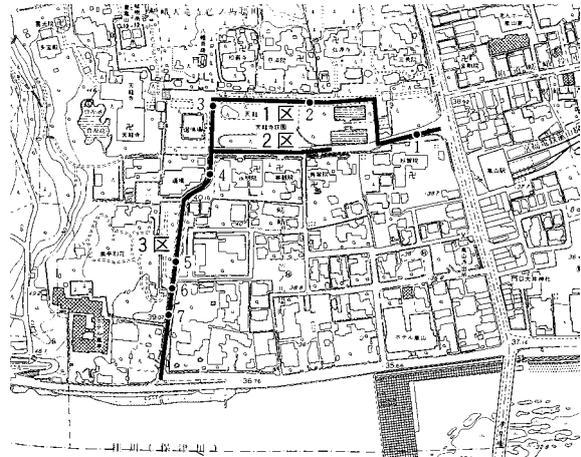


図99 調査位置図（1：5,000）

5 史跡特別名勝天龍寺庭園・史跡名勝嵐山2 (図版2-2・46)

経過 西部第二排水区西部(第二)系統嵯峨(その12・12-2・13・13-2)公共下水道工事に伴う立会調査を実施した。調査地は右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町その他で天龍寺境内および府道宇多野嵐山榎原線などの周辺道路部である。この地は史跡名勝嵐山内であり史跡特別名勝天龍寺庭園でもある。

天龍寺南側の嵯峨(その12)工区を1~7区、天龍寺境内の嵯峨(その12-2)工区を8・9区、天龍寺北側の嵯峨(その13)工区を10区、嵯峨(その13-2)工区を11・12区にそれぞれ地区設定し、調査を実施した。

遺構 天龍寺境内および周辺で検出した平安時代前期の遺構には溝、土壌、遺物包含層がある。平安時代中期から後期の遺構には土壌、遺物包含層がある。鎌倉時代の遺構には柱穴、土壌、溝、井戸、遺物包含層がある。南北朝時代の遺構には柱穴、土壌、溝、整地土層と考えられる遺物包含層がある。室町時代の遺構は最も多く検出した。土壌、溝、井戸、石組遺構、整地土層と考えられる遺物包含層がある。戦国時代の遺構には柱穴、土壌、溝、石組遺構、整地土層と考えられる遺物包含層がある。桃山時代・江戸時代の遺構には土壌、溝、整地土層と考えられる遺物包含層がある。

1区 ほぼ全域にわたり室町時代から戦国時代の遺物包含層(主に褐色系泥砂層)が、現地表下20cm前後で現代盛土層直下に位置し、中央部では桃山時代から江戸時代の遺物包含層(灰色系泥砂層)が堆積する。1地点で検出した土壌は南北幅17.0m、深さ1.2mの大規模なものであり、室町時代の瓦が多量に出土した。2地点では石組遺構を検出した。石組みは20~40cmの石が南北方向に1.2m以上にわたり2段遺存する。3地点で東西方向の溝(SD18)から平安時代前期の遺物がまとまって出土した。

2区 ほぼ全域にわたり室町時代から戦国時代の遺物包含層(主に褐色系泥砂層)が、現地表下20cm前後で現代盛土層直下に位置し、中央部では桃山時代から江戸時代の遺物包含層(灰色系泥砂層)が堆積する。1地点で検出した土壌は南北幅17.0m、深さ1.2mの大規模なものであり、室町時代の瓦が多量に出土した。2地点では石組遺構を検出した。石組みは20~40cmの石が南北方向に1.2m以上にわたり2段遺存する。3地点で東西方向の溝(SD18)から平安時代前期の遺物がまとまって出土した。

2区 現代盛土層下は褐色系の砂および砂礫の旧大堰川による堆積層となる。

3区 主に南北朝時代から室町時代の遺物包含層が現代盛土層直下に位置し、以下は黄褐色系砂礫層の無遺物層となる。4・5地点で室町時代の井戸を検出した。4は石組井戸である。50cm大の石が5段遺存し、内径1.1m、深さ1.4m以上である。5は径1.1m以上、深さ0.8m以上で20~30cmの石を多く含む。他の地点では柱穴・土壌を検出した。

4区 中央部では現代盛土層下に室町時代から戦国時代の遺物包含層が位置し、さらにその下

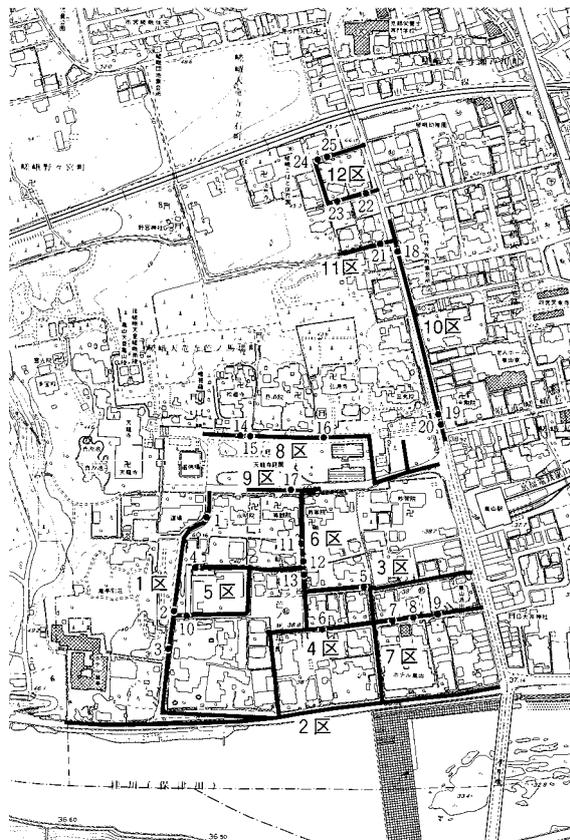


図100 調査位置図(1:5,000)

層に平安時代前期の遺物包含層が広がる堆積となる。6・7地点では南北方向の溝を検出した。7は南北朝時代のもので幅0.80 m、深さ0.85 mである。6は江戸時代のもので幅1.4 m、深さ0.8 mである。8・9地点では石組井戸を検出した。8は鎌倉時代のもので30～40cmの石が7段遺存し、内径0.80 m、深さ1.25 m以上である。9は室町時代のもので30～40cmの石が6段遺存し、内径1.1 m、深さ1.8 m以上である。東部では現代盛土層下には江戸時代の遺物包含層が検出されるが、以下は褐色系粘土層の無遺物層となる。

5区 主に室町時代から戦国時代の遺物包含層が現代盛土層直下に位置している。10地点では戦国時代に属する東西方向の石列を2.2 m以上にわたって検出した。

6区 北部では現代盛土層下に南北朝時代から室町時代の遺物包含層が位置している。12・13地点で東西方向の溝を検出した。13は平安時代のもので幅1.9 m、深さ1.0 mである。12は南北朝時代のもので幅1.2 m以上、深さ0.95 mである。11地点では鎌倉時代の南北方向の溝を検出した。中央部では平安時代中期の遺物包含層を検出した。

7区 北部で室町時代から戦国時代の遺物包含層（主ににぶい褐色泥砂層）が現地地表下20cm前後に位置する。さらにその下層に平安時代後期の遺物包含層と続く堆積となる。

8区 ほぼ全域にわたって室町時代から戦国時代の遺物包含層（主に明黄褐色系泥砂層）が現地地表下20cm前後に位置する。この層の下に中央部では平安時代後期の遺物包含層（主に暗褐色砂泥層）が30cm前後の厚さで堆積している。14地点で土壙を検出した。幅4.1 m、深さ0.4 mの規模で平安時代の瓦が多く出土した。15・16地点で共に北側で西に振れるほぼ同じ傾きを持った南北方向の石組溝を検出した。16の溝は掘形幅1.20 m、内幅0.55 m、深さ0.45 mで石蓋を持つ。溝内から南北朝時代の土師器を出土した。15の溝は掘形幅1.05 m、内幅0.30 m、深さ0.45 mである。

9区 室町時代に属する遺物包含層（灰色系泥砂層）が現地地表下30cm前後に位置する。この層の下に平安時代後期の遺物包含層（黄褐色泥砂層）が厚く堆積する。17地点で検出した土壙は幅3.3 m以上、深さ0.9 mの規模である。鎌倉時代の遺物と共に平安時代の瓦が多量に出土した。

10区 中央部で桃山時代の土壙・遺物包含層を検出した。18地点で平安時代に属する東西方向の溝を検出した。幅0.8 m以上、深さ0.6 mの規模である。19・20地点で江戸時代の南北方向の溝を検出した。19は幅1.45 m以上、深さ0.65 m、20は幅0.55 m以上、深さ0.40 mの規模である。共に25～40cmの石を使用した護岸施設を持つ。南部では南北朝時代の遺物包含層を検出した。

11区 21地点で戦国時代の南北方向の溝を検出した。幅1.65 m、深さ0.45 mの規模である。

12区 西部で室町時代の遺物包含層を検出した。22地点で室町時代の南北方向の溝を検出した。幅1.75 m、深さ0.55 mの規模である。25地点で戦国時代の南北方向の溝を検出した。幅0.40 m、深さ0.65 m以上の規模である。23・24地点では江戸時代の南北方向の溝を検出した。23は幅1.50 m、深さ0.35 mの規模である。24は幅0.9 m以上、深さ0.7 m以上の規模である。北部では平安時代中期の遺物包含層を検出した。

遺物 出土した遺物は整理箱に64箱で、平安時代前期から近世までのものが含まれている。

量的には室町時代のものが最も多く、次いで平安時代のものである。平安時代前期の遺物には土師器皿・杯・蓋・甕、須恵器杯・蓋、緑釉陶器椀、灰釉陶器、黒色土器、軒瓦、瓦などがある。平安時代中期から後期の遺物は主に遺物包含層から土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、瓦が出土した。鎌倉時代の遺物は土師器、焼締陶器、瓦器、瓦がある。南北朝時代の遺物は土師器、焼締陶器、瓦器、輸入陶磁器などがある。室町時代の遺物は土壇・整地土層から出土した瓦類が多くを占める。1地点の土壇から出土した瓦は二次的な火熱を受けたものが多く認められる。他には土師器、焼締陶器、瓦器、輸入陶磁器が出土した。戦国時代の遺物には土師器、焼締陶器、瓦器などが出土している。桃山時代・江戸時代の遺物には土師器、陶器、磁器、瓦器、瓦が出土した。

注目される遺物にはS D 18から一括して出土した土器群がある。平安時代前期に属する土師器(皿・杯・蓋・甕)、須恵器(杯・蓋・壺・甕)である。供膳形態の土器が多くを占める。

14・17地点の土壇から平安時代の瓦が多量に出土した。その中に軒平瓦の瓦当面に文字のあるものがある(3~5)。均整唐草文軒平瓦で先端の巻き込みの強い対抗C字形の中に倒立した

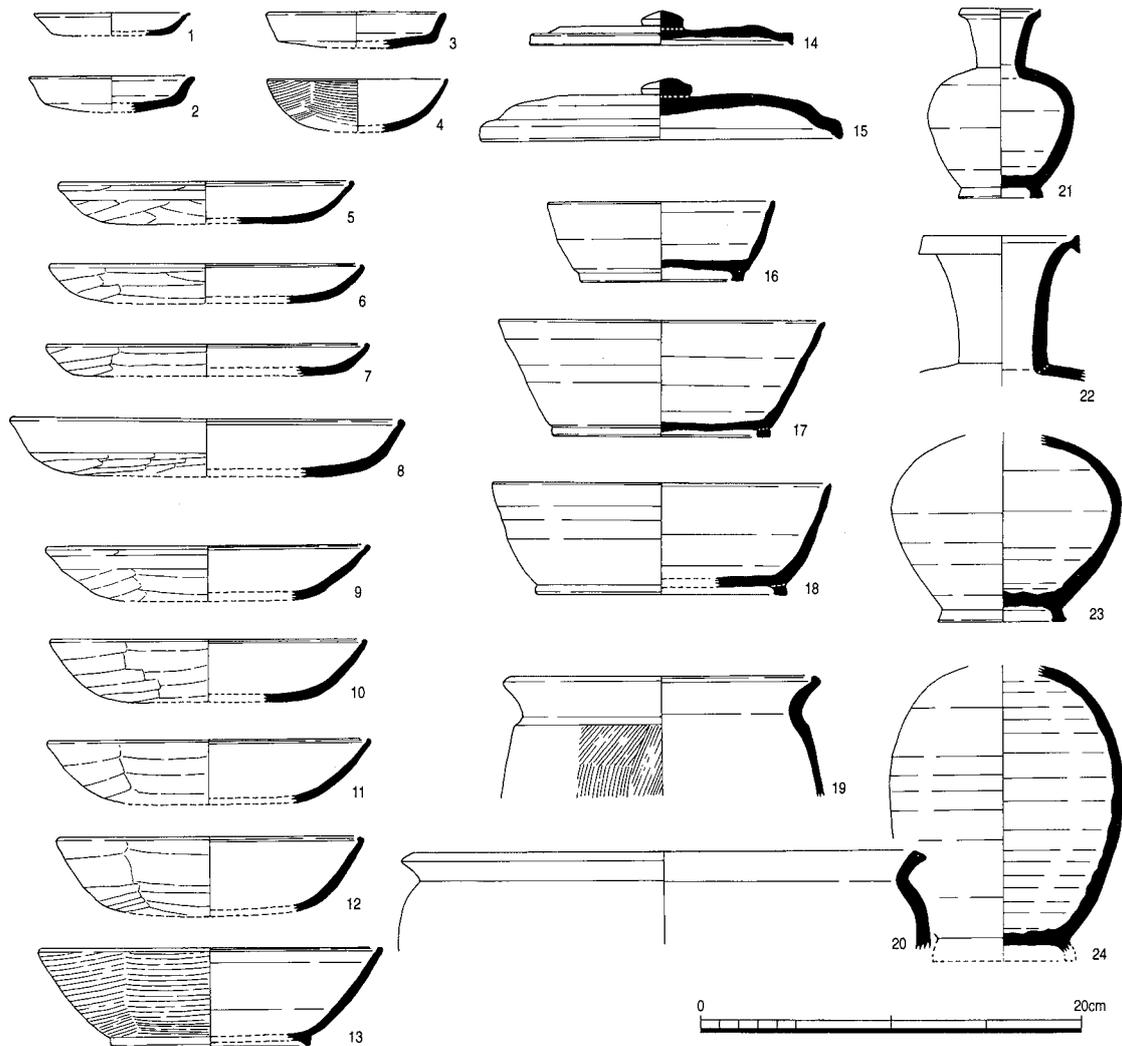


図 101 出土土器実測図 (1:4)

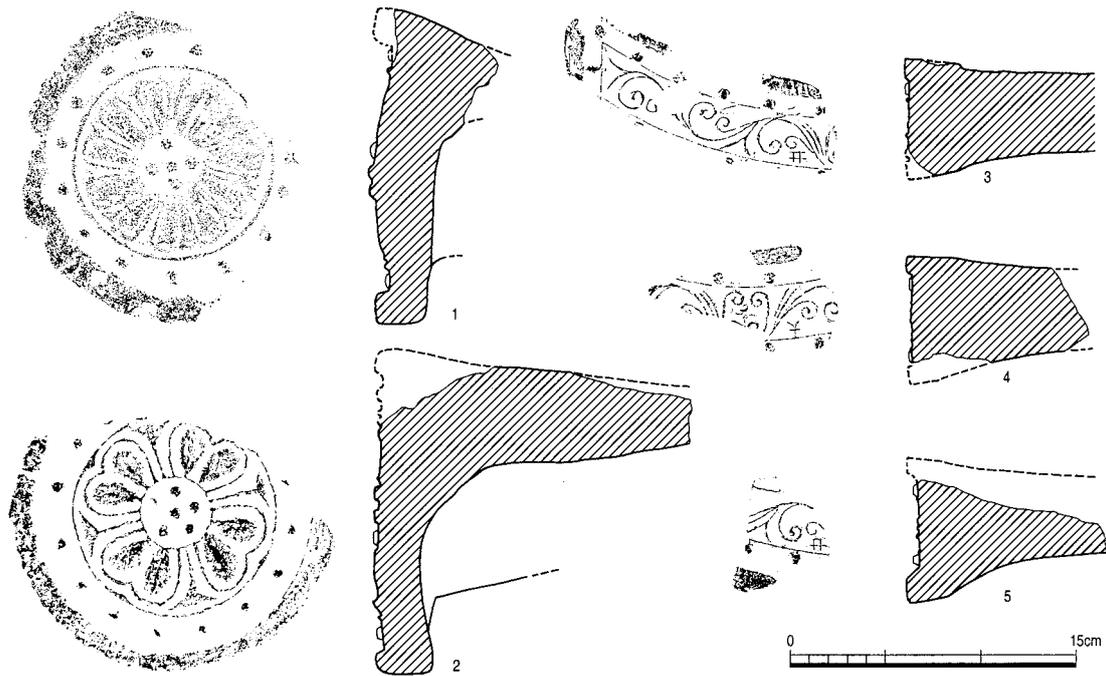


図101 出土軒瓦実測図(1:4)

「寺」字銘を陽刻の細線で表現した中心飾りを持つ。左右に3反転する唐草文を内区に配する。右側第1主葉の中に倒立した「大」字銘を、左側第1主葉の中に「井」字銘を陽刻の細線で表現する。細かい界線で画された外区には珠文を配し、素文の周縁を持つ。ベンガラが付着するものもある。

小結 調査地の天龍寺一帯は嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が承和年間(834～848)に壇林寺を造営したと言われる。その跡地に建長7年(1255)に後嵯峨上皇が仙居として亀山殿を造営した。後の暦応2年(1339)に亀山殿の跡地に勅願寺として天龍寺が造営された。天龍寺は創建から今日までに8回の火災に見舞われたとされている。

調査区ほぼ全域で平安時代の遺構・遺物を検出した。特に4区には平安時代前期の遺構が集中する。この地点は以前の発掘調査で検出された平安時代前期の庭園遺構^註に隣接しており、これらの遺構群と何らかの関連を持つものとみられる。さらに「大井寺」銘の軒平瓦は大堰川との関連からこの地に平安時代前期の「大井寺」の存在を想定させる。鎌倉時代に属する遺構・遺物の検出は少なく、亀山殿との関連は不明である。南北朝時代から戦国時代の遺構はほぼ全域に分布し最も多く検出されている。東西・南北各方向の溝や各種の石組遺構は天龍寺内の区画を示したものと考えられる。二次的に火熱を受けた多量の瓦の出土により天龍寺が大規模な火災に見舞われたことがうかがわれる。

(小檜山一良)

註 木下保明「史跡名勝嵐山」『昭和63年度京都市埋蔵文化財調査概要』
(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993

6 山科本願寺跡（図版2-4）

経過 山科区西野大手先町20の山階小学校において体育館の建設が計画された。建設予定地は山科本願寺の土塁跡が想定されており、実際に現地形も土塁状の高まりをみせている。まず建設予定地に残る講堂の基礎撤去に伴う立会調査で土塁状の遺構を確認した上で、土塁に直交する東西方向の試掘トレンチを設定した。

調査の結果、土塁が良好に残っていることが判明した。その結果を踏まえ、京都市教育委員会と再度協議を行い、調査区の南側も工事による遺跡破壊が考えられるため南側部分に調査区を3箇所設定し、調査を実施した。

遺構・遺物 第1トレンチの調査では、土塁・溝・濠を検出した。土塁は南北方向で、その規模は上部幅15.4m、基底部幅26.5m、高さ3.2mである。版築土は20数層あり、砂礫と粘質土を交互に重ねている。なお、土塁西側の断面をみると、土層面のずれがあり、また土塁西端基底部の下に南北方向の溝が認められた。このことから、土塁を西側に拡幅していることが判明し、拡幅部分の版築土より土師器皿、摺り鉢が出土している。土塁の東側では濠を検出した。濠の規模は東西幅15m以上で東肩は敷地外におよぶ。濠内からは伊万里の染付碗が出土している。

第1トレンチの南20mに設定した第2トレンチでは土塁の痕跡は認められず、全体が第1トレンチの濠と同様の堆積であった。土塁と濠の関連を解明するための第3、第4トレンチを設定したが、第3トレンチは濠内であり、第1トレンチの土塁東肩部から南に延長した第4トレンチでは、南へ5mまで肩口を検出したが、それ以南は、土塁は緩やかに下降し消滅する。

小結 山科本願寺の土塁はほぼ推定位置に残存することが判明した。調査区南側については、現在の四ノ宮川をそのまま南西に延長する形で土塁を浸食したことがわかる。土塁の拡幅工事については、出土遺物が少なく時期は特定し難い。 (本 弥八郎)

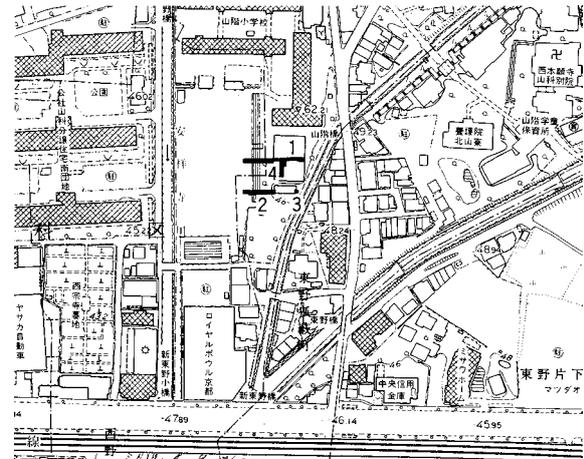


図103 調査位置図(1:5,000)

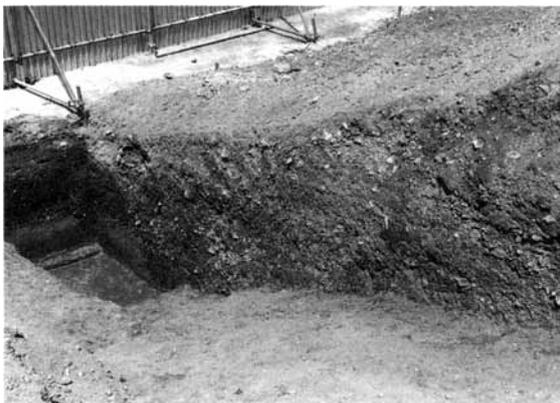


図104 1トレンチ西部断面(南西から)



図105 2トレンチ西部断面(南東から)

7 大宅廃寺・大宅遺跡 (図版2-4・47)

経過 山科区大宅鳥井脇町・中小路町・奥山田地内において下水道の新設工事、上水道の敷設替工事が計画された。当地は大宅廃寺跡、大宅遺跡にあたり、1958年の京都府教育委員会による名神高速道路建設予定地事前調査、1985年の当研究所による京都市立大宅中学校建設に伴う発掘調査の成果から、今回も遺構の検出が期待され、1991年6月17日から8月6日まで立会調査を実施した。

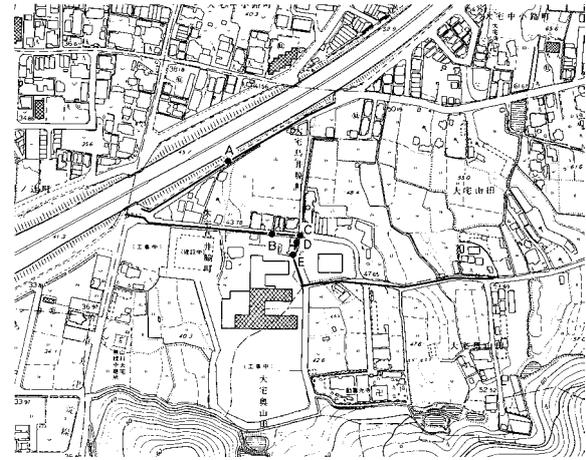


図106 調査位置図(1:5,000)

遺構 A地点では、大宅廃寺の瓦を焼いたと思われる奈良時代後期の瓦窯を1基検出した。1958年の地形図によるとA地点は東に向かって高くなる傾斜地であり、路面下0.3mにて、西側を焚口としてほぼ東西方向に、奥行き3m以上、横幅2.0m、高さ0.8m以上の規模の窯を確認した。断面図のように、奥壁は平瓦を積重ね、分焰壁が2箇所残存していた。窯の中から焼土・炭・土砂と共に、多くの瓦を採取した。出土した平瓦と窯の構造から判断して、分焰壁が7列の奈良時代後期平窯と推定できる。また、分焰壁の下層に炭が入っており、造直したものと考えられる。

B・C・D地点では、現地表下40～60cm以下において4～6層の整地面を検出した。この地点は、1958年の調査で一部確認された中門の推定位置にあたり、これらの整地面は中門の基壇の一部と考えられる。

E地点では、現地表下98cm以下で厚さ26cmの包含層を検出し、奈良時代から平安時代の多量の瓦を採集した。瓦の一部には二次的に焼けたものもあった。この包含層の位置は、1985年の調査で検出された築地状の北側雨落溝の東側延長部分にあたり、その溝の一部と考えられる。

遺物 瓦窯より出土した遺物は整理箱に14箱で大部分は平瓦であった。その中に1点、ほぼ完形の忍冬偏行唐草文軒平瓦(1)があり、これは1958年の調査で出土した創建時の瓦と同範

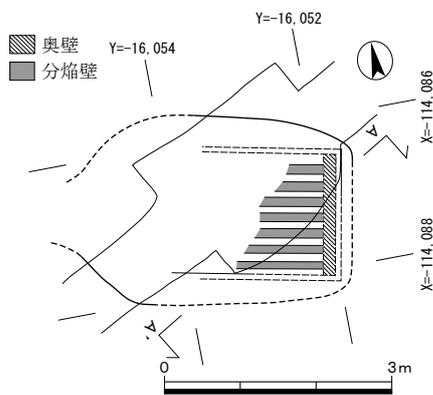


図107 A地点窯推定図(1:100)

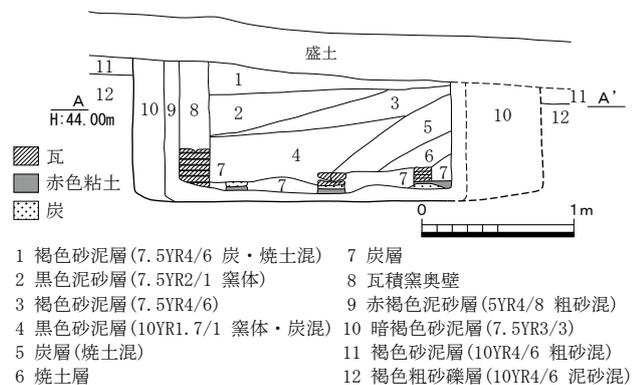


図108 A地点窯断面図(1:50)

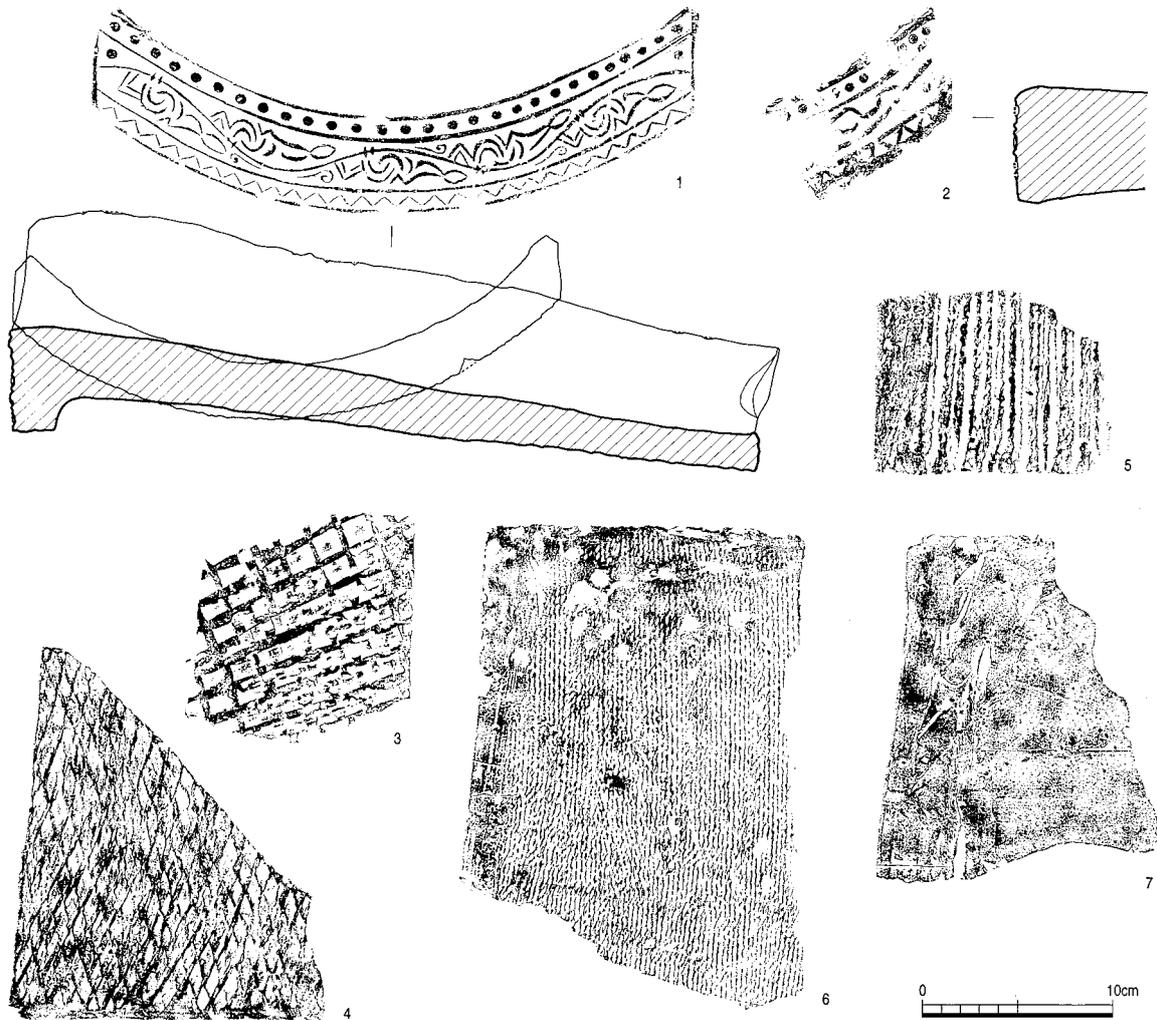


図109 出土瓦実測図(1:4)

である。また、平瓦凸面のタタキは5種類に分けられ、創建時の瓦と同時代頃の桶巻造りによる4枚作りの瓦は、格子タタキ(3)と斜格子タタキ(4)に、新しい時代の1枚造りの瓦は、粗い縄目タタキ(5)と細い縄目タタキ(6)、縄目を丁寧に消したもの(7)に分けられる。(1)の瓦のタタキは(4)であるが、2点出土した丸瓦の叩目は(7)であり、寺院修理のために1枚造りの瓦を焼いたものと考えられる。

瓦当面の3分の1が残存する偏行変形忍冬唐草文の軒平瓦(2)はE地点から出土し、瓦当部よりほぼ10cm後方の凸面にはベンガラが付着していた。この叩目は(6)で、この唐草文は創建時の瓦に比べ簡略化されており、時代が下

がるものと思われる。



図110 出土軒平瓦

小結 A地点における瓦窯は、出土した瓦の時期の違いや窯を作り直したとみられる痕跡から考えて、奈良時代後期に大宅廃寺を修復するための瓦を焼いていたと推定できる。

(竜子正彦・尾藤德行)

第3章 資料整理

1 遺跡測量

本年度における遺跡測量作業は、46 調査現場 80 件の調査基準点測量および 10 調査現場 28 件の写真測量用標定点測量、撮影作業を行った。調査基準点測量の内訳は発掘調査 69 件、試掘・立会調査 11 件である。

今年度は非計測カメラ（35mmカメラ）を用いての写真測量を行い図面精度の内容をテストした。写真測量技術を使って図化処理を行う場合、安定した精度を得るために計測カメラでの撮影が主である。しかし、計測カメラは高価であるために発掘調査毎に配備することが不可能であること、素人には扱いにくいことなどが欠点としてあげられる。発掘調査で普通に利用している 35mmカメラで、図面精度が安定した図化処理ができれば、今までの図化業務のサポートとして発掘現場における図化処理の部分を担当でき、それによって効率化をはかれるのではないかと考えていた。

そこで、問題になるのは 35mmカメラの内部評定プロセス、レンズの歪みである。計測カメラでは精密にこの計測がなされているが、非計測カメラは写真を写すことが目的であるため、当然計測されていない。まず、これらを計測する必要がある。近年、解析図化機にはこれらを計測し、補正を行うソフトが組込まれ、精度を上げて図化処理していくことが可能となった。

今回、非計測カメラで撮影した写真で図化処理を行い、どの程度の精度が得られるかを調べた。具体的に非計測カメラである NIKON 製 35mmカメラで撮影された写真を ADAM TECHNOLOGY 社の解析図化機『MPS-2』で内部評定プロセス、レンズの歪みを計測し、図化処理したデータと計測カメラである HASSELBLAD MK-W で撮影された写真を同社の『MPS-2』で図化処理されたものとで比較することにより、非計測カメラで撮影された写真がどの程度の精度で図化処理できるかを明確にした。

比較テストでは、標定点 23 点を用い、写真縮尺が約 80 分の 1 になるように撮影した。モデル数は 2 モデルである。

MPS-2 の機能を使って カメラレンズのラジアルデストーション値（レンズの歪み）を計測し、内部評定は計測カメラ HASSELBLAD MK-W のレゾマーク 4 箇所を使用して観測し、アフィン変換式により補正を行った。NIKON 製 35mm の一眼レフカメラは MPS-2 のソフトにのっとり有効画角のエッジを使ってエッジの観測をし、アフィン変換式により補正を行った。外部標定は両者のすべてのモデルの結果から、各モデルの標定で使用された各コントロールポイント（標定点）の計算での座標値（X, Y, Z）と現場で実測した測地座標（X, Y, Z）のずれ誤差と呼ばれるが、この誤差の平均値（標準偏差）が 3mm 以下であった。

この標定結果については今回の撮影高度から撮影された写真であれば実長で 4mm 程度の誤差で収まることがわかった。考古学調査の実測図面では縮尺 10 分の 1 図で図上 0.4mm の誤差は許され

ると考えられることから、35mmカメラの撮影で解析図化機を用い、デスーション値などの計測を行い、補正するのであれば図化処理に問題がないと判断できる。今後、撮影方法などを確立できれば、非計測カメラでの利用が増すであろう。

最後に、比較テストにあたり協力していただいた川惣電機工業株式会社松澤秀樹氏には心からお礼申し上げます。

(辻 純一)

2 コンピュータ

前年度に引き続き、調査概要データ・写真データ・遺物管理データ・保存処理データ・調査図面データなどを作成している。現時点で調査カードは11,800件、写真データは24,000件を超えるものになっている。

近年は遺跡測量でコンピュータを介して平面図の作成が行われだした。トータルステーションを用いて行う方法と、写真測量を用いて行う方法であるが、いずれも最終的には測点の集合として図を描かせることになる。この測点は3次元計測され、コンピュータに入力される。この測点データを用いてコンピュータ上で遺構や地図などのデータと同時に管理運営できないかを検討している。以前、写真測量データを利用するにあたり問題点を指摘したが、それらが徐々にではあるが解決の方向にある。また、トータルステーションを用いた遺跡測量システムはかなり普及している。ただし、図面を描くことだけに用いられ、実測した後はデータを破棄しているのが現状である。これらを有効に利用し、手元の遺構台帳や遺物台帳と共用できればかなり有効に利用されるものと思われる。

我々は平安京という大規模遺跡を中心に調査を行っている。平安京の調査では調査面積は非常に小さく、件数が多いのが特徴である。このためには遺跡測量をきっちり行い、各々の調査を有機的に結合することが重要である。これらをコンピュータに取込み、画面上で条坊のデータや現況地形図と重ね合わせてみれば、遺構の性格などが知れることもあるし、新たに行う調査の参考にもなってくる。視覚的に捉えることにより新たな思考も可能となる。3次元データであることから、将来的には周辺の地形をも含め、景観の中で遺跡を捉えて行くこともできるであろう。

いつまでも紙の遺構実測図を保存することはできない。紙は保存状態が悪ければ使用に堪えないものになることが予想される。デジタルデータにしてしまえば保存も楽であり、コンピュータでの利用も可能となる。いずれにしろ、さまざまな機関で写真測量やトータルステーションでの測量が行われている。3次元計測におけるデータのフォーマットは色々あることが想像できる。これらを共通のものにすることにより、誰もが安心して利用することができるようになる。考古学における共通のフォーマットを作成することが急がれる。

(辻 純一)

3 保存処理

1 出土木製品の保存処理状況

平成2年度までの木製品の保存処理状況を表3に示す。これまでの木製品の受け入れ件数は井戸枠などの大形木製品124件、小形木製品は216件であり、その中で保存処理済件数は大形木製品が71件、その他の小形木製品が40件になる。また、木製品の保存処理と並行して行っている資料化につ

表3 平成2年までの出土木製品の保存処理件数

処理内容	大形木製品	小形木製品
受入現場数	124件	216件
保存処理済	71件	40件
図・測・写済	80件	45件
資料カード済	24件	20件
未整理	33件	131件

いて、略図・計測・写真撮影の終了したものは大形木製品では80件、小形木製品では45件になる。保存処理・資料化が共に終了しているのは大形木製品が24件、小形木製品が20件になる。

2 平成3年度の出土木製品の保存処理

平成3年度分の木製品の保存処理件数と点数は表4の通りである。

表4 平成3年度における出土木製品の保存処理

調査記号	点数	調査記号	点数	調査記号	点数	調査記号	点数
78HK-EC	552	78HK-SM	198	80HK-NN	8	81HK-IA2	5
78HK-EC2	70	79HK-ET	14	80HK-OK	202	82HK-FE	25
78HK-EC3	14	79HK-TS2	92	80HK-SA	9	82HK-HK2	177
78HK-EK	27	79K	11	80HK-SI3	4	82HK-KK	68
78HK-NS	80	80HK-CF2	280	80HK-XA	11	82HK-MH	117
78HK-PR	130	80HK-ET2	111	80NG-XA	22	83HK-MJ	779
78HK-RQA	13	80HK-IF	1	81HK-FC	10	87HK-XF2	845
78HK-RQB	14	80HK-NJ	76	81HK-IA	2		

3 金属製品の保存処理

幡枝2号墳出土の鉄刀・鉄剣を中心とする鉄製品の保存処理を行った。錆取りには、精密噴射加工機や精密グラインダーを利用した。また、樹脂含浸処理としてアクリル樹脂（パラロイドB72）を使用した。処理点数は表5の通りである。

表5 金属製品の処理件数

遺物	処理件数	遺物	処理件数
鉄刀	3	金具	6
鉄剣	1	その他	10
鉄鏃	5		

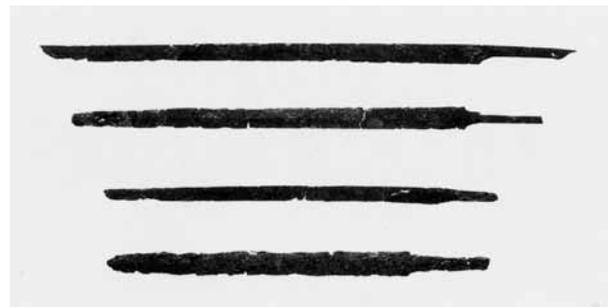


図111 幡枝2号墳出土の鉄器類（処理後）

4 金属製品付着の有機質遺物の分析

幡枝2号墳出土の鉄製品の表面には布や木質が付着していたことから、それらについて繊維の種類や樹種の分析を行った。

その結果、金属に付着した布の繊維には絹と植物繊維の2種類があった。また、鉄刀の鞘にはヒノキ科の材が、鉄属の矢柄にはタケ科の材が用いられていた。

5 焼失住居出土の建築材とみられる炭化材の樹種調査

中臣遺跡第70-4次調査で出土した焼失住居（1号住居、2号住居、4号住居）の建築材とみられる炭化材について樹種の調査を行った。

その結果、1号住居および2号住居ではクヌギ節やクリなどの落葉広葉樹材が多用され、それに対して4号住居ではアカガシ亜属やサカキなどの常緑広葉樹材が多かった。

発掘調査では、出土した遺物から住居の間に年代差はほとんどないことが明らかになっている。このことから、中臣遺跡に住居した当時の人たちは、建物の建築にあたり周囲の環境から樹木を意図的に選択していたことがわかる。また、カシ材やサカキ材などの常緑樹材を多用した住居と、クヌギやクリの落葉樹材を多用した住居がほとんど同時にあったことは、建物の機能に違う側面があった可能性が考えられる。

(岡田文男)

表6 中臣遺跡第70-4次調査出土焼失家屋の樹種調査結果

1号住居	数	2号住居	数	4号住居	数
クヌギ節	25	クヌギ節	48	アカガシ亜属	12
クリ	5	不明	1	サカキ	8
				シイノキ属	2
				クヌギ節	5
				針葉樹	2
				不明	1

4 復原彩色

本年度の復原彩色業務として行った遺物復原は以下の通りである。また、遺物復原の他に、前年度に型取りをした北白川縄文時代竪穴住居の復原模型に彩色を施した。

遺物復原の彩色

本年度、復原彩色を行った遺物は合計 230 点である。平成 3 年度の国庫補助による調査の概報、『昭和 63 年度京都市埋蔵文化財調査概要』、『岩倉幡枝 2 号墳』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第 12 冊の掲載分が主なもので、詳細は以下の通りである。

表7 平成3年度の遺物復原彩色件数一覧表

内 容	調査記号	点数	内 容	調査記号	点数
国庫補助概報	90BBHQ	6	国庫補助概報	90HKDR	10
	90BBMK	34	昭和 63 年度調査概要	88NGPV	3
	90BBRH	7		88RTNK	13
	90BBHR	4		88RHKK	70
	91BBUZ	1	岩倉幡枝 2 号墳	88RHIK	38
	91BBHL	4	展示用・貸出し関係		40

遺構復原模型の彩色

前年度にシリコン樹脂および発泡ウレタン樹脂で取った型は、外部の業者に委託してFRP樹脂で型を起こし、それに着彩をした。復原模型の大きさは 325 × 375cm である。作業は 1992 年 2 月 12 日から 2 月 26 日まで行った。内容は以下の通りである。

着色準備

樹脂模型の総重量は約 130kg である。運搬や設置の便を考え 3 分割した後、パネル仕立てにした。また、FRP樹脂には顔料を混ぜてあらかじめ表土の色に着色してある。樹脂を着色することで次の作業の地塗りの工程を省略することができるためである。通常の遺物復原においては石膏に顔料を混ぜないので、白地に下地の色を塗ることから始めるが、今回のように大きな復原模型では地塗りの工程に多くの時間を費やすため、樹脂を着色することにした。

樹脂模型の表面には製造工程でできた樹脂の粉末が付着しているので彩色前に落とさなければならない。樹脂の粉は水で洗い落とすことができるが、隙間に入りこんでいるためパネルを立てて霧吹きで水を吹付けて表面に浮かび上がらせて流し落とした。

(図 112)



図 112 表面の汚れを取り除く



図 113 実物を観察しながら描く

着色作業

着色するにあたり、遺構の表面はやや湿った状態を想定した。石の部分は現場から採集した実物を観察しながら描く。光沢のある箇所には艶出し剤のグロスメディウムを塗重ね、ざらついた表面には盛上げ剤のモデリングペーストを混ぜて石の質感を表現した。また、パールホワイトやブロンズ、シルバー（絵具名）などを混ぜることで顔料だけでは出しにくい光沢の色調を出した。

（図 113）



図 114 表土の色を修正する

次に表土の色修正を行う。土の質感は絵具にモデリングペーストを混ぜたものをタタキ筆（ブラシ状の筆）で描いたり、金網を使って絵具をはじき落として細かい粒子をつけた。細部が描けるとパネルを組み合わせる全体を見ながら仕上げて行く。（図 114）

樹脂の分割線が白く残って見えるため、現場から採集した土にジェルメディウムを加えて定着させて目立たなくするように努めた。今回の着色作業ではこの分割の際にできた切断線の処理が今後の課題として残った。（図 115）



図 115 分割線を目立たなくする

着色使用材料

〔絵具〕 リキテックスカラー

〔補助剤〕 モデリングペースト

グロスポリマーメディウム

ジェルメディウム

材料はすべて（株）バニーコーポレーション

着色の終わった復原模型は、木枠を取り付けて出土遺物と共に京都市考古資料館に展示した。復原彩色業務は、出水みゆき、田中利津子、中村享子が担当した。（出水みゆき）

第4章・普及啓発事業等報告

1 普及啓発および技術者養成事業

(1) 財団法人京都市埋蔵文化財研究所設立15周年記念文化財講演会の開催

日時 平成3年11月17日(日) 午後1時30分～午後5時

会場 京都産業会館シルクホール (参加者 約550名)

後援 NHK京都放送局・京都新聞社・KBS京都

講演 「六勝寺とその御所」

財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長 杉山信三

「古代の園池」

奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長 牛川喜幸

(2) 「'91発掘調査成果写真展」の開催

日時 平成4年1月18日～1月26日(8日間)

会場 京都市考古資料館 3階会場 (入場者 633名)

後援 NHK京都放送局・京都新聞社・KBS京都

(3) 現地説明会の開催

ア 平成3年8月24日 「大原野地区発掘調査成果発表会」 (参加者 約50名)

イ 平成3年11月9日 「長岡京跡」 (参加者 約150名)

ウ 平成4年2月29日 「長岡京跡」 (参加者 約70名)

エ 平成4年3月22日 「植物園北遺跡」 (参加者 約90名)

(4) 「リーフレット京都」(No.25～No.38)の発行

No.25 土器・瓦6 「初期京焼について」

No.26 都市・農村5 「長岡京と平安京－桓武朝の都城－」

No.27 発掘ニュース5 「いろいろな顔が大集合－長岡京の人面墨書土器－」

No.28 生産・技術2 「京都駅周辺出土の鋳型」

No.29 信仰・祭祀5 「中臣十三塚」

No.30 生産・技術3 「大原野の緑釉陶器生産」

No.31 生産・技術4 「鳥羽離宮殿・堂の基礎工事」

No.32 考古アラカルト5 「考古資料のはなし」

No.33 生活・文化2 「生活の中の木簡」

No.34 土器・瓦7 「中世・近世の平瓦製作技法」

No.35 生産・技術5 「前方後円墳を比較する」

No.36 発掘ニュース6 「発掘成果をふりかえって 1991」

No.37 発掘ニュース7 「新たにみつかった古墳時代の水田跡」

No.38 生活・文化3 「太秦・嵯峨野の古道」

(5) 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者専門研修への派遣

ア 平成3年5月28日～6月19日(19日間)

「環境考古課程」 調査課 太田吉男
〃 永田宗秀

イ 平成4年2月13日～2月18日(5日間)

「城郭調査課程」 調査課 長戸満男

(6) 研究会などへの派遣

ア 平成3年4月～4年3月(毎月開催)(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

「長岡京連絡協議会」 調査課課長 永田信一
調査課第4係長 長宗繁一
調査課主任 木下保明
調査課 上村和直
〃 吉崎伸

イ 平成3年5月18・19日 筑波大学

「日本考古学協会57回総会」 調査課 伊藤潔

ウ 平成3年5月25・26日 奈良大学

「日本文化財学会第8回大会」 資料課 岡田文男

エ 平成3年6月5・6日 国立歴史民俗博物館

「共同研究による研究会」 調査課主任 百瀬正恒

オ 平成3年6月21・22日 国立歴史民俗博物館

「共同研究による研究会」 調査課主任 堀内明博

カ 平成3年8月27～29日 平泉郷土館

「共同研究による研究会」 調査課主任 堀内明博

キ 平成3年9月11～13日 国立歴史民俗博物館

「共同研究による研究会」 調査課主任 百瀬正恒

ク 平成3年9月19日 飛鳥荘他

「全国埋蔵文化財文化財法人連絡協議会平成3年度研修会」

調査課課長 永田信一
調査課 本田次男
資料課 岡田文男

ケ 平成3年11月23・24日 仙台国際センター

「日本考古学協会1991年度大会」 調査課 上村和直

コ 平成3年12月5・6日 国立歴史民俗博物館

	「共同研究による研究会」	調査課主任	百瀬正恒
サ	平成3年12月7・8日	奈良国立文化財研究所	
	「第13回木簡学会研究集会」	調査課主任	久世康博
シ	平成3年12月12・13日	国立歴史民俗博物館	
	「共同研究による研究会」	調査課主任	堀内明博
ス	平成4年3月6・7日	国立歴史民俗博物館	
	「共同研究による研究会」	調査課主任	堀内明博
セ	平成4年3月9・10日	国立歴史民俗博物館	
	「共同研究による研究会」	調査課主任	百瀬正恒
ソ	平成4年3月28日	奈良国立文化財研究所	
	「第8回条里制研究会」	調査課第4係長	長宗繁一

2 京都市考古資料館状況

(1) 展示替えの実施

常設展示「縄文住居跡」コーナー 平成4年3月28日

平成3年3月、北白川廃寺（北白川上終町遺跡）の発掘調査で発見された縄文時代早期の竪穴住居を実物大に復原、展示している。

あわせて、テーマ展示コーナーについても「北白川上終町遺跡の最近の調査」と題して縄文時代早期の押型文土器を中心に展示替えを行った。

(2) 「第12回京都市考古資料館小・中学生夏期教室」の開催

期 間 平成3年8月6日～9日

ア 「小学生親子教室」 8月6・7日

第1日目（児童のみ）

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習。 (参加者 32名)

第2日目（親子参加）

9：30～11：30 古墳見学（御堂ヶ池1号墳、甲塚古墳の見学および遺跡や遺物の時代の決め方、古墳の保存などについての学習）

(参加者 親子31組)

イ 「中学生サマースクール」 8月8・9日

第1日目

9：30～11：30 資料館見学、瓦の拓本の実習。 (参加者 57名)

第2日目

9：30～12：00 長岡京左京六条三坊（伏見区淀樋爪町）の発掘調査現場で発掘調査の実習。 (参加者 54名)

(3) 「夏期教室拓本展ならびにスナップ写真展」の開催

期 間 平成3年8月22日～9月8日

会 場 考古資料館 1階

(4) 文化財講座の開催

ア 第45回 平成3年4月27日

「平成2年度京都市域の調査成果」

調査課課長 永田 信一

「京都の土器」講座1－縄文土器－

調査課主任 菅田 薫

(受講者 98名)

イ 第46回 平成3年5月25日

「平安京右京六条一坊の調査」

資料課主任 梅川 光隆

「京都の土器」講座2－弥生土器－

調査課第2係長 平方 幸雄

(受講者 90名)

ウ 第47回 平成3年6月22日

「京都市北区上賀茂松本町の調査」

調査課 高橋 潔

「京都の土器」講座3－土師器－

〃 山本 雅和

(受講者 99名)

エ 第48回 平成3年7月27日

「長岡京跡の最近の調査」

調査課第4係長 長宗 繁一

「京都の土器」講座4－須恵器－

京都市文化財保護課技師 北田 栄造

(受講者 84名)

オ 第49回 平成3年9月21日

現地講座「植物園北遺跡の調査」

資料課資料係長 峰 巍

(受講者 110名)

カ 第50回 平成3年10月26日 -第50回記念講演会- 於：西陣労働セツルメント

「長岡京と平安京の接点」

京都市埋蔵文化財研究所所長 杉山 信三

「西域学の課題」

京都大学名誉教授 藤枝 晃

(受講者 132名)

キ 第51回 平成4年1月25日

「平安京右京三条二坊十一・十四町の調査」

調査課主任 木下 保明

「京都の土器」講座5－灰釉・緑釉陶器－

〃 百瀬 正恒

(受講者 75名)

ク 第52回 平成4年2月22日

「鳥羽離宮の最近の調査」

調査課第3係長 鈴木 久男

「京都の土器」講座6－黒色土器・瓦器－

調査課 小森 俊寛

(受講者 90名)

ケ 第53回 平成4年3月28日

「南区久世大藪町の調査」

調査課主任 鈴木 廣 司

「京都の土器」講座7－陶磁器－

堀 内 明 博

(受講者 83名)

(5) 印刷物の発行

ア 京都市考古資料館文化財講座資料No.45～No.53

イ 小中学生のための見学のしおり

ウ 夏期教室テキスト

(6) 普及啓発、資料収集

ア 「情報コーナー」において、コンピュータ、レーザーディスクおよびビデオによる市内遺跡、展示資料などの紹介を行うほか、考古学・日本歴史など図書、発掘調査現地説明会資料および市内発掘調査関連記事スクラップなどの閲覧並びに情報提供。

イ 京都府下および近県の博物館施設などのパンフレット、リーフレットの収集および情報提供の実施。

ウ 「リーフレット京都」の配布

(7) 考古資料の貸出

ア 継続貸出分 29件 756点

イ 新規貸出分 22件 488点

(8) 博物館実習生の受入

京都橘女子大学 6名 京都芸術短期大学 8名 帝塚山大学 2名

立命館大学文学部 10名

(9) 京都市考古資料館入館者状況

表8 平成3年度月別観覧者一覧表

月	開館日	一 般		団 体		合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	12才以上	12才未満		
4	25	1,147	378	98	62	1,685	67.4
5	27	1,221	354	259	245	2,079	77.0
6	26	1,164	257	99	101	1,621	62.3
7	26	1,297	373	306	0	1,976	76.0
8	27	1,453	552	262	97	2,364	87.6
9	25	1,197	242	198	0	1,637	65.5
10	27	1,222	159	172	0	1,553	57.5
11	26	1,247	222	228	0	1,697	65.3
12	24	1,008	218	138	62	1,426	59.4
1	24	1,152	262	183	0	1,597	66.5
2	25	1,354	160	90	30	1,634	65.4
3	26	1,312	217	108	0	1,637	63.0
合計	308日	14,774人	3,394人	2,141人	597人	20,906人	67.9人

3 役職員名簿

(1) 役員名簿

役員名	氏名	職名
理事長	増田 駿	京都市文化観光局長
専務理事	吉田 泰夫	京都市文化観光局文化部参事
理事	池田 佳郎	京都市文化観光局文化部文化財保護課長
	上田 正昭	京都大学名誉教授
	木村 捷三郎	財団法人京都市埋蔵文化財研究所嘱託
	杉山 信三	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
	田中 琢	奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター長
	田辺 昭三	京都造形芸術大学教授
	角田 文衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
	檜崎 正孝	京都市文化観光局文化部長
	西川 幸治	京都大学教授
	福山 敏男	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長
監事	西岡 信之	京都市会計室長
	堀 道夫	財団法人京都市文化観光資源保護財団専務理事

(2) 職員名簿

	氏名	職名		氏名	職名
	杉山信三	研究所長(理事)		永田信一	調査課長
	木村捷三郎	嘱託(理事)		本 弥八郎	調査第1係長
	田辺昭三	嘱託(理事)		平方幸雄	調査第2係長
総務部 総務課	伊藤哲夫	総務部長(京都市出向)	調査部 調査課	鈴木久男	調査第3係長
	宮崎 高	総務課長		長宗繁一	調査第4係長
	菅田悦子	事務職員		磯部 勝	調査第5係長
	上村京子	〃		吉村正親	主任
	村木節也	〃		平田 泰	〃
	本田憲三	〃		木下保明	〃
	金島恵一	〃		鈴木廣司	〃
	小松佳子	〃		菅田 薫	〃
	夏原美智代	〃		堀内明博	〃
					百瀬正恒

	氏 名	職 名
調 査 部 調 査 課	久世康博	主 任
	加納敬二	〃
	平尾政幸	〃
	辻 裕司	研究職員
	前田義明	〃
	上村和直	〃
	丸川義広	〃
	吉崎 伸	〃
	網 伸也	〃
	内田好昭	〃
	高 正龍	〃
	高橋 潔	〃
	山本雅和	〃
	南 孝雄	〃
	小森俊寛	〃
	長戸満男	〃
	上村憲章	〃
	伊藤 潔	〃
	真喜志悦子	調査補佐員
	能芝 勉	〃
	能芝妙子	〃
	法邑真理子	〃
	鎌田泰知	〃
	小倉万里子	〃
	松尾武彦	〃
	竜子正彦	〃
	本田次男	〃
	桜井みどり	〃
	清藤玲子	〃
	藤村敏之	〃
	山口 真	〃
	津々池惣一	〃
	上田栄治	〃
太田吉男	〃	
堀内寛昭	〃	
大立目一	〃	
川村雅章	〃	
小檜山一良	〃	
近藤章子	〃	

	氏 名	職 名	
	西大條 哲	調査補佐員	
	布川豊治	〃	
	永田宗秀	〃	
	東 洋一	〃	
	宮下則子	〃	
	吉本健吾	〃	
	端 美和子	〃	
	藤村雅美	〃	
	北川和子	〃	
	北原四男	〃	
	小谷 裕	〃	
	尾藤德行	〃	
	大立目道代	〃	
	調 査 部 調 査 課	峰 巍	資料課長
		梅川光隆	主 任 (6.9 退職)
		中村 敦	研究職員
辻 純一		〃	
岡田文男		〃	
西川恵美子		〃	
原山充志		〃	
出水みゆき		調査補佐員	
児玉光世		〃	
角村ひろみ		〃	
田中利津子		〃	
卜田健司		〃	
出口 勲		〃	
宮原健吾		〃	
角村幹雄		〃	
村井伸也		〃	
幸明綾子	〃		
村上 勉	〃		
多田清治	〃		
モンテ恭代	〃		
大槻明義	〃		
考 古 資 料 館	塩崎英雄	館 長	
	浪貝 毅	副 館 長 (京都市埋蔵文 化財調査センター所長兼任)	
	中島松夫	主 任	
	南出俊彦	学 芸 員	

表9 発掘調査一覧表

	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
平安宮	01 H3-028 中務省跡 191HK-DT	上京区下樞木町通浄福寺 西入中務町	91.09.02 ～ 91.09.21	84㎡	京都市長	吉村	国庫補助
	02 H3-039 中務省跡 291HK-DU	上京区土屋町通丸太町上る 中務町	91.10.21 ～ 91.11.09	43㎡	京都市長 (株)桐野	鈴木久	国庫補助
	03 H3-040 大極殿院跡東部 91HK-DV	上京区下立売通千本東入 中務町	91.11.06 ～ 91.11.16	30㎡	京都市長 山本康子	鈴木久	国庫補助
	04 H3-014 宮・右京一条三・四坊・二条二・ 三坊・三条一坊 91HK-IT003	中京区西ノ京・聚楽廻、 右京区花園地先	91.06.11 ～ 92.03.31	1,378㎡	京都市長	平田	
平安京	05 H3-006 左京二条三坊 91HK-MZ	中京区烏丸通丸太町下る 大倉町	91.05.13 ～ 91.10.04	390㎡	(株)亀田利三郎 薬舗	磯部 山本	
	06 H3-015(2) 左京三条一坊・神泉苑跡・ 史跡旧二条離宮 91HK-FR005	中京区押小路通 (堀川～美福) 114	91.11.01 ～ 92.04.25	651㎡	京都市公営企業 管理者交通局長	小森、網 百瀬、南 上村憲 長戸	№ 20 ～ 25・ 31 トレンチ
		H3-015(1) 左京三条二坊・史跡旧二条離宮 91HK-FR005	中京区押小路通 (堀川～智恵光院)	91.06.21 ～ 91.11.02	839㎡	京都市公営企業 管理者交通局長	小森 上村憲
	07 H3-026 左京三条三坊 91HK-ED	中京区烏丸通三条上る場之町	91.09.02 ～ 92.06.15	1,300㎡	(株)日本電信電 話関西建築総合 センター	辻裕 鈴木廣 磯部	
	08 H3-027 左京六条一坊 91HK-HK005	下京区中堂寺命婦町地内	91.07.15 ～ 91.10.30	1,170㎡	住宅都市整備公 団関西支社	平尾	
	09 H3-007 左京九条二坊 91HK-BH003	南区西九条鳥居口町	91.05.01 ～ 91.10.17	840㎡	(株)松下興産	菅田	
		H3-042 左京九条二坊 91HK-BH004	南区西九条鳥居口町	91.11.05 ～ 92.03.31	620㎡	(株)松下興産	菅田
10 H3-053 右京二条四坊 91HK-IR003	右京区太秦安井辻ノ内町地内	92.01.27 ～ 92.04.20 93.02.15 ～ 93.03.04	770㎡	京都市長	山本		
11 H3-047 右京六条一坊 91HK-XF006	下京区中堂寺栗田町	91.11.18 ～ 92.03.07	2,000㎡	(株)京都リサー チパーク	平尾		
白河街区	12 H3-029・H4-027 最勝寺跡・岡崎遺跡 91KS-OG003	左京区岡崎最勝寺町 (岡崎グラウンド内)	91.09.30 ～ 92.09.17	10,041㎡	(財)京都市駐車 場公社	丸川 内田 平方	
鳥羽離宮	13 H3-011 鳥羽離宮跡第 137 次調査 91TB-TB137	伏見区竹田浄菩提院町	91.06.05 ～ 91.07.12	180㎡	油忠不動産(株)	南	
中臣遺跡	14 H3-037 中臣遺跡第 70-4 次調査 91RT-NK070	山科区西野山中臣町	91.11.22 ～ 92.02.28	785㎡	京都市長	平方 高	Ⅲ区、 Ⅵ-1～3区
長岡京	15 H3-030 左京一条三坊 91NG-AO002	南区久世東土川町	91.09.10 ～ 91.09.18	140㎡	京都市上下水道 事業管理者	長宗 吉崎	
	16 H3-050 左京四条二・三坊 91NG-MD001	伏見区羽束師菱川町	91.12.10 ～ 91.12.29	217㎡	前田清一	長宗 吉崎	

	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考
長岡京	17 H3-005 左京六条三坊 91NG-MI002	伏見区淀水垂町・樋爪町	91.04.01 ～ 92.03.31	29,300㎡	京都市長	吉崎 木下 上村和	E2・3、 F1・2区
	18 H3-010 焼場谷炭窯跡 91RH-SK	左京区岩倉上蔵町	91.06.20 ～ 91.07.10	30㎡	京都市長	伊藤	国庫補助
	19 H3-055 栗栖野瓦窯跡 191RH-QL003	左京区岩倉幡枝町	92.02.12 ～ 92.03.20	135㎡	京都市長	吉村	
	20 H3-056 栗栖野瓦窯跡 291RH-QL004	左京区岩倉幡枝町	92.02.17 ～ 92.03.20	41㎡	京都市長	本	
	21 H3-013・H4-056 植物園北遺跡 91RH-CH002	左京区下鴨半木町 (京都府立大学 農学部農園の一部)	91.06.04 ～ 92.06.08	6,641㎡	京都市長	久世 高橋	
	22 H3-023 北白川廃寺 91KS-KG	左京区北白川大堂町	91.07.01 ～ 91.08.05	175㎡	前田音次	鈴木廣 長戸	
	23 H3-017 広隆寺旧境内 191UZ-US	右京区太秦峰岡町 (右京消防署)	91.03.19 ～ 91.04.20	200㎡	京都市長	平田 本 伊藤	
	24 H3-058 広隆寺旧境内 291UZ-UK002	右京区太秦峰岡町 (右京区役所)	92.01.12 ～ 92.02.22	130㎡	京都市長	平田	
その他の遺跡	25 H3-036 史跡大覚寺御所跡 91UZ-AA001	左京区嵯峨大沢町	91.09.06 ～ 91.11.15	486㎡	宗教法人大覚寺	堀内	
	H3-045 史跡大覚寺御所跡 91UZ-AA002	右京区嵯峨大沢町	91.11.09 ～ 92.02.15	905㎡	宗教法人大覚寺	堀内 高	
	H3-060 史跡大覚寺御所跡 91UZ-AA003	右京区嵯峨大沢町	92.03.09 ～ 92.05.14	613㎡	宗教法人大覚寺	堀内 高	
	26 H3-024 松室遺跡 91MK-MU	西京区松室中溝町	91.07.23 ～ 91.09.30	150㎡	京都市長	伊藤	
	27 H3-008(1) 南春日町遺跡第22次調査 91MK-HO022	西京区大原野南春日町	91.04.22 ～ 91.07.05	600㎡	京都府知事	加納	
	H3-008(2) 南春日町遺跡 第23次調査 91MK-HO023	西京区大原野南春日町	91.09.24 ～ 91.12.25	500㎡	京都府知事	加納	下西代古墳 群解体調査
	H3-008(3) 南春日町遺跡 第24次調査 91MK-HO024	西京区大原野南春日町	91.12.17 ～ 92.03.16	800㎡	京都府知事	加納	
	28 H3-031 史跡随心院境内 91FD-SB001	伏見区小野御霊町 随心院境内	91.07.17 ～ 91.07.25	36㎡	京都市長	内田 平方	
	29 H3-025 史跡醍醐寺境内 91FD-DT	伏見区醍醐東大路町	91.07.17 ～ 91.11.19	445㎡	京都市上下水道 事業管理者	高	

表10 試掘・立会調査一覧表

	契約No・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
平安京	01	H3-018-03 左京二条・三条四坊 91HK-UW016	中京区夷川通 (烏丸通～堺町通)	92.01.13 ～ 92.04.16	立会 1,019m	京都市上下水道 事業管理者	竜子 尾藤	
	02	H3-018-04 左京三条二坊 91HK-UW015	中京区二条通 (小川通～烏丸通)	91.08.26 ～ 91.12.03	立会 2,200m	京都市上下水道 事業管理者	竜子 尾藤	
	03	H3-032 左京五条四坊 91HK-AH001	下京区仏光寺通 高倉西入西前町 (豊園小学校)	91.08.06 ～ 91.08.08	試掘 66㎡	京都市長	本	
	04	H3-018-02 右京五条二坊 91HK-UW017	中京区綾小路通 (西御土居通～御前通)	91.09.25 ～ 91.10.25	立会 598m	京都市上下水道 事業管理者	川村 吉本	
鳥羽離宮	05	H3-002 鳥羽離宮跡 91TB-SW002	伏見区中島秋ノ山町、 南区上鳥羽火打形町	91.04.02 ～ 91.09.13	立会 1,271㎡	京都市上下水道 事業管理者	鈴木久	2章I-1
長岡京	06	H3-019 左京四条二・三坊・羽東師遺跡 91NG-SW005	伏見区羽東師菱川町	91.07.15 ～ 91.12.21	立会 830m	京都市上下水道 事業管理者	長宗	2章II-2
その他の遺跡	07	H3-018-09 釈迦谷廢寺 91RH-UW009	北区釈迦谷	91.06.07 ～ 91.07.02	立会 320㎡	京都市上下水道 事業管理者	川村 吉本	
	08	H3-038 岩倉中在地遺跡 91HK-UW019	左京区岩倉村松町 ～中在地町	92.03.16 ～ 92.03.26	立会	京都市上下水道 事業管理者	川村 吉本	
	09	H3-018-10 植物園北遺跡 91RH-UW018	北区上賀茂南大路町	91.10.07 ～ 92.02.15	立会 792㎡	京都市上下水道 事業管理者	川村 吉本	
	10	H3-018-11 相国寺旧境内 91RH-UW010	上京区上立売通 (烏丸通～寺町通)	91.08.07 ～ 91.08.28	立会	京都市上下水道 事業管理者	川村 吉本	
	11	H3-021 史跡特別名勝天竜寺庭園・ 史跡名勝嵐山 91UZ-SW007	右京区嵯峨天竜寺 芒ノ馬場町	91.06.06 ～ 92.03.03	立会 1,620m	京都市上下水道 事業管理者	小檜山	2章III-5
	12	H3-022 史跡特別 名勝天竜寺庭園 ・史跡名勝嵐山 91UZ-SW008	右京区嵯峨天竜寺 造路町・立石町・芒ノ馬場町	91.06.07 ～ 91.07.24	立会 200m	京都市上下水道 事業管理者	小檜山	2章III-5
	13	H3-046 史跡特別名勝天竜寺庭園・ 史跡名勝嵐山 91UZ-SW011	右京区嵯峨天竜寺 芒ノ馬場町	91.11.25 ～ 92.02.26	立会 420m	京都市上下水道 事業管理者	小檜山	2章III-5
	14	H3-048 史跡特別名勝天竜寺庭園 ・史跡名勝嵐山 91UZ-SW012	右京区嵯峨天竜寺 立石町・芒ノ馬場町	91.11.19 ～ 91.12.04	立会 200m	京都市上下水道 事業管理者	小檜山	2章III-5
	15	H3-065 嵯峨院跡・史跡大覚寺御所跡 91UZ-SW014	右京区嵯峨觀空寺 明水町・大沢町、 北嵯峨北ノ段町	92.03.10 ～ 93.07.01	立会 400m	京都市上下水道 事業管理者	小檜山	2章III-3
	16	H3-052 史跡特別名勝天竜寺庭園 史跡名勝嵐山 91UZ-UW013	右京区嵯峨天竜寺 芒ノ馬場町	91.12.16 ～ 92.02.28	立会 680m	京都市上下水道 事業管理者	小檜山	2章III-4
17	H3-001 松室遺跡 91MK-SW001	西京区松室北河原町	91.03.30 ～ 92.01.30	立会 932㎡	京都市上下水道 事業管理者	川村 吉本		
18	H3-018-12 山科本願寺跡、左義長町遺跡 91RT-UW004	山科区西野左義長町	91.07.12 ～ 91.08.30	立会 500m	京都市上下水道 事業管理者	竜子 尾藤		

	契約No.・遺跡名・記号	所在地	調査期間	面積	委託者	担当者	備考	
その他の遺跡	19	H3-034 山科本願寺跡 91RT-AH001	山科区西野大手先町 (山階小学校)	91.08.20 ～ 91.10.18	試掘 212㎡	京都市長	本	2章Ⅲ-6
	20	H3-020 大宅廃寺 91RT-SW006	山科区大宅山田 ・鳥井脇町・中小路町	91.06.17 ～ 91.07.22	立会 210㎡	京都市上下水道 事業管理者	竜子 尾藤	2章Ⅲ-7
	21	H3-018-08 大宅廃寺、大宅遺跡 91RT-UW003	山科区大宅鳥井脇町 ～大宅奥山田	91.07.17 ～ 91.08.06	立会 410㎡	京都市上下水道 事業管理者	竜子 尾藤	2章Ⅲ-7
	22	H3-033 伏見城跡 91FD-AH001	伏見区丹後町 (伏見南浜小学校)	91.07.30	試掘 67㎡	京都市長	本	
	23	H3-035 伏見城跡 91FD-AH002	伏見区桃山水野左近東町 (桃山中学校)	91.08.13 ～ 91.09.09	試掘 54㎡	京都市長	本	
	24	H3-041 史跡醍醐寺境内 91FD-DG004	伏見区醍醐東大路町	91.07.31 ～ 91.08.20	試掘 203㎡	京都市長	平方 丸川 内田	
	25	H3-009 京都市内遺跡 91BB-	京都市内一円			京都市長	本 伊藤	国庫補助